博　多　53

－ 博多遺跡群第71次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集

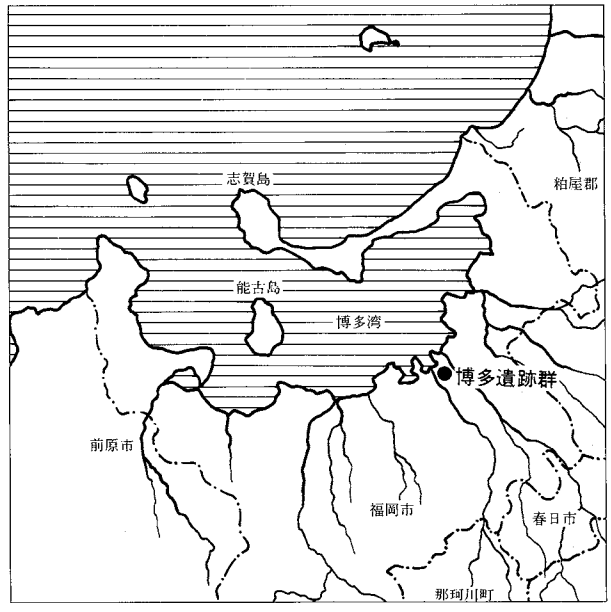
1996

福岡市教育委員会

博　　多　　53

－ 博多遺跡群第71次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第450集



遺跡調査番号 9111
遺跡略号　　HKT

1 9 9 6

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

博多遺跡群は、ＪＲ博多駅より博多湾にかけて広がる弥生時代から中・近世にわたる複合遺跡です。弥生時代以来、大陸文化流入の門戸として栄え、とりわけ中世の国際都市「博多」の繁栄を物語る多種多量の輸入陶磁器が出土しています。今回報告する第71次調査では、中国南部の諸窯で焼かれた陶磁器をはじめ、タイ・ベトナム陶器、北方青磁、高麗・李朝陶磁器などが出土し、「海のシルクロード」の終着点のひとつとしてアジアに開かれた港湾都市の様相を彷彿とさせるものがあります。

博多の都心部では、近年再開発が活発に進められ、それに伴って発掘件数も増加しています。

福岡市教育委員会では、工事によってやむを得ず消滅するこれら埋蔵文化財については記録保存に努めているところであります。

本書は、平成３年度に実施したビル建設工事に伴う第71次調査の記録を収録したものです。本書が埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告に至るまで株式会社九州リースサービス、九州建設株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会

教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が1971（平成３）年５月15日から10月６日にかけて発掘調査を実施した、ビル建設に伴う博多遺跡群第71次緊急発掘調査の報告書である。出土した遺物は厖大で多種多岐にわたっており、予算の関係で報告できなかったものが多数ある。

2．遺構の呼称は記号化し、井戸址→SE、土坑→SK、石組遺構その他→SX、溝→SD、ピット→SPとした。なお、遺構番号は第Ⅰ面から第Ⅲ面まで各調査面ごとに付し、種類に関係なく連番とした。ただし、SPはSPだけで各調査面ごとに番号を付している。遺構番号は第Ⅰ面が100番台、第Ⅱ面が200～300番台、第Ⅲ面が400～500番台となっている。

3．本書にはできるだけ多くの図を記載したため、限られたページ数では遺物の細かな説明ができなかった。遺物名は実測図の下に細かく表示している。また、土師器の坏や皿については底部調整痕を図右下に略して表示している。ヘラ→回転ヘラ切り、糸→回転糸切り、板→板目圧痕のことである。

4．本書に使用した遺構図及び遺構写真は下村　智・菅波正人・上方高弘が行なった。遺物実測は下村　智・田上勇一郎・久住猛雄・上方高弘・吉田香代・茨木浩一・坂本憲昭・佐田裕一が行なった。トレース及び図版作成は下村　智・田上勇一郎・久住猛雄・上方高弘・吉田香代・茨木浩一・坂本憲昭・佐田裕一・茨木式子・酒井香代子・長浦芙美子・末次由起恵・鳥飼悦子・室　以佐子・持原良子・福本美智子・野口未幾があたった。遺物写真は下村が撮影し焼き付けを行なった。

　出土陶磁器の分類及び遺構一覧表作成については、森本朝子・田中克子両氏の多大なご協力とご指導を受けた。出土古式土師器の説明は久住猛雄が担当した。

5．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。また、レベル高は御供所小学校に設置した国土地理院高Ｈ＝3.5298ｍから移動した。

6．博多遺跡群第71次調査に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

7．第71次調査で出土した、白磁片に付着した緑色ガラスとルツボに付着したガラスの化学分析および鉛同位体比測定については名古屋大学名誉教授　山崎一雄氏・奈良国立文化財研究所　肥塚隆保氏・室蘭工業大学　白幡浩志氏から玉稿を頂いた。

8．本書の執筆・編集は下村が行なった。

遺跡調査番号	9111	遺 跡 番 号	ＨＫＴ71		
調査地地籍	博多区御供所町235-1番地他		分布地図番号	049－Ａ－１	
開 発 面 積	803㎡	調査対象面積	600㎡	調査実施面積	600㎡
調 査 期 間	1991（平成３）年５月15日～10月６日		事前審査番号	１－２－384	

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに
1　調査に至る経過と調査組織 …… 1
2　遺跡の立地と環境 …… 1
Ⅱ　調査の記録
概要 …… 3
1　第Ⅰ面の調査 …… 3
(1)　土坑 …… 4
(2)　配石遺構 …… 6
(3)　井戸 …… 6
(4)　溝 …… 6
(5)　包含層他 …… 6
2　第Ⅱ面の調査 …… 6
(1)　土坑 …… 6
(2)　配石遺構 …… 10
(3)　井戸 …… 17
(4)　溝 …… 20
(5)　包含層・遺構確認他 …… 24
3　第Ⅲ面の調査 …… 24
(1)　土坑 …… 33
(2)　竪穴住居址 …… 58
(3)　井戸 …… 58
(4)　溝 …… 63
(5)　遺構確認他 …… 64
4　抽出した出土遺物 …… 64
(1)　天目・黒釉陶器 …… 64
(2)　磁州・タイ・ベトナム陶器 …… 65
(3)　元・明青花磁 …… 65
(4)　石製品 …… 65
(5)　金属製品 …… 77
(6)　玉 …… 78
(7)　ガラス製品 …… 78
(8)　銭貨 …… 78
Ⅲ　おわりに …… 78
博多遺跡群第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した
緑色ガラスなどの化学分析および鉛同位体比測定 …… 79
名古屋大学名誉教授　山崎　一雄
奈良国立文化財研究所　肥塚　隆保
室蘭工業大学　白幡　浩志

挿　図　目　次

Fig. 1　博多遺跡群位置図（1/25000）…… 2
Fig. 2　第71次調査地点位置図（1/4000）…… 2
Fig. 3　第71次調査区周辺図（1/750）…… 3
Fig. 4　調査区範囲図（1/500）…… 4
Fig. 5　第Ⅰ面遺構全体図（1/150）…… 5
Fig. 6　第Ⅰ面出土土坑・石組遺構実測図（1/60）…… 7
Fig. 7　第Ⅰ面出土土坑・井戸実測図（1/60）…… 8
Fig. 8　第Ⅱ面遺構全体図（1/150）…… 11
Fig. 9　第Ⅰ・Ⅱ面出土土坑・井戸実測図（1/60）…… 12
Fig.10　出土遺物実測図(1)（1/2・1/3）…… 13
Fig.11　出土遺物実測図(2)（1/3）…… 14
Fig.12　第Ⅱ面出土土坑実測図（1/60）…… 15
Fig.13　出土遺物実測図(3)（1/3）…… 16
Fig.14　出土遺物実測図(4)（1/6）…… 17
Fig.15　第Ⅱ面出土土坑実測図（1/60）…… 18
Fig.16　第Ⅱ面出土土坑・石組遺構・井戸実測図（1/60）…… 19
Fig.17　第Ⅱ面出土井戸実測図（1/60）…… 20
Fig.18　出土遺物実測図(5)（1/3）…… 21
Fig.19　出土遺物実測図(6)（1/3）…… 22
Fig.20　出土遺物実測図(7)（1/3）…… 23
Fig.21　第Ⅲ面遺構全体図（1/150）…… 25
Fig.22　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）…… 26
Fig.23　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）…… 27
Fig.24　出土遺物実測図(8)（1/3）…… 28
Fig.25　出土遺物実測図(9)（1/3）…… 29
Fig.26　出土遺物実測図(10)（1/3・1/4）…… 30
Fig.27　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）…… 31
Fig.28　第Ⅲ面出土土坑・住居址・井戸実測図（1/60）…… 32
Fig.29　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）…… 33
Fig.30　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）…… 34
Fig.31　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）…… 35
Fig.32　出土遺物実測図(11)（1/3・1/4）…… 37
Fig.33　出土遺物実測図(12)（1/3・1/4）…… 38
Fig.34　出土遺物実測図(13)（1/3・1/4）…… 39
Fig.35　出土遺物実測図(14)（1/3）…… 40
Fig.36　出土遺物実測図(15)（1/3）…… 41
Fig.37　出土遺物実測図(16)（1/3・1/4）…… 42

Fig.38　出土遺物実測図⒄（1/3・1/4）…… 43
Fig.39　出土遺物実測図⒅（1/3・1/4）…… 44
Fig.40　出土遺物実測図⒆（1/3）…… 45
Fig.41　出土遺物実測図⒇（1/3）…… 46
Fig.42　出土遺物実測図(21)（1/2・1/3）…… 47

本文写真目次

PH. 1　出土遺物写真(1) …… 48
PH. 2　出土遺物写真(2) …… 49
PH. 3　出土遺物写真(3) …… 50
PH. 4　出土天目(1) …… 52
PH. 5　出土天目(2) …… 53
PH. 6　出土天目(3) …… 54
PH. 7　出土天目(4)・黒釉陶器 …… 55
PH. 8　出土元染・明染付磁器(1) …… 56
PH. 9　出土明染付磁器(2) …… 57
PH.10　出土磁州・タイ・ベトナム陶器、古式土師器（庄内）… 58
PH.11　出土石製品(1) …… 59
PH.12　出土石製品(2) …… 60
PH.13　出土石製品(3)・金属製品(1) …… 61
PH.14　出土金属製品(2)・玉・ガラス製品 … 62

図版目次

PL. 1 (1)　第Ⅰ面遺構出土状況（南から）
　　(2)　SK102出土状況（東から）
PL. 2 (1)　SK103出土状況（南から）
　　(2)　SK104出土状況（南から）
PL. 3 (1)　SK107出土状況（南から）
　　(2)　SK127出土状況（南から）
PL. 4 (1)　SK144出土状況（東から）
　　(2)　SK149出土状況（南西から）
PL. 5 (1)　SK160出土状況（北から）
　　(2)　SK161～163出土状況（東から）
PL. 6 (1)　SK167出土状況（西から）
　　(2)　SK173出土状況（西から）
PL. 7 (1)　SK177出土状況（西から）
　　(2)　SX148出土状況（南東から）
PL. 8 (1)　SE114出土状況（西から）
　　(2)　SE131出土状況（西から）
PL. 9 (1)　SE140出土状況（西から）
　　(2)　SE180出土状況（西から）
PL.10 (1)　SE181出土状況（東から）
　　(2)　第Ⅱ面遺構出土状況全景（南から）
PL.11 (1)　SK203出土状況（東から）
　　(2)　SK203礫堆積状況（東から）

PL.12 (1)　SK204出土状況（西から）
　　(2)　SK210出土状況（北から）
PL.13 (1)　SK212出土状況（北から）
　　(2)　SK214出土状況（東から）
PL.14 (1)　SK221出土状況（西から）
　　(2)　SK222出土状況（南から）
PL.15 (1)　SK250無頸壺出土状況（南から）
　　(2)　SK229 出土状況（西から）
PL.16 (1)　SK232出土状況（南から）
　　(2)　SK239～242・244出土状況（南から）
PL.17 (1)　SK245・246出土状況（南から）
　　(2)　SK249出土状況（北から）
PL.18 (1)　SK252出土状況（北から）
　　(2)　SK252礫堆積状況（北から）
PL.19 (1)　SK253出土状況（東から）
　　(2)　SK260出土状況（西から）
PL.20 (1)　SK266出土状況（西から）
　　(2)　SK272 出土状況（北から）
PL.21 (1)　SK277・278出土状況（西から）
　　(2)　SK279出土状況（南から）
PL.22 (1)　SK285・286出土状況（西から）
　　(2)　SK292出土状況（西から）
PL.23 (1)　SK295出土状況（南から）
　　(2)　SK304出土状況（東から）
PL.24 (1)　SK300・323・324出土状況（北から）
　　(2)　SK326出土状況（北から）
PL.25 (1)　SK332出土状況（東から）
　　(2)　SK227出土状況（西から）
PL.26 (1)　SX318出土状況（南から）
　　(2)　SX318礫堆積状況（北から）
PL.27 (1)　SX228出土状況（西から）
　　(2)　１号人骨（土壙墓）出土状況（西から）
PL.28 (1)　SE201出土状況（北から）
　　(2)　SE225出土状況（西から）
PL.29 (1)　SD209出土状況（北から）
　　(2)　SE226出土状況（北から）
PL.30 (1)　SE113・154 ・325出土状況（南から）
　　(2)　SD319出土状況（東から）
PL.31 (1)　SD320出土状況（東から）
　　(2)　SD237出土状況（南から）

PL.32 (1)　第Ⅲ面遺構出土状況全景（北から）
PL.33 (1)　第Ⅲ面Ａ・Ｂ－５・６区遺構出土状況全景（西から）
　　(2)　SE402出土状況（南から）
PL.34 (1)　SK403出土状況（東から）
　　(2)　SK404出土状況（北から）
PL.35 (1)　SK405・527出土状況（西から）
　　(2)　SK409出土状況（西から）
PL.36 (1)　SK410出土状況（南から）
　　(2)　SK413出土状況（北から）
PL.37 (1)　SK414・415出土状況（北から）
　　(2)　SE416出土状況（東から）
PL.38 (1)　SK435出土状況（北から）
　　(2)　SK439出土状況（西から）
PL.39 (1)　SK442出土状況（南から）
　　(2)　SK452出土状況（東から）
PL.40 (1)　SK467出土状況（東から）
　　(2)　SK473出土状況（南から）
PL.41 (1)　SK475出土状況（北から）
　　(2)　SK478出土状況（南から）
PL.42 (1)　SK486出土状況（北から）
　　(2)　SK454・492出土状況（南から）
PL.43 (1)　SK510出土状況（北から）
　　(2)　SE530出土状況（北から）
PL.44 (1)　SC501出土状況（北から）
　　(2)　SC501遺物出土状況（北から）
PL.45 (1)　SE432・433出土状況（西から）
　　(2)　SE138・447出土状況（東から）
PL.46 (1)　SE493出土状況（東から）
　　(2)　SE500出土状況（北から）
PL.47 (1)　SD430出土状況（西から）
　　(2)　SD430出土状況（北から）
PL.48 (1)　２号人骨出土状況（南から）
　　(2)　調査区から聖福寺を望む（西から）

表　目　次

Tab. 1　出土銭貨一覧表 …… 66
Tab. 2　出土遺構一覧表 …… 67

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経過と調査組織

1990（平成２）年３月22日付で、福岡市博多区博多駅前４丁目１－１の株式会社九州リースサービスから、博多区御供所町235－１番他における事務所ビル建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、博多遺跡群の範囲内であり、これまで、南側及び西側の隣接地で埋蔵文化財の本調査を実施していることから、連続した遺跡の広がりが存在すると判断した。試掘調査は３月27日に実施し、２本のトレンチから古代、中世、近世と各時期の遺構及び包含層が保存良好な状態で検出された。出土遺物も非常に多いことが確認された。そこで、試掘調査の結果をふまえ、申請者とビル建設によって破壊される遺構の取り扱いについて協議を重ね、建築工事によって破壊される部分を対象に本調査を実施することで合意に達した。本調査は株式会社九州リースサービスの受託調査として実施した。調査組織は以下のとおりである。

調査委託：株式会社九州リースサービス　取締役社長　元石昭善
調査受託：福岡市　福岡市長　桑原敬一
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　井口雄哉
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾　学　埋蔵文化財第２係長　塩屋勝利
調査庶務：埋蔵文化財第１係長　飛高憲雄　吉田麻由美
調査担当：埋蔵文化財第２係　吉留秀敏　佐藤一郎（試掘調査）　下村　智（本調査）
調査補助：上方高弘
調査作業：大神嘉彦、高田茂、徳永榮彦、仲田忠孝、山部増人、的野治郎、柴戸浩司、田川　剛、西谷　彰、永川カツエ、江嶋光子、川上すぎえ、黒瀬千鶴、嶋　ヒサ子、菅野シゲ、長浦芙美子、永利咲江、永松トミ子、本多ナツ子、宮原つや子、松井良子、村田トモヨ、安高久子、山下智子、山村スミ子、山本后代、吉田香代、安野良、副田則子、松下節子、吉村知子、緒方さゆり
整理作業：茨木式子、酒井香代子、長浦芙美子、末次由紀恵、鳥飼悦子、室　以佐子、持原良子

なお、調査期間中、西谷　正（九州大学）、亀井明徳（専修大学）、石山　勲（福岡県）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、陳　文平（上海博物館）、インドネシア考古館館長、高　廣仁（中国社会科学院考古研究所副所長）、邵　望平（同考古研究所研究員）、以上、各氏のご来訪を受けご教示、ご指導を賜わった。

2　遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、福岡平野の中央部を北西に流れる那珂川と江戸時代に開鑿された石堂川とにはさまれた砂丘上に位置している。砂丘は３列あり、内陸側の２列を「博多浜」、海側の列を「息浜」と呼んでいる。調査地点は、「博多浜」に属し、栄西が鎌倉時代初めに建てた聖福寺の門前にあたる。標高は６ｍ前後である。「博多浜」ではこれまでに、弥生時代から中世・近世にかけての集落地や墓地が確認され、数多くの遺構・遺物が出土している。

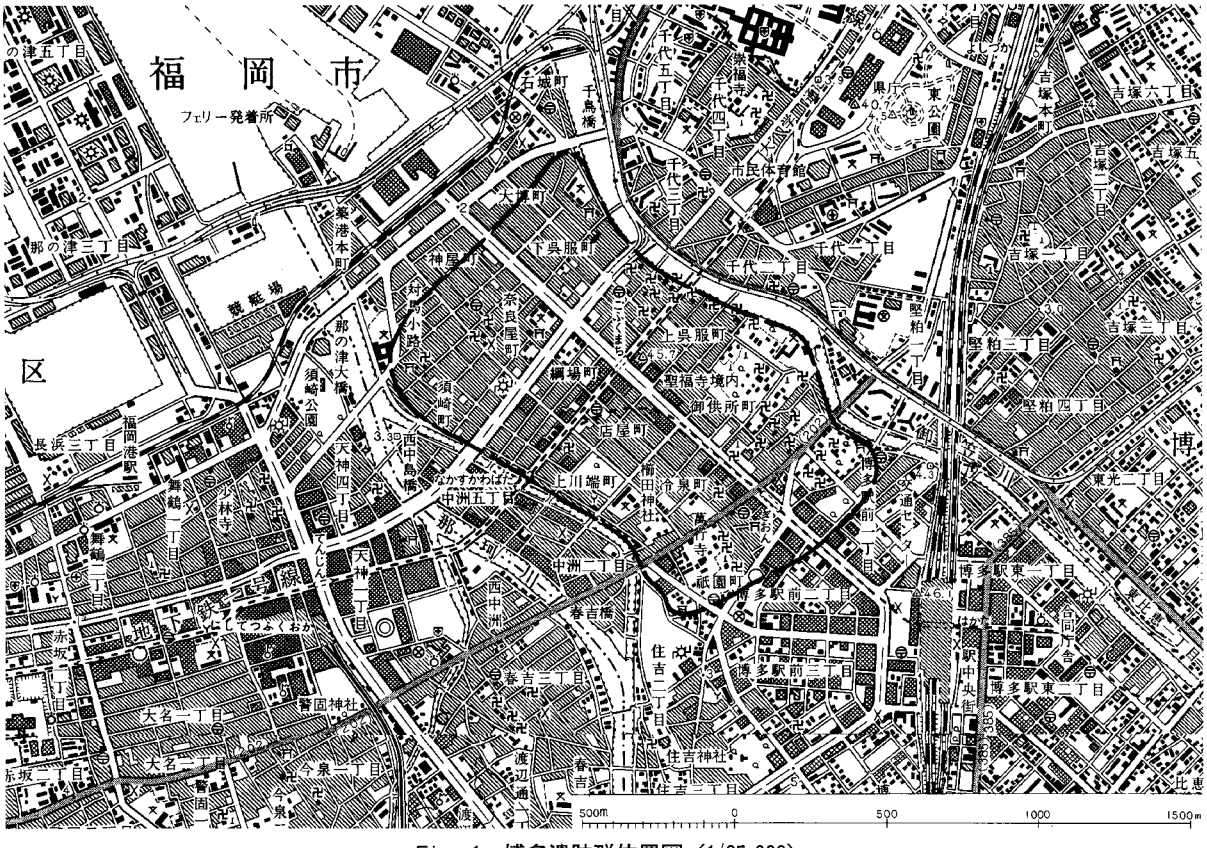


Fig. 1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

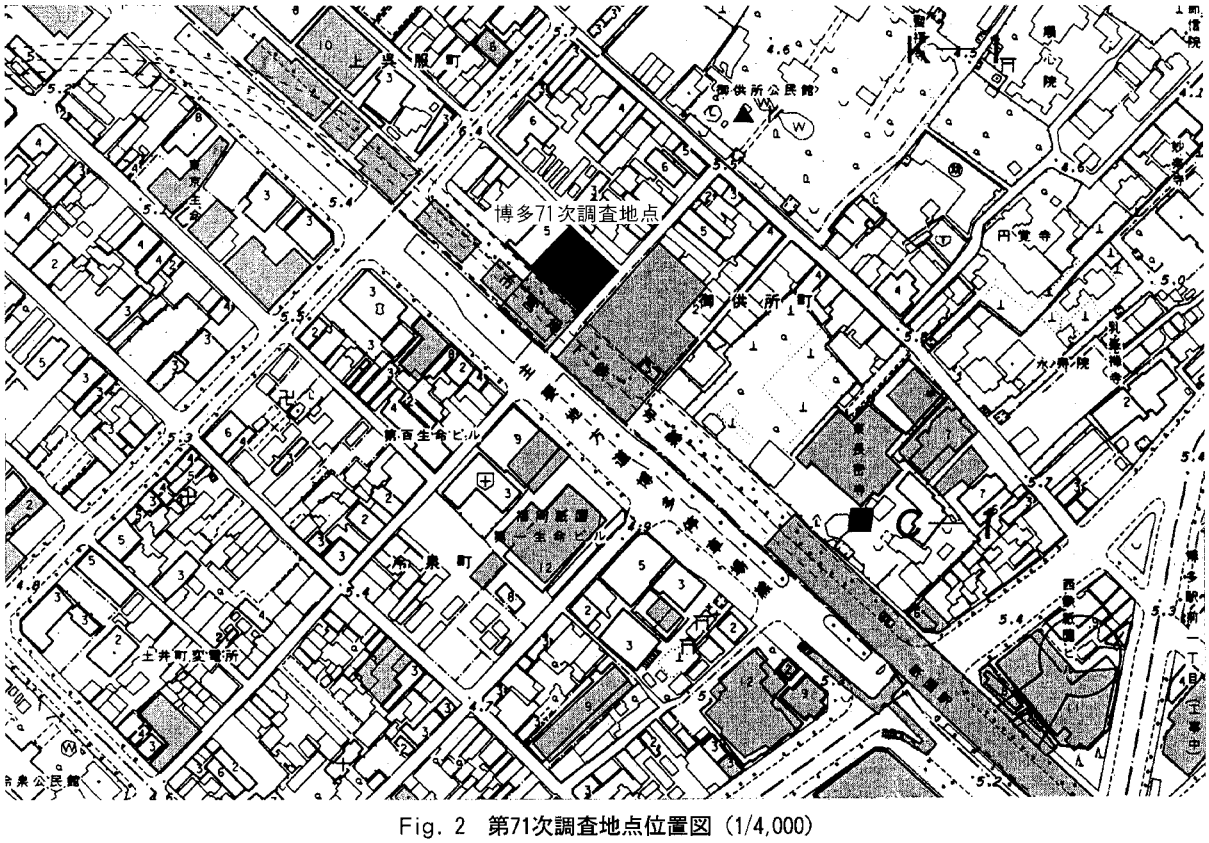


Fig. 2　第71次調査地点位置図（1/4,000）

Ⅱ　調査の記録

概　要

調査地点は、発掘調査前に旧建物の解体、基礎除去が終了し、－0.75mまで近現代の撹乱層がスキ取られていたので、発掘調査は現地表面から－0.75m下がった面から開始した。試掘調査では、GL－75～125cmは近現代の造成土と近世包含層、GL－75～157cmは14～16世紀の遺構と包含層、GL157～200cmは12～13世紀の遺構と包含層、GL－190～230cmは９～11世紀の遺構及び包含層と報告され、最下層には古墳時代の遺物が出土する可能性が指摘されている。試掘では鍵層となる明確な焼土層や硬化面は検出されていなかったので、遺構の時期と深さを目安に、任意に３面の調査面を設定して調査を行なった。

１　第Ⅰ面の調査

撹乱層除去後の面を第Ⅰ面としたが、部分的に深い撹乱が残存していた。標高は4.7～5.0m前後である。検出遺構は、土坑73基、石組遺構１基、井戸９基、溝１条、ピット多数である。主に15～16世紀から近世にかけての遺構群である。近世の遺構の中にも古い時代の遺物が多数みられ、明代の染付磁器が目立つ。近世の遺物は今回の報告では取り上げていないが、古伊万里、古唐津をはじめ17～18世紀から幕末までの主に肥前系を中心とする陶磁器が多量に出土している。また、瀬戸系及び備前系、

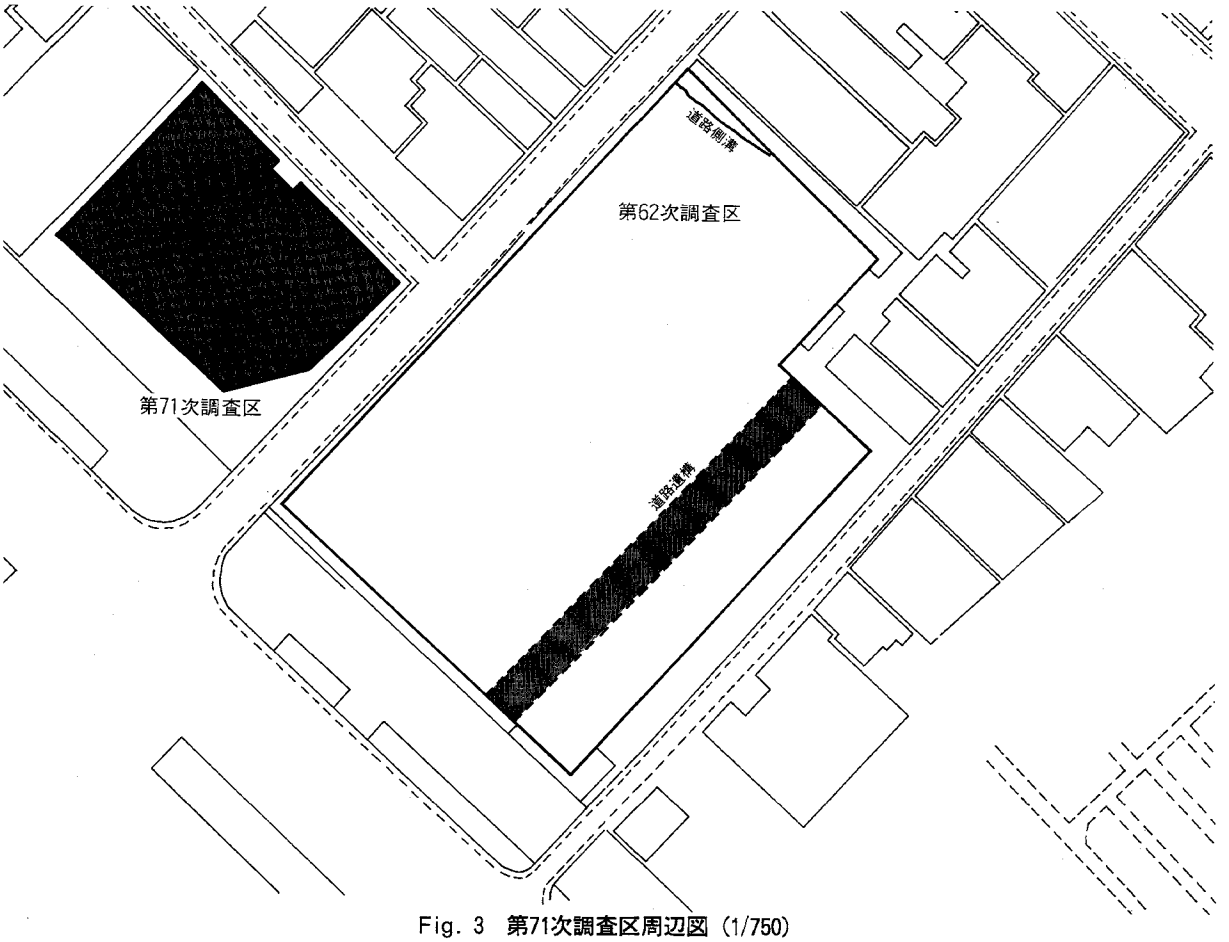


Fig. 3　第71次調査区周辺図（1/750）

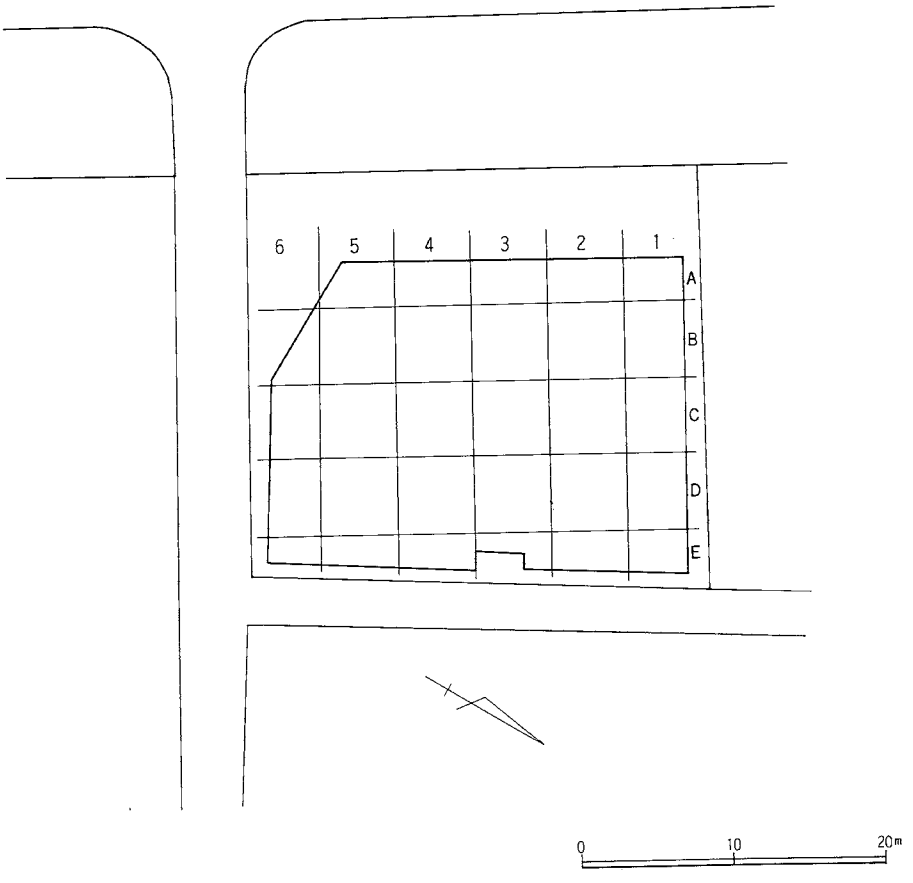


Fig. 4　調査区範囲図（1/500）

在地の陶磁器なども数多く出土している。その他、下がり藤、タチバナ、巴文の軒丸瓦、唐草文の軒平瓦などの出土も多い。近世瓦では銘や刻印のあるものがかなりある。土製品では土錘や土鈴・土製人形及び人形の外型などがみられる。明代の青磁、青花磁などは多数出土しているが殆ど図化できていない。抽出した遺物の頁に一部写真だけ示している。高麗・李朝陶磁器の出土も多い。高麗系の陶磁器はⅡ面・Ⅲ面と古い時期からの出土も多いが、Ⅰ面では、象嵌で龍文を施した瓶、見込みに如意頭文を施した碗や双鶴文をあしらった碗などが出土している。李朝青磁は見込みに目跡の付いた灰緑色釉のものが多い。

(1)　土坑（Fig. 6 ～ 9、PL. 1 ～10）

73基出土している。15～16世紀のものと近世のものがある。一部東側で検出した土坑は13～14世紀に上るものがある。それぞれの規模については別表に譲るが、プランは方形、長方形、円形、楕円形、不定形などがある。SK103は略方形を呈し、一部礫組みが残っている。坑内からは伊万里の染付磁器がまとまって出土し、中には焼き継ぎが施されているものがある。その中で蓋物の内側に「奥堂」と朱書したものが２例出土している。Fig.10－１は鉄製の庖丁であろう。全長28.0cm、最大幅3.5cm、最大厚0.5cmを測る。銹がかなり進んでいる。SK160～163は調査区南東側で検出された浅い土坑群である。それぞれ陸産亀の甲羅が数点づつ出土している。ごく一部四肢骨がみられたが、殆ど甲羅だけ投入されていた。甲羅には火の痕などは確認されていない。出土遺物が少なく時期を決め難いが中世末から近世初頭のものであろう。SK173は土坑の中に礫組みが残っている。ただし、半分以上は調査区外に広がっており全体の様子は分らない。坑内に礫が投入されていた土坑は他にも幾つか存在する。

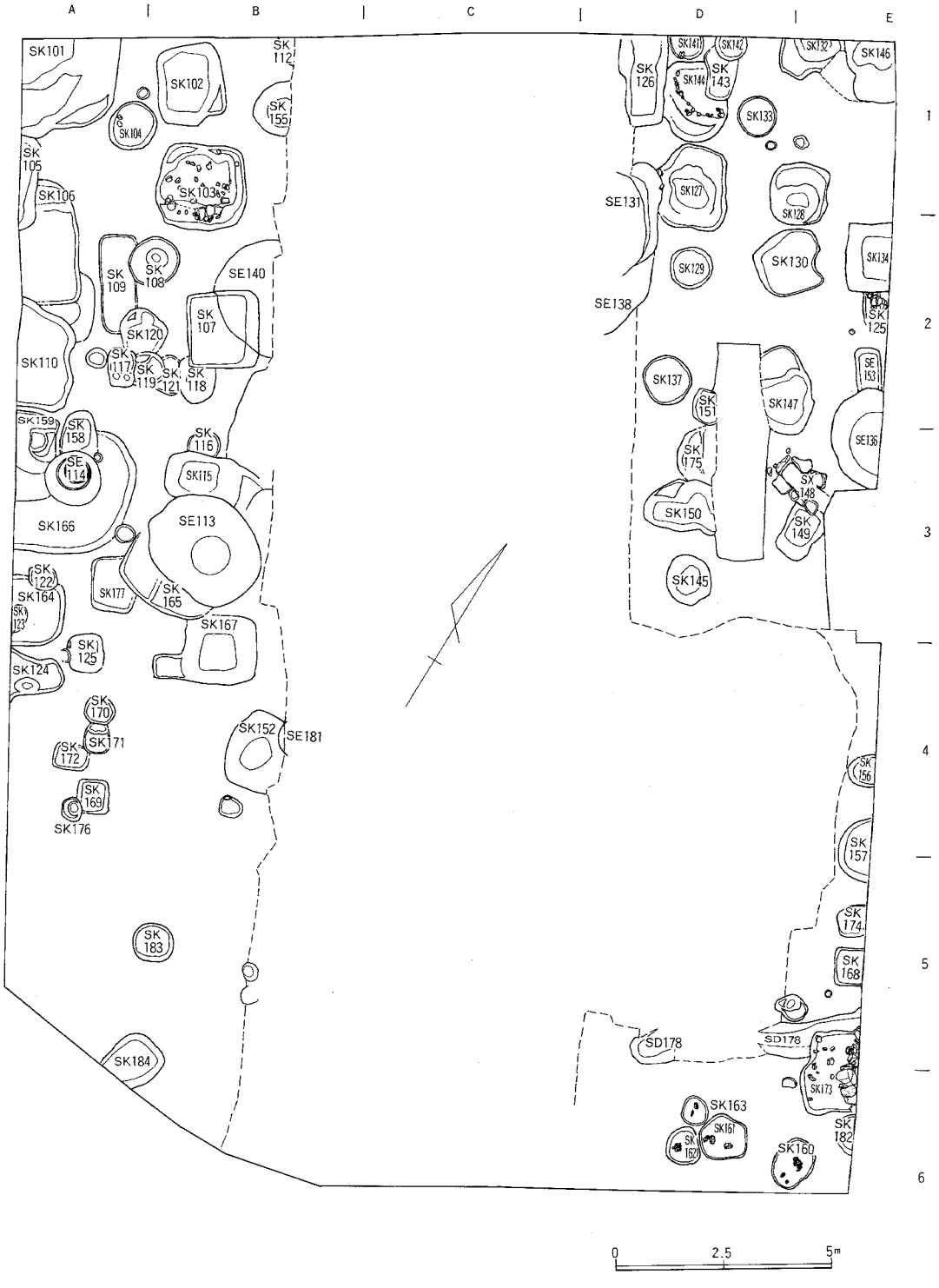


Fig. 5　第Ⅰ面遺構全体図 (1/150)

Fig.10－2はSK159から出土した土師皿である。口径が9.2cmあり、時期的に古いものが混入したものである。

(2)　配石遺構（Fig.6、PL.7）

SX148はD・E－3区で出土した石組遺構である。内法は長さ1.2m以上、幅0.4mで1段ないし2段の石積みが残っている。東側はシートパイル打ち込みで壊されているので全長は分からない。石積みは縦長の礫を面を揃えて並べ、小口は平たい石を立てている。出土遺物は肥前系の染付碗や七輪などが出土しているので近世のものであろう。

(3)　井戸（Fig.7・9、PL.8～10）

9基の井戸が出土している。素掘りの井戸と瓦組の井戸がある。調査区北側にまとまって出土しており割と等間隔に並んでいる。並んでいる軸線は現在の町割りと平行し、それぞれの町家に井戸が存在したものであろう。第Ⅰ面で出土した井戸は全て近世である。SE140は上面径2.92×3.9m、深さ4.43mを測る。井側は瓦組みで1段9枚で構成されている。径0.65mで、調査では6段残存しているのを確認した。井戸内からは肥前系陶磁器、瓦器、瓦質の擂鉢、明染付磁器などが出土している。SE113は素掘りの井戸で、瓦組の井側が抜かれているのかも知れない。上面径2.72×2.25m、深さは2.99mである。肥前系陶器擂鉢、染付碗、皿、明の染付皿、七輪、鉄滓などが出土している。SE131は、C・D－1・2区で検出した井戸で、上面径2.88×3.25m、深さ3.34mを測り、井側径は0.8m前後になるものと考えられる。瓦は殆ど抜かれており一部分だけ残存しているのみであった。出土遺物は肥前系陶磁器、巴文軒丸瓦、天目碗などが出土している。Fig.10－3はSE131から出土した土師皿である。口径8.7～8.9cm、器高1.1cmを測り、底面は糸切りで板目圧痕がみられる。時期的に古い土師皿が混入したものである。

(4)　溝

D・E－5区で検出した。確認長5.40m、幅0.8m、深さ0.65mで、断面は「U」字形を呈する。旧建物の基礎撹乱によって一部壊されているが、さらに東側に延びると考えられる。龍泉窯の青磁碗、備前焼の甕、糸切りの土師坏・皿、瓦などが出土している。15～16世紀のものであろう。

(5)　包含層他（PH.5～13）

博多遺跡群では遺構の上に遺構が重層的に切り合って重なっており、遺構として掘り上げなかった部分も遺構の一部である可能性が高い。Ⅰ面の調査が終了してⅡ面の遺構を確認するため人力で掘り下げたが、その部分は包含層として各区ごとに取り上げた。皮肉にもこの包含層にいいものが沢山含まれている場合が多い。Ⅰ面の包含層からは、天目碗、タイ・ベトナム陶器、磁州窯陶器、石鍋、硯、青銅製品、磨製石斧などが出土している。

2　第Ⅱ面の調査

第Ⅱ面は標高4.3m前後で、近世の遺構も残っているが、13～14世紀が中心で15～16世紀の遺構もかなり存在する。部分的に深く掘り下げている所は12世紀代の遺構が確認されている。遺構は土坑が129基、井戸9基、溝6条、石組遺構3基が出土している。

(1)　土坑（Fig.9～16、18～20、PL.10～25）

出土した土坑は、方形、長方形、円形、楕円形、不定形などのプランがある。時期的には12世紀代から近世まで含まれる。SK203は長方形の土坑に礫が充満している。断面図には一部しか表示していないが坑底まで礫が詰っている。建物の基礎の一部であろうか。SK232は略円形土坑で土師坏・皿がまとまって出土している。SK239・245・264・252・253・262・276・324にはそれぞれ坑内に礫が配

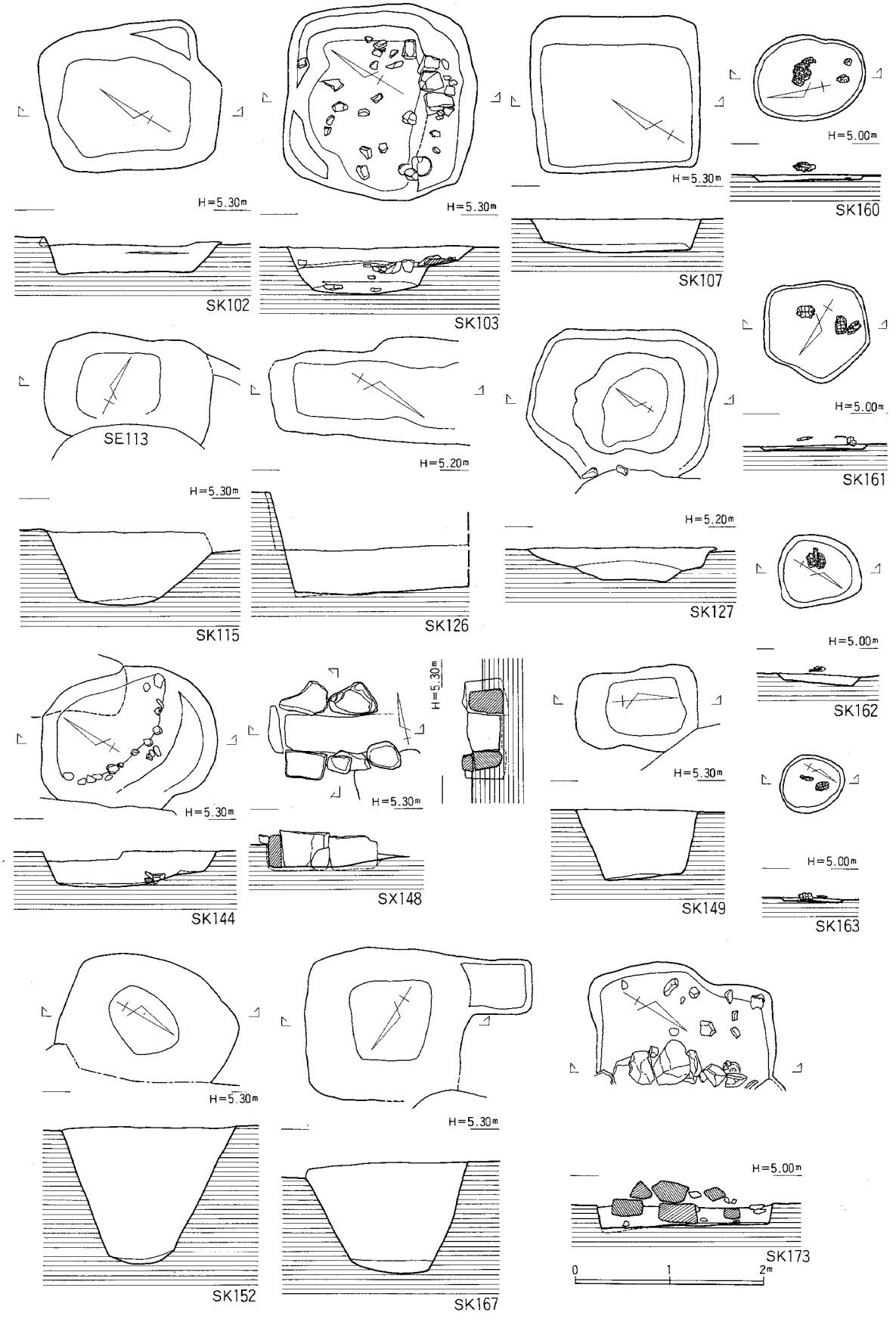


Fig. 6　第Ⅰ面出土土坑・石組遺構実測図（1/60）

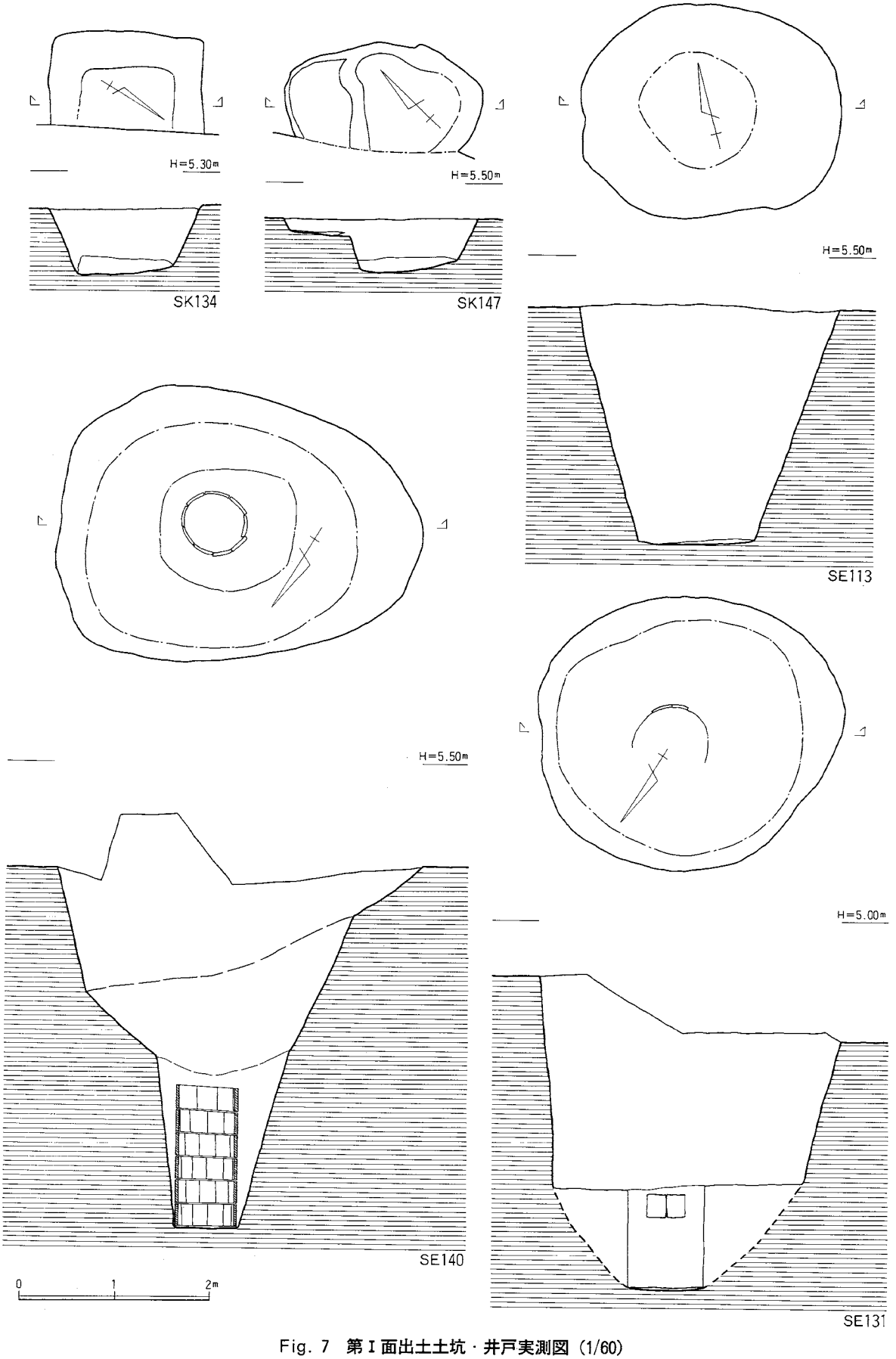


Fig. 7　第Ⅰ面出土土坑・井戸実測図（1/60）

されている。

土坑内からは多くの遺物が出土しているが、図化している遺物は必ずしも土坑の時期を示しているものばかりではない。時期的に新しい土坑でも、古い時期の遺物が数多く混入している場合があるからである。ただし、一括で土師器などがまとまって出土している場合は時期の決め手として重要である。Fig.10－4～8はSK202から出土した土師器の坏・皿である。坏の口径は13.4～15.0cmを測りややバラつきがある。底面は全て糸切りである。12世紀末から13世紀前半にかけてのものであろう。9はSK203、10～12はSK204から出土した土師坏・皿である。13は龍泉窯系の青磁盤である。見込みに印花文を施す。16は土師皿である。底面はヘラ切り離しで時期的に古い。13・16はSK210出土。14・15はSK218から出土した龍泉の青磁碗である。15は蓮弁に櫛描文を施す。17～20はSK221から出土した土師皿と天目碗である。天目は国産のものである。21～24、Fig.11－25はSK222から出土した土師坏・皿である。遺構は近世であるが土師器は15世紀代のものであろう。26～29はSK224から出土した土師皿、30は白磁平底皿である。31はSK230から出土した白磁皿、32は土師坏である。33～36はSK231から出土した土師坏・皿である。37～49はSK231からまとまって出土した土師坏・皿である。13世紀後半代のものであろう。50はSK234から出土した同安窯系の青磁碗、51はSK235から出土した白磁碗、52はSK238から出土した白磁皿である。52の見込みには印花文が施される。53～55はSK242から出土した土師坏である。底面は糸切りで板目圧痕が付く。56は同遺構から出土した白磁皿である。57はSK243から出土した龍泉窯の青磁碗である。Fig.13－58～74はSK245から出土した土師坏・皿である。全て糸切りで、底面に板目圧痕の付くものがある。13世紀後半代のものであろう。75・76はSK243から出土した土師皿と白磁碗である。77～83はSK246から出土した土師坏・皿である。すべて底面は糸切りである。84・85はSK247から出土した白磁皿、86はSK250から出土した青磁皿である。86には片切彫りで魚文を施す。SK250からは後述するがラッキョウ型の無頸壺が埋められた状態で完形で出土している。87はSK252から出土した同安窯系の青磁皿である。88～92はSK253から出土したもので、88は青磁碗、89は青磁皿、90・91は土師坏、92は白磁碗である。93はSK255から出土した青磁の双魚文皿である。94はSK250から出土した完形の無頸壺である。口径16.0cm、胴径50.8cm、底径12.8cm、器高52.0～53.7cmを測り、胎土はややザラついた明褐色を呈する。釉は胎土の上に鉄サビを流しがけした上に黄緑灰色～淡黄灰色釉を流しがけする。釉のかけ残しが斑点状に多くみられる。内面はくすんだ灰緑色を呈する。口縁部にはほぼ五角形の釉のかけ残しが認められる。焼成は良好で、胴上部に胎土目跡が17箇所認められる。Fig.18－95はSK258から出土した土師皿である。底面は糸切りである。96～101はSK260から出土した遺物である。96は土師皿、97は白磁の高台付皿である。98～100は白磁碗で、98は見込みが輪ハゲになっている。口径16cm、器高5.5cmを測る。99は口径17.4cm、器高6.2cm、底径5.7cmである。100は高台が高く口径16.2cm、底径6.6cm、器高7.9cmを測る。101は同安窯系の青磁碗である。内面に櫛描きのジグザグ文、外面に片切り彫りで沈線を施す。102はSK262から出土した白磁輪ハゲ碗である。103～106はSK264から出土した遺物である。103・104は土師皿で底面は糸切りである。105は白磁平底皿、106は白磁高台付皿である。底面に墨書が認められる。107～111はSK269から出土した土師坏・皿である。底面は糸切りである。13～14世紀代のものであろう。112はSK276から出土した土師皿である。114・115はSK279から出土した土師皿と坏である。遺構は新しいので混入品であろう。113はSK280から出土した白磁平底皿である。116～118はSK279から出土した白磁皿と龍泉窯系の青磁碗である。116は白磁皿で口径12.7cm、底径4.9cm、器高3.15cmを測る。見込みに花文を彫り込む。117は口縁部が輪花に切り込まれている青磁碗である。区画内に雲文が施されるタイプのものである。118は内面に蓮花折枝文を施す龍泉窯系青磁碗である。口径17.1cm、底

径7.1cm、器高7.3cmを測る。119～121はSK283から出土した土師皿と白磁小壺である。土師皿は復元口径9.0と9.6cmである。底面は糸切りで板目圧痕が付く。白磁小壺は口径2.6cm、底径3.3cm、胴径5.8cm、器高3.8cmを測る。土師皿及び白磁小壺は遺構の時期よりも古いものである。122・123はSK292から出土した土師皿と土師坏である。皿は糸切り板目圧痕の底部調整を施し、123の坏は底面ヘラ切りである。外面には指頭圧痕が残り、内面にはミガキをかける。遺構の時期は13世紀と考えられるが、土師坏はこれよりも古いタイプである。124～Fig.19－126はSK297から出土した遺物である。124は底面糸切りの土師皿である。口径9.4cm。125は同安窯系の青磁皿である。内面に櫛描文を施す。126は龍泉窯系の青磁碗である。内面に雲文を施す。127はSK303から出土した底面糸切りの土師皿である。口径11.2cmで15世紀代に属するものであろう。128はSK306から出土した白磁高台付皿で、129はSK307から出土した白磁の平底皿である。130は底面糸切り板目圧痕の土師坏、131は底面糸切りの土師坏である。131は近世に属するものであろう。132はSK313から出土した白磁碗、133はSK314から出土した白磁である。133の見込みは釉がカキ取られ輪ハゲになっている。134はSK315から出土した白磁碗である。外面に粗いケズリ痕が残っている。135はSK321から出土した土師坏、136はSK323から出土した土師坏である。共に15世紀代のものであろう。137～139はSK330から出土した白磁碗である。137は輪ハゲ碗、138は外面に縦線文を施す白磁碗、139は口縁部が玉縁状になる白磁碗である『博多出土陶磁分類表』によれば137はⅨ類、138はⅤ類、139はⅣ類に相当しよう。137の底面には墨書がみられる。これらは12世紀代のものであろう。140はSK332から出土した白磁平底皿である。141～143はSK331から出土した白磁皿と碗である。141は内面に白堆線がみられ、底面には墨書が施される。142は退化した玉縁状の口縁を有する白磁碗である。143は内面に曲線文を施した白磁皿である。ともに12世紀代のものであろう。144～160はSK334からまとまって出土した遺物である。144は白磁高台付皿、145は褐釉の陶器皿か蓋、146～153は土師皿である。土師皿は底面糸切りで板目圧痕が付く。口径は大体9.2cm前後である。154は底面ヘラ切りの丸底を呈する土師坏である。155～159は底面糸切りで、板目圧痕のある土師坏である。口径は全て15cmを越え最も口径の大きくなる時期のものである。12世紀後半代に位置づけられよう。160は瓦器椀である。内外面にヘラ磨きを施す。Fig.20－161～164はSK336から出土した天目碗と白磁碗である。161は白縁天目で、口径11.8cm、胎土は灰白色で細かい白点がはいる。釉はくすんだ黒茶褐色釉で、口縁内面は釉を掻き取り白釉を施す。白縁天目は他の遺構からも出土している。162は口径12.6cm、底径4.0cm、器高4.5～4.8cmを測り、胎土は淡黄灰色でややザラつき細かい赤色粒子を含む。内面は光沢のある黒釉、外面はやや褐色味を帯びており釉ダレが認められる。口縁端部は茶褐色を呈し、釉が薄くなる。169も168とよく似た天目碗である。口径は12.2cm、底径3.8cm、器高4.6 cmを測る。胎土は灰色～橙褐色でややザラつき細かい赤色粒子が認められる。釉は光沢のある黒釉で、やや薄い部分は茶味を帯びる。口縁端部は茶褐色を呈する。小型の小さな土坑であるが天目がまとまって出土しており注目される。164は同時に出土した小さな玉縁口縁の白磁碗である。口径15.4cm、底径5.9cm、器高6.2cmを測る。11世紀後半から12世紀代のものであろう。165はSK337から出土した土師皿である。12世紀代に属するものであろう。166はSK339から出土した土師坏である。口径16cm、底面はヘラ切りで板目圧痕がつく。167・168はSK341から出土した土師皿と白磁碗である。168は口径17.6cm、器高6.65cmを測る。169はSK340から出土した底面糸切りの土師坏である。口径は12.0cm、底径8.2cm、器高2.9cmを測る。

(2)　配石遺構（Fig.9・16・20、PL.14 ）

配石遺構は4基出土している。SX221は配石遺構というよりも石組遺構という方が正しいであろう。大部分は未調査区に広がっているが、方形ないし長方形を呈すると考えられる。石積みは2～3段残

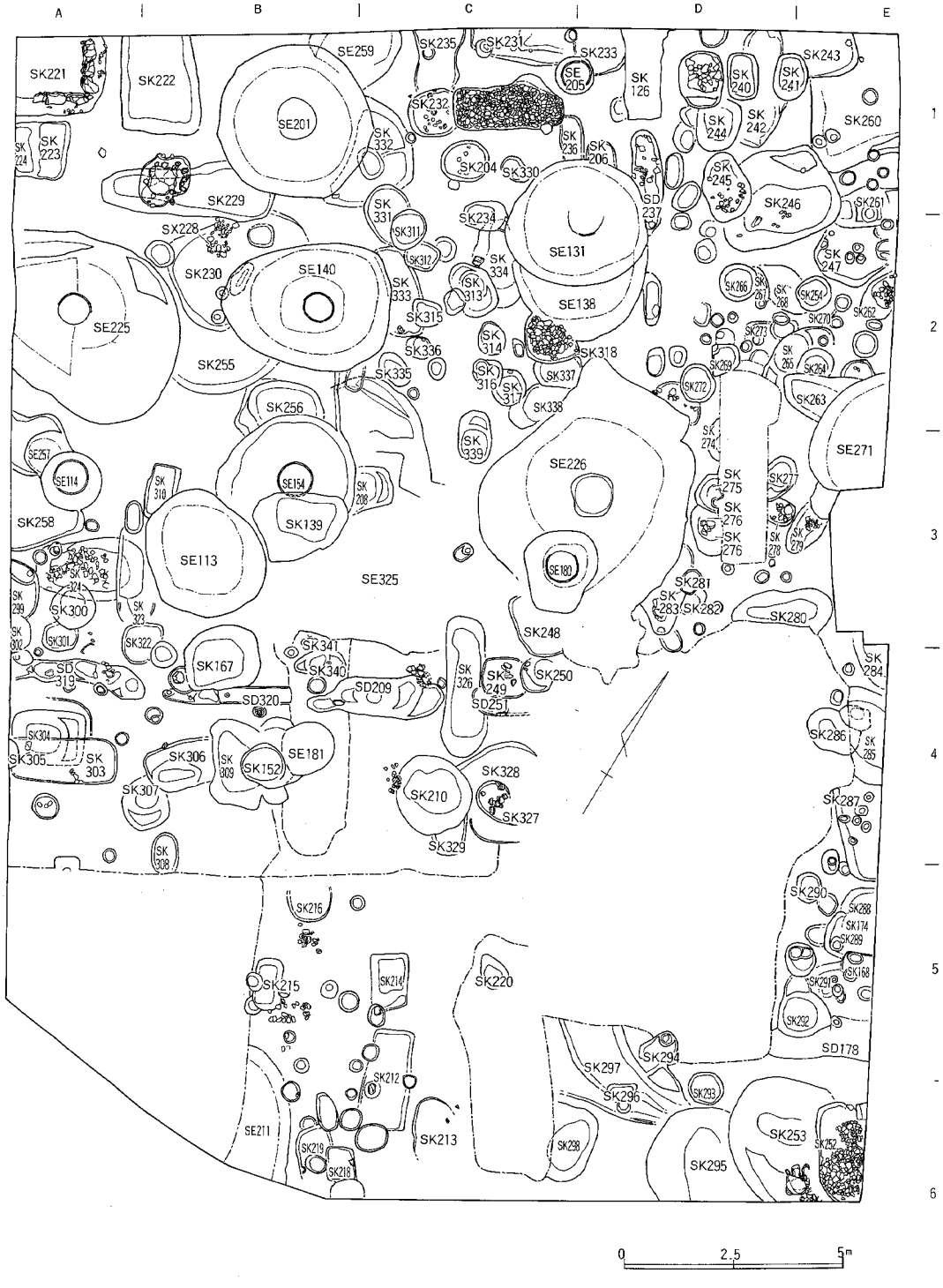


Fig. 8　第Ⅱ面遺構全体図（1/150）

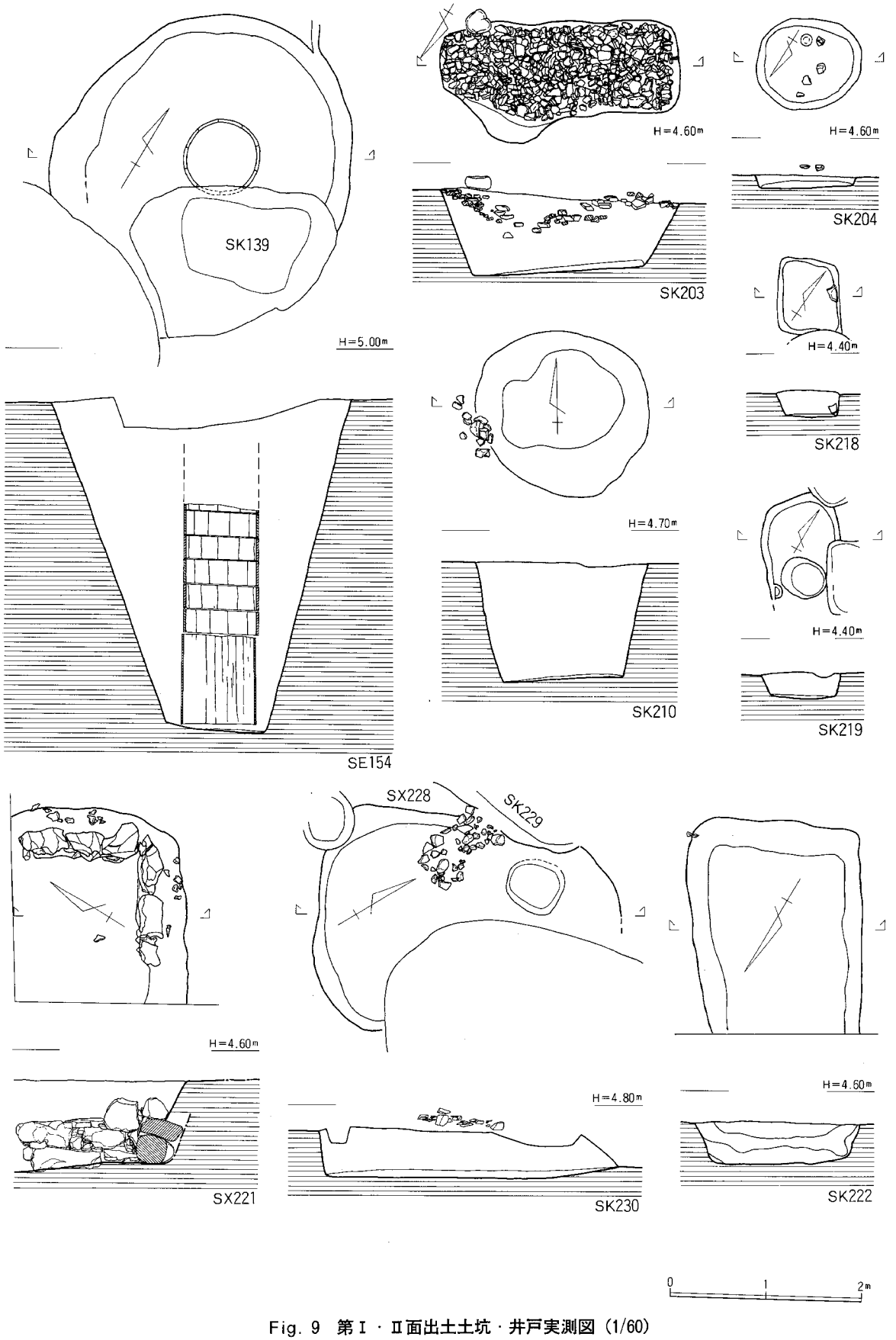


Fig. 9　第Ⅰ・Ⅱ面出土土坑・井戸実測図（1/60）

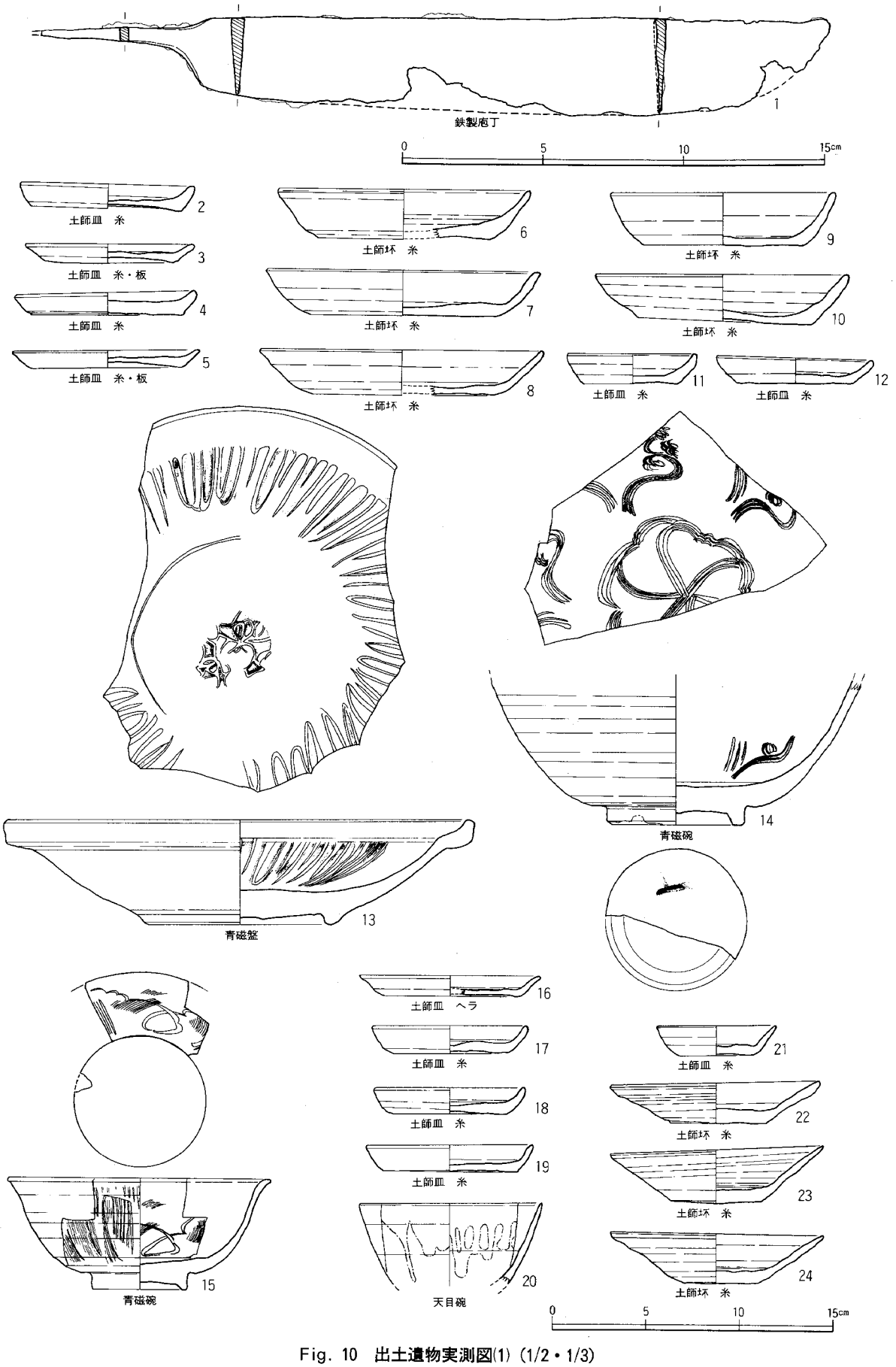


Fig. 10　出土遺物実測図(1)（1/2・1/3）

1：SK103　2：SK159　3：SE131　4～8：SK202　9：SK203　10～12：SK204　13：SK210　14・15：SK218
16：SK210　17～20：SK221　21～24：SK222

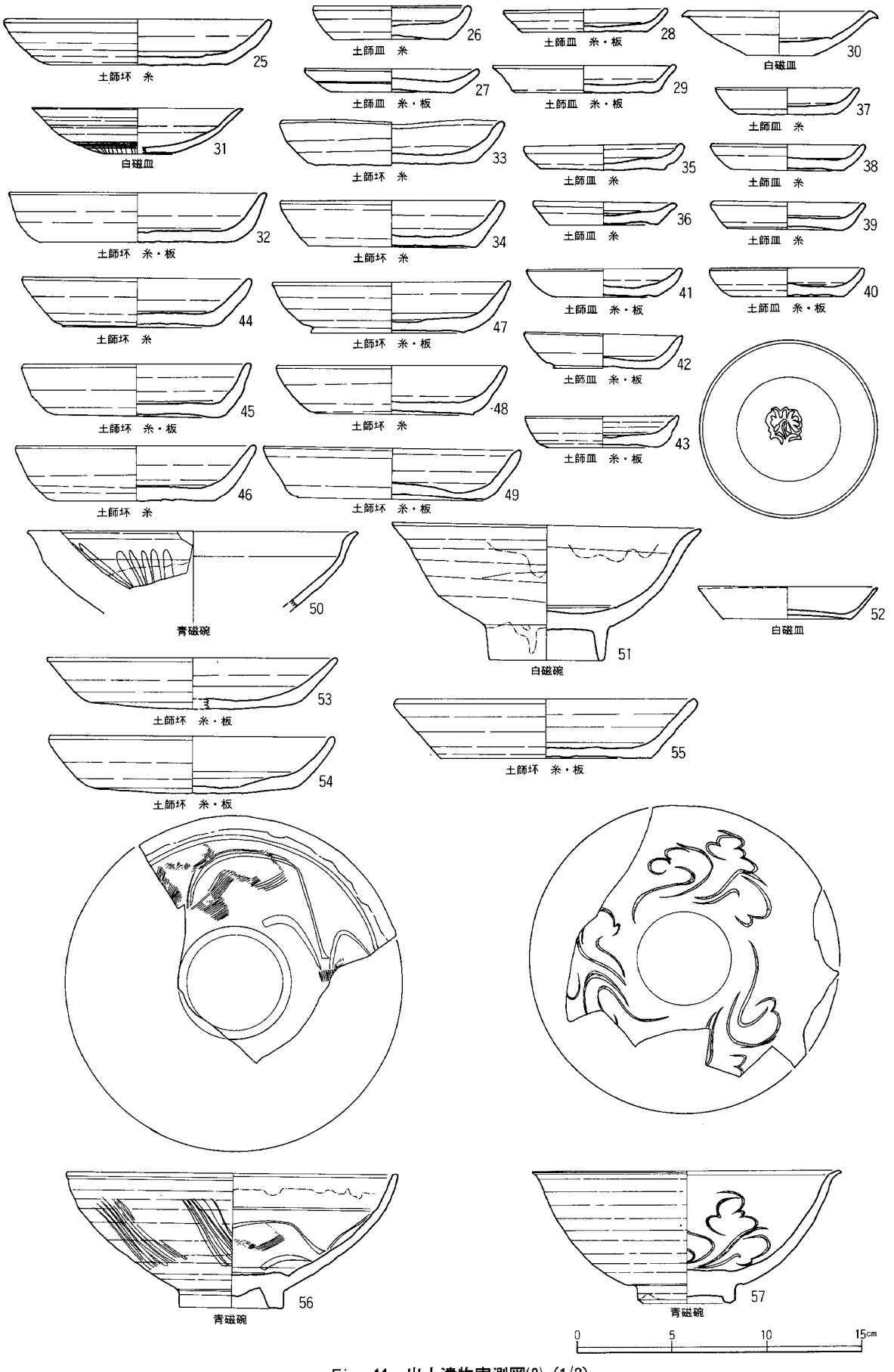


Fig. 11　出土遺物実測図(2) (1/3)

25～30：SK224　31・32：SK230　33－36：SK231　37～49：SK232　50：SK234
51：SK235　52：SK238　53～56：SK242　57：SK243

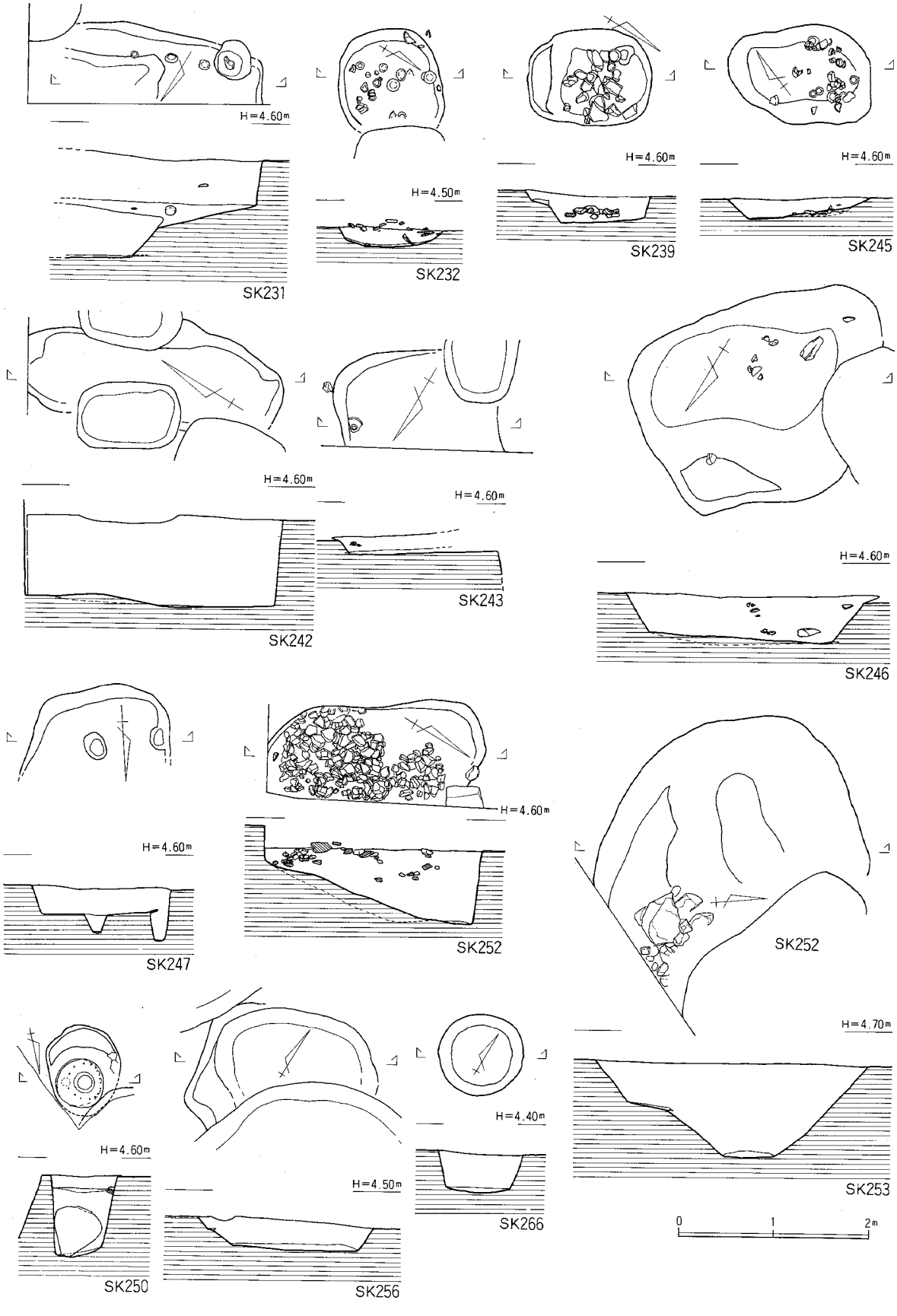


Fig. 12　第Ⅱ面出土土坑実測図（1/60）

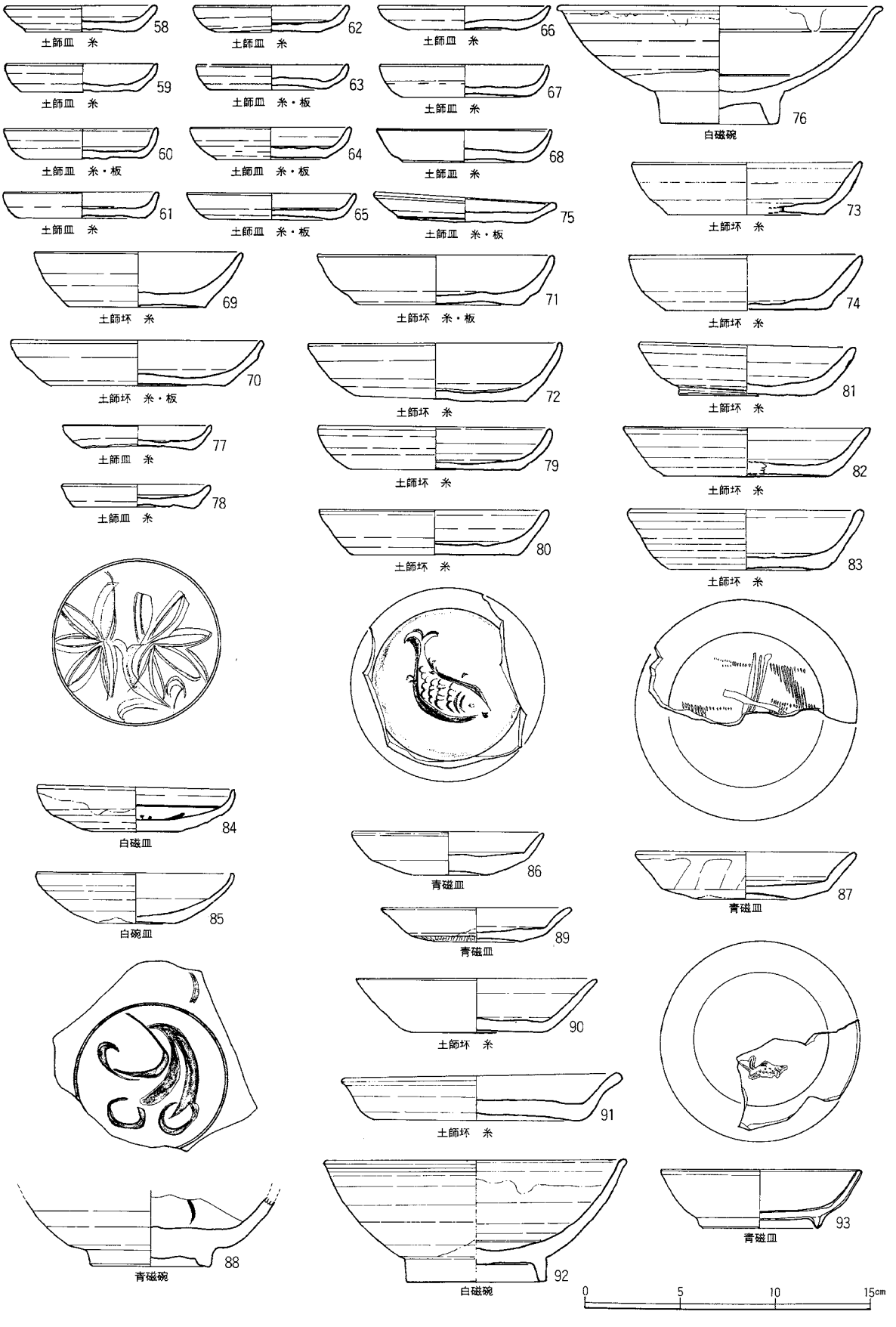


Fig. 13　出土遺物実測図(3) (1/3)

58～74：SK245　75・76：SK243　77～83：SK246　84・85：SK247　86：SK250　87：SK252　88～92：SK253　93：SK255

存している。遺構内からは多量の肥前系染付磁器、肥前系青磁鉢、白磁、香炉、刷毛目皿、花瓶、擂鉢、小皿、刷毛目碗、大甕、黄釉皿などが出土している。近世に属する遺構である。SX227は大きな礫を礎石状に据え、周りに拳大の礫を配する遺構である。龍泉窯系の青磁碗Ⅱ類、糸切りの土師坏、白磁碗などが出土している。14世紀代に属するものであろう。SX228はSK230の上部で検出された配石遺構で、長さ0.9m、幅0.6mの範囲内に5～15cm大の礫を配したものである。出土遺物は口ハゲの白磁皿、青磁碗、褐釉陶器、土師坏・皿などである。Fig.20－**171～174**はSX228から出土した土師坏・皿である。土師皿は口径8.8cmと8.9cmで、底面は糸切りである。坏は口径12.8cm、器高2.95cmを測り、底面は糸切りで板目圧痕が付く。14世紀代に属するものであろう。SX318は略方形の土坑に礫を敷きつめたもので、遺物の出土は極端に少なく時期を特定することができなかった。

(3)　井戸（Fig.16・17・20・29、PL.28～30）

第Ⅱ面で調査した井戸は合計9基である。近世に属するものが多い。SE201は素掘りの井戸である。瓦組み井戸の瓦が抜かれた可能性がある。近世のもので、肥前陶磁器、青磁碗・皿、白磁碗・皿、中国陶器などが出土している。SE205は近世の瓦組井戸である。井側の瓦列は7段残存していた。肥前陶磁器、青磁碗、白磁碗などが出土している。SE211は円形の井戸で一部しか掘り下げていない。15世紀代に属すると考えられる。SE225は近世の瓦組井戸である。肥前陶磁器や明染付磁器、土師器などが出土している。Fig.20－**177～179**はSE225から出土した土師坏・皿である。**179**は底部ヘラ切りの丸底坏である。内面はミガキが施されている。時期的に古いものが多く混入していた。SE226は中世の井戸と考えられていたが、一部肥前系陶磁器が含まれているので近世のものであろう。円形の素掘り井戸で木桶が使用されていた可能性がある。Fig.20－**180～187**はSE226から出土した土師坏・皿と黒褐釉盃である。土師器坏・皿は13～14世紀に属するものである。**183**は黒褐釉盃である。土は温みのある白色で微細な褐点が少々観察される。釉は褐味のある黒色で、表面は二次火熱を受け荒れて灰色がかり光沢が無くなっている。見込みを輪状に釉切りし、高い高台が付くとみられる。磁州窯の産であろう。SE257は円形素掘りの井戸である。壁際だったので一部しか掘り下げていない。近世の井戸で、肥前系磁器、明染付皿などが出土している。Fig.20－**188**は出土した土師皿である。SE259は褐釉壺、瓦器椀、瓦器皿、土師坏・皿などが出土しており13世紀代まで遡る可能性がある。但し、壁際だったので途中までしか掘り下げていない。Fig.20－**189**は出土した瓦器皿である。SE271も近世に属する井戸であるが壁際だったので一部しか掘り下げていない。Fig.20－**190**は出土した土

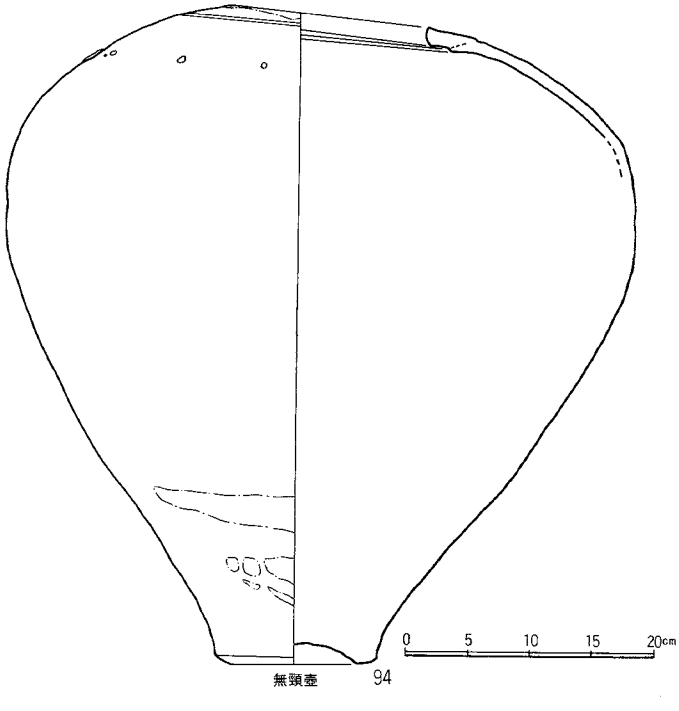


Fig. 14　出土遺物実測図(4)（1/6）

94：SK250

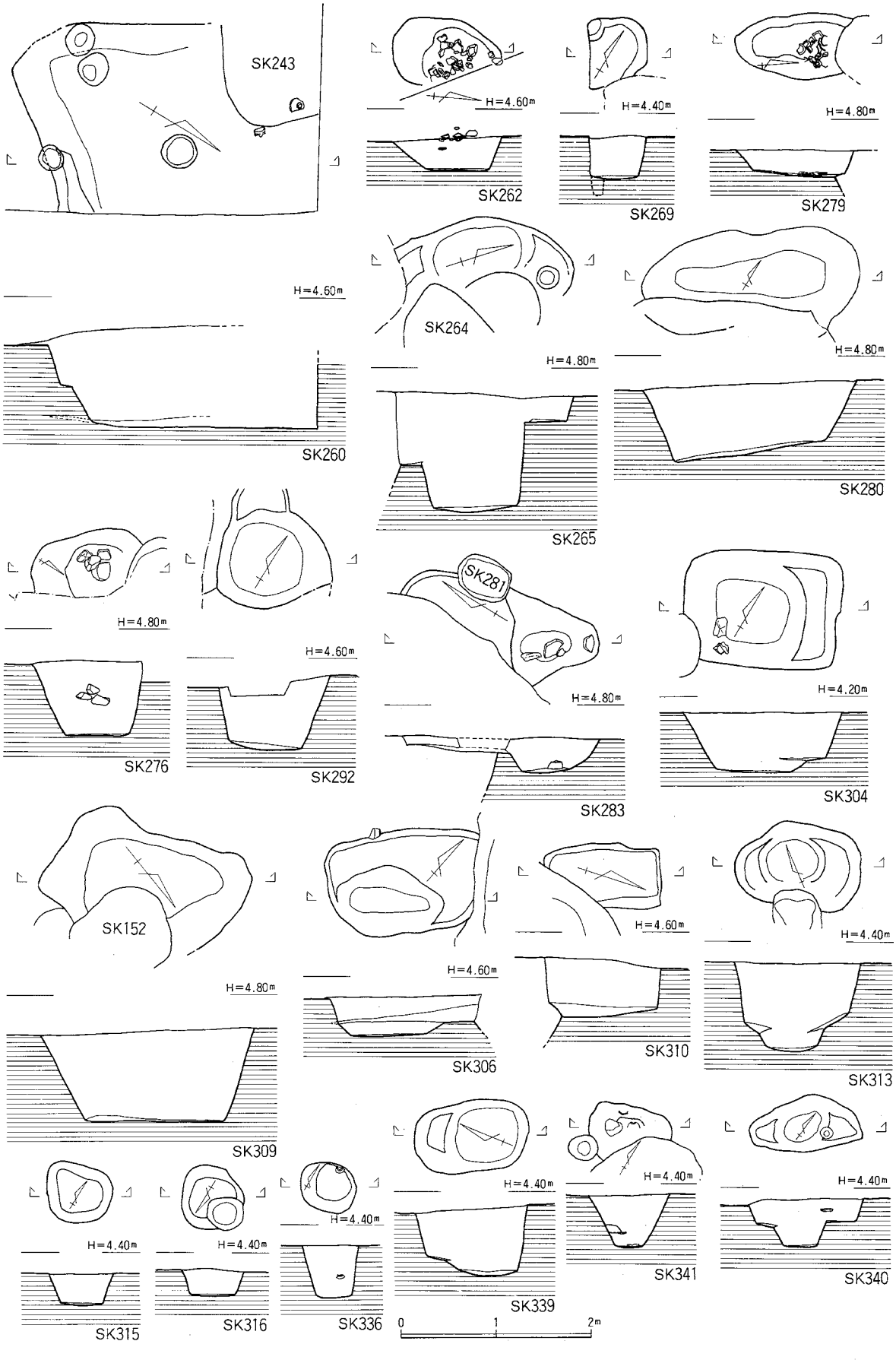


Fig. 15　第Ⅱ面出土土坑実測図（1/60）

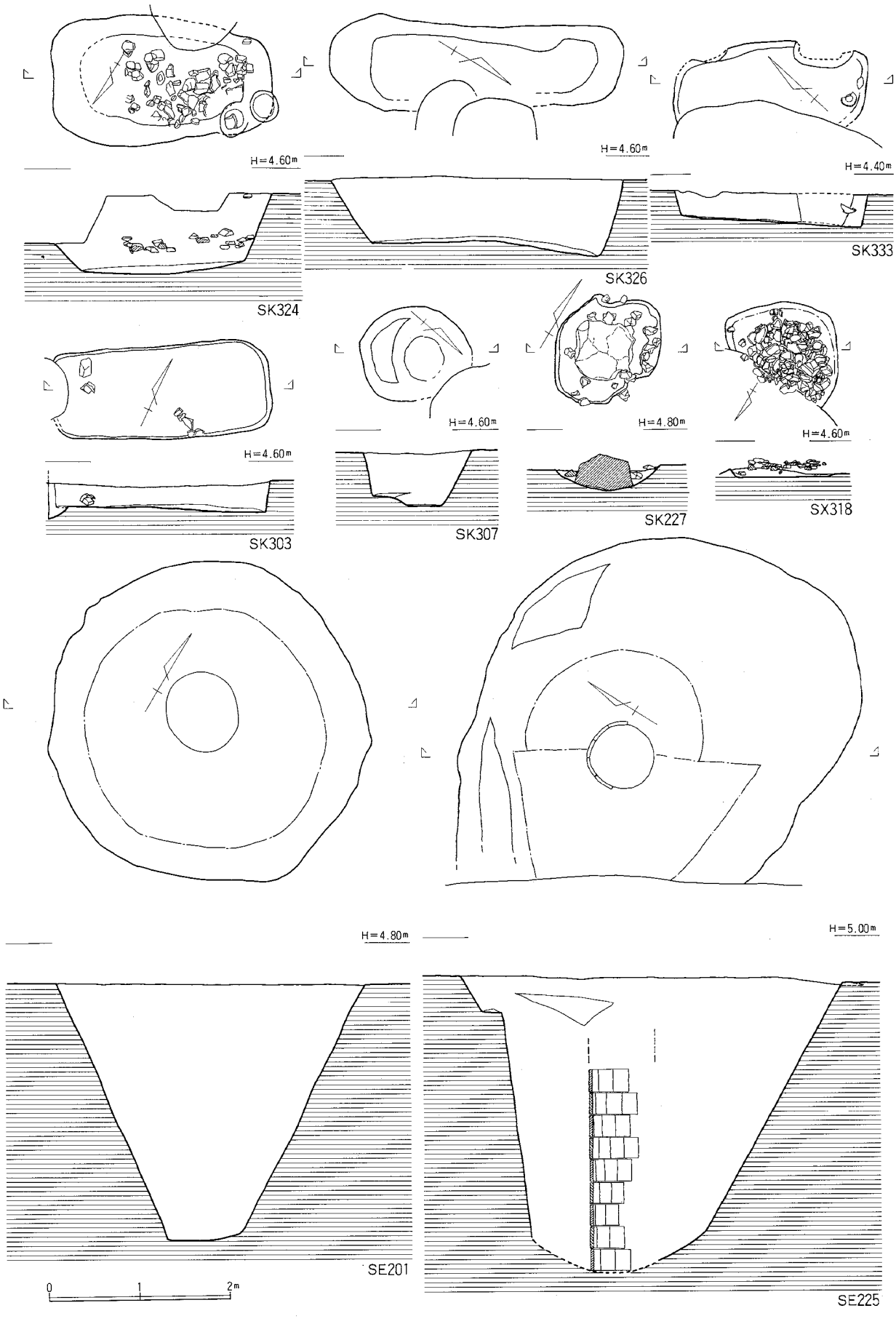


Fig. 16　第Ⅱ面出土土坑・石組遺構・井戸実測図（1/60）

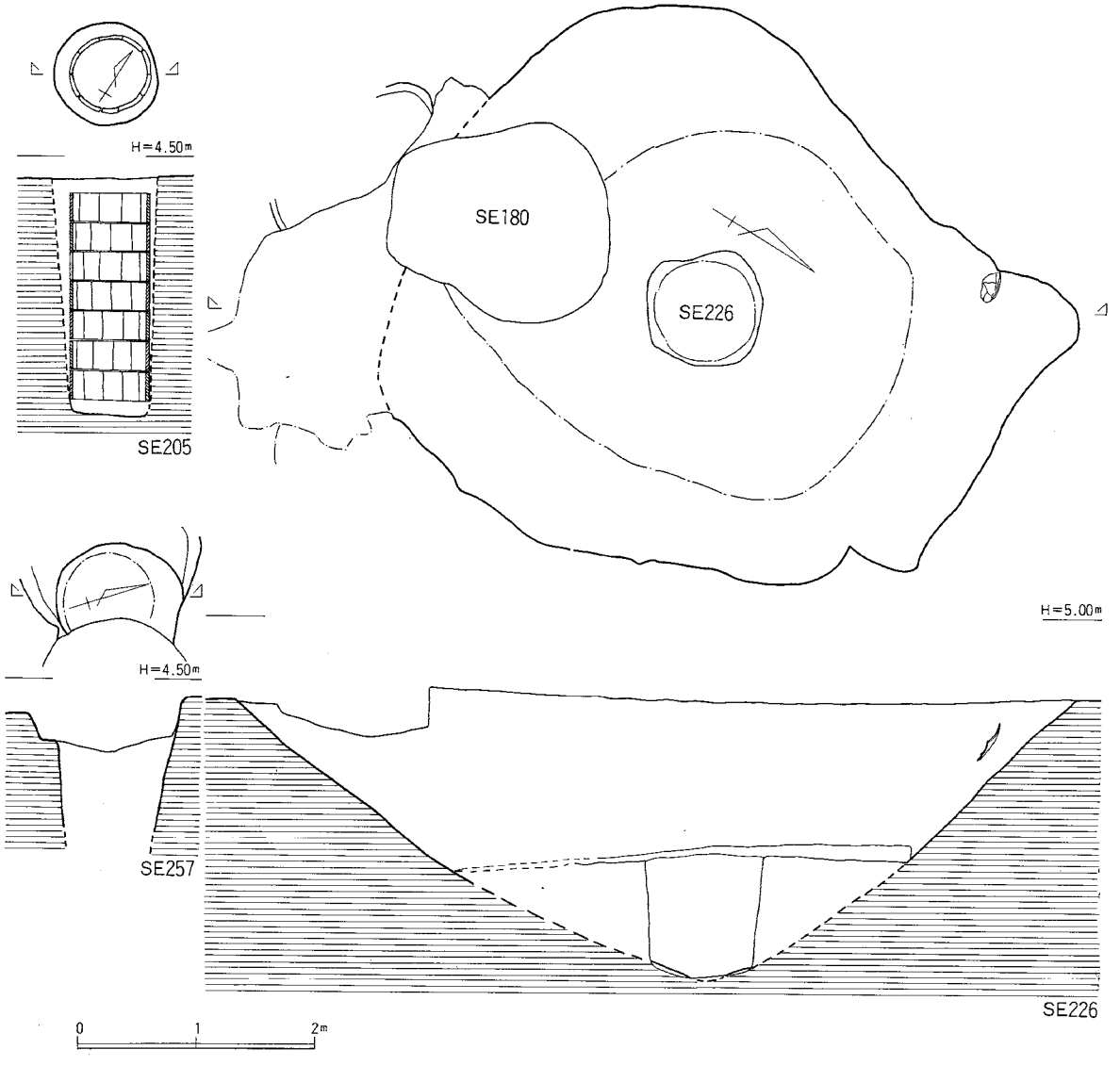


Fig. 17　第Ⅱ面出土井戸実測図（1/60）

師皿である。小型で近世に属するものであろう。SE325は大形の掘り方を持つ素掘りの井戸である。井筒の壁が直に立つのでもともと木桶が使用されていたものであろう。Fig.20－192～197は同井戸から出土した土師坏・皿、瓦器椀である。土師皿は底面がヘラ切り、糸切りと二者存在するが、土師坏は口径が小さく新しくなる可能性があるので、14世紀後半代から15世紀代の時期を考えておきたい。瓦器椀は残りが良く、古い時期の遺構を壊して井戸が作られ、混入したものであろうか。

(4)　溝（Fig.20、PL.29 ～31）

溝は6条検出している。これらの溝は連続して長く伸びる溝ではなくて、途切れ途切れでそれぞれ同一方向に連なっている。溝底は凹凸やピット状の深い穴が存在するなど水を流すような用途の溝ではない。板屏か何らかの区画の溝と考えられる。方向は現在の町割りとほぼ並行している。南北方向の溝がSD237、SD238、東西方向の溝がSD319、SD320、SD209、SD251である。出土遺物からみるとそれぞれの溝は時期的にバラつきがあるが、出土遺物からだけでは博多遺跡群の場合時期が決め難い。因に、出土遺物からこれらの溝の時期を見てみると、SD237が14～15世紀、SD238が14世紀、SD251は不明、SD209が15～16世紀、SD320が12世紀、SD319が不明となっている。SD320からは古

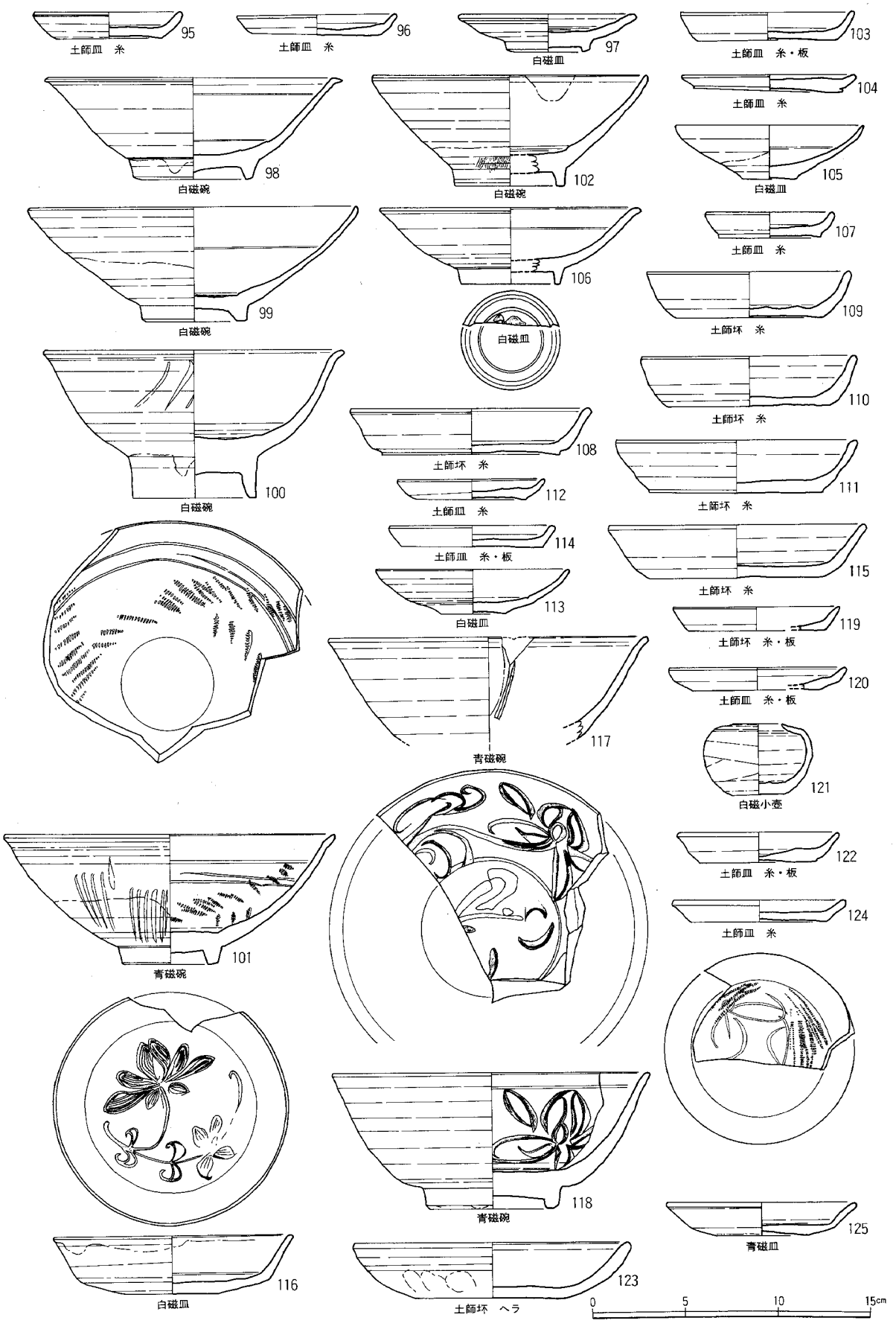


Fig. 18　出土遺物実測図(5) (1/3)

95：SK258　96～101：SK260　102：SK262　103：SK264　104～106：SK265　107～111：SK269　112：SK276
113：SK280　114～118：SK279　119～121：SK283　122・123：SK292　124・125：SK297

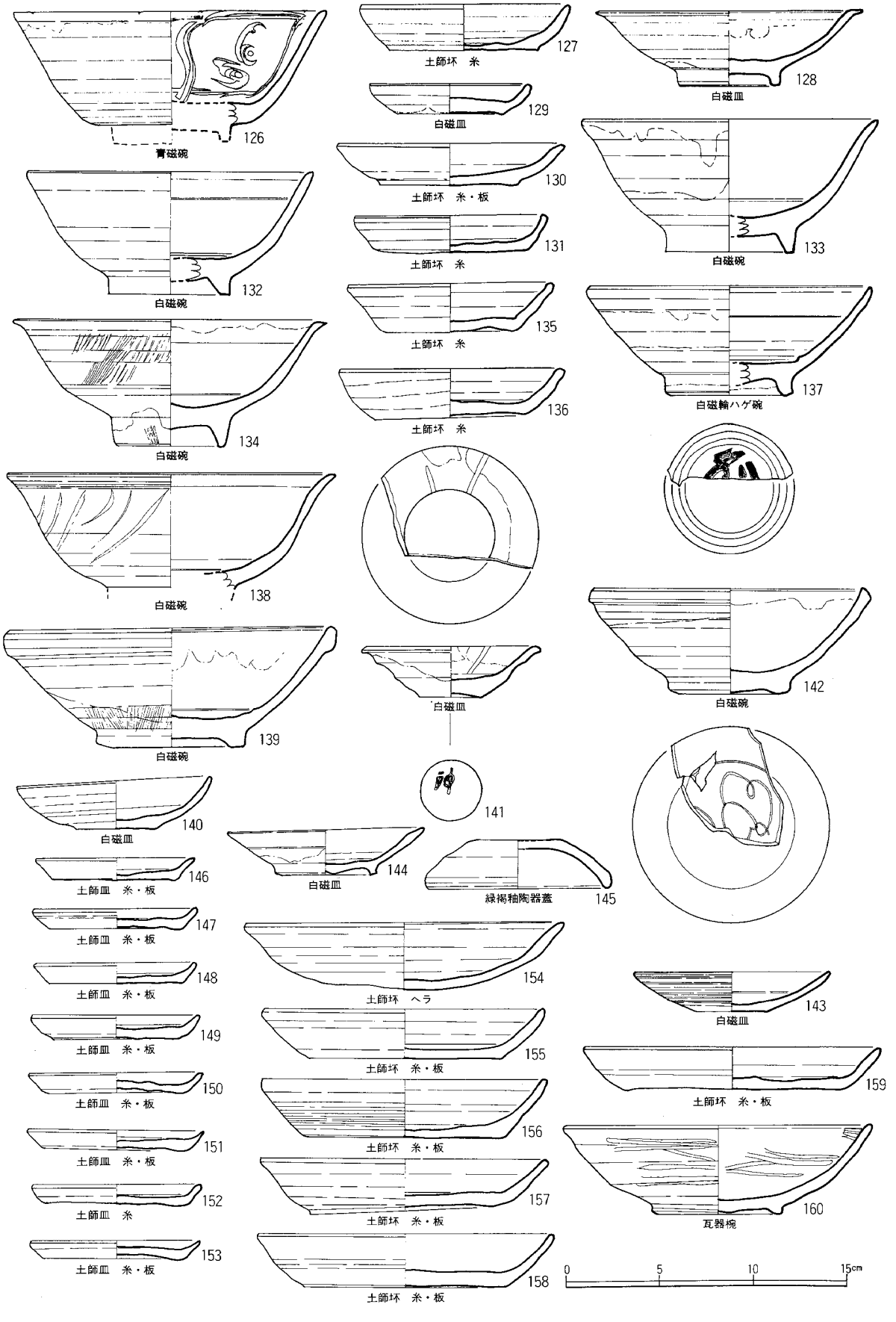


Fig. 19　出土遺物実測図(6) (1/3)

126：SK297　127：SK303　128：SK306　129：SK307　130：SK309　131：SK310　132：SK313　133：SK314
134：SK315　135：SK321　136：SK323　137～139：SK330　140：SK332　141～143：SK331　144～160：SK334

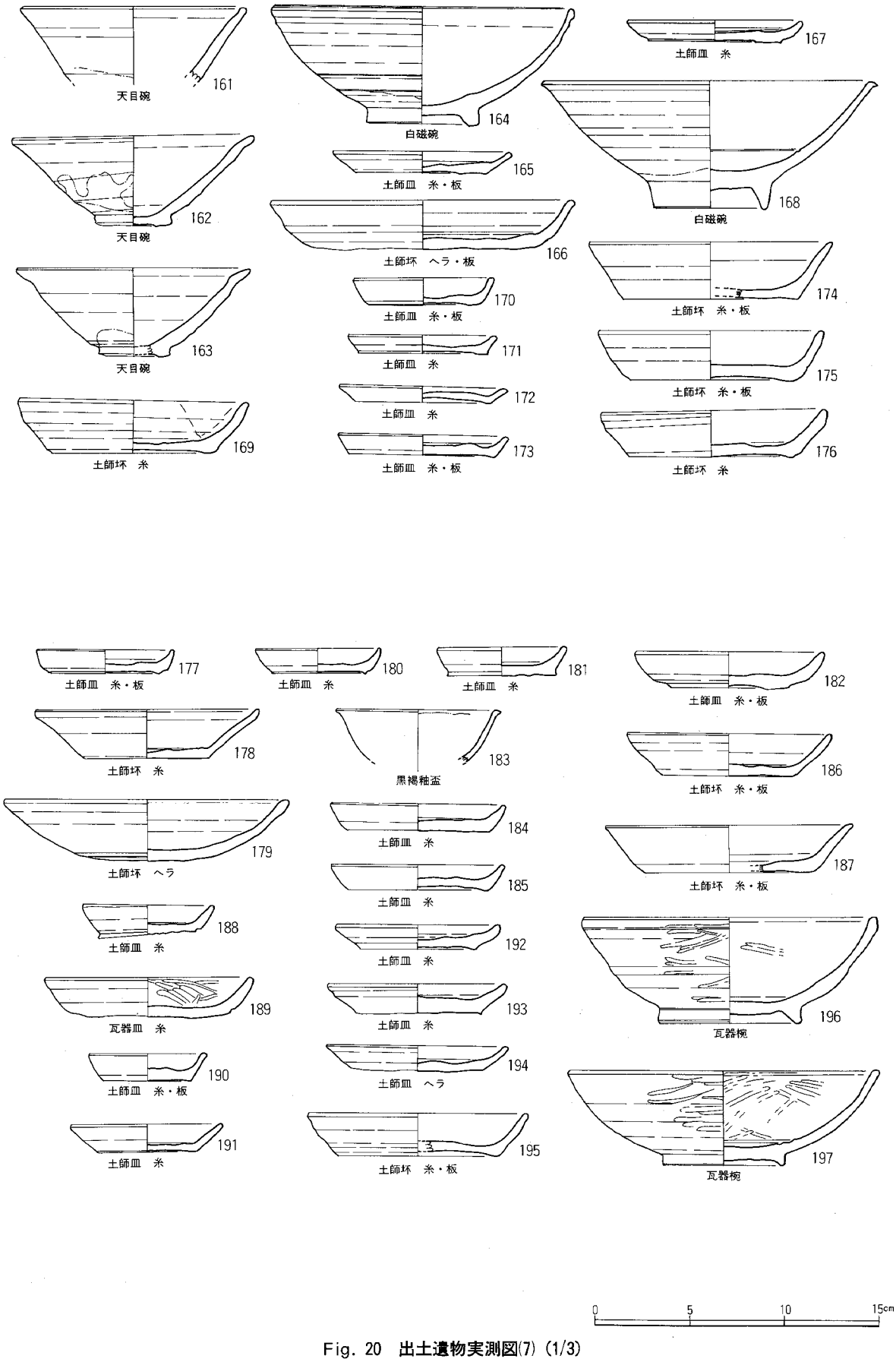


Fig. 20 出土遺物実測図(7) (1/3)

161～164：SK336　165：SK337　166：SK339　167・168：SK341　169：SK340　170・171：SD209　172～174：SX228
175・176：SD237　177～179：SE225　180～187：SE226　188：SE257　189：SE259　190：SE271　191～197：SE325

いものだけしか出土していないし、SD209はやや新しい遺物が出土している。最も多く出土する遺物は14～15世紀代が中心となるので、これらの溝の年代もほぼ同時期と考えていいのではなかろうか。Fig.20－175・176はSD237から出土した土師坏である。口径は11.8cmと11.9cm、器高は2.6cmと2.5cmである。底面は糸切りで、175には板目圧痕が残っている。時期的には14世紀後半から15世紀代にかけてのものであろう。

(5)　包含層・遺構確認他（Fig.39～41）

第Ⅱ面の調査終了後、人力で第Ⅲ面の調査面まで各区ごとに掘り下げた際、出土した遺物をⅡ面下包含層として取り上げた。包含層といっても未調査の遺構の一部を含んでいるため遺物は多量に出土した。その一部を取り上げておきたい。

Fig.39－455～459は白磁高台付皿、460～469は白磁平底皿である。456～459は内面見込みを輪状に釉ハギする。459は底面に花押の墨書が施されている。460は内面に櫛描文と線描文で花文を施している。467は片切彫で、468は櫛描文でそれぞれ花文を描いている。469は白堆線で内面を区画している。470は型押しの白磁碗である。Fig.40－479～484は白磁碗である。479は小さな玉縁口縁、480・481は縁の大きな玉縁口縁となる。483は輪ハゲの白磁碗である。484は内面に櫛描文を施す。485青白磁の刻花唐子文鉢である。口径19.8cm、底径5.7cm、器高6.1cmを測る。胎土は灰白色で透明な光沢のある灰白色の釉がかかる。内面には上下に向い合った唐子を巡って唐草の文様が施されている。景徳鎮の製品と思われる。486は連江窯の青磁碗である。口径13.4cm。Fig.41－490は白磁器の蓋である。外径8.7cm、歯径5.6cmを測る。胎土は灰白色磁質で黒い微粒子が少し混入し、小孔がある。釉は灰青味の半透明釉で釉中に気泡を含む。氷裂はない。表面に青いガラスの塊りが溶け落ちたように付着している。このガラスについては専門的な立場で分析をお願いした結果を収録している。491は銹茶玳玻盞である。復元口径13.6cm、胎土は細かく混じりなしで、褐味のある白色を呈し半磁化している。釉はミルクチョコレート色で、マット、灰をふる。灰をかぶった部分は釉中の鉄分がうすくなり黒～オリーブ色になる。492は黒褐釉盞である。復元口径14.6cm、底径3.6cm、復元高3.9cmを測る。胎土はかすかにピンクがかった白で細かい。焼成は良好で堅く焼けている。釉は漆黒で一部にさび色が出る。内面には透明か青磁釉で堆線を施し区劃している。底面に墨書がある。493・494は内白天目碗である。493は復元口径12cm、胎土は褐味のある灰白色で半磁質、細かい黒点がある。釉は外面から内の口まで黒褐釉をかける。釉層は薄く、ピンホールが多く、マットな感じを与える。内面にはうすく灰味のある透明釉をかける。光沢があり氷裂がはいる。494の胎土は褐味のある灰白色で半磁質、釉は外面から口縁内面までは黒褐釉で釉層はうすい。内面下部はオリーブ味の灰白色半透明釉である。495～497は青磁皿、498は白磁碗、499は青磁鎬蓮弁文碗である。完形で１号人骨の副葬品である。500は瓦器皿、501は青磁碗である。503は褐釉と緑釉をかけた二彩盤である。内面に魚文を線描きし、底面に墨書がある。504は弥生後期の高坏脚である。Fig.42－503は青磁盤である。509は緑褐釉の四耳壺、510は須恵質の捏鉢、511は備前の擂鉢である。

3　第Ⅲ面の調査

第Ⅲ面は標高3.9m前後で、大部分は黄白色の砂層が基盤となって遺構が掘り込まれている。遺構は12世紀を中心にそれぞれ前後する時期にわたり、古くは古墳時代・古代から、新しくは15～16世紀まで存在する。ただし、新しい時期の遺構は、第Ⅲ面になると極端に少なくなってくる。古い遺構では古式土師器の時期まで遡れるが、黄白色砂層上面で弥生中期の甕などが出土しているので、遺跡の開始は弥生中期まで遡ることができる。第Ⅲ面で出土した遺構は、土坑118基、井戸15基、溝３条な

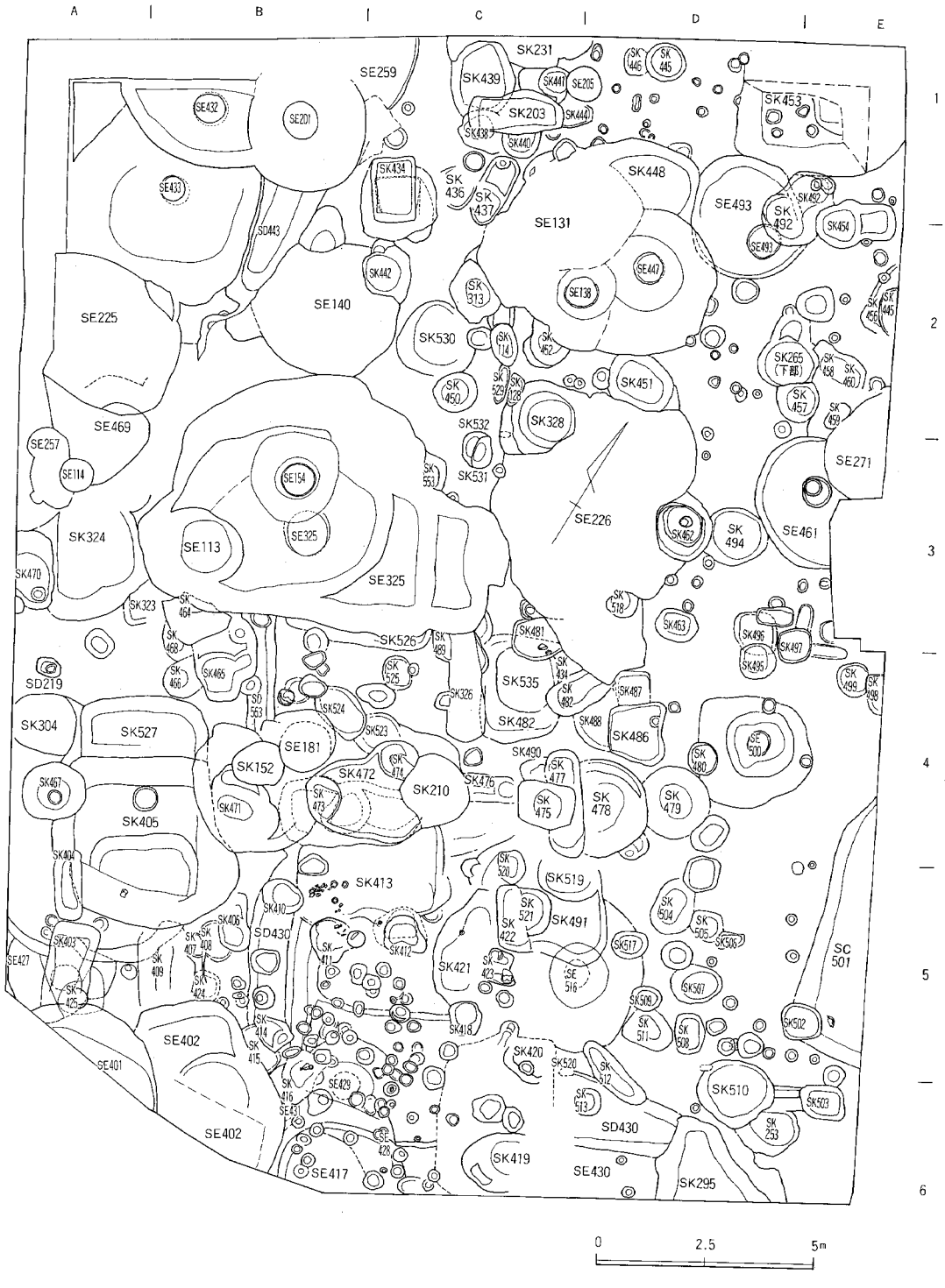


Fig. 21　第Ⅲ面遺構全体図（1/150）

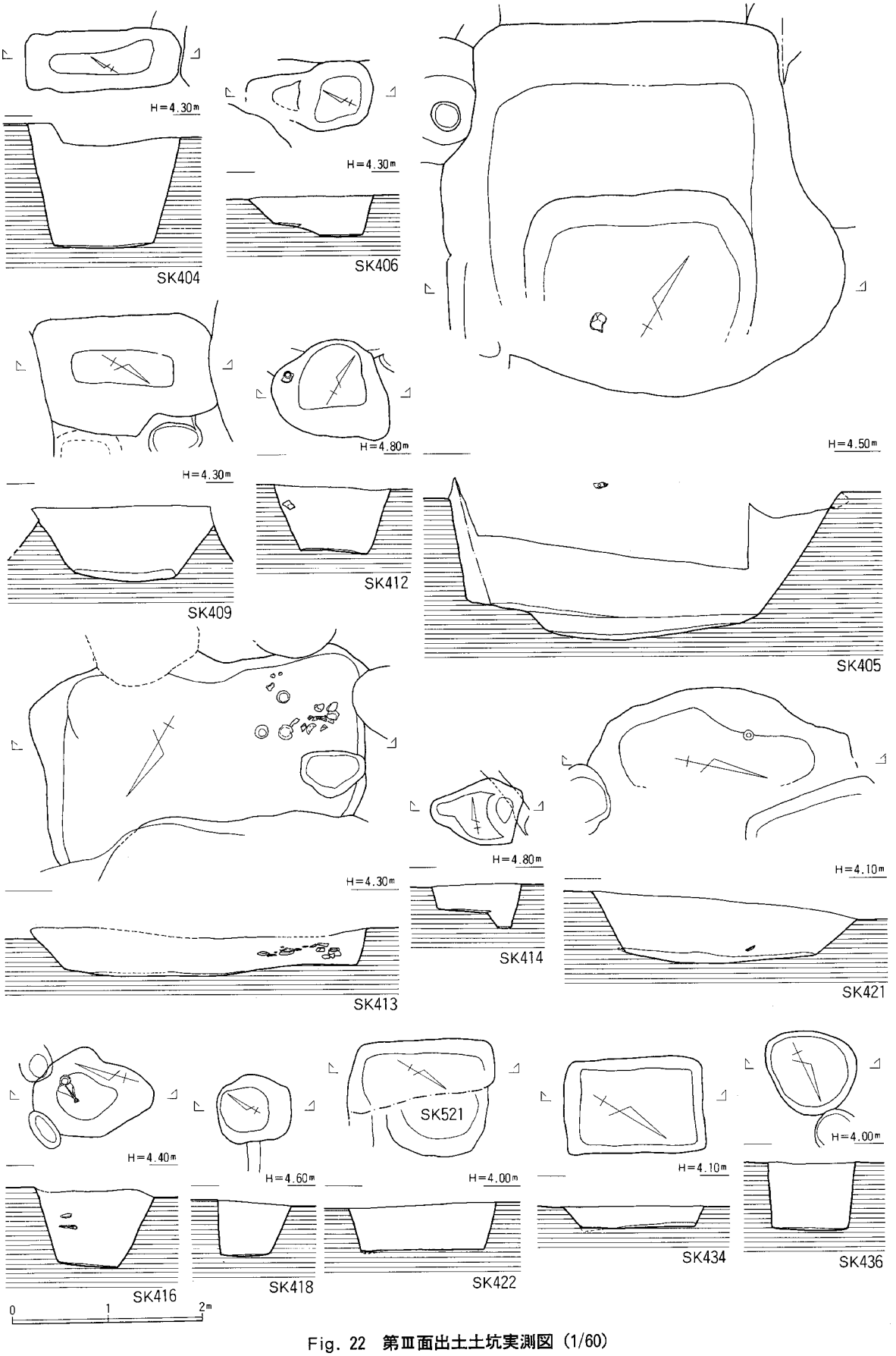


Fig. 22　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）

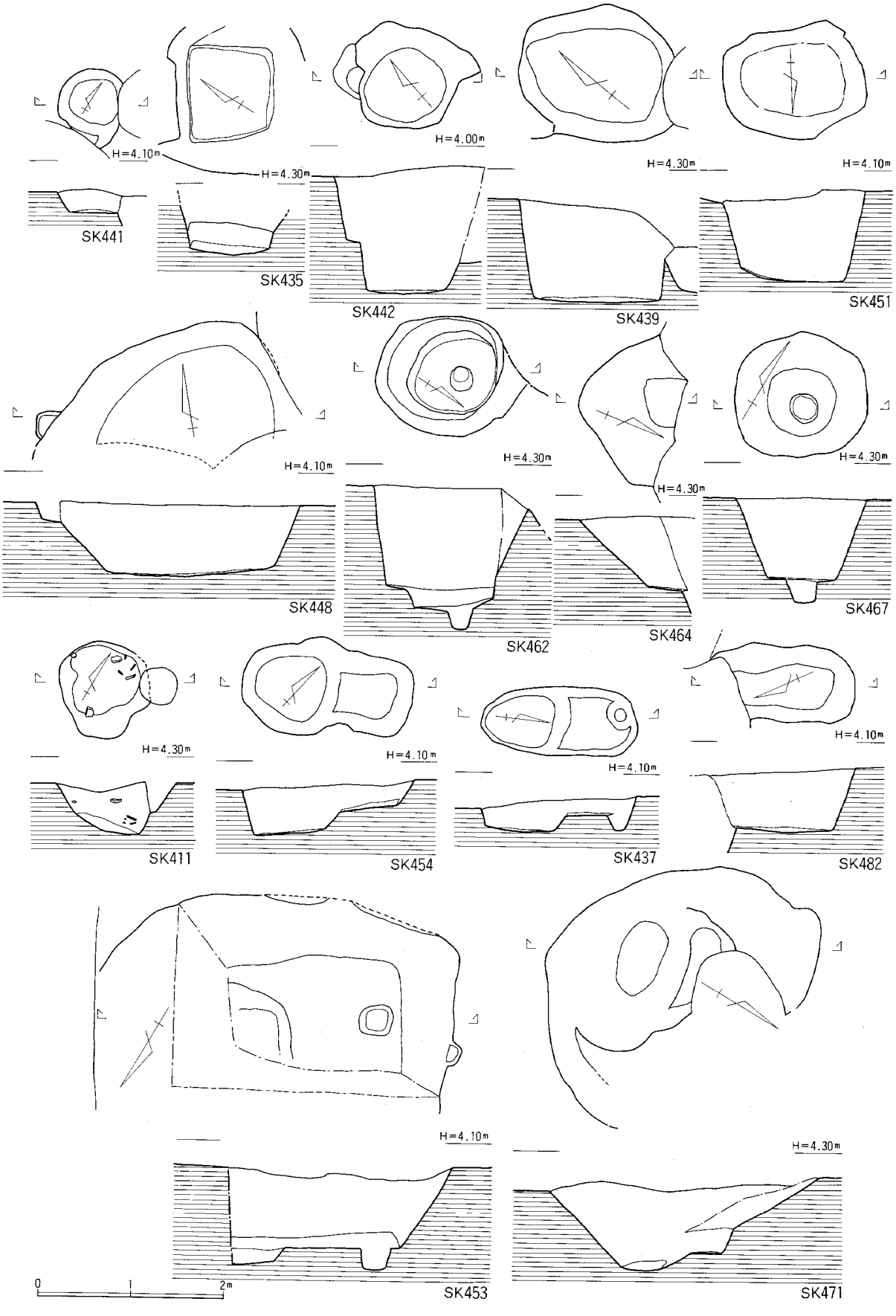


Fig. 23　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）

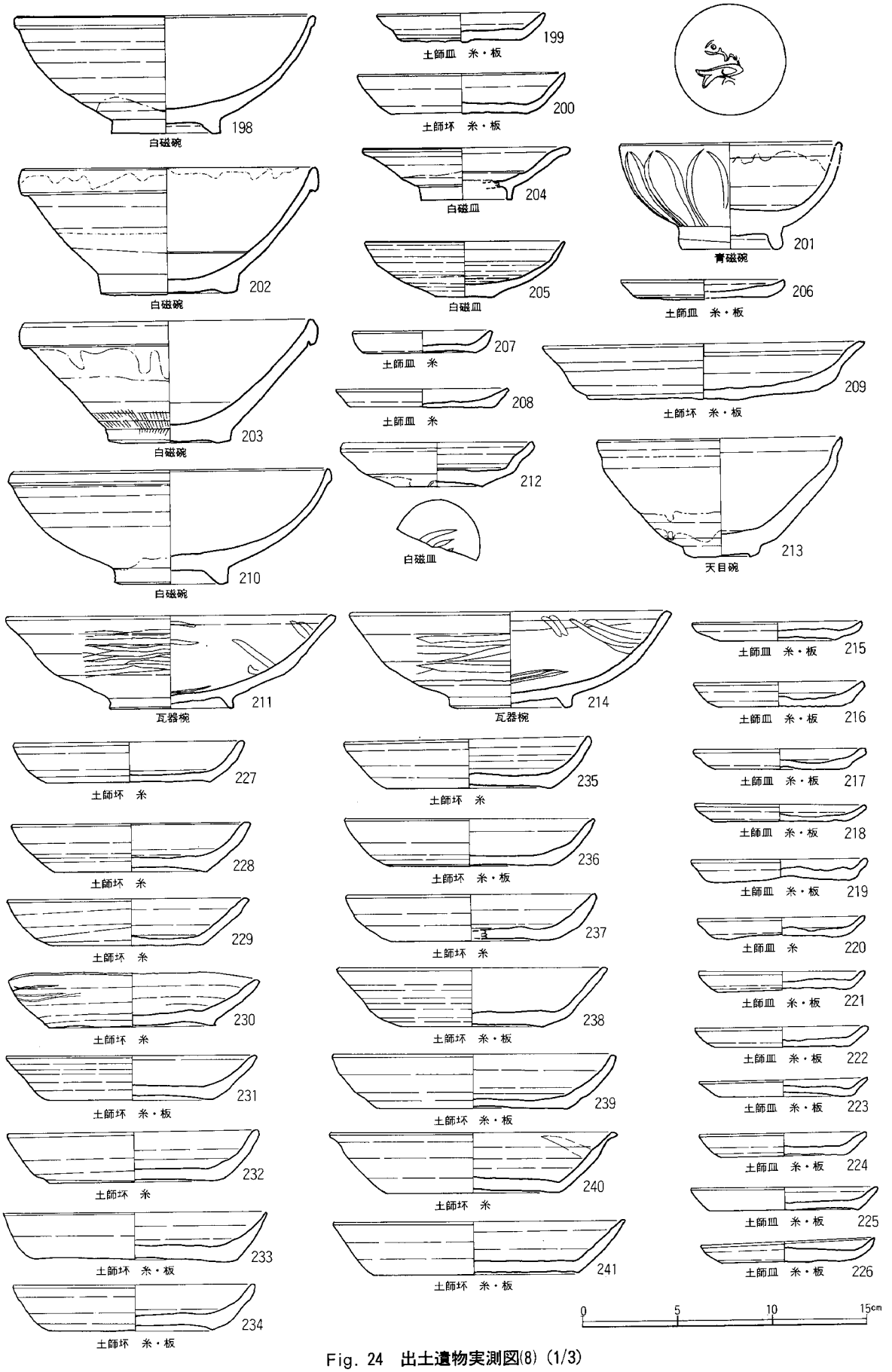


Fig. 24　出土遺物実測図(8) (1/3)

198：SK402　199～201：SK404　202～204：SK405　205：SK406　206～209：SK409　210・211：SK412　212～241：SK413

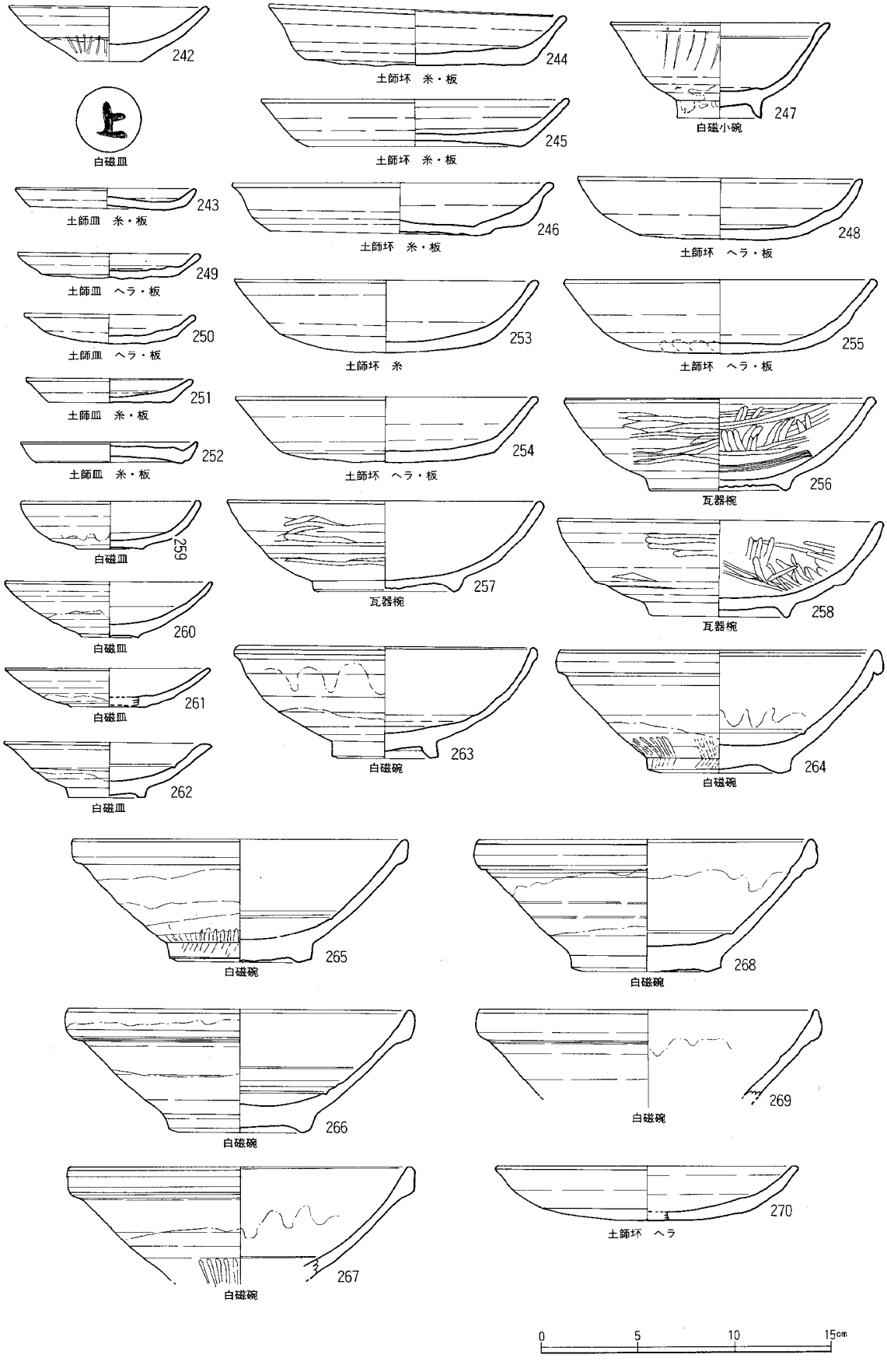


Fig. 25　出土遺物実測図(9) (1/3)

242：SK414　243～246：SK416　247・248：SK418　249～269：SK421　270：SK422

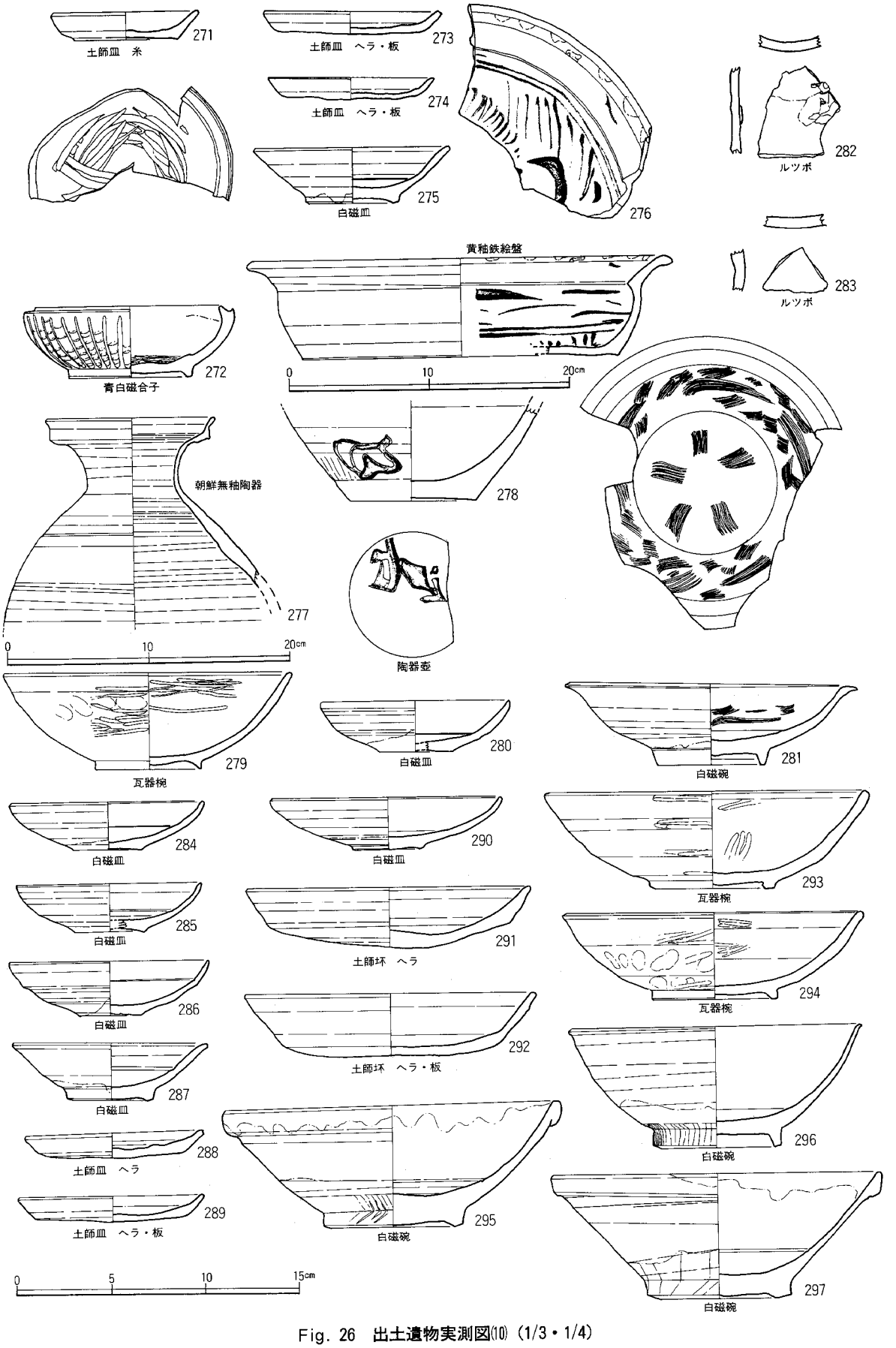


Fig. 26　出土遺物実測図(10)（1/3・1/4）

271・272：SK425　273：SK426　274～276：SK434　277・278：SK435　279～281：SK436　282・283：SK438
284～297：SK439

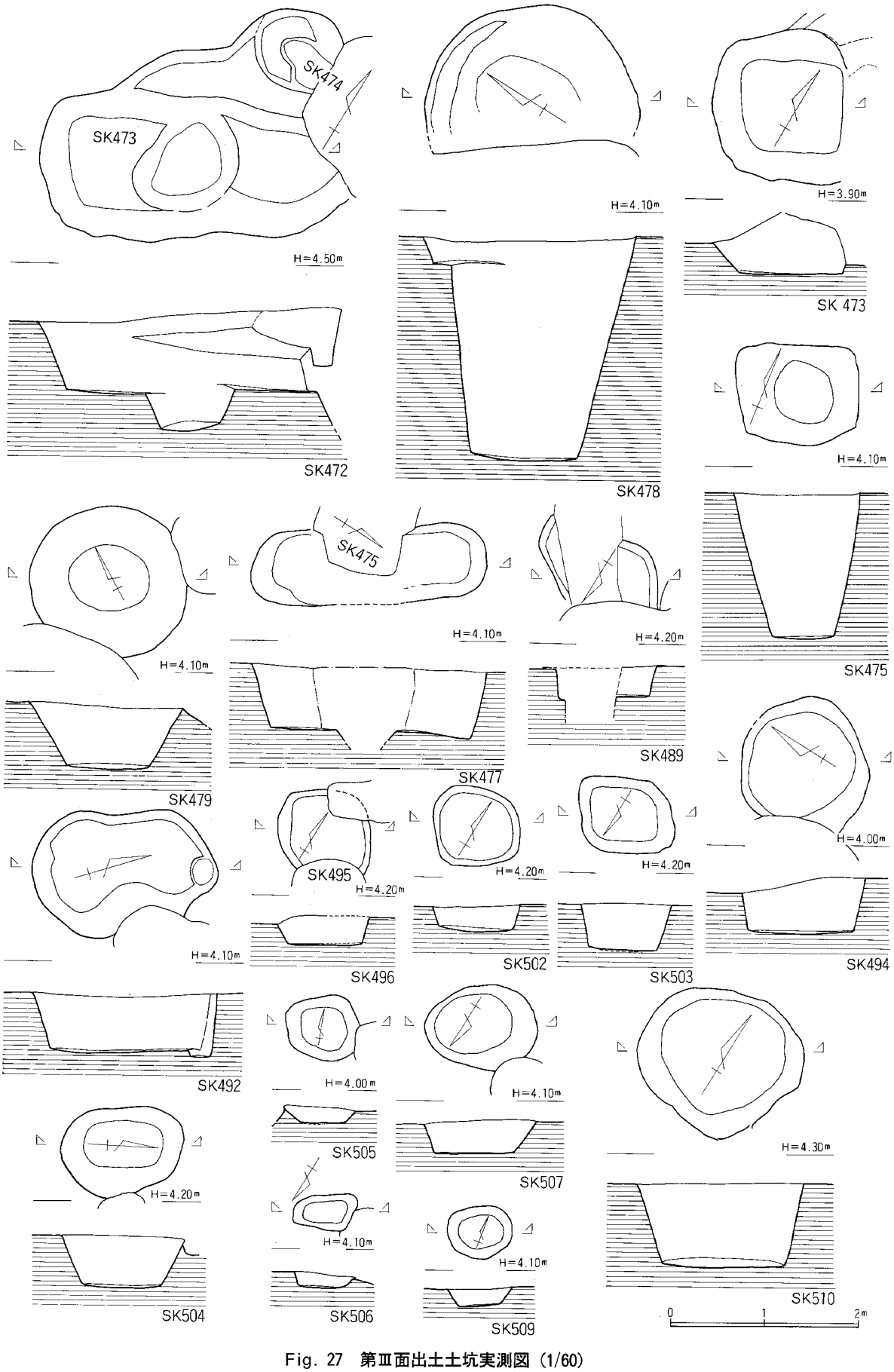


Fig. 27　第Ⅲ面出土土坑実測図（1/60）

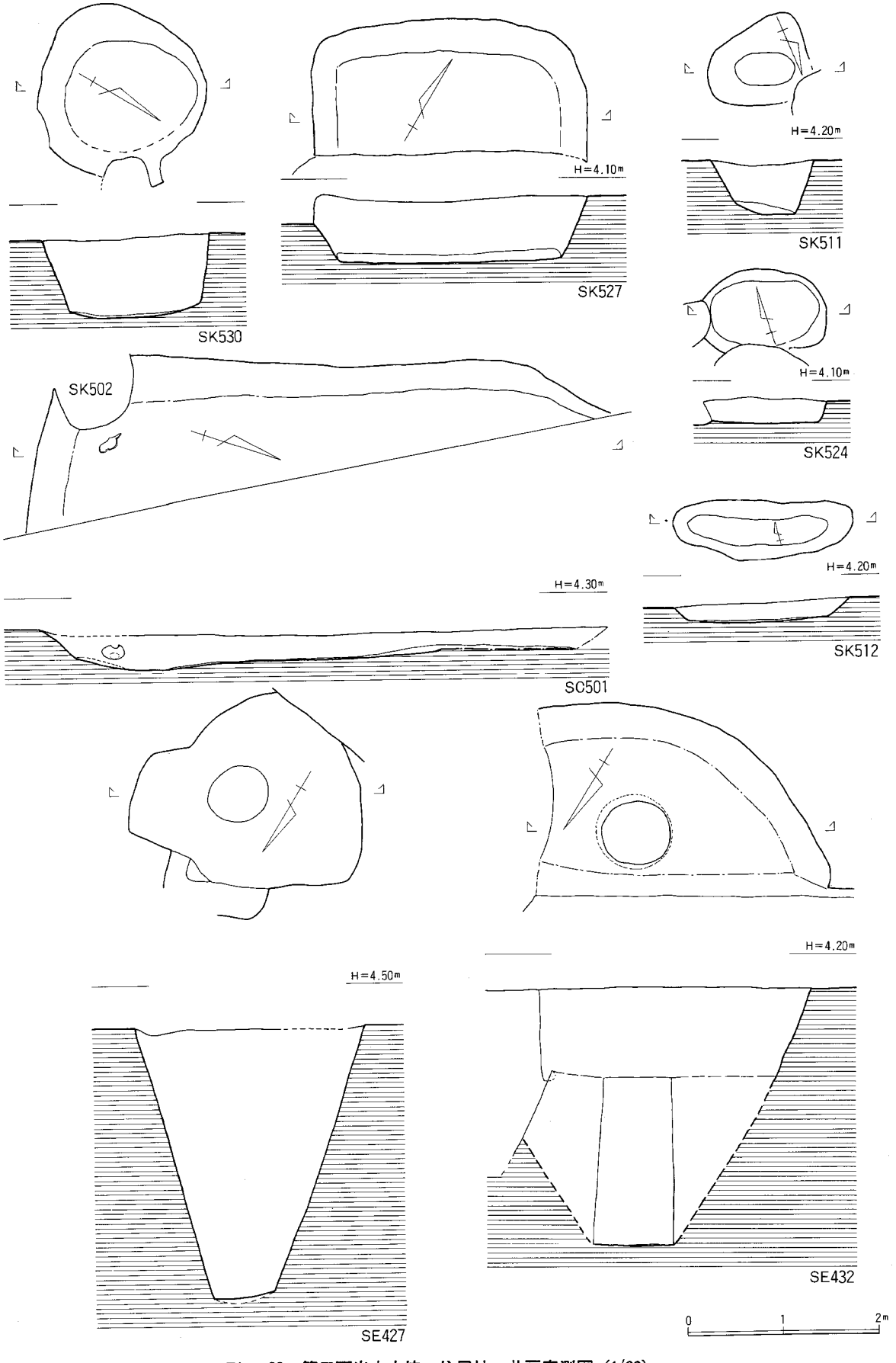


Fig. 28　第Ⅲ面出土土坑・住居址・井戸実測図（1/60）

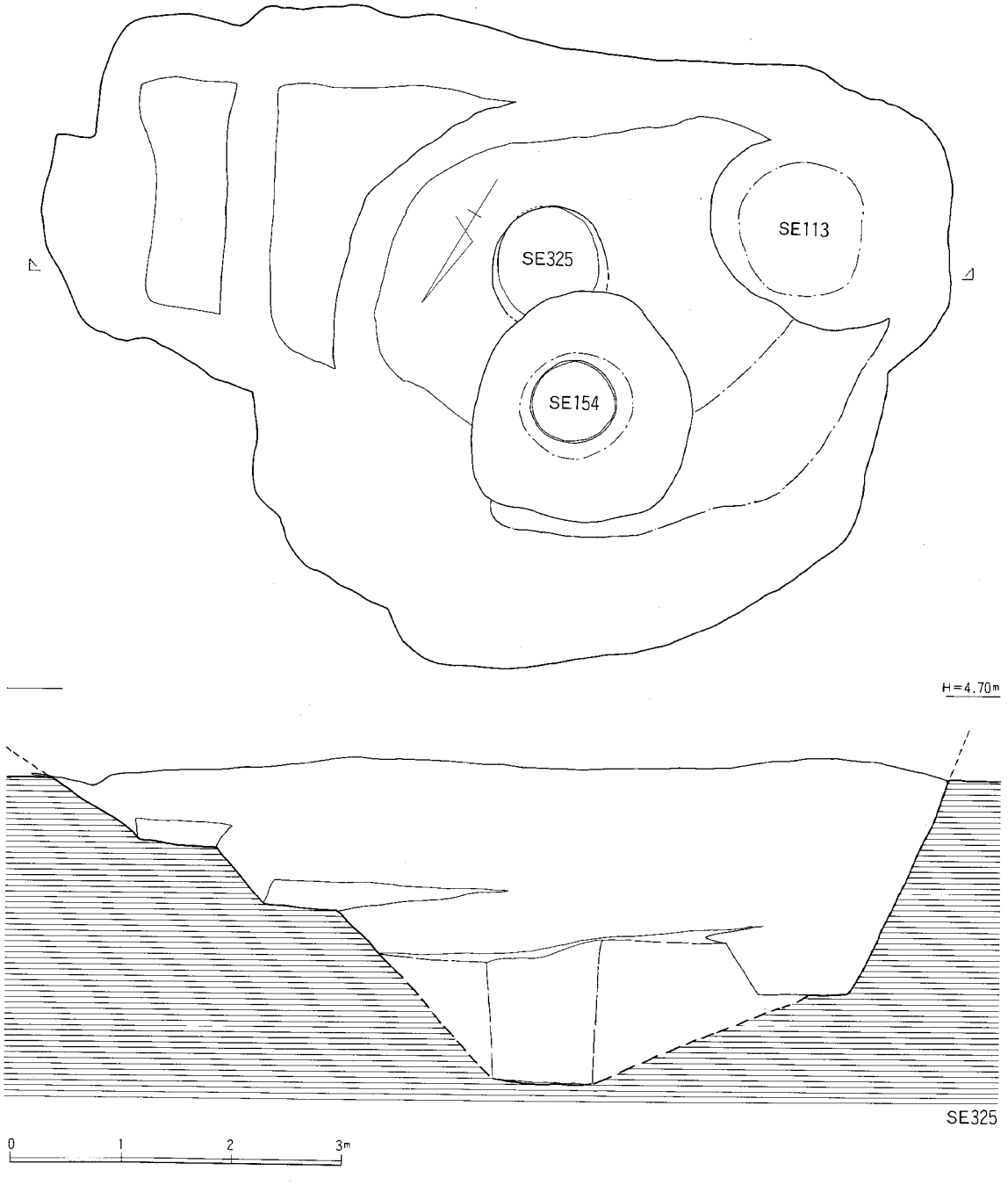


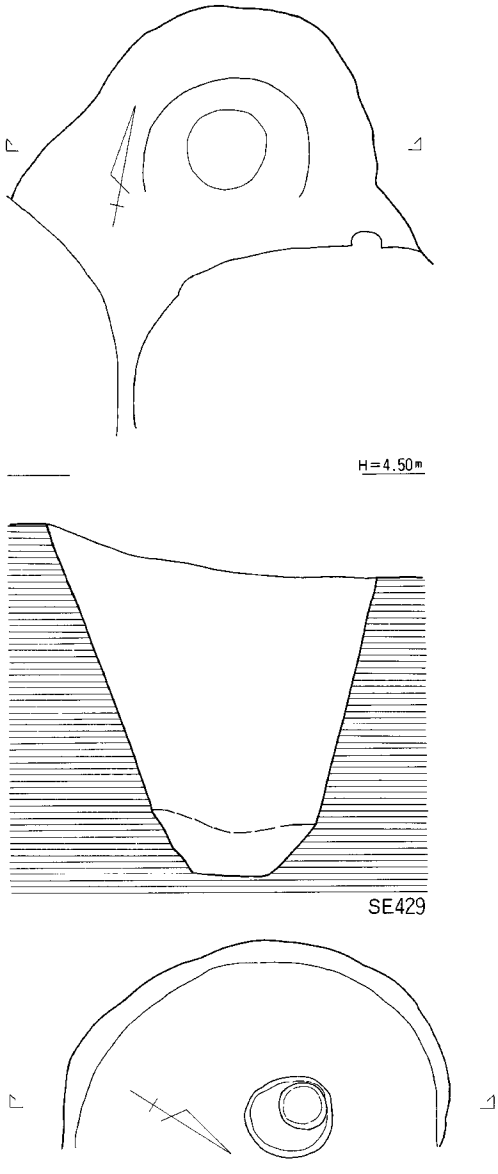
Fig. 29　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）

どである。ピットも多数出土している。

(1)　土坑（Fig.22～28、32～37、PH. 2 ・3 、PL.32～43）

100基を越える土坑が出土しているが、プランは方形、長方形、円形、楕円形とその亜形式及び不定形などがある。大きさも小型のものから大型のものまで各種のタイプが存在する。また、掘り方が井戸状に深く掘り込まれる土坑も数基確認されている。

SK405は大型の土坑で、確認面から人骨の頭部が単独に出土している。この人骨は2号人骨としたが、SK405と関係があるかどうか判断できなかった。SK413は略長方形の大型土坑で土師坏・皿がまとまって出土している。SK411は略円形を呈する土坑であるが、中から撹乱された状態で人骨の四肢



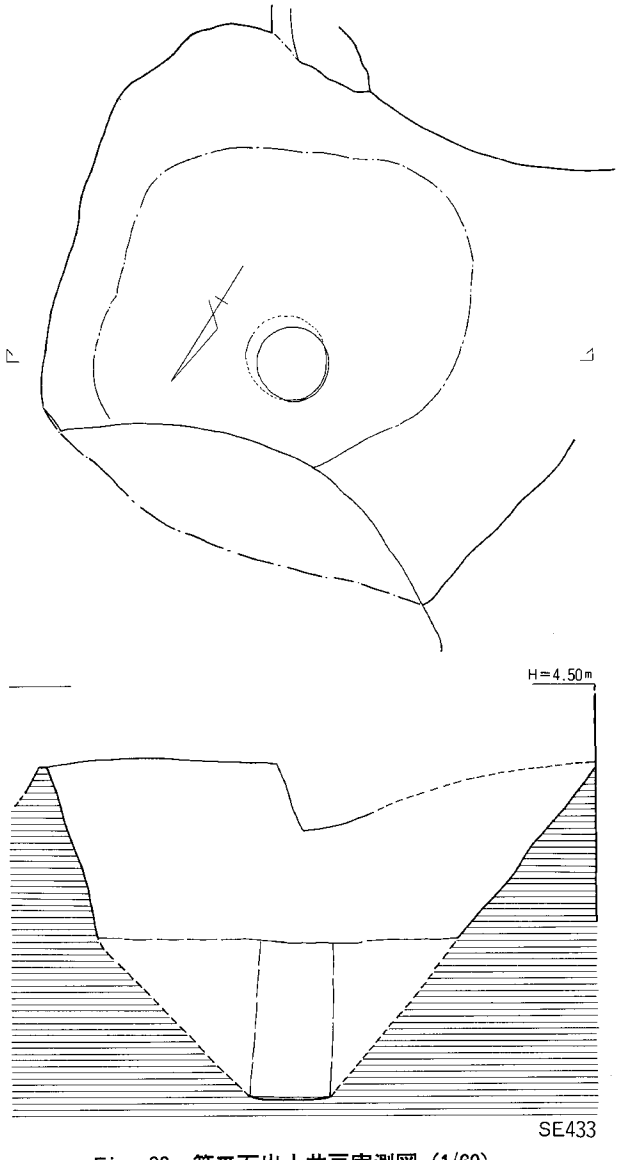
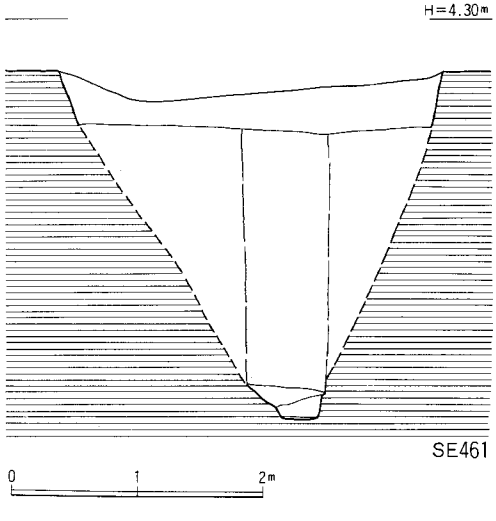


Fig. 30　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）



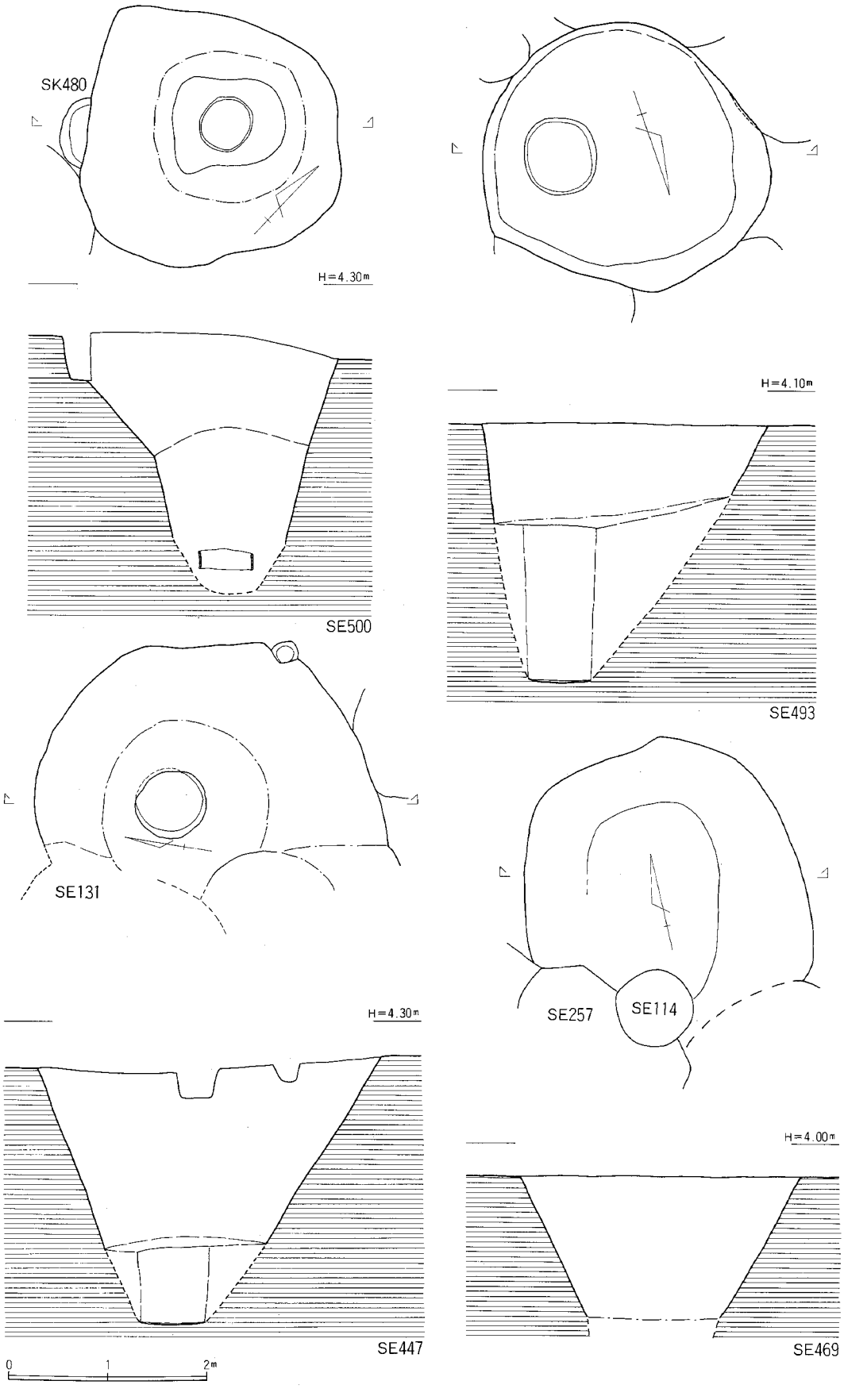


Fig. 31　第Ⅲ面出土井戸実測図（1/60）

骨の一部が出土している。SK416からは青磁皿と動物の肩甲骨が出土した。肩甲骨には火を受けた痕は認められなかった。SK462と467は円形を呈する深い土坑で、坑底にピットが掘り込まれている。SK467にはピットに焼砂が詰っていた。SK478と475は、それぞれプランは異なるが井戸状に深くなるタイプである。その他の土坑の規模及び出土遺物の概要については細かな説明をする紙数がないので遺構一覧表をご参照願いたい。

Fig.24－198はSK402から出土した小さな玉縁口縁の白磁碗である。199～201はSK404から出土した土師坏・皿・青磁碗である。青磁碗の見込みには双魚文の印刻、外面は片切彫で蓮弁文を施す。202～204はSK405から出土した白磁碗と白磁高台付皿である。205は白磁平底皿でSK406から出土、206～209はSK409から出土した土師器坏・皿である。全て糸切りで、206と209には底面に板目圧痕が付く。210・211はSK412から出土した白磁碗と瓦器椀である。210は小さな玉縁口縁を有する。212～241はSK413から出土した一括遺物である。212は青磁平底皿、213は天目碗である。口径13cm、底径3.9cm、器高6.2cmを測り、胎土は灰黒色で白い細かい粒子を含む。釉は光沢のある黒釉で厚くかけられている。口縁内側のやや薄い部分は茶褐色を呈する。口縁部の釉はうすく掻き取っている。214は瓦器椀である。215～226は土師皿、227～241は土師坏である。底面は糸切りで板目圧痕が付くものが多い。Fig.25－242は白磁皿である。底面に「上」の墨書がある。243～246はSK416から出土した土師坏・皿である。247は白磁碗、248は土師坏である。底面はヘラ切り離しで、内面には磨きが施されている。249～269はSK421から出土した一括遺物である。249～252は糸切り及びヘラ切りの土師皿、253～255は糸切り及びヘラ切りの土師坏である。256～258は瓦器椀、259～262は白磁皿である。262のみ高台付となる。263～269は白磁碗である。270はSK422から出土した底面ヘラ切りの土師坏である。内面はよく磨かれている。Fig.26－271・272はSK425から出土した土師皿と青白磁鎬文合子である。外口径11.1cm、底径6.5cm、器高3.8cmを測る。胎土は灰白色で黒色の細粒を含んでいる。釉は内面乳白色、外面は青白色を呈する。273は底面ヘラ切りで板目圧痕の付いた土師皿である。SK426出土。274～276はSK434から出土したヘラ切りの土師皿、白磁皿、黄釉鉄絵盤である。277は盤口状を呈す朝鮮無釉陶器の壺、278は中国陶器の壺底部である。底面及び側面には墨書がみられる。これらはSK435から出土。279～281はSK436から出土した瓦器椀・白磁皿・白磁碗である。282～283はSK438から出土したルツボ片である。282は頸部の部分で、土は黒褐色でこまかい。白い大小の砂がたくさん混る。内外表面に風化して不透明黄褐色を呈するガラスが付着している。ガラスは空色だったと思われる。このガラスについても分析結果が出ている。283も同一個体の破片と思われ、内面に太めのロクロ目がまわっている。284～297はSK439から出土した一括遺物である。284～287・290は白磁皿、288・289は底面ヘラ切りの土師皿、291・292は底面ヘラ切りの土師坏、293・294は瓦器椀、295～297は白磁碗である。Fig.32－298～300はSK442から出土した白磁碗である。298はⅤ類、299・300はⅣ類に属する。301はSK448から出土した奈良時代の須恵器坏蓋である。焼けひずみが激しくかなり歪んでいる。天井部のつまみは外れている。303・304は同じくSK448出土で、ふたつとも底面はヘラ切りで板目圧痕が付く。305～307はSK452から出土した遺物である。305は土師器の高台付碗で、外面に指頭圧痕が残る。306は平底の白磁皿、307は高い高台の付いた白磁皿である。308は同安窯系の青磁碗、309は白磁皿、310は糸切りの土師皿である。以上３点はSK453から出土している。311はSK456から出土した須恵器の坏身である。奈良時代のものであろう。312はSK459から出土した白磁平底皿である。313はSK462から出土した土師坏である。底面はヘラ切りで内面はミガキが施されている。314はSK464から出土した底部糸切りの土師坏である。315～318はSK467から出土したもので、315はＢ群の緑褐釉四耳壺、316～318は土師坏である。316は底面が小さく器体は外開きで器高が高い。319

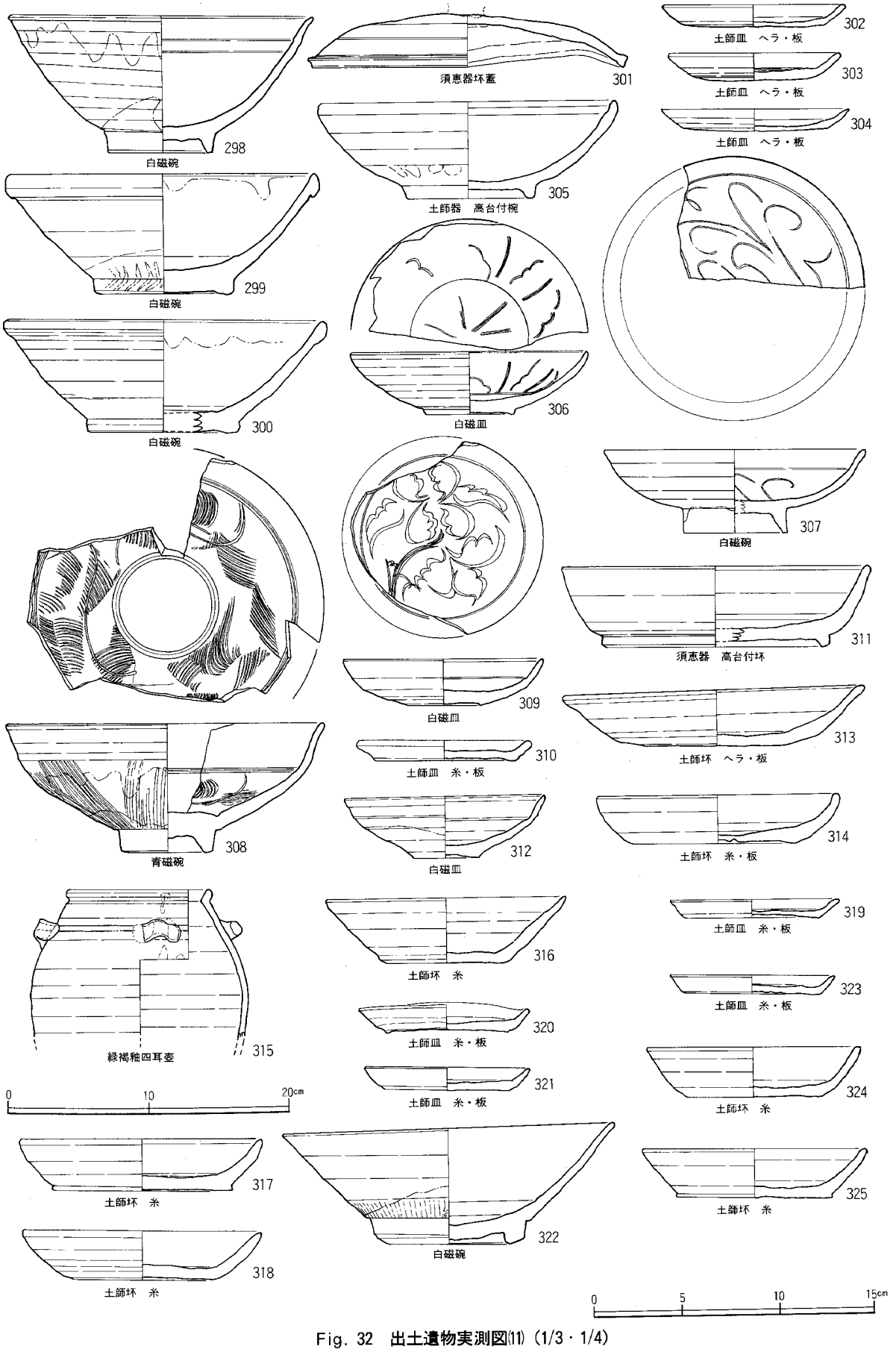


Fig. 32　出土遺物実測図(11)（1/3・1/4）

289～300：SK442　301・303・304：SK448　302：SK441　305～307：SK452　308～310：SK453　311：SK456　312：SK459
313：SK462　314：SK464　315～318：SK467　319～322：SK471　323～325：SK472

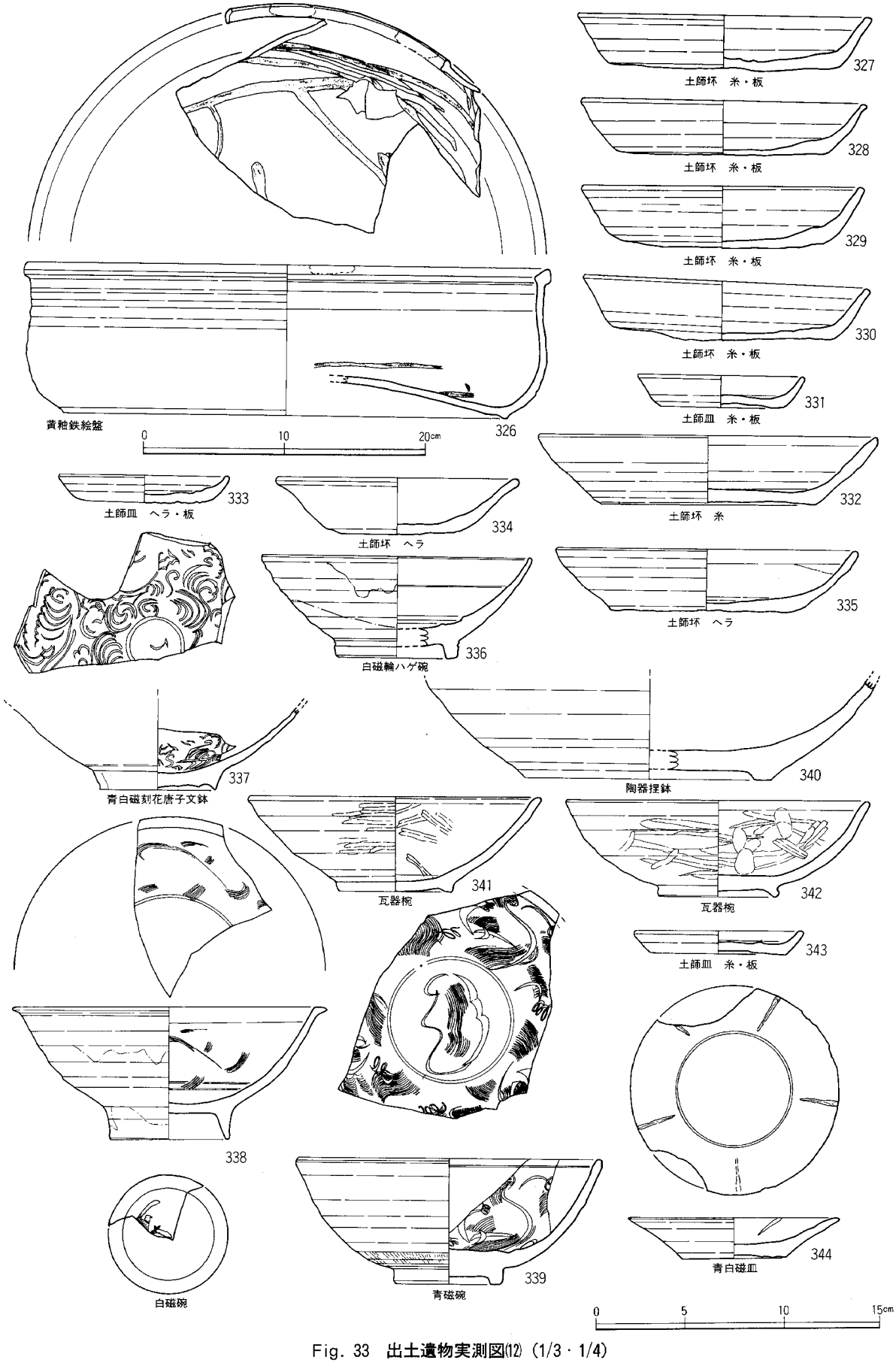


Fig. 33　出土遺物実測図(12)（1/3・1/4）

326：SK472　327～329：SK473　330：SE477　331・332：SK478　333～342：SK479　343・344：SK483

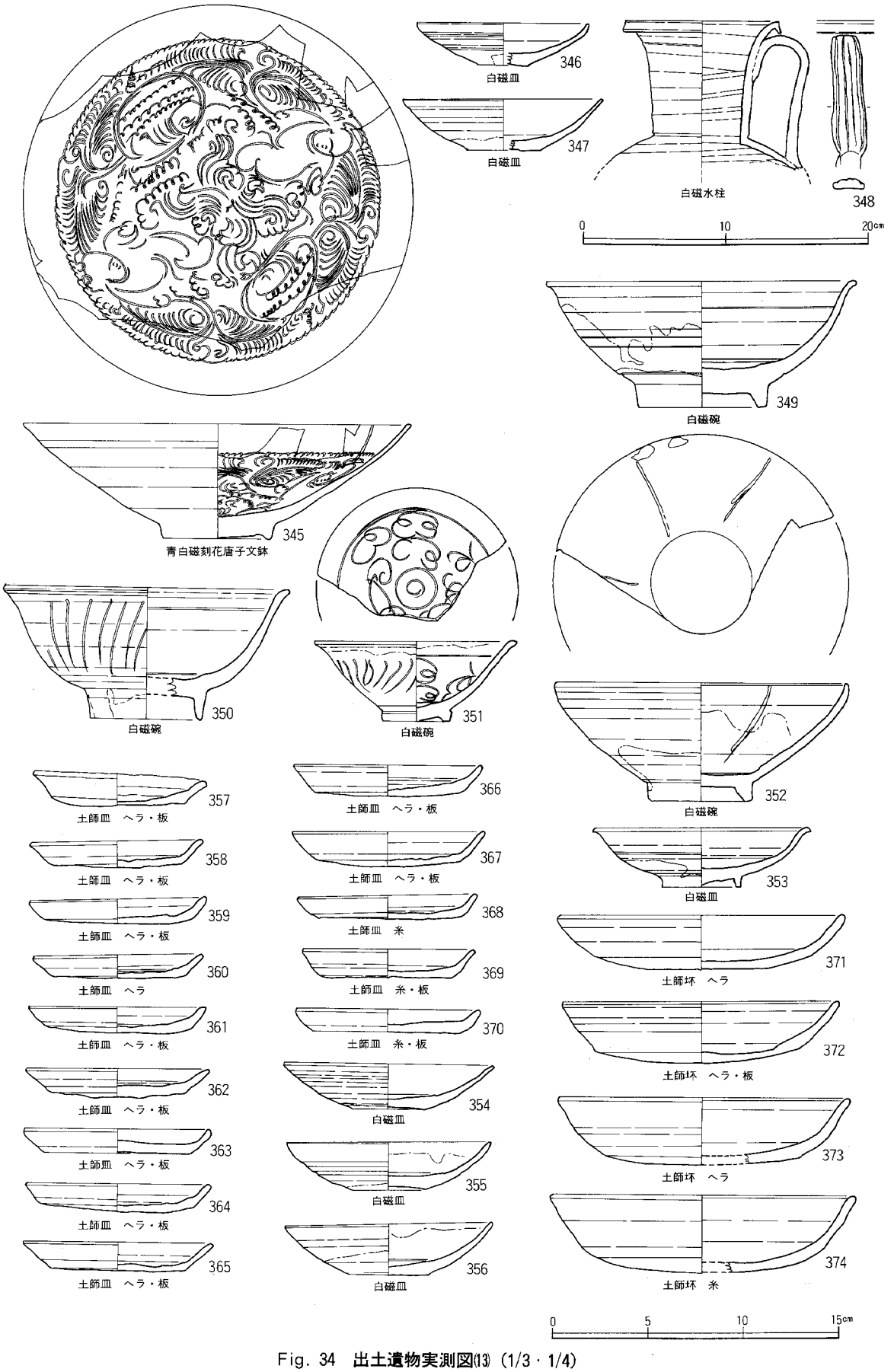


Fig. 34　出土遺物実測図(13)（1/3・1/4）

345～348：SK483　　349：SK485　　350～374：SK488

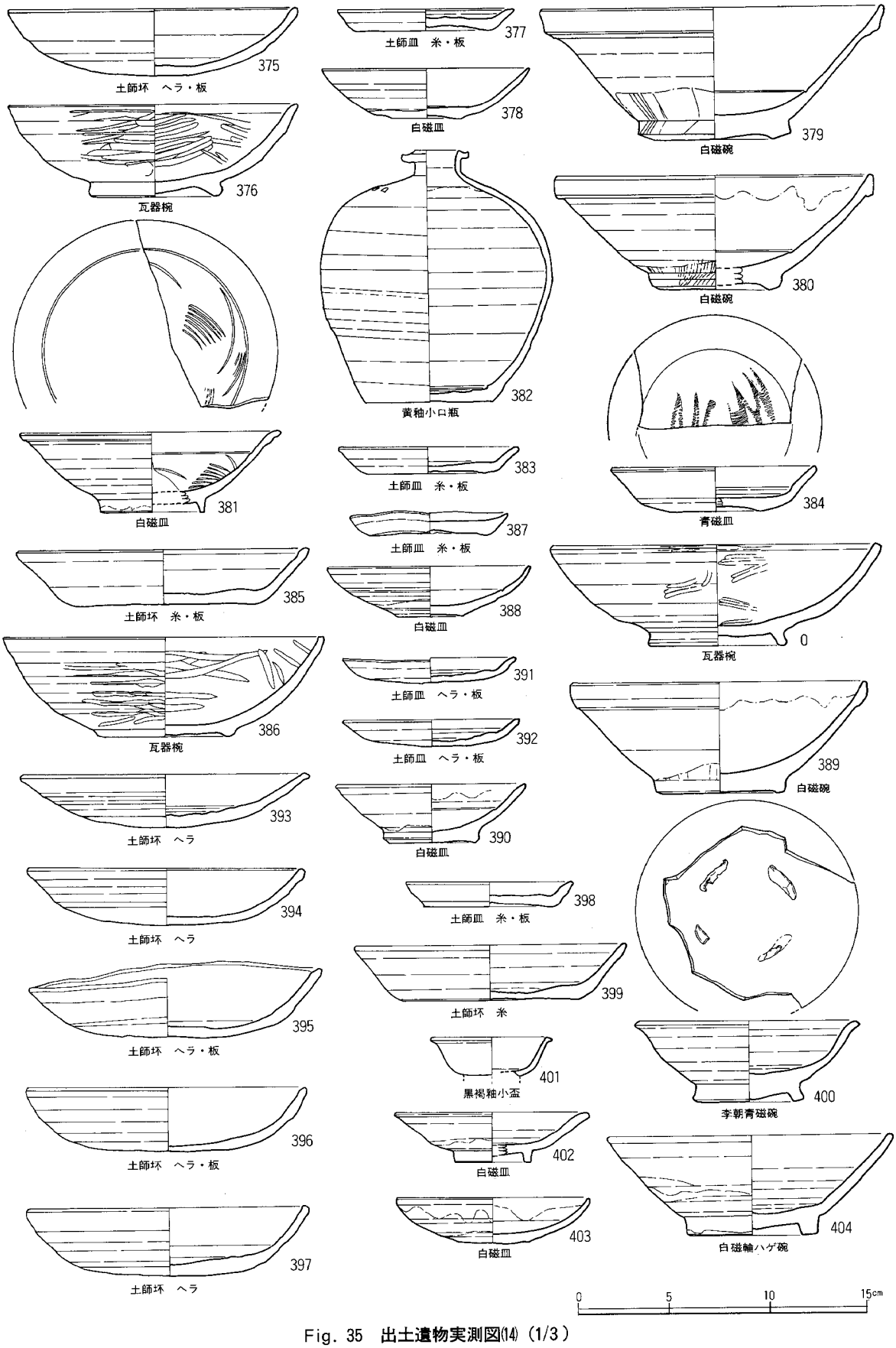


Fig. 35　出土遺物実測図⒁（1/3）

375・376：SK489　377～379：SK490　380：SK499　381：SK498　382・383：SK502　384：SK503　385：SK504　386：SK505
387・388：SK507　389～397：SK510　0：SK509　398・399：SK519　400：SK516　401～404：SK527

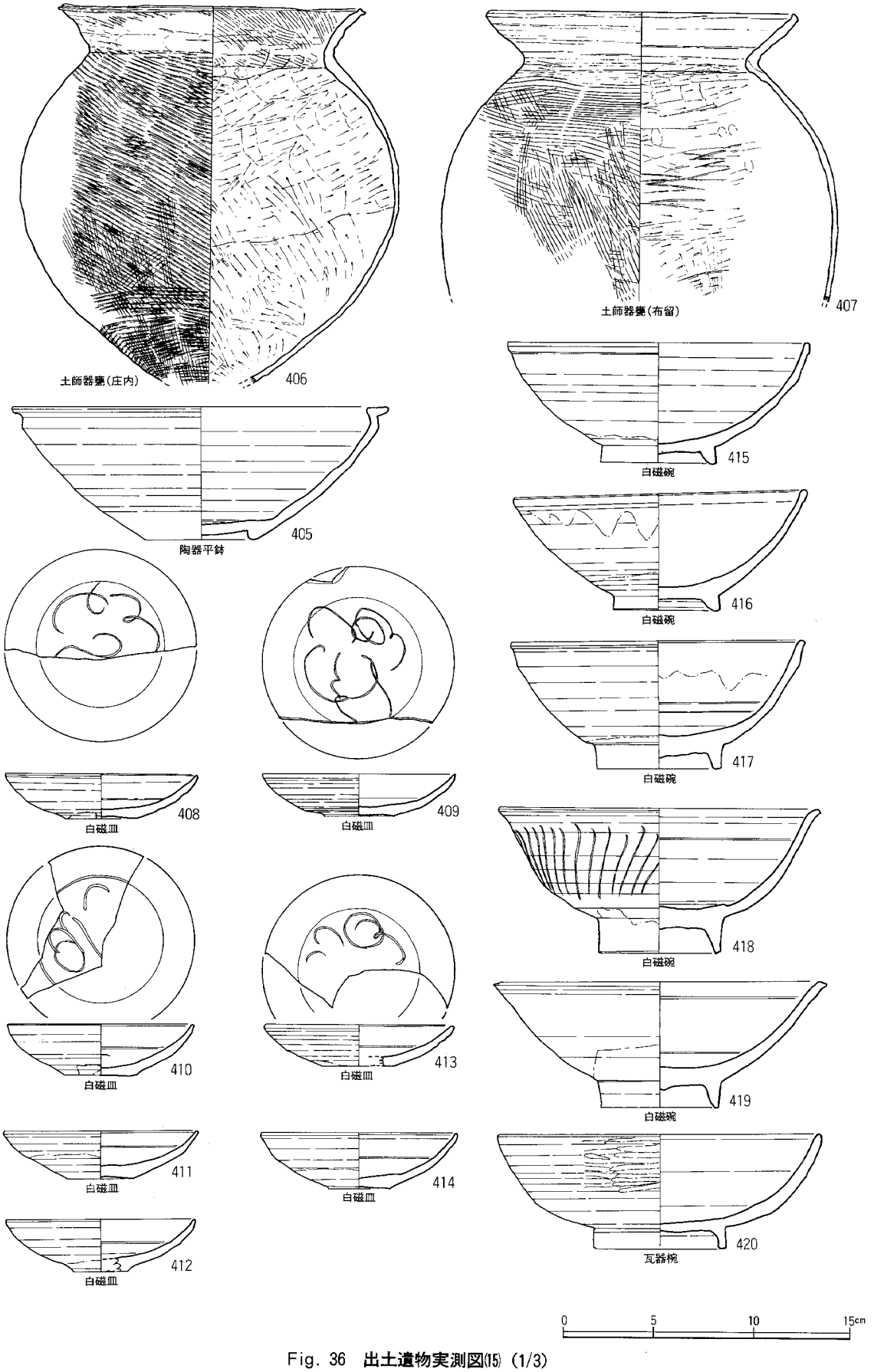


Fig. 36　出土遺物実測図(15)（1/3）

405：SK527　406・407：SK526　408～420：SK530

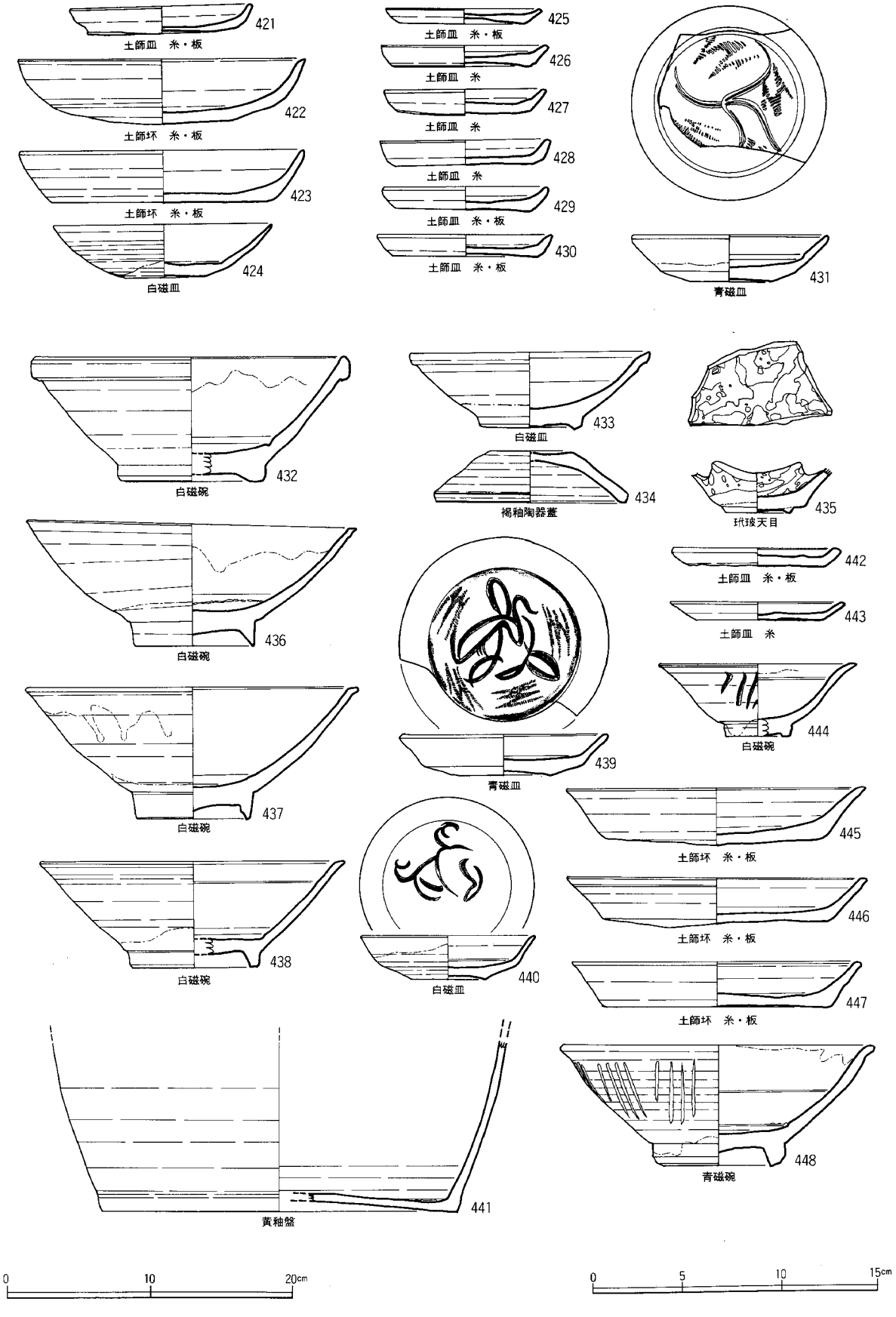


Fig. 37　出土遺物実測図⑯（1/3・1/4）

421：SK573　422：SK533　423・425～431：SK534　424：SK570　432・433：SK427　434・435：SE433
436～440：SE447　441：SE472　442・443：SE461　444～448：SE493

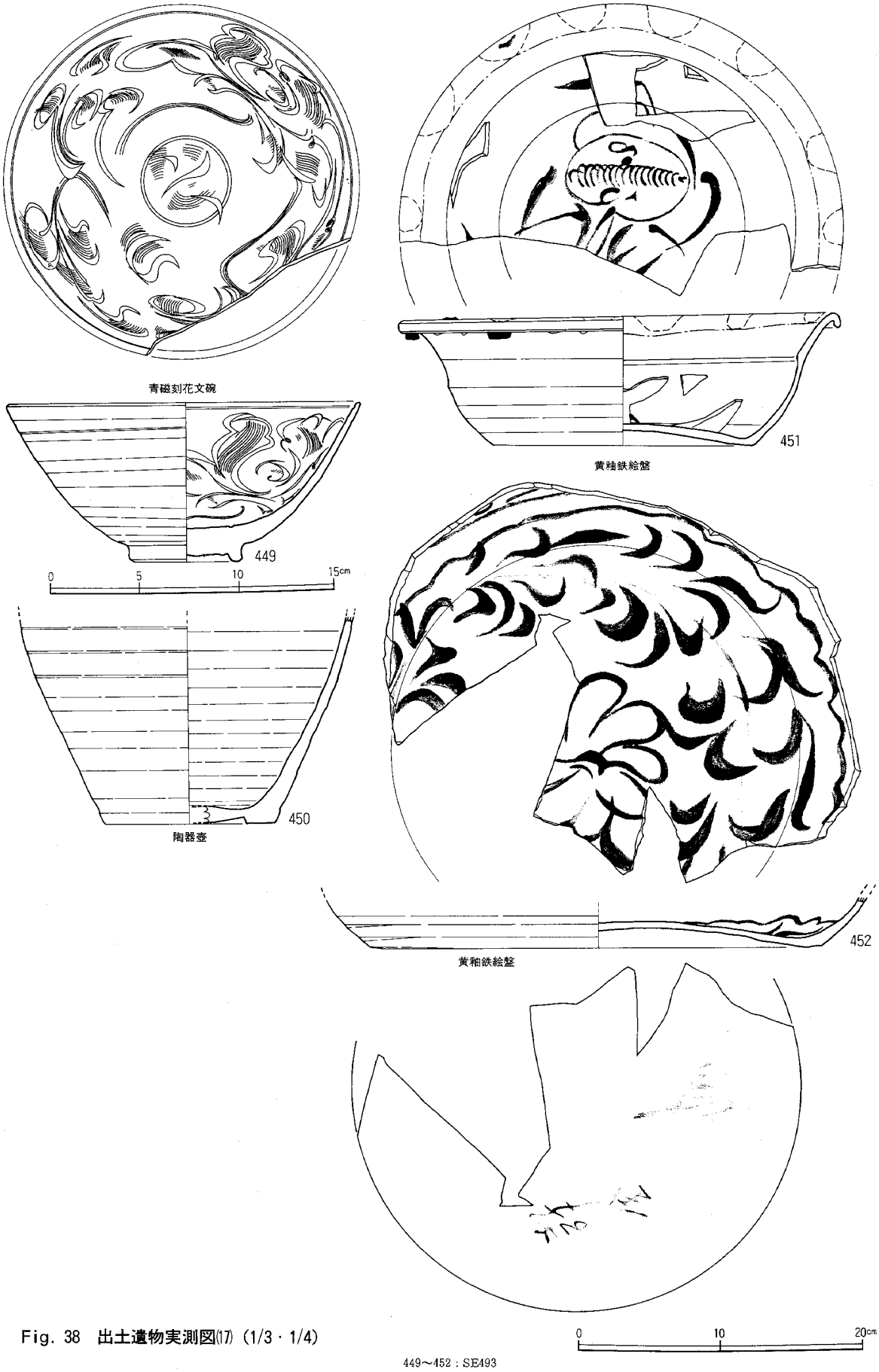


Fig. 38　出土遺物実測図⒄（1/3・1/4）

449～452：SE493

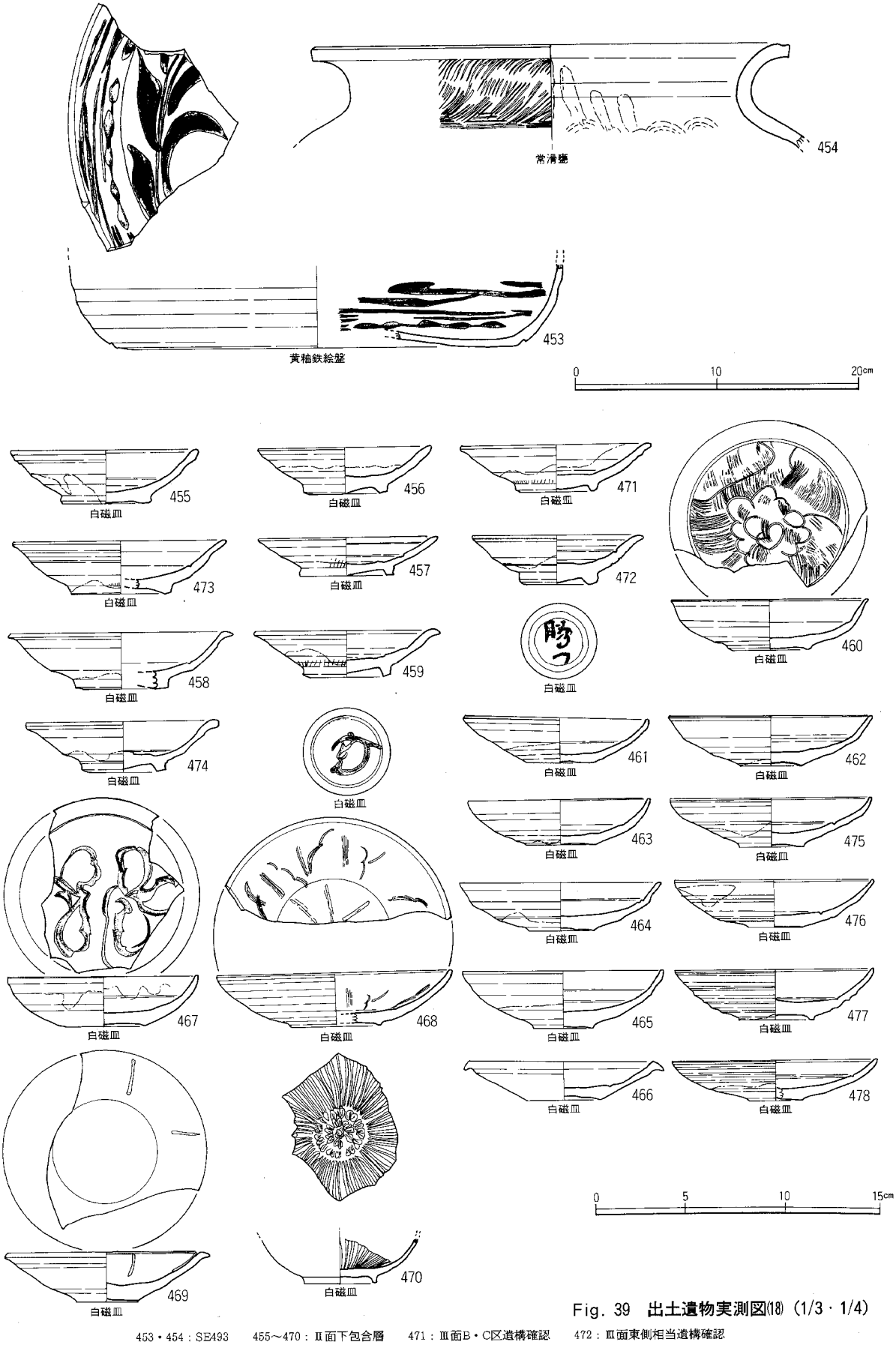


Fig. 39　出土遺物実測図⑱（1/3・1/4）

453・454：SE493　455～470：Ⅱ面下包含層　471：Ⅲ面B・C区遺構確認　472：Ⅲ面東側相当遺構確認
473：Ⅲ面C・D-5遺構確認　474：Ⅲ面南側カクラン　475～478：Ⅲ面南側遺構確認

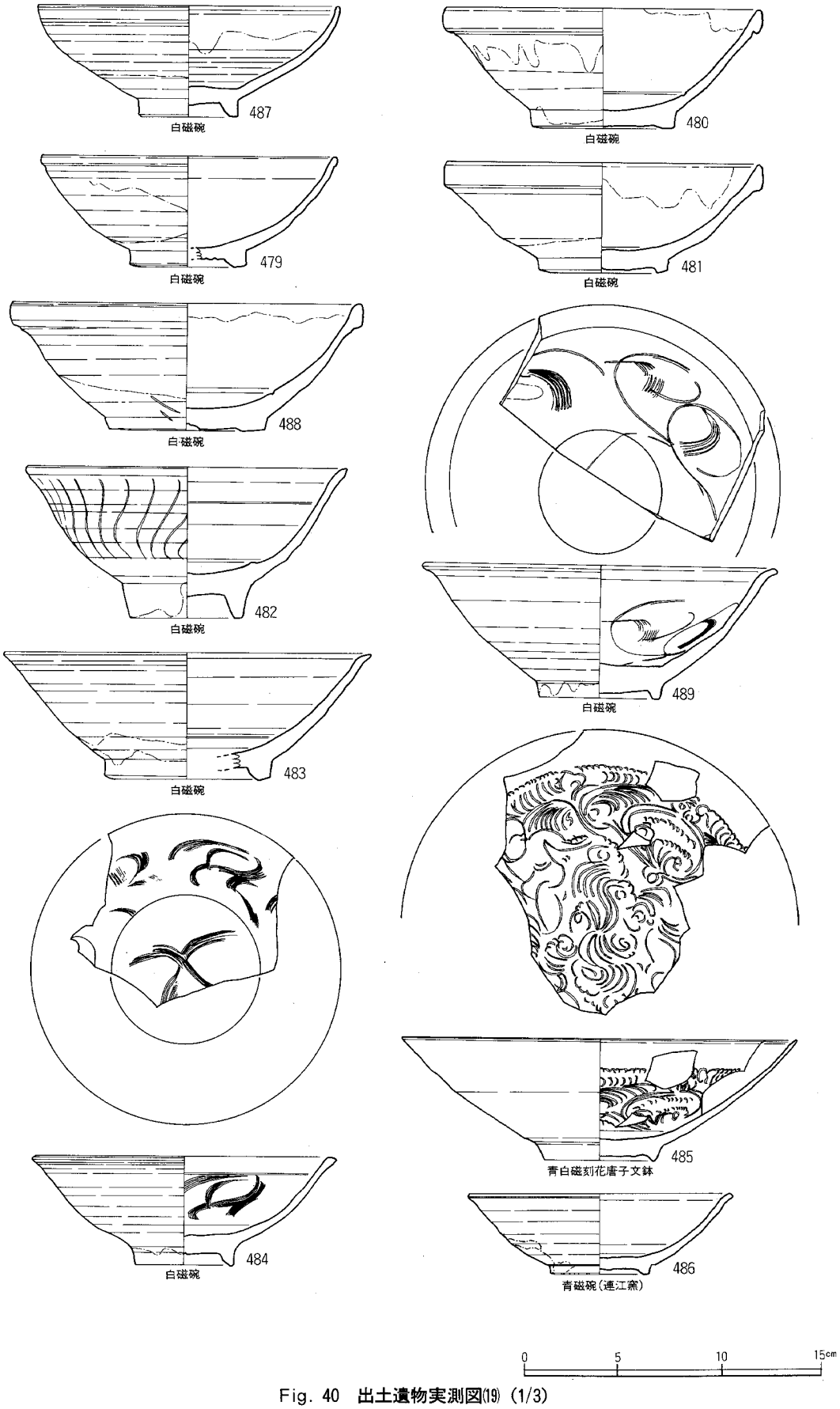


Fig. 40　出土遺物実測図(19)（1/3）

479～486・489：Ⅱ面下包含層　　487・488：Ⅲ面D-5遺構確認

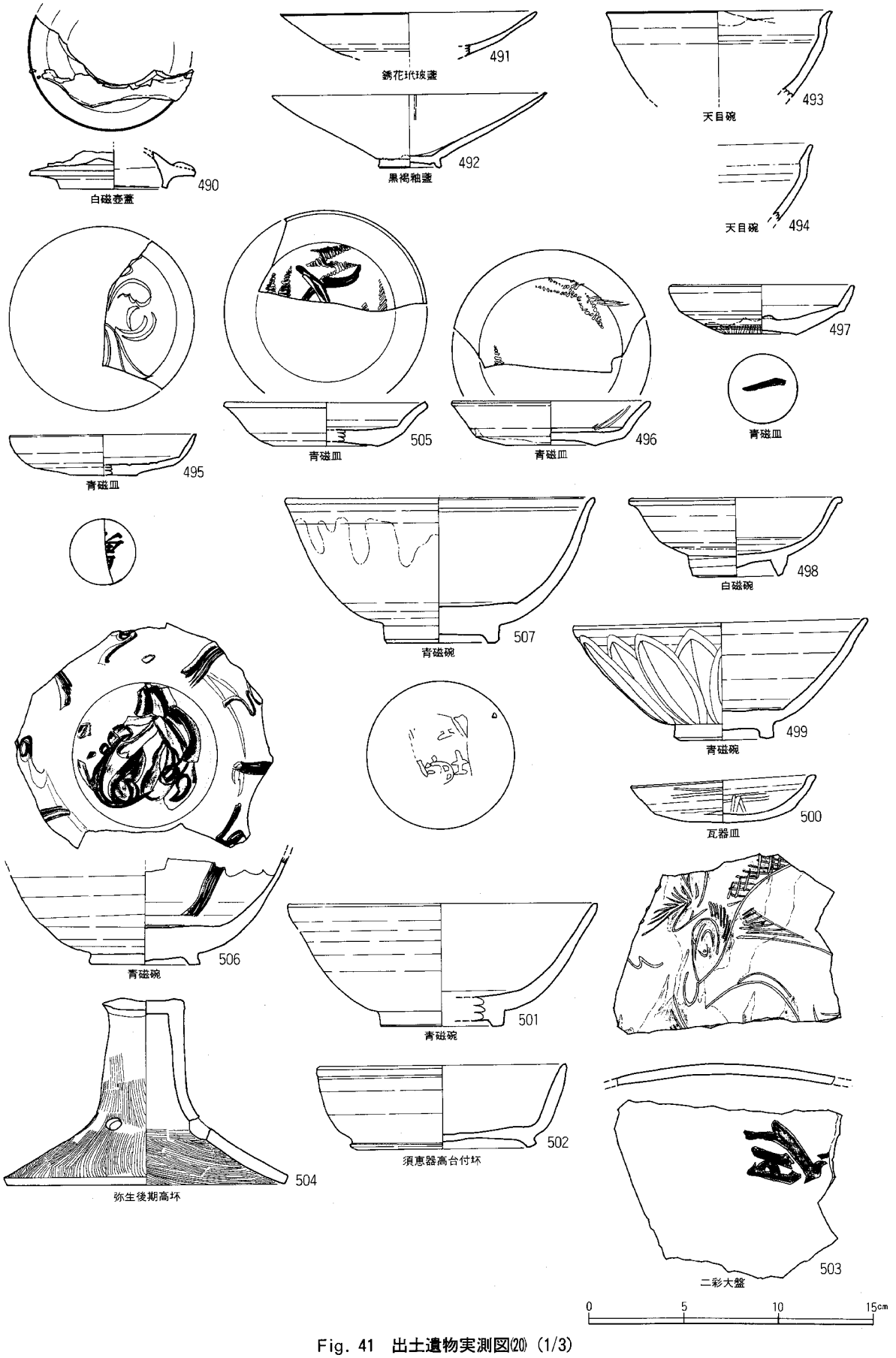
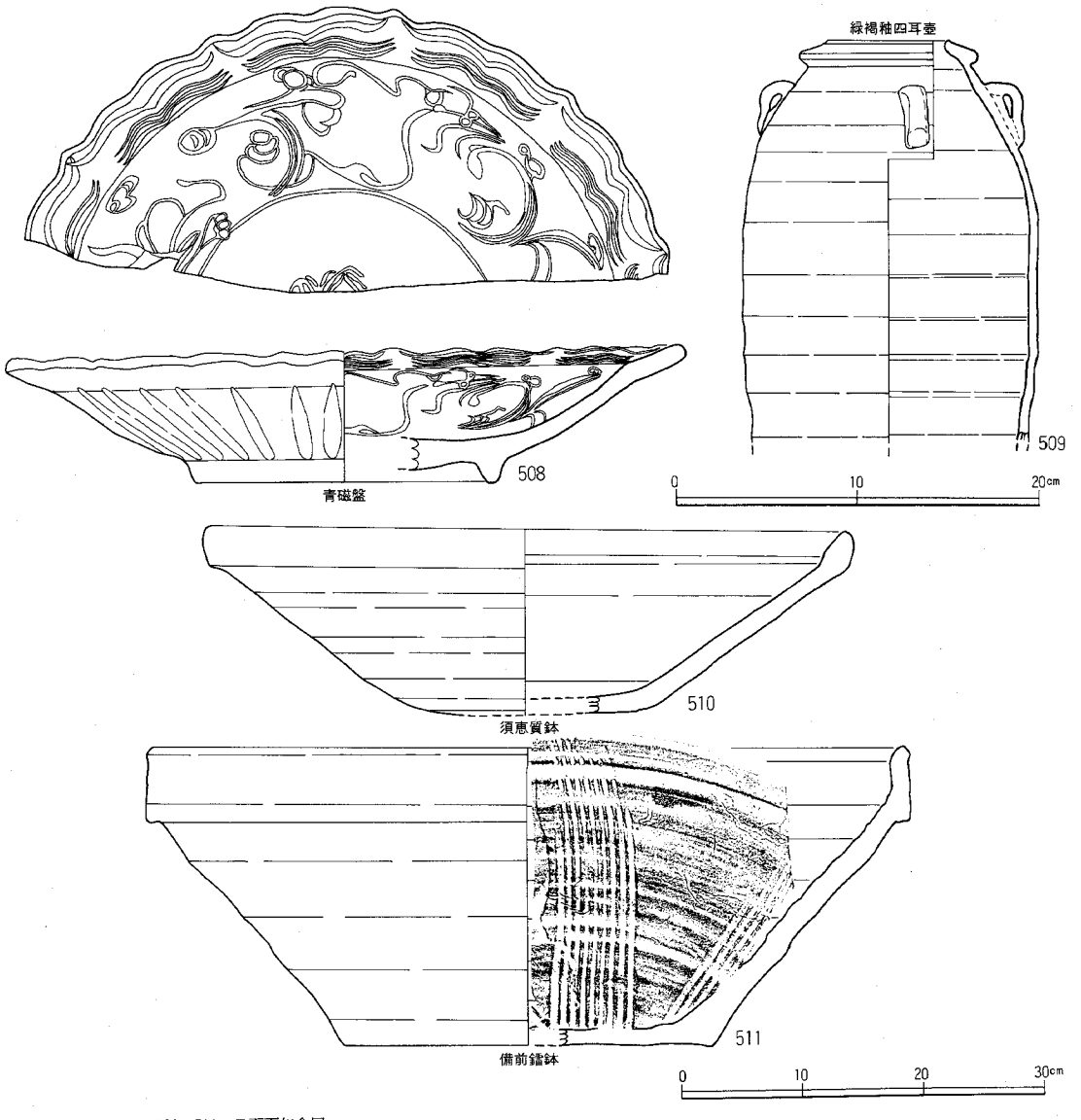


Fig. 41　出土遺物実測図(20)（1/3）

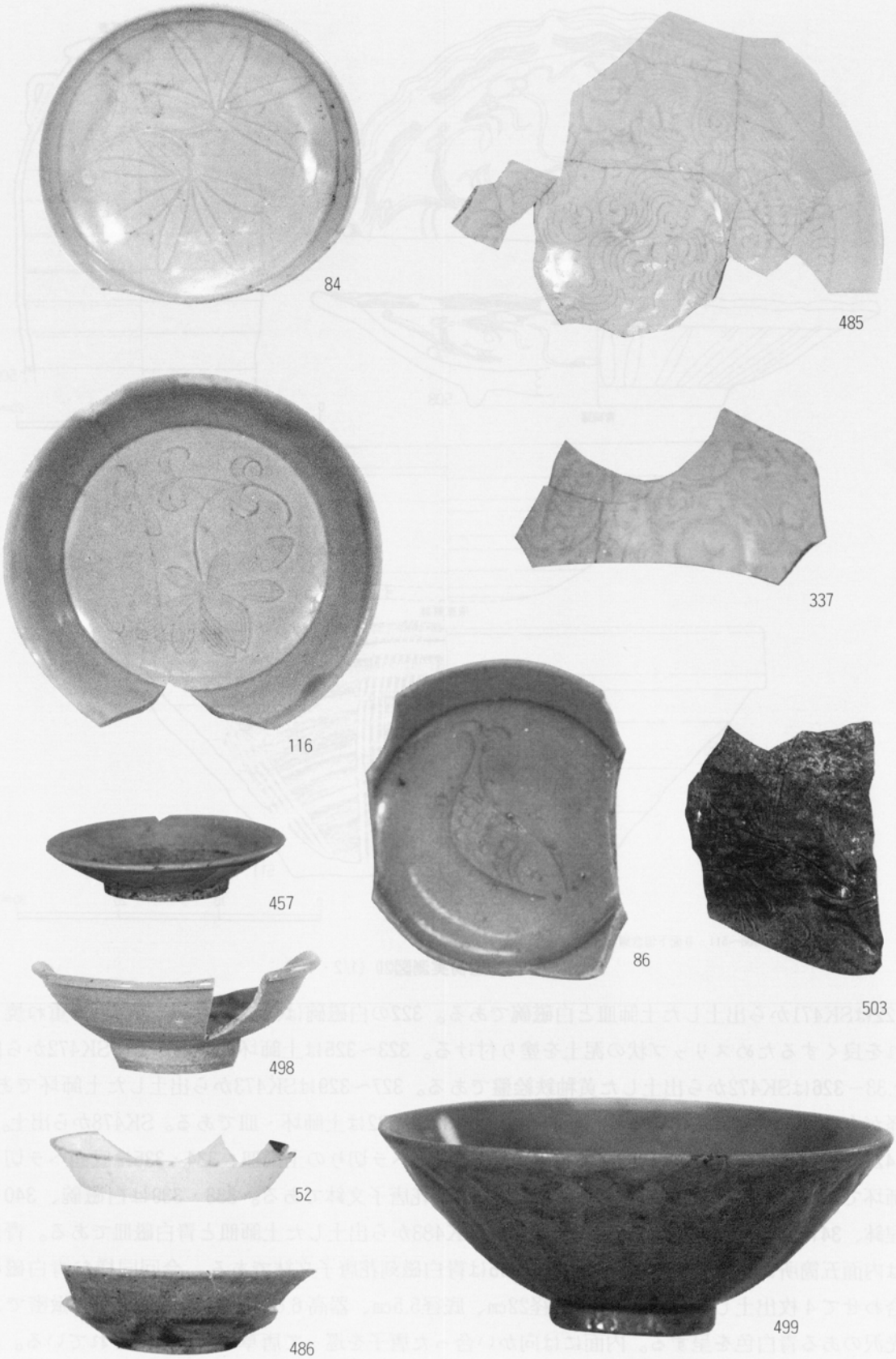
490・492・494～498・500・501・503：Ⅱ面下包含層　491：西側遺構確認　493：Ⅰ面西側遺構確認　499：Ⅰ面下包含層
502・504～507：Ⅲ面遺構確認



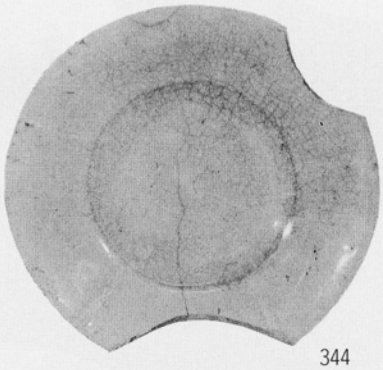
508～511：Ⅱ面下包含層

Fig. 42　出土遺物実測図(21)（1/2・1/3）

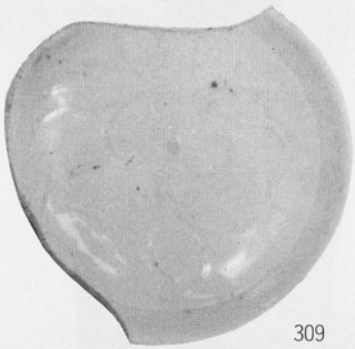
～322はSK471から出土した土師皿と白磁碗である。322の白磁碗は輪ハゲ碗で、畳付には重ね焼きの離れを良くするためスリップ状の泥土を塗り付ける。323～325は土師坏・皿である。SK472から出土。Fig.33－326はSK472から出土した黄釉鉄絵盤である。327～329はSK473から出土した土師坏である。口径が大きく、底面は糸切りで板目圧痕が付く。331・332は土師坏・皿である。SK478から出土。333～342はSK479から出土した遺物群である。333は底面ヘラ切りの土師皿、334・335は底面ヘラ切りの土師坏である。336は白磁輪ハゲ碗、337は青白磁刻花唐子文鉢である。338・339は白磁碗、340はC群捏鉢、341・342は瓦器椀である。343・344はSK483から出土した土師皿と青白磁皿である。青白磁皿は内面五箇所に白堆線を施す。Fig.34－345は青白磁刻花唐子文鉢である。今回同様な青白磁の鉢が合わせて4枚出土している。345は口径22cm、底径5.5cm、器高6cmを測る。胎土は白色緻密で、釉は光沢のある青白色を呈する。内面には向かい合った唐子を巡って唐草の文様が配されている。江西省景徳鎮窯の製品と考えられる。SK483出土。346～348もSK483の出土で、346・347は白磁平底皿、348は白磁水注である。349～374はSK485から出土した一括の遺物である。349～352は白磁碗である。351は小碗で、内面に曲線文で花文を施す。353～356は白磁皿で353が高台付、354～356が平底である。



PH. 1　出土遺物写真(1)


344

449


309

448

449

277

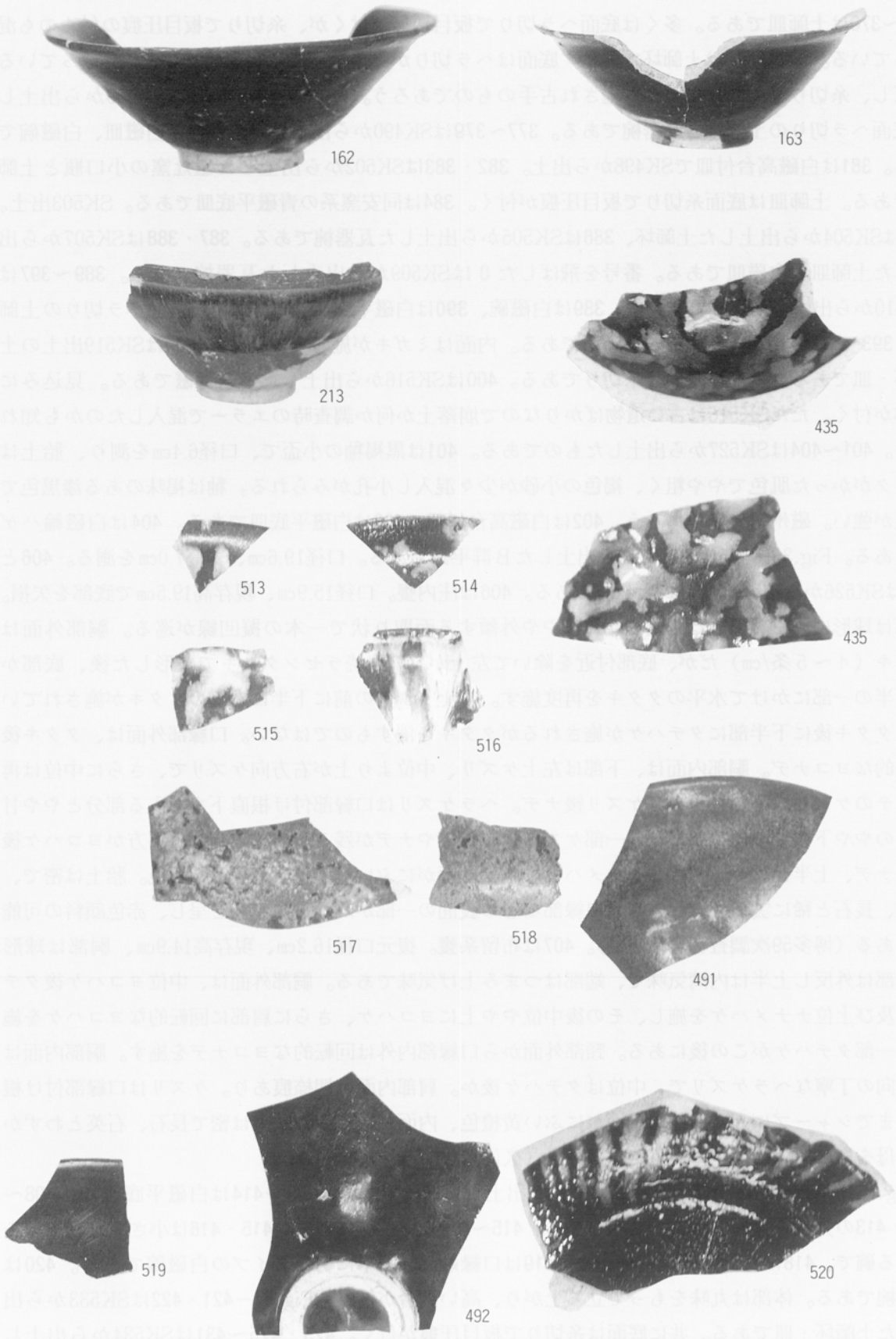
512

PH. 2　出土遺物写真(2)

PH. 3　出土遺物写真(3)

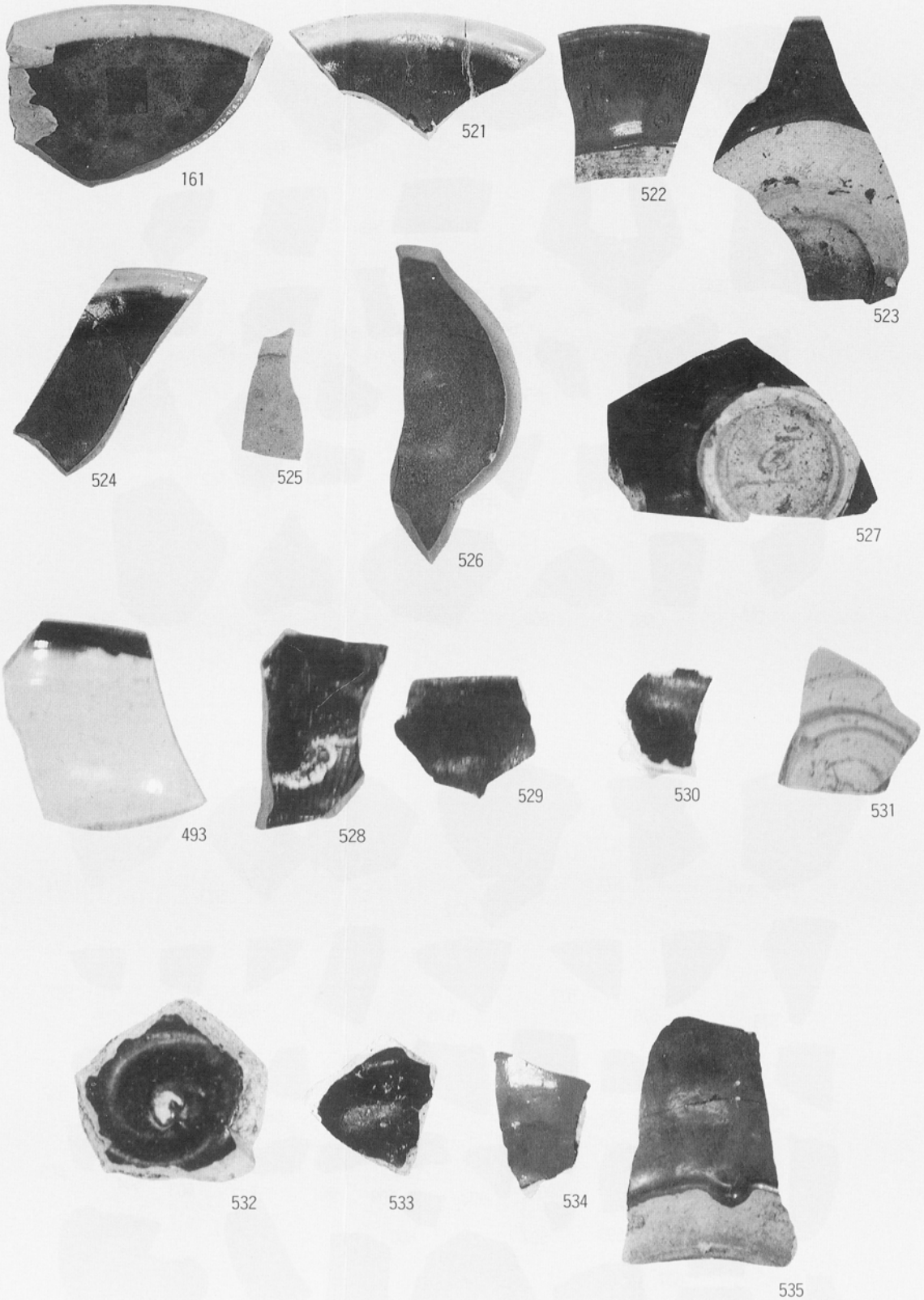
357～370は土師皿である。多くは底面ヘラ切りで板目圧痕が付くが、糸切りで板目圧痕の付くのも混ざっている。371～374は土師坏である。底面はヘラ切りが主体を占めるが糸切りも若干混ざっている。ただし、糸切りも内面はミガキが施され古手のものであろう。Fig.35－375・376はSK489から出土した底面ヘラ切りの土師坏と瓦器椀である。377～379はSK490から出土した土師皿、白磁皿、白磁碗である。381は白磁高台付皿でSK498から出土。382・383はSK502から出土した磁灯窯の小口瓶と土師皿である。土師皿は底面糸切りで板目圧痕が付く。384は同安窯系の青磁平底皿である。SK503出土。385はSK504から出土した土師坏、386はSK505から出土した瓦器椀である。387・388はSK507から出土した土師皿と白磁皿である。番号を飛ばした0はSK509から出土した瓦器椀である。389～397はSK510から出土した遺物群である。389は白磁碗、390は白磁平底皿、391・392は底面ヘラ切りの土師皿、393～397は底面ヘラ切りの土師坏である。内面はミガキが施される。398・399はSK519出土の土師坏・皿である。ともに底面は糸切りである。400はSK516から出土した李朝青磁である。見込みに目跡が付く。ただSK516は古い遺物ばかりなので崩落土か何か調査時のエラーで混入したのかも知れない。401～404はSK527から出土したものである。401は黒褐釉の小盃で、口径6.4cmを測り、胎土はピンクがかった肌色でやや粗く、褐色の小砂が少々混入し小孔がみられる。釉は褐味のある漆黒色で光沢が強い。磁州窯の産であろう。402は白磁高台付皿、403は白磁平底皿である。404は白磁輪ハゲ碗である。Fig.36－405はSK527から出土したB群平鉢である。口径19.6cm、器高7.0cmを測る。406と407はSK526から出土した古式土師器である。406は庄内甕。口径15.9cm、現存高19.5cmで底部を欠損。胴部は球形に近く、口縁は外反し端部はやや外傾する面取り状で一本の擬凹線が巡る。胴部外面はタタキ（4～5条/cm）だが、底部付近を除いて左上がりの連続ラセンタタキで整形した後、底部から下半の一部にかけて水平のタタキを再度施す。左上タタキの前に下半に右上のタタキが施されている。タタキ後に下半部にタテハケが施されるがタタキを消すものではない。口縁部外面は、タタキ後断続的なヨコナデ。胴部内面は、下部は左上ケズリ、中位より上が右方向ケズリで、さらに中位は再度タテのケズリを行い、下半はケズリ後ナデ。ヘラケズリは口縁部付け根直下まで入る部分とやや甘くそのやや下までの部分があり、一部ケズリ前の押捺やナデが残る。口縁部内面は下方がヨコハケ後ヨコナデ、上半はヨコナデ後？ナナメハケ。色は外面がにぶい黄橙色、内面は褐灰色。胎土は密で、石英、長石と稀に雲母を含む。なお口縁部などの表面の一部がかすかに赤色を呈し、赤色顔料の可能性もある（博多59次調査報告に類例）。407は布留系甕。復元口径16.2cm、現存高14.9cm、胴部は球形、口縁部は外反し上半は内湾気味で、端部はつまみ上げ気味である。胴部外面は、中位ヨコハケ後タテハケ及び上位ナナメハケを施し、その後中位やや上にヨコハケ、さらに肩部に回転的なヨコハケを施す。一部タテハケがこの後にある。頸部外面から口縁部内外は回転的なヨコナデを施す。胴部内面は右方向の丁寧なヘラケズリで、中位はタテハケ後か。肩部内面は押捺痕あり。ケズリは口縁部付け根直下までシャープに入る。色は外面がにぶい黄橙色、内面が灰白色。胎土は密で長石、石英とわずかな雲母を含むが砂粒は全体として少ない。（久住猛雄）

Fig.36－408～420はSK530からまとまって出土した遺物である。408～414は白磁平底皿で、408～410・413の見込みには曲線文で文様を描く。415～419は白磁碗である。415・416は小さな玉縁口縁を有する碗で、418は外面に縦線文を施す。419は口縁端部を水平に切るタイプの白磁碗である。420は瓦器椀である。体部は丸味をもって立ち上がり、高い高台が付く。Fig.37－421・422はSK533から出土した土師坏・皿である。共に底面は糸切りで板目圧痕が付く。423・425～431はSK534から出土した遺物である。423は土師坏で、底面は糸切りである。425～430は土師皿で、底面は糸切りで板目圧痕の付くものが多い。431は同安窯系の青磁平底皿である。424はSK510から出土した白磁平底皿であ



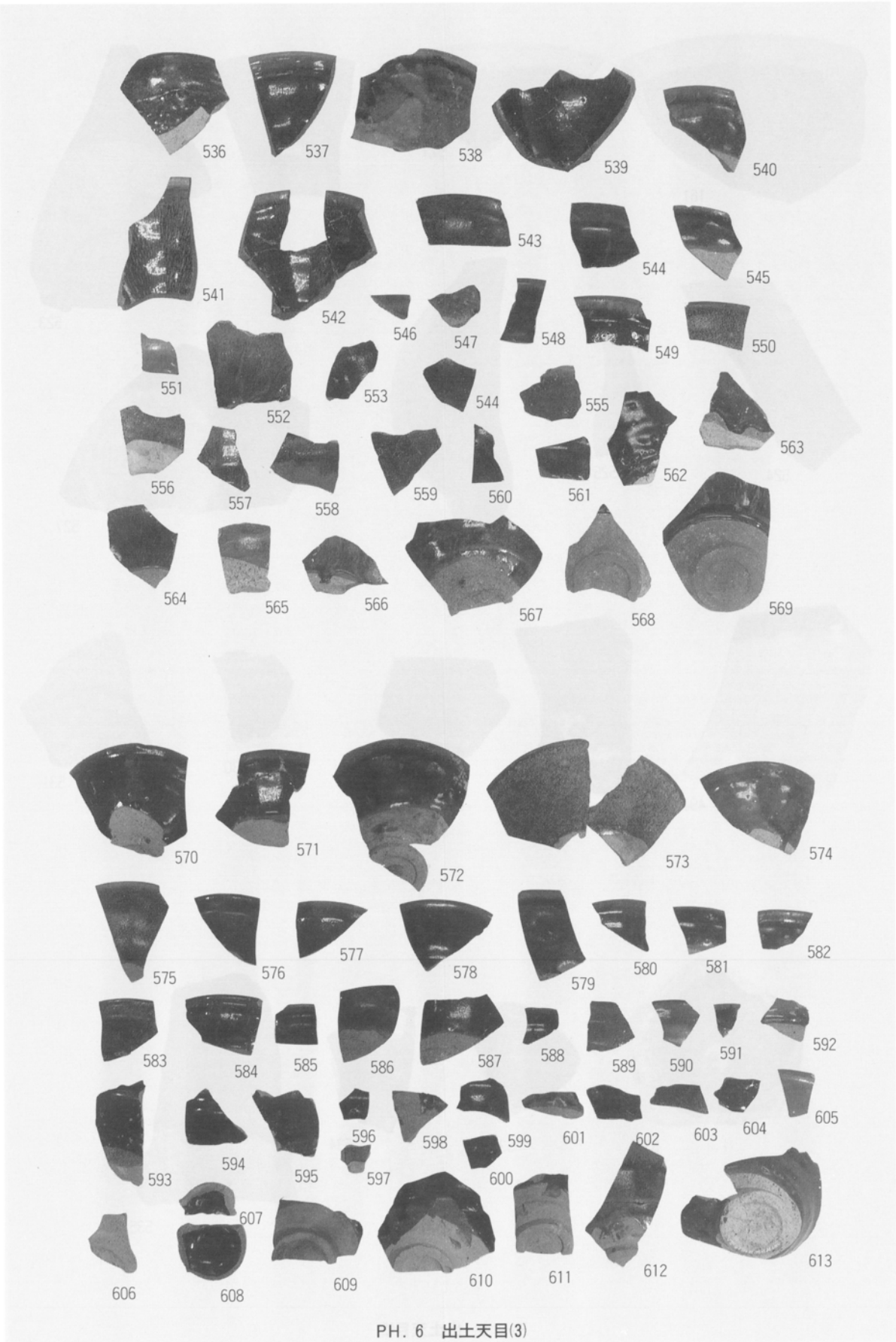
PH．4　出土天目(1)

162・163：SK336　213：SK413　435：SE433　513・517・491：Ⅱ面西側遺構確認　514：SK263
515：SE325　516：SK252　518：SK470　519・492：Ⅱ面下包含層　520：SE255



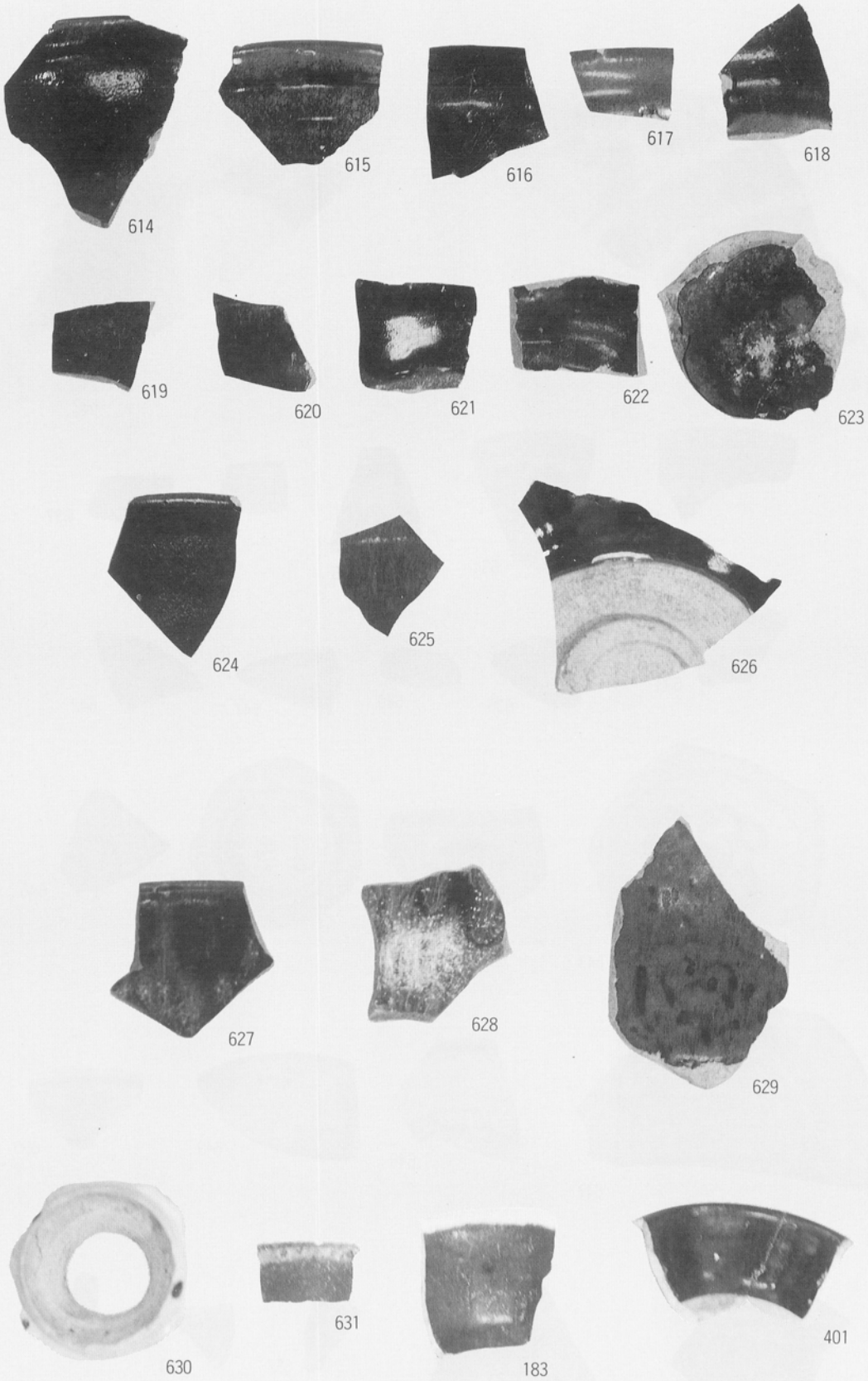
PH. 5　出土天目(2)

161：SK336　521・522：SK436　523：中央部遺構確認　524・531・532：Ⅱ面下包含層　525：SK244
526：SK479　527：SE433　493：西側遺構確認　528：Ⅱ面下包含層　529：SE257　530：SE447
533：SE226　534：Ⅰ面中央部南側攪乱　535：SK169



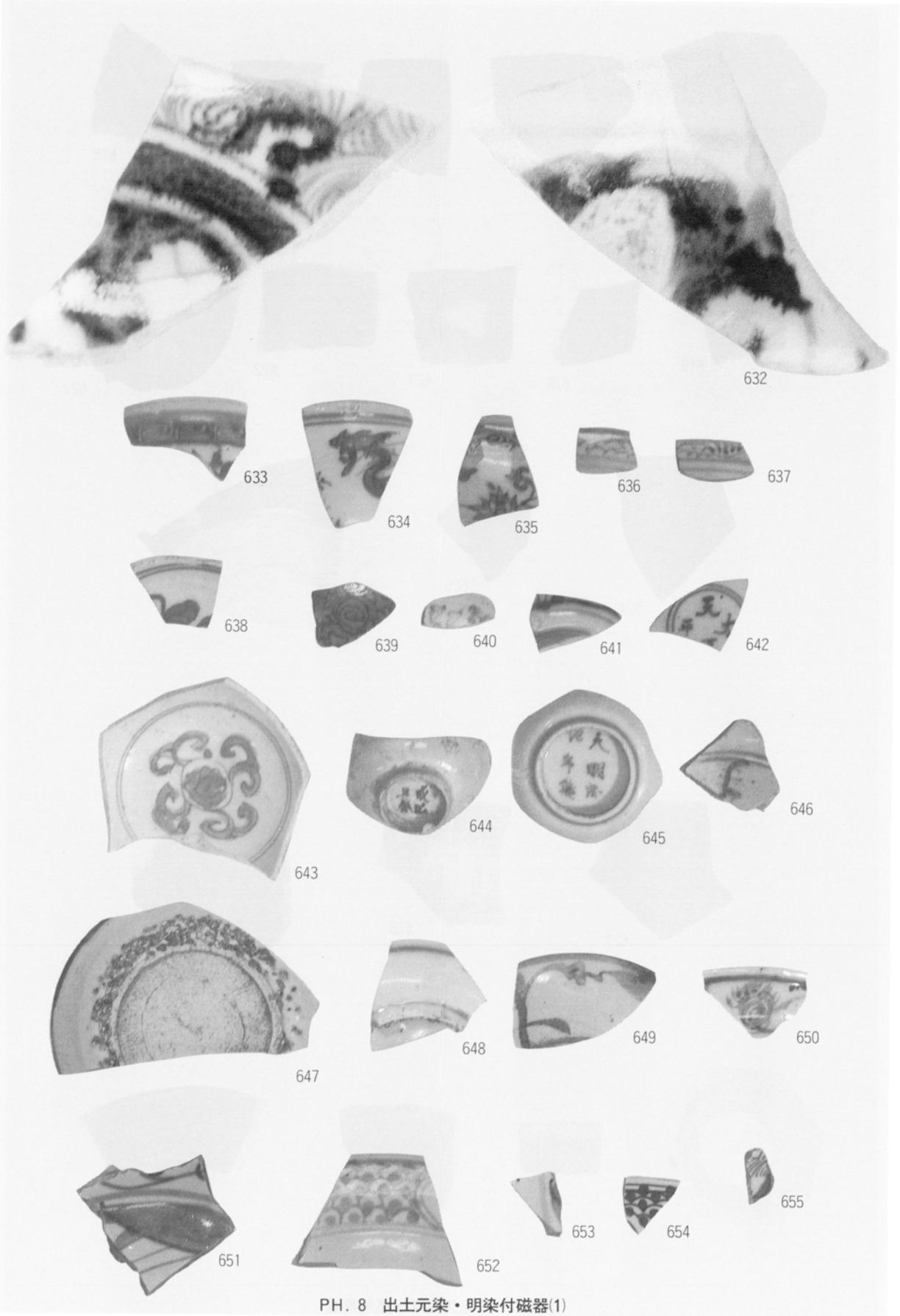
PH. 6　出土天目(3)

536・538・540・545・566・579・589・591・592：Ⅰ面下包含層　537：SK253　539：SK504　541・547・552・553・563・556・557・561・576・583・586・601・606・612：Ⅱ面下包含層　542：SE226　543：SK260　544・548・555・560・564・572・587・594・595・598・602：Ⅱ面遺構確認　546・551・608：Ⅰ面遺構確認　549：SK298　550：SK203　554：SK492　558：SK231　559：SK222　562：SK433　565：SE402　567：SK426　568：排土　569：SE225　570：SK336　571：SK244　573：SK473　574：SK527　575：SE516　577：SK212　578・580：SK421　581：SK425　582・593・603：SE325　584：Ⅲ面遺構確認　585：SK316　588：SK413　590・610・611：SK167　596・605：SX209　597：SK218　599：SK404　600：SK330　604：SK405　609：SE493　613：SK344



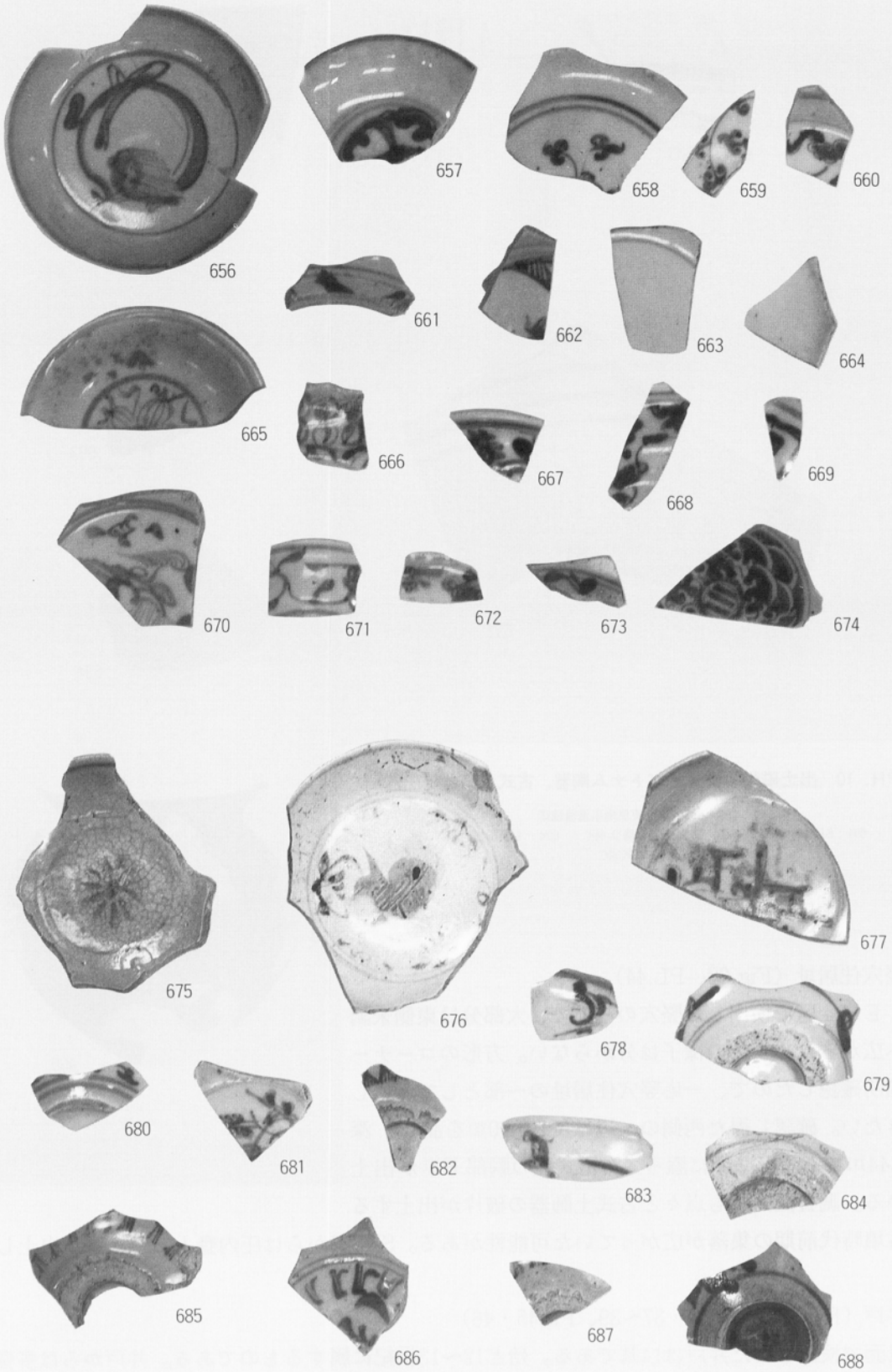
PH. 7　出土天目(4)・黒釉陶器

614・624：Ⅰ面下包含層　615：SK362　616：SK252　617：SE402　618・619：Ⅱ面下包含層　620：SX209
621・631：SE226　622：SK146　623：SK177　625：SE201　626：SK425　627・628：SK167　629：SE133
630：SK504　183：SD319　401：SK527



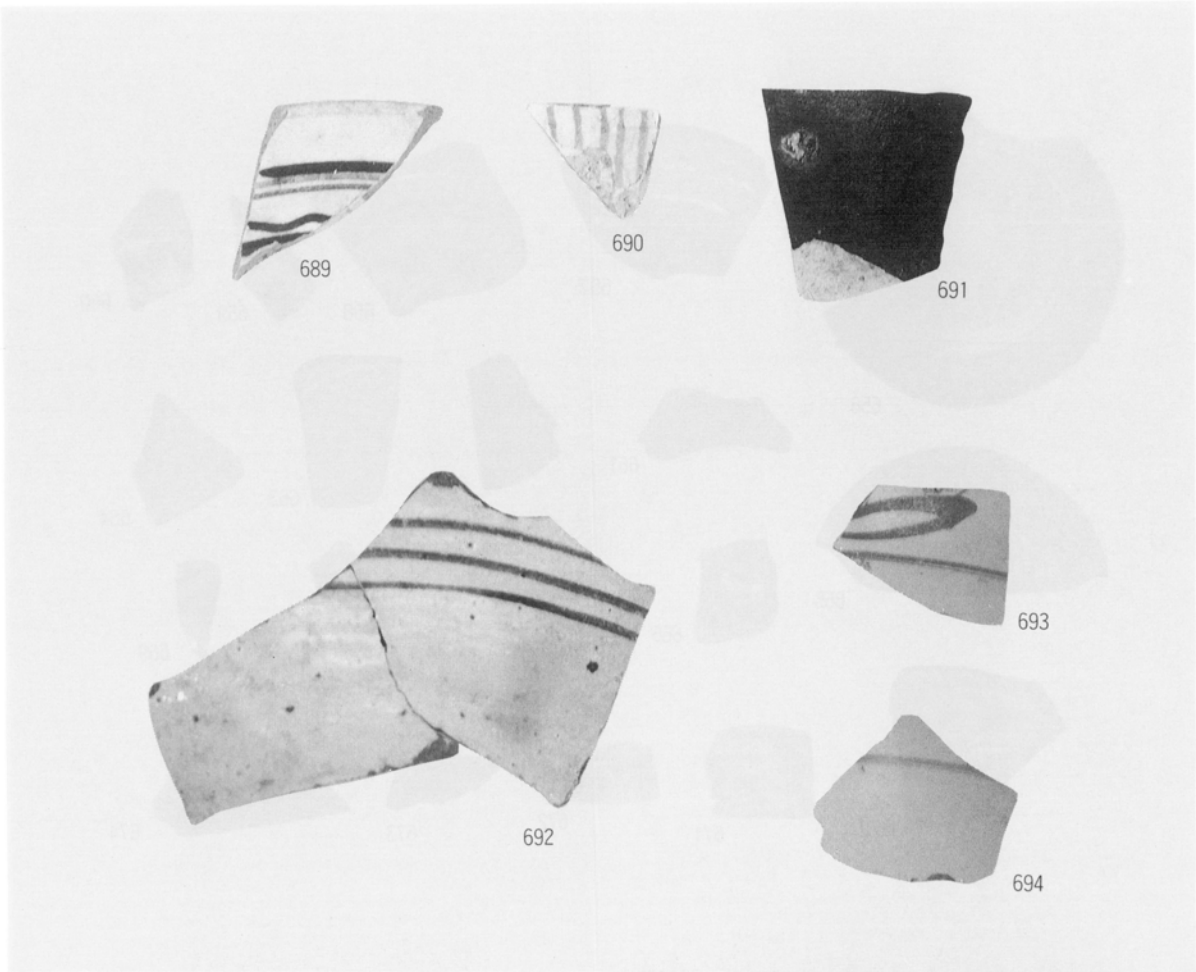
PH. 8　出土元染・明染付磁器(1)

632：中央部攪乱　633：SE402　634・637・640・648・649・651・655：Ⅰ面遺構確認
635・636・638・642・644・653・654：Ⅰ面下包含層　639・647：Ⅰ面検出時　641：Ⅱ面下包含層　643：SK164
645：SK136　646・650：排土　652：SK159



PH. 9　出土明染付磁器(2)

656・664・668・670・673・675・676・677・678・688：Ⅰ面下包含層　657・684：SK140　658・661・669：Ⅲ面南側遺構確認
659・660：Ⅱ面下包含層　665・671：SK167　662・667：排土　663：SE226　666：Ⅰ面検出時　672・681：SE226　674：SE225
679：SK103　680：SK210　682：SK134　683：Ⅰ面中央遺構確認　685・687：Ⅰ面西側遺構確認　686：SE131



PH. 10　出土磁州・タイ・ベトナム陶器、古式土師器（庄内）

689・690：Ⅰ面東側南半遺構確認
691：SE225　692・693：Ⅰ面下包含層D-6区　694：Ⅰ面下包含層A-4区
406：SK526

る。

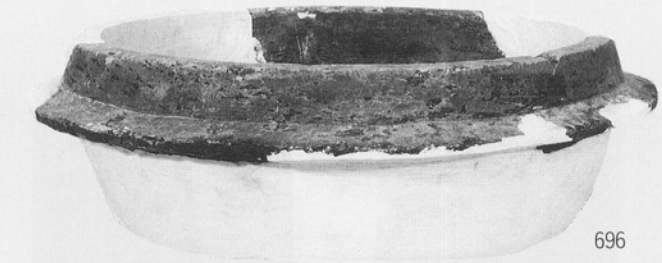
(2)　竪穴住居址（Fig.28、PL.44）

D・E－4区で検出した竪穴の一部で、大部分は東側未調査区へ広がるため全体の様子は分からない。方形のコーナーを1箇所確認したので、一応竪穴住居址の一部として報告しておきたい。確認し得た西側の一辺は長さ5.90mを測り、深さは0.44mである。壁際に添って布留式甕の胴部下半が出土している。調査区内でも点々と古式土師器の破片が出土するので古墳時代前期の集落が広がっていた可能性がある。SK526からは庄内甕と布留式甕が出土している。

(3)　井戸（Fig.28・30・31・37～39、PL.45・46）

第Ⅲ面で検出された井戸は14基である。殆ど12～13世紀に属するものである。井戸からは多量の遺物が出土している。

SE427　A－5区に位置し、掘方上面径2.50m、井筒径0.65m、深さ2.89mを測る。Fig.37－**432**は井筒から出土した白磁碗、433は掘方から出土した白磁碗である。その他井筒から白磁0－Ⅱ類、掘り


696

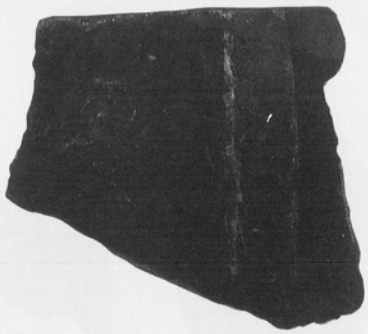
695

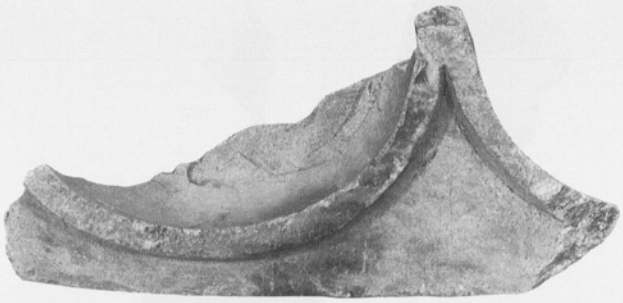
697

698

699

700

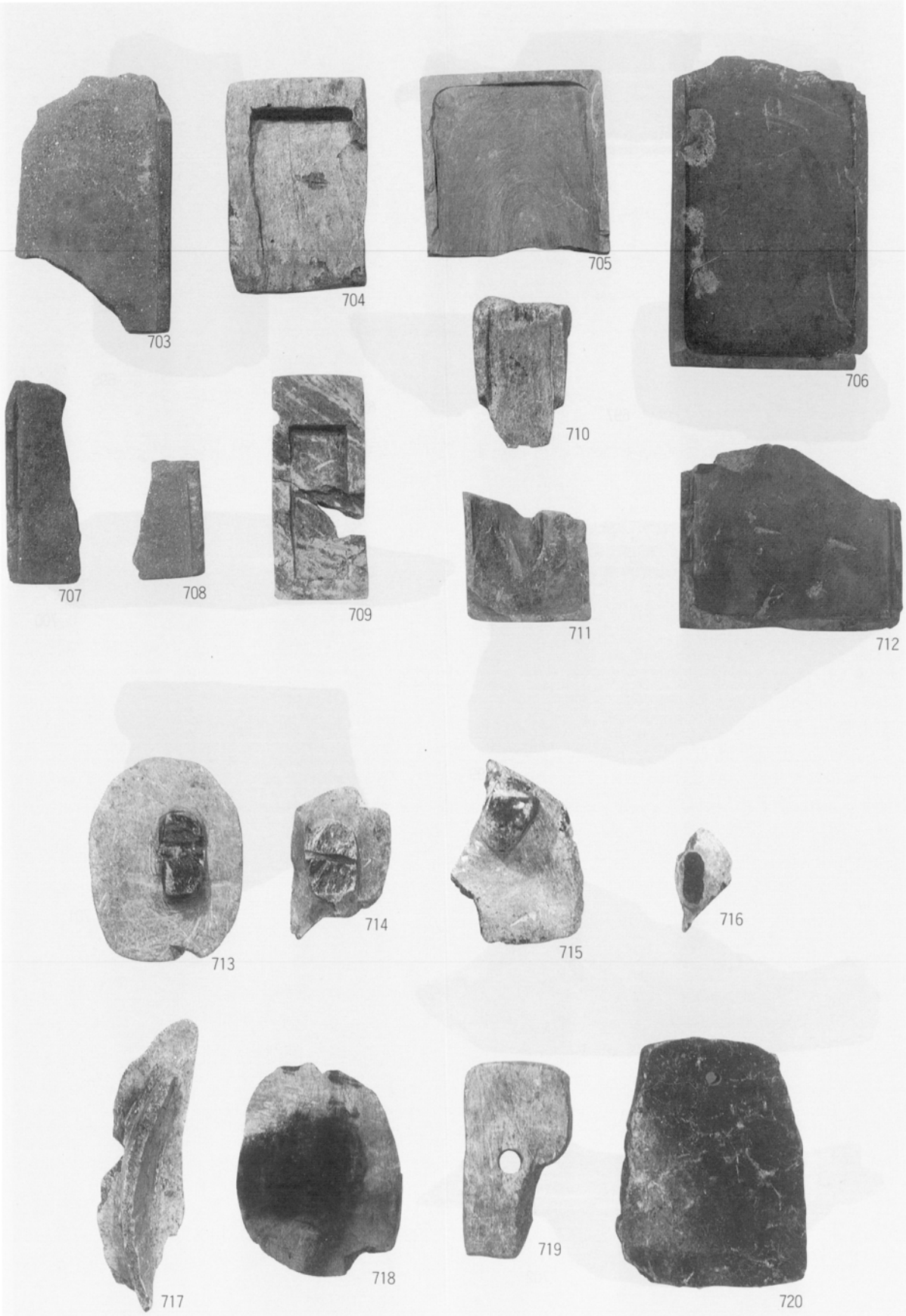

701



702

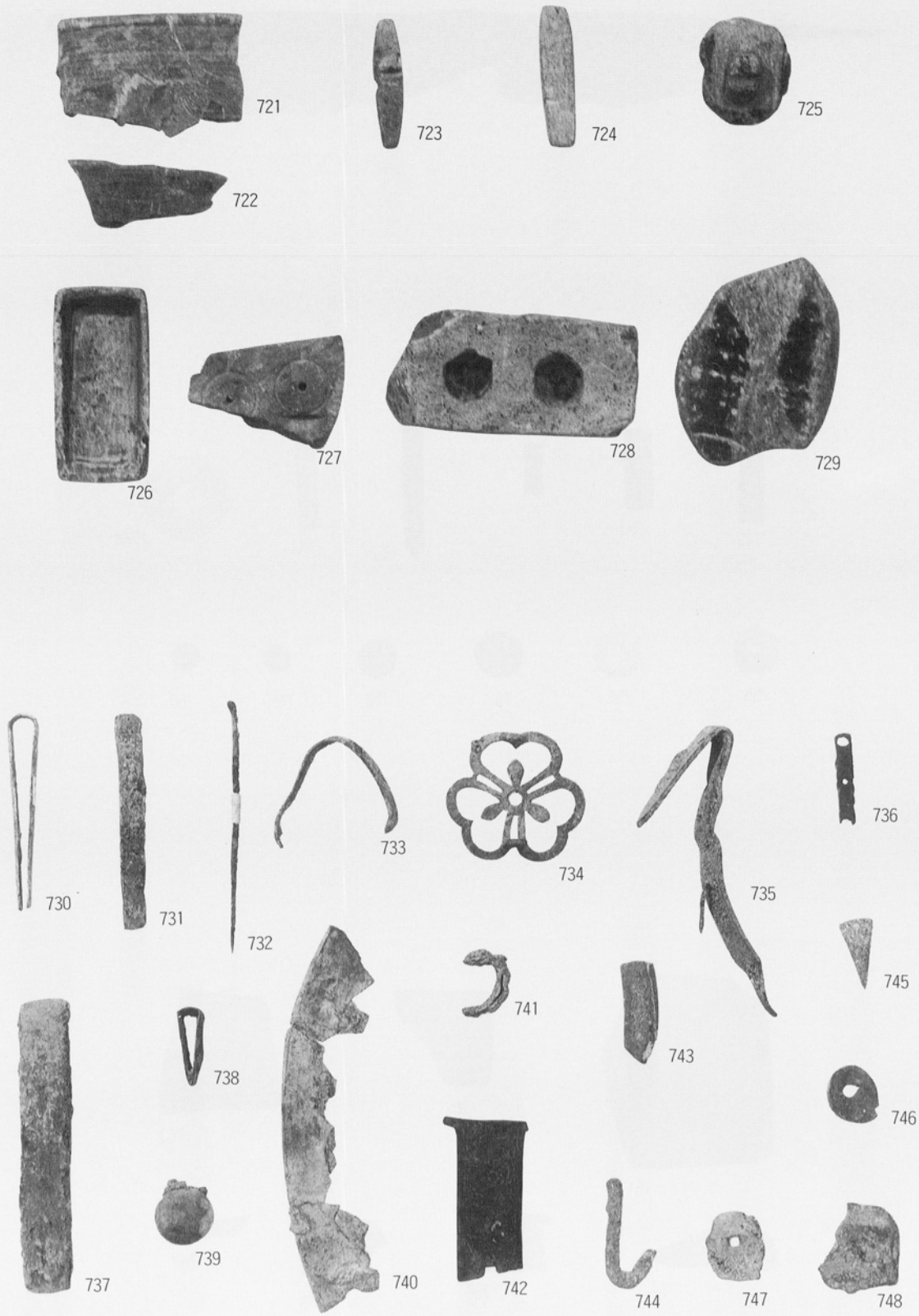
PH. 11　出土石製品(1)

695：Ⅰ面検出時　696・701・702：SE493　697：SK439　698：SK331　699：Ⅰ面下包含層　700：SP229



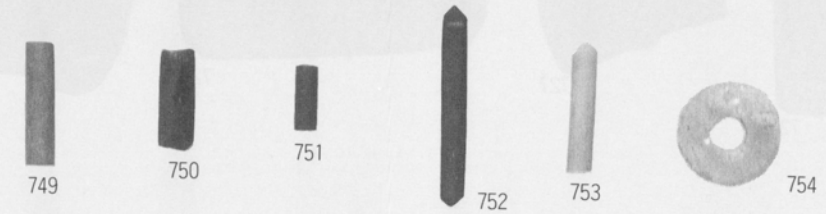
PH. 12　出土石製品(2)

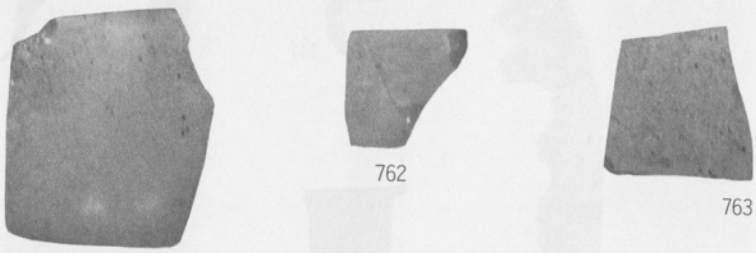
703：Ⅰ面下包含層　704：Ⅲ面遺構確認　705・706：SK101　707・708：SK284　709・715：SE226
710・714：SK292　711：排土　712：Ⅰ面遺構確認　713：SK453　716・718：Ⅱ面下包含層　717：SK338
719：SK330　720：SE493



PH. 13　出土石製品(3)・金属製品(1)

721：SE225　722：SE201　723：SK402　724・725・747：Ⅱ面下包含層　726：SK425　727：SK255
728：Ⅱ面遺構確認　729：SK260　730：SE131　731・732：SK139　733・734・743：Ⅰ面下包含層　735・739：SK325
736：SK107　737：SK111　738：SE113　740：SK249　741：SE226　742：SK292　744：SK461
746：SE140　748：SK248





PH. 14　出土金属製品(2)・玉・ガラス製品

1：SK103　749：SK478　750：SK404　751・756：SK413　752・753：SK107　754：SK262　755：SK333
757：SE225　758：SK247　759：SE201　760：SK221　761：SE447　762・764：SK334　763：SK231
764・766・767：Ⅱ面遺構確認　765：SK334

方から白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、平底皿、東播系須恵器、C群捏鉢、朝鮮無釉陶器などが出土している。12世紀前半代に位置づけられよう。

SE429　B・C－5・6区に位置し、掘方上面径2.32m、井筒径0.65m、深さ2.78mを測る。遺物は掘り方から白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、井筒から白磁碗Ⅱ類、白磁平底皿、瓦器椀、弥生土器、須恵器などが出土している。時期は12世紀前半代であろう。

SE432　A・B－1区で検出した井戸で掘方上面径3.10m、井筒径0.8m、深さ2.40mを測る。桶組みの井戸である。掘り方から龍泉系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、ロハゲ白磁皿、上質の高麗の碗、糸切りの土師皿などが出土している。13世紀以降のものであろう。

SE433　A・B－1・2区で検出した井戸で、掘方上面径4.6m、井筒径0.65m、深さ3.02mを測る。下部には桶組みが残っていた。遺物は、白磁碗0・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ類、白磁平底皿Ⅱ・Ⅵ類、ロハゲ白磁皿、白磁水注、同安窯系青磁碗・皿、龍泉窯系青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、龍泉系青磁平底皿Ⅰ類、高麗青磁碗・皿、A群壺、鉢、黄釉盤、C群甕などが出土している。Fig.37－**434**は褐釉の皿か蓋、**435**は玳玻天目碗の底部である。底径は3.5cm。胎土は灰白色で、釉は光沢があり黒釉と鼈甲色の釉が斑らに広がっている。SE433は出土遺物から13世紀代と考えられる。

SE447　C・D－1・2区に位置し、掘方上面径3.40m、井筒径0.65m、深さ2.71mである。Fig.37－**436**・**437**は白磁碗Ⅵ類、**438**はⅪ類の白磁輪ハゲ碗である。**439**・**440**は青磁平底皿、**441**は黄釉盤である。その他、緑釉陶器皿、朝鮮系無釉陶器、瓦器椀、糸切りの土師坏・皿などが出土している。13世紀代に位置づけられよう。

SE461　D・E－3区に位置し、掘方上面径3.04m、井筒径0.70m、さらに底面は径0.4mで1段窪み曲物を据えている。深さは2.81mである。調査区壁際だったので井筒のみ掘り下げ、井戸掘方は一部しか掘り下げていない。出土遺物は白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、白磁平底皿、白磁輪ハゲ皿、龍泉窯青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁碗Ⅰ類、B群瓶、C群行平・捏鉢、土師坏・皿などである。Fig.37－**442**・**443**は底面糸切り板目圧痕のある土師皿である。12～13世紀代に属するものであろうか。

SE469　A・B－2・3区に位置し、掘方上面径3.0m以上、調査区壁際のため－1.65mまでしか掘り下げていない。井筒は未掘である。出土遺物は龍泉窯青磁碗Ⅰ類、同安窯系青磁皿、白磁小片、A群黄釉陶器、準A群四耳壺、B群四耳壺、C群捏鉢などが出土している。12世紀後半代の時期であろう。

SE493　D－1・2区で検出した井戸で、掘方上面径2.85m、井筒径0.75m、深さ2.60mを測る。井筒は桶組みでやや東側に片寄る。出土遺物は、白磁香炉、白磁劃花文皿、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、龍泉窯系青磁碗・皿、同安窯系青磁碗、磁灯窯系小口瓶、陶器B群水注・鉢、瓦、石鍋、東播系鉢、土師坏・皿などである。Fig.37－**444**は白磁小碗、**455**～**447**は土師坏で口径が大きく底面は糸切り板目圧痕が認められる。**448**はⅨ類の白磁輪ハゲ碗である。Fig.38－**449**は龍泉窯系青磁碗である。大型の碗で口径18.7cm、底径6.0cm、器高8.4cmを測る。胎土は灰色精良で、釉は透明な光沢ある灰緑色を呈する。釉には氷裂がはいる。内面には片切彫りで蓮花折枝文を施す。見込みが小さく古手の碗であろう。**450**は陶器B群の壺底部である。**451**は黄釉鉄絵盤である。**452**も同様の盤である。底部に「許金？」の墨書と花押が認められる。Fig.39－**453**は黄釉鉄絵盤、**454**は常滑焼の甕である。出土遺物から12世紀後半代に位置づけられる。

SE500　D・E－4区に位置し、掘方上面径2.6×2.6m、井筒径0.5×0.55m、深さ2.65mを測る。遺物は、白磁碗Ⅱ・Ⅴ類、小碗Ⅴ類、須恵器高台付坏、陶器C群行平、ヘラ及び糸切りが混在した土師坏・皿などが出土している。12世紀代に属するものであろう。

(4)　溝（PL.47）

第Ⅲ面で３条の溝を検出した。それぞれ部分的な確認なので全体の様子は明確でない。

SD430　Ｂ・Ｃ・Ｄ－５・６区で検出した溝で、最大幅3.10m、深さ0.4mを測り、Ｂ－５区からＤ－６区へ「Ｌ」字状に曲がる。出土遺物は青白磁合子、白磁碗Ⅱ類、高麗青磁碗、須恵器坏蓋、弥生土器などが出土している。中世の遺構が多数切り合っているので同時期の遺物が多く見られるが、調査時の観察では撹乱のない溝の埋土から高台付の須恵器坏や坏蓋などが出土していたことから奈良時代後半期の溝と考えたい。

SD443　Ｂ－１・２区で出土。幅1.4m、深さ0.6m、長さは2.9mまで確認した。Ｂ－２区からＢ－１区へ延びている。遺物は須恵器、格子タタキ平瓦、朝鮮系無釉陶器などが出土している。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

SD536　Ｂ－３・４区に位置する。幅0.6m、深さ0.16mを測る。出土遺物は須恵器坏蓋がある。奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。

(5)　遺構確認他

第Ⅲ面の遺構確認で本来遺構に埋まっていたと考えられる遺物が取り上がっている。取り上げた遺物は第Ⅲ面の遺構群とほぼ同時期のものである。

Fig.39－**471**～**474**は白磁高台付皿で、**475**～**478**は白磁平底皿である。**477**は底部を削り出して輪高台状になっている。**487**は白磁碗Ⅲ類、**488**はⅣ類の白磁碗である。**489**はⅦ類の白磁碗であろう。Fig.41－**505**は同安窯系の青磁平底皿、**506**は雲文を施した龍泉窯系の青磁碗、**507**も龍泉窯系の青磁碗である。見込みに「金玉満堂」のスタンプ文がある。**502**は須恵器高台付の坏である。奈良時代後期のものであろう。

4　抽出した出土遺物

各遺構出土遺物の頁で取り上げた遺物と重複するものも含まれるが、個別に報告できなかった遺物群を取りまとめてみた。

(1)　天目・黒釉陶器

PH.４～７は天目及び黒釉陶器である。天目は第71次調査区だけで破片も含めて150点近く出土している。**162**・**163**・**213**は前頁で説明した天目碗である。**435**・**491**・**513**～**518**は玳玻盞である。**435**・**513**・**514**は同一個体であろう。口径は16cm位に復元できる。**435**はSE433の頁で説明したものである。**515**は器体がラッパ形に開くと考えられ、土はベージュで比較的細かく混じりがない。小孔が認められる。釉は黒褐色にはちみつ色の斑がはいり、斑の上に空色をおびたなまこが出る。斑は内外面に認められる。江西省吉安吉州窯の産であろう。**516**は玳玻釉小碗か。器壁は２mmで、土はベージュ味のある白でやや粗い。陶胎になっている。釉は黒の地に茶色透明斑がはいり、斑の方に空色がかるなまこがかかる。内外面とも斑入りである。吉州窯のものであろう。**517**・**518**は口径が14.5cm位に復元でき、器壁は端部が２mm、底部近くが5.5mmである。土はやや灰味があるが白色で、磁質になっている。破断面はやや粗い。釉は褐色鉄銹色で、マットの表面上に黒褐色の斑が散る。一部は黄褐色に溶けかけている。火具合では玳玻になっただろう。土が吉州であるのとは違い、別の系統の窯であろう。**491**は前出した銹花玳玻盞である。**492**・**519**は黒釉盞である。土は肌色を帯びたやわらかい白で細かく、磁質になっている。釉は漆黒色で光沢があり、全体に施釉後高台を削る。内面には口縁からおりる茶オリーブの線があり、内面を輪花につくるものであろう。華北産のものと考えられる。**520**は黒釉銹花の鉢である。土は黄褐色で細かく、陶胎になっている。体部は黒い釉が厚くかかり、体

下半はうすい釉になっている。内面には茶色のサビで連続した縦線文を施す。外面は体部下半近くまで光沢ある漆黒色の釉がかかり、下半は黒褐色を呈する。底部近くから高台外面にかけてうす茶の透明釉がかけられ砂が付着する。畳付及び内底面は露胎となる。新安沈船に類品がある。161・521～527は、口縁内面が白くなる白縁天目である。161は前出のものである。493は内面が口縁部以外白くなる内白天目である。528は文字天目で白で文字か文様を描く。529～531は付高台を有するタイプである。529は口縁部の破片で、土はベージュ色で細かく、磁質に近く溶けている。釉は暗褐色で表面はくもりがかかっている。器壁は口縁端部が3.5mm、体部が1.5mmとなっている。531の土はベージュ色で細かく、露胎はねっとりして緻密である。釉は黒褐色で、層は厚くなく釉表面はかすみがかかる。器壁は３mmで、底径4.3mm、高台から内底面にかけ丸味をもって整形されている。530も同様な作りになっている。これらは磁灶窯の土に良く似ているものである。532～535は天目碗の体部から底部である。534・535は褐色を帯びた釉で瀬戸天目であろう。536～569は、胎土が黒灰色でやや粗く、建窯に近いグループである。570～613は胎土が灰色でやや堅い。下釉のかかるものが多い。建窯よりやや遠いグループである。614～623は胎土の色がややうすいグループである。器壁は堅緻である。624～626は白くやや粗い胎土を持つグループである。626は胎土が灰味のある白でやや粗く、磁質になっている。釉は黒又は黒褐色で光沢があり、釉尻はきれいに茶一線になっている。器壁は２mmで、底部中央が４mmの厚さになっている。627～629は玳玻盞である。630・631・183・401は磁州倣定の盃托と盃である。183と401は前出の遺構から出土した遺物の頁に説明を行なっている。

(2)　磁州・タイ・ベトナム陶器（PH.10）

整理の過程で気づいたものを取り出したが、その後、見落したものに気づき、さらに数点類例が増えている。689～691は磁州窯の鉄絵と黒釉の陶器である。692はタイの白釉の陶器で、鉄絵で平行線が描かれている。693・694はベトナム陶器で、下地に鉄絵が描かれ、その上から白釉がかけられている。

(3)　元・明青花磁（PH.８・９）

元の遺物は少ないが、明の青磁、青花磁などはかなり多く出土している。写真に示していない資料も多数ある。632は小さな破片であるが、元の染付磁器とみられるものである。一部分だけであり全体の様子は分らない。

633～646は明の染付碗である。15世紀の終りから17世紀初めのものまで含まれている。647～655は染付皿である。647～650は福建広東系の染付皿、651～655は漳州窯系の染付皿であろう。656～674は15世紀から17世紀初めにかけての染付皿である。675～688は底が碁笥底になるタイプの明染付皿である。その他、明の赤絵も数点出土している。

(4)　石製品（PH.11～13）

695は第Ⅰ面の検出時に出土した弥生時代の太型蛤刃石斧である。玄武岩製で基部が欠損しており、残長15.1cmを測る。弥生中期の甕がⅢ面の砂層から出土しているので、本来は下部にあったものが撹乱などによって上に持ち上げられたものであろう。696～702は滑石製の石鍋である。696は口径34.7cmで底部を欠失している。SE493の井筒から出土している。697・698は小型の石鍋である。697は復元口径が19cm程度になるとみられ、外面に縦方向の把手が付く。SE439出土。698はさらに小型になるものと考えられる。SE331から出土している。699・700は鍔が付く石鍋である。701は縦方向に把手が付く石鍋である。ススが多量に付着している。SE493から出土。SE493からは多数の石鍋が出土している。702は器形がめずらしい二連の石鍋である。残存している部分が二連あるもので、それ以上に続くかどうかは分らない。鍔は共有し、薄く作られ方形に巡っていたものと考えられる。SE4

Tab. 1　出土銭貨一覧

出土遺構	銭銘（表）	銭銘（裏）	初鋳年		備考
ＳＫ１０６・Ⅰ面	寛永通寶	文	寛文8年	1668年	
ＳＫ１０７・Ⅰ面	寛永通寶		元禄10年	1697年	新寛永
ＳＫ１０７・Ⅰ面	寛永通寶		寛永13年	1636年	
ＳＫ１１１．Ⅰ面	不明	不明			上層より出土
ＳＫ１１１．Ⅰ面	不明	不明			上層より出土
ＳＫ１１５．Ⅰ面	寛永通寶		元禄10年	1697年	新寛永
ＳＫ１２６．Ⅰ面	○○○寶	不明			
ＳＫ１２８．Ⅰ面	不明	不明			
ＳＥ１３１．Ⅰ面	寛永通寶		元禄10年	1697年	新寛永
ＳＥ１３１．Ⅰ面	寛永通寶		元禄10年	1697年	新寛永
ＳＫ１３６．Ⅰ面	寛永通寶		寛永13年	1636年	
ＳＫ１４１．Ⅰ面	不明	不明			
ＳＫ１４２．Ⅰ面	淳熙元寶	捌	淳熙元年	1174年（北宋）	
ＳＥ１５４．Ⅰ面	寛永通寶	文	寛文8年	1668年	井戸掘方より出土
ＳＫ１５７．Ⅰ面	至道元寶		至道元年	995年（北宋）	
ＳＫ１５８．Ⅰ面	寛永通寶		寛永13年	1636年	
ＳＫ１５８．Ⅰ面	○○○寶	不明			
ＳＫ１５８．Ⅰ面	不明	不明			
ＳＫ１５９．Ⅰ面	寛永通寶		寛永13年	1636年	下層より出土
Ⅰ面遺構確認	寛永通寶		寛永13年	1636年	
Ⅰ面中央部遺構確認	天聖元寶		天聖元年	1023年（北宋）	
Ⅰ面中央部遺構確認	不明	不明			小破片
Ⅰ面中央部遺構確認	不明	不明			小破片
Ⅰ面中央部遺構確認	一銭	明治十六年	明治3年	1870年	
Ⅰ面西側遺構確認	元豊通寶		元豊元年	1078年（北宋）	
Ⅰ面西側遺構確認	寛永通寶	不明	元文4年	1739年	
Ⅰ面西側遺構確認	不明	不明			
Ⅰ面西側遺構確認	明元○寶				一部破損
Ⅰ面採集	祥符元寶		大中祥符元年	1008年（北宋）	
Ⅰ面Ａ５区包含層	寛永通寶	波			当四文
Ⅰ面Ａ５区包含層	嘉祐元寶		嘉祐元年	1057年（北宋）	
Ⅰ面Ｂ３区包含層	元豊通寶		元豊元年	1078年（北宋）	
Ⅰ面Ｂ３区包含層	咸平元寶		咸平元年	997年（北宋）	
Ⅰ面Ｂ３区包含層	不明	不明			
Ⅰ面Ｄ６区包含層	開元通寶		武徳4年	621年（唐）	
Ⅰ面Ｅ６区包含層	不明	不明			小破片
Ⅰ面包含層	不明	不明			1／2残存
ＳＥ２０１．Ⅱ面	元祐通寶		元祐元年	1086年（北宋）	井戸掘方中層より出土
ＳＥ２１１．Ⅱ面	○○○寶				1／2残存
ＳＫ２１２．Ⅱ面	紹聖元寶		紹聖元年	1094年（北宋）	
ＳＫ２１２．Ⅱ面	太平通寶		太平興国元年	976年（北宋）	
ＳＫ２１２．Ⅱ面	天○○寶				1／2残存
ＳＫ２１２．Ⅱ面	不明	不明			数個体分小破片一括
ＳＫ２２９．Ⅱ面	不明	不明			2枚錆着
ＳＫ２４５．Ⅱ面	治平元寶		治平元年	1064年（北宋）	
ＳＫ２４５．Ⅱ面	不明	不明			
ＳＫ２４５．Ⅱ面	不明	不明			
ＳＥ２５７．Ⅱ面	不明	不明			
ＳＫ２５８．Ⅱ面	皇宋通寶		寶祐元年	1253年（北宋）	
ＳＰ２１７．Ⅱ面	太平通寶		太平興国元年	976年（北宋）	
Ⅱ面中央部遺構確認	皇宋通寶		寶祐元年	1253年（北宋）	
Ⅱ面中央部遺構確認	○熙元寶				1／3残存
Ⅱ面中央部遺構確認	不明	不明			
Ⅱ面西側遺構確認	紹聖元寶		紹聖元年	1094年（北宋）	
Ⅱ面西側遺構確認	天聖元寶		天聖元年	1023年（北宋）	
Ⅱ面西側遺構確認	聖宋元寶		聖宋元年	1101年（北宋）	
Ⅱ面Ｂ３区包含層	宣和通寶		宣和元年	1118年（北宋）	
Ⅱ面Ｅ４区包含層	元豊通寶		元豊元年	1078年（北宋）	
Ⅱ面Ｅ５区包含層	大観通寶		大観元年	1107年（北宋）	
Ⅱ面Ｅ５区包含層	明道元寶			1023年	
Ⅱ面Ｅ５区包含層	○平元寶		（治平元年1064年）		治平元寶か？
ＳＫ４０３．Ⅲ面	紹聖元寶		紹聖元年	1094年	
ＳＫ４０４．Ⅲ面	不明	不明			1／2残存
ＳＥ４０５．Ⅲ面	紹聖元寶		紹聖元年	1094年	上層より出土
ＳＥ４６９	熙寧元寶		熙寧元年	1068年（北宋）	
ＳＥ４６９．Ⅲ面	皇宋通寶		寶祐元年	1253年（北宋）	
ＳＥ４６９．Ⅲ面	嘉祐元寶		嘉祐元年	1057年（北宋）	
Ⅲ面Ａ３区遺構確認	皇宋通寶		寶祐元年	1253年	
Ⅲ面．出土地点不明	不明	不明			1／3残存

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ101	略方形土坑	近世	Ａ-1区、北東隅に位置、大部分は調査区外へ広がる、中央に向かって段状に窪む。検出部分は、東西2.27ｍ、南北2.22ｍ、深さ0.98ｍ。　肥前系染付碗・皿、擂鉢、花瓶、巴文軒丸瓦・軒平瓦、博多焜炉			12
ＳＫ102	略方形土坑	近世	Ｂ-1区、長さ1.9ｍ、幅1.58ｍ、深さ0.31ｍ。　明の青花皿、褐釉陶器、高取焼、花瓶、灯明、肥前系陶磁器	6	1	
ＳＫ103	略方形土坑	16Ｃ	Ｂ-1・2区、長さ2.11ｍ、幅1.97ｍ、深さ0.51ｍ、プランはやや胴張りで、方形石組の礫が一部残る。　明の染付皿、備前大甕・片口・擂鉢、瓦質火舎、土師皿	6	2	9・14
ＳＫ104	円形土坑	16Ｃ	Ａ・Ｂ-1区、径1.15×1.06ｍ、深さ0.49ｍ。　明染付、瓦質捏鉢・擂鉢		2	
ＳＫ105	略方形土坑	近世	Ａ-1・2区、残存長2.18ｍ、残存幅0.45ｍ、深さ0.22ｍ、大部分は西側未調査区へ広がる。ＳＫ101に切られ、ＳＫ106を切る。　肥前系磁器（皿・碗）、肥前系陶器、七輪			
ＳＫ106	略方形土坑	近世	Ａ-1・2区、長さ2.90ｍ、残存長1.38ｍ、深さ0.29ｍ、北側には段が付く。西側未調査区へ広がる。ＳＫ111を切る。　肥前系磁器（碗・皿・瓶）、肥前系陶器（甕・擂鉢）、唐津三彩大皿、刷毛目皿			
ＳＫ107	方形土坑	近世	Ｂ-2区、長さ1.78ｍ、幅1.67ｍ、深さ0.35ｍ、ＳＫ118・ＳＥ140を切る。　肥前系磁器（碗・皿）、角皿、鉢、火消壺、大香炉	6	3	13・14
ＳＫ108	円形土坑	16Ｃ	Ａ・Ｂ-2区、径1.18×1.08ｍ、中央部は径0.45ｍさらに深くなる。合わせた深さは0.22ｍ。ＳＫ109を切る。　明染付碗、褐釉陶器			
ＳＫ109	長方形土坑	近世	Ａ-2区、長さ2.30ｍ、幅0.88ｍ、深さ0.07ｍ。きわめて浅い土坑。　肥前系陶磁器（碗・擂鉢）、博多焜炉			
ＳＫ110	不定形土坑	近世	Ａ-2区、残存長2.52ｍ、残存幅1.32ｍ、深さ0.24ｍ、ＳＫ106・ＳＫ111を切る。大部分は西側未調査区へ広がる。　肥前陶磁器（碗・皿）、肥前系青磁小碗、紅皿、肥前系陶器（擂鉢）、博多焜炉			
ＳＫ111	略方形土坑	近世	Ａ-2区、残存長1.64ｍ、残存幅1.28ｍ、深さ0.20ｍ、ＳＫ106・ＳＫ110に切られており一部しか残っていない。　肥前系磁器（碗・皿・坏・鉢）、肥前系陶器（擂鉢・碗・甕）、青磁鉢、巴文軒丸瓦			13
ＳＫ112	略方形土坑？	近世	Ｂ-1区、中央部撹乱で壊されているので一部しか残っていない。　陶器碗、土師坏・皿（糸切）、瓦			
ＳＥ113	円形素掘井戸	近世	Ｂ-3区、上径2.72×2.25ｍ、底径1.22×1.13ｍ、深さ2.99ｍ、ＳＫ115・ＳＫ165を切っている。　明染付皿、肥前系磁器（碗・皿）、肥前系陶器（擂鉢　他）、七輪、鉄滓	7	30	13
ＳＥ114	円形瓦組井戸	近世	Ａ-3区、掘方径1.32×1.26ｍ、井筒径0.79ｍ、一段12枚の瓦組、瓦の幅20ｃｍ、高さ25ｃｍ、厚さ3ｃｍを測る。井筒径0.68ｍ、瓦組、深さは標高0.5ｍ前後、ＳＫ158・ＳＫ159・ＳＫ166を切る。　肥前系磁器		8	
ＳＫ115	長方形土坑	近世	Ｂ-3区、長さ1.78ｍ、幅1.10ｍ以上、深さ0.84ｍ、ＳＫ116を切っている。　肥前系青磁、花瓶、染付碗、刷毛目碗、瓦質大甕、七輪、擂鉢	6		
ＳＫ116	円形土坑	近世	Ｂ-3区、径0.76ｍ、深さ0.2ｍ、小型の土坑。　肥前系磁器（角皿）、擂鉢、七輪			
ＳＫ117	長方形土坑	16Ｃ	Ａ-2区、長さ0.88ｍ、幅0.65ｍ、深さ0.1ｍ、小型で浅い土坑、ＳＫ119・ＳＫ120を切る。南側は8ｃｍ程度さらに深くなる。　明染付、備前擂鉢、常滑甕			
ＳＫ118	楕円形土坑	—	Ｂ-2区、長径1.10ｍ以上、短径0.85ｍ、深さ0.34ｍ、ＳＫ121を切る。　土師皿片			
ＳＫ119	円形土坑	近世	Ａ・Ｂ-2区、径0.77ｍ、深さ0.21ｍ、小型の土坑。ＳＫ120・ＳＫ121を切る。　肥前系磁器（皿）、肥前系陶器（甕）、瓦質片口、天目碗			
ＳＫ120	略楕円形土坑	近世	Ａ・Ｂ-2区、長径1.25ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.32ｍ、ＳＫ109を切る。　肥前系陶磁器、備前擂鉢、瓦質大甕			
ＳＫ121	略方形土坑？	—	Ｂ-2区、長さ0.86ｍ、幅不明、深さ0.12ｍ、小型で浅い土坑。　褐釉瓶		13	
ＳＫ122	略長方形土坑	近世	Ａ-3区、長さ0.66ｍ、幅0.56ｍ、深さ0.17ｍ、小型で浅い土坑、ＳＫ164を切る。　肥前系陶器、刷毛目碗、七輪			
ＳＫ123	楕円形土坑	近世	Ａ-3区、長径0.65ｍ以上、短径0.45ｍ以上、深さ0.28ｍ、ＳＫ164を切る小型の土坑。　肥前系陶磁器			
ＳＫ124	不定形土坑	近世	Ａ-4区、残存長1.24ｍ、残存幅1.28ｍ、深さ0.17ｍ、南側は柱穴状に深さ0.19ｍ窪む。遺構全体は西側未調査区へ広がる。　肥前系陶磁器			
ＳＫ125	方形土坑	近世	Ａ-4区、長さ0.91ｍ、幅0.85ｍ、深さ0.42ｍ。　陶器甕、軒平瓦、土師坏・皿			
ＳＫ126	長方形土坑	近世	Ｄ-1区、長さ2.10ｍ以上、幅1.14ｍ、深さ1.09ｍ、壁の立ち上がりのシャープな深い土坑、ＳＫ144を切る。北側未調査区へさらに広がる。　黒釉壺、肥前系磁器（碗・皿・坏・蓋物）、陶器（擂鉢・碗・甕・壺）、博多焜炉、火舎	6		
ＳＫ127	不定形土坑	15Ｃ	Ｄ-1・2区、長さ1.95ｍ、幅1.65ｍ、深さ0.33ｍ、中央部は段状に窪む。　備前擂鉢、土釜、瓦、土師坏・皿	6	3	
ＳＫ128	略方形土坑	15～16Ｃ	Ｄ・Ｅ-1・2区、長さ1.43ｍ、幅1.30ｍ、深さ0.41ｍ、中央部は段状に深くなる。　瓦質擂鉢、瓦質鉢、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ129	円形土坑	近世	Ｄ-2区、径0.99ｍ、深さ0.19ｍ。　擂鉢、明の青磁碗			
ＳＫ130	略方形土坑	15Ｃ	Ｄ・Ｅ-2区、長さ1.55ｍ、幅1.50ｍ、深さ0.38ｍ、底面は西側が深くなる。　スタンプ文火舎、瓦質鉢、土師坏			
ＳＥ131	円形瓦組井戸	近世	Ｃ・Ｄ-1・2区、掘方長径3.25ｍ、短径2.88ｍ、井側径0.8ｍ前後か、瓦組、枚数は不明、深さ3.34ｍ、ＳＥ138を切る。　肥前陶磁器、巴文軒丸瓦、天目、高麗青磁	7	8	9・13
ＳＫ132	不定形土坑	近世	Ｅ-1区、長さ1.41ｍ、幅0.96ｍ以上、北側は長さ1.00ｍ、幅0.55ｍ以上の部分がさらに深くなる。合わせた深さは0.41ｍ、半分は北側未調査区へ広がる。　近世軒平瓦、明青磁碗・皿、陶器壺、擂鉢、円筒埴輪			
ＳＫ133	円形土坑	—	Ｄ-1区、径0.9×0.95ｍ、深さ0.09ｍ、きわめて浅い土坑。			7
ＳＫ134	方形土坑？	16Ｃ	Ｅ-2区、長さ1.05ｍ以上、幅1.60ｍ、深さ0.74ｍ、礫が多数混入していた。ＳＫ135を切る。半分以上は東側未調査区へ広がる。　明染付碗、備前擂鉢、常滑甕、瓦質擂鉢	7		9
ＳＫ135	方形土坑？	—	Ｅ-2区、長さ0.6ｍ以上、幅0.84ｍ以上、礫が多くみられた。大部分は東側未調査区へ広がる。　土師皿片			
ＳＥ136	円形井戸	近世	Ｅ-2・3区、上径2.3ｍ以上、半分以上は東側未調査区に広がり、シートパイル崩壊の危険性があったので一部しか掘り下げていない。以下未掘。ＳＫ153を切る。　明染付、肥前系陶磁器、瓦			8
ＳＫ137	円形土坑	16Ｃ	Ｄ-2区、径1.15ｍ、深さ0.09ｍの浅い土坑、ＳＫ153を切る。　備前擂鉢・甕、瓦質火舎、土師坏			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＥ138	円形瓦組井戸	近世	Ｃ・Ｄ-2区、径3.10m、井側径0.8m、深さ4.04m、一段10枚の瓦組。　李朝青磁碗、肥前系磁器（碗・皿）、肥前系陶器（擂鉢　他）、備前擂鉢、七輪		45	
ＳＫ139	略楕円形土坑	近世	Ｂ-3区、長さ2.20m、幅1.60m、深さ1.26m、ＳＥ154を切る。　明染付、肥前系磁器、肥前系陶器、備前擂鉢			13
ＳＥ140	円形瓦組井戸	近世	Ｂ・Ｃ-2区、長径3.90m、短径2.92m、深さ4.43m、井側径0.65m、一段9枚の瓦組。　肥前系磁器、陶器、瓦器、瓦質擂鉢、明染付	7	9	13
ＳＫ141	円形土坑	近世	Ｄ-1区、径0.78m、深さ0.07mの小型で浅い土坑。北側は未調査区へ広がる。　肥前系陶磁器、片口鉢			
ＳＫ142	円形土坑	15～16Ｃ	Ｄ-1区、径0.75m、深さ0.23mの小型の土坑。ＳＫ143を切る。　明染付碗・青磁碗、土師皿			
ＳＫ143	略長方形土坑	15～16Ｃ	Ｄ-1区、長さ1.25m以上、幅0.80m、深さ0.13m。ＳＫ144を切る。　青磁皿			
ＳＫ144	略楕円形土坑	近世	Ｄ-1区、長径1.85m、短径1.50m以上、深さ0.38m、北側が一段深くなり、鉄滓、礫などが混入する。　肥前系陶器碗、備前擂鉢、瓦質鉢	6	4	
ＳＫ145	円形土坑	近世	Ｄ-3区、径1.18×1.04m、深さ0.58m。　肥前系磁器（碗・皿・鉢）、花瓶、赤絵ビン付油壺、備前擂鉢、褐釉甕			
ＳＫ146	不定形土坑	15Ｃ	Ｅ-1区、長さ1.42m以上、幅1.17m以上、深さ0.56m、大部分は未調査区へ広がる。　青磁雷文碗・端反碗、白磁高台付皿、褐釉陶器、天目			7
ＳＫ147	略楕円形土坑	15～16Ｃ	Ｄ・Ｅ-2区、長径2.08m、短径1.18m以上、深さ0.59m、南側が一段深くなる。一部試掘トレンチによって切られている。　明染付、中国陶器Ｃ群捏鉢、土師坏・皿、李朝青磁	7		
ＳＸ148	長方形石組遺構	近世	Ｄ・Ｅ-3区、内法は、長さ1.2m以上、幅0.4mで一段ないし二段の石積残存、東側はシートパイルで壊わされている。　肥前系磁器碗、七輪、李朝青磁	6	7	
ＳＫ149	長方形土坑	12Ｃ	Ｄ・Ｅ-3区、長さ1.32m、幅0.92m、深さ0.73m。　白磁碗Ⅴ・Ⅵ類、白磁皿、中国陶器Ｃ群捏鉢、土師器（糸・箆切）	6	4	
ＳＫ150	不定形土坑	近世	Ｄ-3区、長さ1.62m以上、幅1.20m、深さ0.31m、試掘トレンチによって東側部分が壊わされている。　肥前系磁器、肥前系陶器、在地系陶器、李朝青磁			
ＳＫ151	略方形土坑	16Ｃ	Ｄ-2区、長さ0.78m、幅0.56m以上、深さ0.57m小型で浅い土坑、東側部分は試掘トレンチで壊わされている。　明の青磁碗、染付碗、白磁、褐釉陶器			
ＳＫ152	略長方形土坑	16Ｃ	Ｂ-4区、長さ1.82m、幅1.35m以上、深さ2.18mの深い土坑、東側は建物基礎撹乱で壊されている。ＳＥ181に切られる。　明の染付碗、備前擂鉢、土師皿	6		
ＳＫ153	長方形土坑	近世	Ｅ-2区、長さ0.94m以上、幅0.59m、深さ0.28m、ＳＥ136に切られているので全長は不明。　肥前染付皿、高麗青磁	6		
ＳＥ154	円形瓦組井戸	近世	Ｂ-2・3区、掘方上径3.0m、井側径0.80m、深さ2.52m、井側は一段10枚の瓦組、下部だけ残存。　軒平瓦、備前擂鉢、肥前系磁器	9	30	
ＳＫ155	円形土坑	16Ｃ	Ｂ-1区、径1.28m、深さ0.52m、東側部分は建物基礎撹乱によって壊されている。　李朝陶器			
ＳＫ156	楕円形土坑	16Ｃ	Ｅ-4区、長径0.64m以上、短径0.76m、深さ0.39m、東側半分は未調査区へ広がる。　常滑甕、李朝陶器、土師皿			
ＳＫ157	円形土坑？	13Ｃ	Ｅ-4・5区、径1.50m以上、深さ0.73m、東側半分以上は未調査区へ広がる。　青白磁合子・皿、同安系青磁碗、龍泉系青磁碗、白磁、黄釉鉄絵盤			
ＳＫ158	略長方形土坑	近世	Ａ-2・3区、長さ1.07m以上、幅0.88m、深さ0.25m、ＳＥ114に切られている。　明の染付碗、肥前系陶磁器			
ＳＫ159	方形土坑？	近世	Ａ-2・3区、長さ2.10m、幅1.0m以上、部分的に階段状に深くなり、最も深いところが1.00m、西側部分は未調査区へ広がる。　肥前系陶磁器、二彩唐津、明の染付皿（呉須手）、擂鉢			8
ＳＫ160	楕円形土坑	—	Ｄ　・Ｅ-6区、長径1.20m、短径0.92m、深さ0.05m、浅い土坑で陸産亀の甲羅6個体分が出土。　褐釉陶器	6	5	
ＳＫ161	不定形土坑	—	Ｄ-6区、長さ1.14m、幅1.07m、深さ0.06m、浅い土坑で陸産亀の甲羅3個体分が出土。　褐釉陶器	6	5	
ＳＫ162	略円形土坑	近世？	Ｄ-6区、長径0.88m、短径0.78m、深さ0.08m、浅い土坑で陸産亀の甲羅3～4個体分が出土。	6	5	
ＳＫ163	円形土坑	—	Ｄ-6区、0.68×0.63m、深さ0.03m、非常に浅い土坑で陸産亀の甲羅2個体分が出土。	6	5	
ＳＫ164	略方形土坑？	近世	Ａ-3・4区、長さ1.22m以上、幅1.65m、深さ0.3m、西側部分は未調査区へ広がる。　明の染付碗、巴文瓦、肥前陶磁器			8
ＳＫ165	略長方形土坑	近世	Ａ・Ｂ-3区、残存長2.40m以上、残存幅1.0m以上、深さ0.33m、西側が一段深くなる。ＳＫ167を切る。　明の染付碗、唐津陶器			
ＳＫ166	略楕円形土坑	近世	Ａ-3区、長径2.78m以上、短径2.82m以上、深さ0.35m、ＳＥ114・ＳＫ158・ＳＫ159に切られており全体の様子は分からない。　備前擂鉢、唐津小碗、肥前系磁器、天目			
ＳＫ167	方形土坑	16Ｃ	Ｂ-3・4区、長さ1.7m、幅1.6m、深さ1.31m、方形の深い土坑である。西側に張り出し部分がある。　明染付碗、明白磁皿、天目碗、フイゴ羽口、鉄釘、李朝青磁	6	6	6・7・9
ＳＫ168	方形土坑？	14Ｃ	Ｅ-5区、長さ0.87m、幅0.66m以上、深さ0.60m、東側半分は未調査区へ広がる。　龍泉系青磁碗、同安系青磁碗、白磁、褐釉四耳壺、土師坏			
ＳＫ169	方形土坑	近世	Ａ-4区、長さ0.74m、幅0.78m、深さ0.18m、小型で浅い土坑。　瀬戸天目、肥前系磁器、天目			5
ＳＫ170	円形土坑	近世	Ａ-4区、径0.71×0.66m、深さ0.14m、小型で浅い土坑。ＳＫ171を切る。　肥前系磁器			
ＳＫ171	略方形土坑	—	Ａ-4区、長さ0.70m以上、幅0.62m、深さ0.10m、小型で浅い土坑、北側はさらに0.06m窪む。ＳＫ172を切る。　褐釉陶器			
ＳＫ172	長方形土坑	近世	Ａ-4区、長さ0.82m、幅0.61m、深さ0.15m、小型で浅い土坑。　土師小皿			
ＳＫ173	方形土坑？	16Ｃ	Ｅ-5・6区、長さ1.88m、幅1.32m、深さ0.24m、石組遺構の一部が残る。半分は東側未調査区へ広がる。　瓦器椀、白磁碗、明の青磁碗、高麗青磁、土師坏	6	6	
ＳＫ174	略方形土坑	13～14Ｃ	Ｅ-5区、長さ0.70m以上、幅0.73m、深さ0.65m、小型で深い土坑。　龍泉系蓮弁碗、黄釉陶器、石鍋、土鍋			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ175	円形土坑？	16Ｃ	Ｄ-3区、径1.4m以上、深さ0.32m以上、東側が一段深くなる。ＳＫ150・ＳＫ151・試掘トレンチに切られており全体の様子がはっきりしない。明の染付印花碗			
ＳＫ176	楕円形土坑	—	Ａ-4区、長径0.54m、短径0.48m、深さ0.6m、二段掘りになっており柱穴の可能性が高い。			
ＳＫ177	長方形土坑	15Ｃ	Ａ-3区、長さ1.30m、幅1.04m以上、深さ0.26m、ＳＫ165に切られている。龍泉系青磁碗Ⅲ、天目、土師坏・Ⅲ		7	7
ＳＤ178	溝	15～16Ｃ	Ｄ・Ｅ-5区、確認長5.40m、幅0.80m、深さ0.65m、断面「Ｕ」字形、建物の基礎攪乱によって一部壊されている。さらに東側に延びる。　龍泉系青磁碗、天目、土師坏・Ⅲ（糸切）、瓦			
ＳＫ179		—	ＳＥ226の井筒部分。			
ＳＥ180	円形瓦組井戸	近世	Ｃ・Ｄ-3区、掘方上径1.88×1.70m、井側径0.75m、深さ確認部分で0.58m、井側は一段11枚の瓦組、ＳＥ226を切る。　肥前系磁器（碗・Ⅲ）、陶器		9	
ＳＥ181	円形瓦組井戸	近世	Ｂ-4区、掘方径1.15m。　肥前系磁器、擂鉢		10	
ＳＫ182	円形土坑	14Ｃ	Ｅ-6区、径0.98m、深さ0.46m、半分以上は東側未調査区へ広がる。　土師坏			
ＳＫ183	円形土坑	—	Ａ・Ｂ-5区、径0.92×0.90m、深さ0.25m。			
ＳＫ184	略長方形土坑	近世	Ａ・Ｂ-5・6区、長さ1.18m以上、幅1.14m、深さ0.29m、遺構南側は未調査区へ広がる。　肥前磁器、土師坏・Ⅲ			
ＳＥ201	円形素掘井戸	近世	Ｂ・Ｃ-1区、上径3.60×3.50m、井筒径0.78×0.88m、深さ2.84m、材は残っていなかったが壁の立ち上がり具合から桶組井戸と考えられる。　肥前陶磁器、青磁碗・Ⅲ、白磁碗・平底Ⅲ、中国陶器	16	28	7•13•14
ＳＫ202	土坑	12～13Ｃ	Ｄ-1区、ＳＫ233の上にのっていた遺構、調査時に消滅。　龍泉青磁碗、同安青磁碗、白磁碗Ⅵ・Ⅸ類・Ⅲ、朝鮮系無釉陶器、黄釉盤、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ203	長方形土坑	13Ｃ後半～14Ｃ初	Ｃ-1区、長さ2.52m、幅1.0m、深さ0.85m、壁の立ち上がりがシャープな土坑で礫が天端まで充填されている。建物の基礎か、ＳＫ232を切る。　龍泉青磁碗Ⅱ類・平底Ⅲ、白磁碗Ⅳ類、瓦質鉢・擂鉢、土師坏・Ⅲ（糸切）	9	11	6
ＳＫ204	略円形土坑	13Ｃ後半～14Ｃ初	Ｃ-1区、長径1.10m、短径0.95m、深さ0.12m、浅い土坑。　龍泉青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類・平底Ⅲ、中国陶器、瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）	9	12	
ＳＥ205	円形瓦組井戸	近世	Ｃ・Ｄ-1区、掘方径0.96m、井側径0.64m、深さ1.06m、井側は一段10枚の瓦組。　肥前磁器、青磁碗、白磁碗	17		
ＳＫ206	楕円形土坑	—	Ｄ-1区、長径0.60m以上、短径0.68m、深さ0.19m、ＳＥ131に切られる。　土師片			
ＳＫ207	土坑	12～13Ｃ	Ｃ-2区、調査時に消滅。　龍泉青磁碗、同安青磁碗、白磁碗、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ208	長方形土坑？	16Ｃ	Ｃ-3区、長さ0.90m以上、幅1.06m、深さ0.66m、西側が段状に深くなる。ＳＥ154に切られる。　明染付碗、龍泉青磁碗Ⅴ類、白磁碗Ⅵ類、中国陶器準Ａ群壺、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＤ209	溝	15～16Ｃ	Ｂ・Ｃ-4区、長さ3.15m、幅1.01m、深さ0.65m、中央部が段状に深くなる。礫混入。ＳＤ319・ＳＤ320・ＳＤ251と一連のものであろう。　龍泉青磁碗・Ⅲ・盤、同安青磁碗、高麗青磁、白磁口禿Ⅲ、瓦、中国陶器		29	6•7
ＳＫ210	円形土坑	15Ｃ	Ｃ-4区、径1.80×1.70m、深さ1.22m、ＳＫ328・ＳＫ329を切る。　白磁碗Ⅳ・Ⅵ・Ⅺ類・平底Ⅲ、明赤絵、龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅴ類、同安青磁碗・Ⅲ、青磁盤、土師坏・Ⅲ（篦切）、李朝青磁	9	12	9
ＳＥ211	円形井戸	15Ｃ	Ｂ-5・6区、上径3.0m以上、シートパイル崩壊の危険性があったので未掘。　龍泉青磁碗・盤、同安青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・平底Ⅲ、黄釉盤、瓦器椀、瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ212	長方形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-5・6区、長さ2.30m、幅1.10m、深さ0.27m、墓壙の可能性がある。　龍泉青磁碗Ⅰ類・Ⅲ、同安青磁碗、白磁碗・Ⅲ、青白磁合子、褐釉陶器、瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）			6
ＳＫ213	楕円形土坑？	—	Ｃ-6区、長径1.20m以上、短径0.9m以上、深さ0.07m、一部分残存。　白磁輪禿碗、瓦			
ＳＫ214	長方形土坑	16Ｃ	Ｃ-5区、長さ1.30m、幅0.86m、深さ0.44m、南側は段状に浅くなる。　龍泉青磁碗Ⅰ類、天目碗、越州系青磁、白磁碗・Ⅲ、渥美焼大甕、備前壺、瓦		13	
ＳＫ215	略長方形土坑	—	Ｂ-5区、長さ1.18m、幅0.62m、深さ0.42m。　白磁碗、同安青磁碗片			
ＳＫ216	楕円形土坑？	12～13Ｃ	Ｂ-5区、長径0.62m以上、短径1.02m、深さ0.34m、北側は段落ちで未確認。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同安青磁碗、白磁碗・Ⅲ、青白磁水注、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ217	楕円形土坑	14Ｃ	Ｂ-6区、長径0.86m、短径0.44m、深さ0.22m、小型で土坑かどうかはっきりしない。ＳＫ219を切る。　白磁輪禿碗、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ218	長方形土坑	12Ｃ後半	Ｂ-6区、長さ0.8m、幅0.66m、深さ0.19m、ＳＫ219を切る。　龍泉青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅵ類・Ⅲ、黄釉盤、捏鉢、土師坏・Ⅲ（糸切）	9		6
ＳＫ219	長方形土坑？	14Ｃ	Ｂ-6区、長さ1.0m以上、幅0.85m、深さ0.28m、南側は未確認。　龍泉青磁碗、同安青磁碗、白磁碗Ⅶ類・口禿Ⅲ、土師坏・Ⅲ（糸切）	9		
ＳＫ220	略楕円形土坑	—	Ｃ-5区、長径0.82m、短径0.58m、深さ0.32m、攪乱で削平されており一部しか残っていない。　同安青磁碗、白磁碗・Ⅲ、土師坏片			
ＳＫ221	方形石組土坑	近世	Ａ-1区、残存長1.80m、残存幅2.05m、深さ0.94m、石積が2～3段残る。大部分は未調査区へ広がる。　肥前系青磁鉢、白磁、香炉、刷毛目Ⅲ、花瓶、擂鉢、小Ⅲ、刷毛目碗、大甕、黄釉Ⅲ、肥前系磁器、土師Ⅲ（糸切）	9	14	14
ＳＫ222	長方形土坑	近世	Ａ・Ｂ-1区、長さ2.30m、幅1.80m、深さ0.47m、北側は未調査区へ広がる。　明の白磁Ⅲ、瓦質擂鉢、肥前陶磁器、土師坏・Ⅲ（糸切）	9	14	6
ＳＫ223	方形土坑？	近世	Ａ-1区、長さ1.34m、幅0.70m以上、深さ0.16m、ＳＫ224に切られる。肥前系磁器（碗・Ⅲ）			
ＳＫ224	方形土坑？	近世	Ａ-1区、長さ1.22m以上、幅0.56m以上、深さ0.54m、大部分は西側未調査区へ広がる。　肥前陶磁器、白磁平底Ⅲ、土師Ⅲ（糸切）			
ＳＥ225	円怪瓦組井戸	近世	Ａ・Ｂ-2区、掘方上面径3.70m、井側径0.78m、深さ2.24mまで確認、井側は一段10枚の瓦組、ただし半分しか残っていない。ＳＫ255を切る。　肥前陶磁器、明染付Ⅲ	16	28	6•9•10•13•14
ＳＥ226	円形素掘井戸	近世	Ｃ・Ｄ-2・3区、掘方上面径5.20×4.70m、井筒径0.85m、深さ2.58m壁の立ち上がりからもともと桶組井戸であったと考えられる。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、白磁碗・Ⅲ、瓦質片口、肥前陶磁器、明白磁Ⅲ、明染付Ⅲ、瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）	17	29	5•6•7•9•12•13
ＳＸ227	配石土坑	14Ｃ	Ｂ-1区、長径1.37m、短径1.11m、中央に0.65m略方形、厚さ0.41mの大石を据え、12～13ｃｍ前後の礫がとりまく。ＳＫ229を切る。　龍泉青磁碗Ⅱ類、白磁碗、土師坏（糸切）	16	25	

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＸ228	配石遺構	14Ｃ	Ｂ-2区、長さ0.90ｍ、幅0.60ｍ範囲内に5～15ｃｍ大の礫が分布。　褐釉陶器、白磁口禿皿、青磁碗、土師坏・皿		27	
ＳＫ229	長楕円形土坑	14Ｃ前半	Ａ・Ｂ-1・2区、長径3.98ｍ、短径1.30ｍ以上、深さ0.39ｍ、ＳＥ201に切られ、ＳＫ230を切っている。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類・皿、白磁碗・皿、中国陶器準Ａ群四耳壺		15	11
ＳＫ230	楕円形土坑	13Ｃ後半	Ｂ-2区、長径3.24ｍ、短径2.37ｍ、深さ0.36ｍＳＥ140に切られる。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、白磁碗Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸ類・平底皿・壺、黄釉盤、捏鉢、瓦器椀、土師坏（糸切）	9		
ＳＫ231	長方形土坑？	14Ｃ	Ｃ-1区、長さ2.35ｍ以上、幅0.84ｍ以上、深さ0.92ｍ、ＳＥ205・ＳＫ233に切られ、大部分は北側未調査区へ広がる。　龍泉青磁碗・皿、白磁碗・皿・口禿皿・壺、常滑甕、瓦、土師坏・皿（糸切）	12		6•14
ＳＫ232	略円形土坑	13Ｃ後半	Ｃ-1区、径1.10ｍ、深さ0.17ｍ、ＳＫ203に切られ、ＳＫ235を切る。土師器がまとまって出土している。　青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類・皿、須恵器甕、瓦、土師坏・皿（糸切）	12	16	
ＳＫ233	略円形土坑	13Ｃ前半	Ｃ・Ｄ-1区、径1.05ｍ以上、深さ0.24ｍ、ＳＫ126・ＳＥ205に切られ、北側は未調査区へ広がっている。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗、白磁碗Ⅺ類・皿、朝鮮系無釉陶器、黄釉盤、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ234	略楕円形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-1・2区、長径1.0ｍ、短径0.69ｍ、深さ0.33ｍ、ＳＫ334を切る。　龍泉青磁皿、同安青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類、黄釉盤、土師坏・皿（糸・篦切）			
ＳＫ235	不定形土坑	12Ｃ	Ｃ-1区、長さ1.34ｍ以上、幅1.20ｍ、深さ0.44ｍ、ＳＫ232に切られ、北側は未調査区へ延びる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅺ類・平底皿、黄釉盤、瓦器椀、土師高台付碗、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ236	長楕円形土坑	—	Ｃ・Ｄ-1区、長径1.02ｍ以上、短径0.55ｍ、深さ0.10ｍ、ＳＥ131に切られる。　龍泉青磁盤、白磁片			
ＳＤ237	溝	14～15Ｃ	Ｄ-1・2区、長さ2.42ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.43ｍ、礫混入、ＳＤ238・ＳＰ228も関連するものと考えられる。　龍泉青磁碗Ⅱ類、白磁碗・皿、褐釉陶器、天目碗、緑釉盤、瀬戸おろし皿、瓦、土師坏		31	
ＳＤ238	溝	14Ｃ	Ｄ-2区、長さ1.20ｍ、幅0.42ｍ、深さ0.54ｍ、礫混入、ＳＥ138に切られる。　白磁碗Ⅵ類・口禿皿、褐釉陶器、土師坏			
ＳＫ239	楕円形土坑	15Ｃ	Ｄ-1区、長径1.30ｍ、短径1.03ｍ、深さ0.28ｍ、北側が一段深くなり礫が詰まる。ＳＫ244を切る。　龍泉青磁碗、備前擂鉢、土釜	12	16	
ＳＫ240	略長方形土坑	15Ｃ	Ｄ-1区、長さ1.07ｍ、幅0.70ｍ、深さ0.22ｍ、ＳＫ242を切る。　龍泉青磁碗、白磁碗、瓦質擂鉢・捏鉢、巴文軒丸瓦、土師皿（糸切）		16	
ＳＫ241	楕円形土坑	14Ｃ	Ｄ-1区、長径1.08ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.13ｍの浅い土坑、ＳＫ242を切る。　龍泉青磁碗、白磁碗Ⅳ類、土師坏（糸切）		16	
ＳＫ242	長楕円形土坑	12Ｃ後半	Ｄ-1区、長径2.68ｍ以上、短径0.90ｍ以上、深さ0.83ｍ、ＳＫ240・ＳＫ241・ＳＫ244に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿・平底皿・壺、龍泉青磁碗・皿、同安青磁碗Ⅱ類・皿、黄釉盤、中国陶器Ｃ群捏鉢・平鉢、朝鮮系無釉陶器、瓦器椀、瓦、土師坏・皿（糸切）	12	16	
ＳＫ243	略方形土坑？	13Ｃ	Ｅ-1区、長さ1.20ｍ以上、幅1.04ｍ以上、深さ0.33ｍ、ＳＫ241・ＳＫ242に切られ、北側は未調査区に広がるので全体の様子は分からない。　龍泉青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅵ・Ⅸ類・高台付皿・平底皿・口禿皿・壺、青磁碗、黄釉盤、瓦、土師坏・皿（糸切）	12		
ＳＫ244	楕円形土坑	13Ｃ前半	Ｄ-1区、長径1.25ｍ、短径1.02ｍ、深さ0.39ｍ、ＳＫ239に切られている。　龍泉青磁碗・皿、同安青磁碗、白磁碗Ⅳ類、黄釉盤、褐釉陶器、土師坏・皿（糸切）		16	5•6
ＳＫ245	略楕円形土坑	13Ｃ後半	Ｄ-1・2区、長径1.53ｍ、短径1.04ｍ、深さ0.22ｍ、ＳＫ246を切る。　龍泉青磁碗・皿、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類・平底皿、青白磁、四耳壺、須恵質擂鉢・鉢、土師坏・皿（糸切）	12	17	
ＳＫ246	略長方形土坑	14Ｃ後半	Ｄ・Ｅ-1・2区、長さ2.30ｍ、幅2.20ｍ、深さ0.51ｍ、ＳＫ260・ＳＫ261を切る。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類・平底皿、同安青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類、青白磁、褐釉陶器、黄釉盤、中国陶器、土師坏・皿（糸切）	12	17	
ＳＫ247	略方形土坑？	12Ｃ	Ｅ-2区、長さ1.30ｍ以上、幅1.58ｍ以上、深さ0.32ｍ、ＳＫ261に切られ、一部は東側未調査区へ広がる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・平底皿、瓦器椀、土師坏・皿（糸・篦切）	12		14
ＳＫ248	略長方形土坑	13Ｃ	Ｃ-3・4区、長さ1.54ｍ以上、幅0.82ｍ以上、深さ0.44ｍ・ＳＥ180に切られ、調査中に東側部分が崩壊した。龍泉青磁碗、白磁碗Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ類・平底皿、中国陶器Ｃ群捏鉢、備前擂鉢、瓦質擂鉢、土師坏・皿（糸・篦切）			13
ＳＫ249	略方形土坑	12Ｃ	Ｃ-4区、長さ0.90ｍ以上、幅0.91ｍ、深さ0.19ｍ、配石ＳＤ251を切り、ＳＫ250に切られる。　龍泉青磁碗、同安青磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・皿、中国陶器Ｂ群壺・平鉢、土師坏・皿（糸切）		17	13
ＳＫ250	円形土坑	12Ｃ後半～13Ｃ	Ｃ-4区、径0.80ｍ、深さ0.84ｍ、北側が深くなり完形の無頸壺が埋置された様な状態で出土。　龍泉青磁碗・皿・Ⅰ類皿（魚文）、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・水注、黄釉盤、中国陶器Ｃ群Ｙ字型口縁甕、朝鮮系無釉陶器・土師坏・皿（糸切）	12	15	
ＳＤ251	溝	—	Ｃ-4区、幅0.65ｍ以上、長さ0.80ｍ以上、深さ0.27ｍ以上、ＳＫ249に切られ、東側は攪乱で破壊されているので全体は分からない。　龍泉青磁碗、同安青磁碗、土師皿（糸切）			
ＳＫ252	楕円形土坑？	13～14Ｃ	Ｅ-6区、長径2.30ｍ以上、短径1.0ｍ以上、深さ0.77ｍ、礫が多量に配されている。一部未調査区へ広がる。ＳＫ253を切る。　龍泉青磁碗・皿・鉢、同安青磁碗・皿、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ類・皿・壺、中国陶器準Ａ群壺、常滑甕、瓦質擂鉢・火舎、瓦、土師坏・皿（糸切）	12	18	4•7
ＳＫ253	略円形土坑？	14Ｃ	Ｄ・Ｅ-6区、径2.90ｍ、深さ1.03ｍ、南側に大きな礫を配する。ＳＫ252に切られ、ＳＫ295を切る。　龍泉青磁碗Ⅰ類・平底皿、同安青磁碗・皿、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・口禿皿、磁州窯盤、中国陶器Ａ群、Ｃ群大甕・捏鉢、黄釉盤、黒褐釉小口瓶、備前擂鉢、瓦、土師坏（糸切）	12	19	6
ＳＫ254	略方形土坑	14Ｃ	Ｅ-2区、長さ0.80ｍ、幅0.75ｍ、深さ0.41ｍ、ＳＫ268を切る。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、白磁碗Ⅲ類・平底皿・口禿皿、中国陶器、瓦質捏鉢、土師坏・皿			
ＳＫ255	円形土坑？	15～16Ｃ	Ｂ-2区、推定径3.0ｍ前後の大型の土坑と考えられるが、ＳＥ140・ＳＥ225・ＳＫ230に切られ全体は不明。深さ0.82ｍ。　龍泉青磁碗、青磁皿（双魚文）、明白磁皿・赤絵、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類、中国陶器、瓦、土師坏・皿（糸切）			4•13
ＳＫ256	楕円形土坑	近世？	Ｂ-2区、長径1.75ｍ、短径1.0ｍ以上、深さ0.35ｍ、ＳＥ154に切られる。　同安青磁碗、白磁碗Ⅳ類、肥前系陶器皿	12		10
ＳＥ257	円形井戸	近世	Ａ-3区、径1.05ｍ、1.15ｍ下げたがシートパイル際で危険なため掘り下げ断念。　肥前系磁器皿、明染付皿、七輪、高取焼	17		5
ＳＫ258	不定形土坑	近世？	Ａ-3区、長さ1.68ｍ以上、幅1.86ｍ以上、深さ0.23ｍ、ＳＥ114・ＳＥ257に切られ、半分以上は西側未調査区へ広がる。　同安青磁皿、白磁碗Ⅳ・Ⅵ類、青白磁皿、肥前系青磁染付碗蓋、土師皿（糸切）			
ＳＥ259	円形井戸	13Ｃ	Ｂ・Ｃ-1区、直径2.0ｍ前後、深さ0.73ｍまで掘り下げたが壁際なので以下未掘。　褐釉壺、須恵器皿、瓦器椀、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ260	略方形土坑？	12～13Ｃ	Ｅ-1区、長さ3.20ｍ以上、幅2.0ｍ以上、深さ1.0ｍ、大型で大部分は未調査区へ広がり、全体の様子は分からない。　龍泉青磁碗・皿、同安青磁碗、越州窯系青磁碗、白磁碗Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅸ類・高台付皿・壺、黄釉盤、黒釉壺、中国陶器Ａ群褐釉壺、Ｃ群捏鉢、瓦器椀、瓦、土師坏・皿（糸切）	15	19	6•13
ＳＫ261	略長方形土坑？	12Ｃ	Ｅ-1・2区、長さ1.15ｍ以上、幅0.90ｍ、深さ0.71ｍ、西側がやや深くなる。　中国陶器Ａ群無釉壺、瓦器椀、土鍋、須恵質鉢、瓦、土師器高台付椀、土師坏・皿（糸・篦切）			
ＳＫ262	楕円形土坑	12Ｃ	Ｅ-2区、長径1.20ｍ以上、短径0.70ｍ、深さ0.29ｍ、礫を配する。一部未調査区へ広がる。　白磁輪禿碗Ⅸ類、土師坏・皿（糸・篦切）	15		14
ＳＫ263	略楕円形土坑？	13Ｃ後半	Ｄ・Ｅ-2区、長径1.70ｍ以上、短径1.20ｍ以上、深さ0.62ｍ、ＳＥ271に切られる。　龍泉青磁碗Ⅱ・Ⅲ類・小鉢、同安青磁碗、黄釉盤、褐釉陶器（壺・甕）、土師坏・皿（糸切）			4
ＳＫ264	円形土坑	12～13Ｃ	Ｅ-2区、径0.75ｍ、深さ0.64ｍ、小型の土坑、ＳＫ263に切られる。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗・皿、黄釉盤、褐釉壺、土師坏・皿（糸切）			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ265	楕円形土坑？	12Ｃ後半	Ｄ・Ｅ-2区、長径1.70m、短径1.40m以上、深さ1.06m、南側が径1.40ｍで円形を呈し深くなる。ＳＫ264に切られる。　須恵器、白磁割花文Ⅲ・碗Ⅱ・Ⅳ類、中国陶器	15		
ＳＫ266	円形土坑	13Ｃ後半	Ｄ-2区、径0.86×0.90m、深さ0.46m、ＳＫ267を切る。　龍泉青磁Ⅲ類、土師器坏・Ⅲ（糸切）	12	20	
ＳＫ267	楕円形土坑？	—	Ｄ-2区、ＳＫ266に切られ一部分しか検出していない。　捏鉢、土師器小片			
ＳＫ268	楕円形土坑？	12Ｃ	Ｄ・Ｅ-2区、長径1.40m以上、短径0.85m、深さ0.69m、ＳＫ254・ＳＫ267に切られる。　高麗青磁碗、白磁小片、須恵器、土師坏・Ⅲ			
ＳＫ269	略方形土坑	13Ｃ	Ｄ-2区、長さ0.72m、幅0.62m、深さ0.46m、小型の土坑。　龍泉青磁Ⅱ類、白磁口禿Ⅲ、土師坏・Ⅲ	15		
ＳＫ270	土坑	—	Ｅ-2区、一部分しか検出していない。　龍泉青磁、白磁碗Ⅱ類、瓦器椀、土師坏・Ⅲ			
ＳＥ271	円形井戸	近世	Ｅ-2・3区、掘方上面径3.0m以上、深さ1.06mまで掘り下げたが、壁際なので以下未掘。　銅銭片、青磁、龍泉青磁Ⅲ類、古墳時代の土師器破片、近世陶磁器			
ＳＫ272	略円形土坑	12Ｃ	Ｄ-2区、径0.90×0.82m、深さ0.3m、小型の土坑。　白磁片、中国陶器片、るつぼ、瓦器椀、土師坏・Ⅲ（糸切）		20	
ＳＫ273	方形土坑？	—	Ｄ-2区、遺構の切り合いで一部分しか検出していない。　土師器破片	19		
ＳＫ274	円形土坑？	—	Ｄ-3区、径0.98m以上、深さ0.23m、大部分は試掘トレンチで壊されている。　土師片			
ＳＫ275	略方形土坑？	—	Ｄ-3区、長さ0.84m、深さ0.24m、中央部に径35ｃｍの礫を配する。　龍泉青磁Ⅱ類、肥前系白磁			
ＳＫ276	楕円形土坑？	12Ｃ終	Ｄ-3区、長さ1.20m以上、幅0.70m以上、深さ0.80m、中央部に礫を配する。ＳＫ275に切られる。　連江窯青磁、龍泉青磁Ⅰ類	15		
ＳＫ277	楕円形土坑	12Ｃ終	Ｄ-3区、長径1.08m以上、短径0.72m、深さ0.41m、北側が一段深くなる。南側は試掘トレンチで切られている。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗、土師器坏・Ⅲ		21	
ＳＫ278	略方形土坑	—	Ｄ-3区、長さ0.64m、幅0.60m、深さ0.26m、坑内に礫を配する。　瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）		21	
ＳＫ279	楕円形土坑	17Ｃ	Ｄ・Ｅ-3区、長径1.25m以上、短径0.70m、深さ0.21m、北側は攪乱で切られている。礫が詰まる。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁、明白磁、土師坏（糸切）	15	21	
ＳＫ280	楕円形土坑	15Ｃ？	Ｄ・Ｅ-3区、長径2.32m、短径1.0m以上、深さ0.75m、南側は建物の基礎攪乱で壊されている。　白磁Ⅰ類、龍泉青磁Ⅰ類、青磁、備前Ⅳ期大甕、常滑Ｎ字型口縁甕	15		
ＳＫ281	略長方形土坑	—	Ｄ-3区、長さ0.57m、幅0.45m、深さ0.22m、小型の土坑。　土師器Ⅲ			
ＳＫ282	円形土坑？	—	Ｄ-3区、径0.72m、深さ0.21m、ＳＫ281・ＳＫ283に切られている。　白磁小片、瓦器椀小片、江頭窯青磁碗			
ＳＫ283	不定形土坑	15Ｃ	Ｄ-3区、長さ0.92m、幅0.9m、深さ0.27m、礫を配する。　明の青磁、瓦、土師器坏・Ⅲ	15		
ＳＫ284	円形土坑？	近世	Ｅ-4区、径1.0m以上、深さ0.58m、大部分は東側調査区外へ広がる。大型の土坑であろう。　明染付、近世陶器壺、白磁、土師坏・Ⅲ（糸切）			12
ＳＫ285	楕円形土坑？	12Ｃ	Ｅ-4区、長径0.9m以上、短径1.90m、深さ0.51m、西側は攪乱で壊され、東側は未調査区へ広がる。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗、越州青磁、中国陶器、瓦器椀、瓦、土師器坏・Ⅲ		22	
ＳＫ286	楕円形土坑	12Ｃ	Ｅ-4区、長径1.28m、短径0.94m、深さ0.48m、ＳＫ285の下で確認、西側は建物の基礎攪乱で削平されている。　白磁Ⅶ類、瓦、土師器坏・Ⅲ（篦切）		22	
ＳＫ287	長方形土坑？	—	Ｅ-4・5区、長さ2.26m以上、幅1.20m以上、深さ0.31m、大部分は東側未調査区へ広がる。　白磁Ⅱ・Ⅴ類、鉄絵盤、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ288	略円形土坑？	—	Ｅ-5区、一部分のみ検出、ＳＫ174・ＳＫ289に切られ、東側未調査区へ広がる。　青磁、古墳時代の土師器片、土師器坏・Ⅲ			
ＳＫ289	方形土坑？	12Ｃ？	Ｅ-5区、長さ1.0m以上、幅0.4m以上、深さ0.26m、ＳＫ174・ＳＫ168に切られる。　白磁、高麗青磁、須恵器、中国陶器、瓦器椀、土師坏・Ⅲ（篦切）			
ＳＫ290	楕円形土坑	—	Ｅ-5区、長径0.71m、短径0.57m、深さ0.22m、小型の土坑。　龍泉青磁Ⅲ、土師器坏・Ⅲ			
ＳＫ291	不明	—	Ｅ-5区、一部分のみ検出、ＳＫ168に切られる。　白磁Ⅱ・Ⅴ類、土師坏・Ⅲ（糸・篦切）			
ＳＫ292	円形土坑	13Ｃ	Ｄ・Ｅ-5区、径1.22×1.05m、深さ0.78m、ＳＤ178に切られる。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗・Ⅲ、白磁、瓦器椀、土師坏・Ⅲ（糸切）	15	22	12・13
ＳＫ293	円形土坑	—	Ｄ-5・6区、径0.83×0.72m、深さ0.27m、小型の土坑。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁Ⅲ、瓦質擂鉢、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ294	略楕円形土坑	—	Ｄ-5区、長径0.92m、短径0.62m、深さ0.24m小型の土坑。　磁器、土師小破片			
ＳＫ295	円形土坑？	14Ｃ	Ｄ-6区、径2.0m以上、深さ1.06m、ＳＫ253に切られ南側は未調査区へ広がる。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁、陶板、土師坏・Ⅲ（糸切）		23	
ＳＫ296	略楕円形土坑	—	Ｄ-6区、長径0.72m、短径0.40m、深さ0.35m、小型の土坑。　陶磁器小破片、中国陶器捏鉢、瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ297	不定形土坑	13Ｃ中以降	Ｃ・Ｄ-5・6区、長さ3.40m以上、幅2.20m以上、深さ0.62m、土坑ではなく溝状遺構の一部かもしれない。　龍泉青磁Ⅱ類、白磁口禿Ⅲ、中国陶器、須恵器、瓦、土師器坏・Ⅲ（糸切）			
ＳＫ298	楕円形土坑	—	Ｃ・Ｄ-6区、長径1.78m、短径1.0m以上、西側は攪乱で壊されている。　龍泉青磁Ⅰ類、常滑小片、軒平瓦、土師坏・Ⅲ（糸切）			6
ＳＫ299	円形土坑？	13Ｃ中以降	Ａ-3区、径1.30m以上、深さ0.17m、北側が一段深くなる。半分以上は西側未調査区へ広がる。　龍泉青磁Ⅱ・Ⅲ類、白磁四耳壺、黄釉鉄絵盤、土師坏・Ⅲ（篦切）			
ＳＫ300	円形土坑	12Ｃ	Ａ-3区、径1.06×1.04m、深さ0.26m、ＳＫ301・ＳＫ324を切る。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗、白磁、中国陶器片、瓦器椀		24	
ＳＫ301	略方形土坑	近世	Ａ-3・4区、長さ0.80m、幅0.70m、深さ0.16m、小型の土坑。　土師器、磁器小破片　肥前系陶磁器			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ302	円形土坑	13Ｃ	Ａ-3・4区、径0.90m、攪乱の一部か。　同安青磁碗、瓦、土師小片（糸切）			
ＳＫ303	長方形土坑	15Ｃ	Ａ-4区、長さ2.42m以上、幅1.04m、深さ0.36m、礫混入。ＳＫ304を切る。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、元青磁、白磁、温斗山壺、中国陶器、瓦、土師坏・皿（糸切）	16		
ＳＫ304	長方形土坑	—	Ａ-4区、長さ1.68m、幅1.26m、深さ0.80m、西側は段状に深くなる。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗、明染付、肥前系陶磁器、中国陶器、土師坏・皿（糸切）	15	23	
ＳＫ305	円形土坑	13Ｃ	Ａ-4区、径0.67m以上、攪乱の一部か。　龍泉青磁碗			
ＳＫ306	略長方形土坑？	13Ｃ	Ｂ-4区、長さ1.60m以上、幅1.10m、深さ0.43m、南側が部分的に深くなる。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、白磁、土師坏・皿（糸切）	15		
ＳＫ307	略円形土坑	13Ｃ	Ａ・Ｂ-4区、径1.23×1.08m、深さ0.62m、ＳＫ306に切られる。　龍泉青磁Ⅲ類？、土師坏・皿（糸切）	16		
ＳＫ308	楕円形土坑	15Ｃ	Ｂ-4・5区、長径0.96m、短径0.62m、深さ0.37m、小型の土坑。　李朝粉青砂器、中国陶器、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ309	不定形土坑	—	Ｂ-4区、長さ1.95m、幅1.30m以上、深さ1.00m、ＳＫ152に切られる。　明青磁、龍泉青磁碗、白磁小壺蓋、瓦、土師坏・皿（糸切）	15		
ＳＫ310	長方形土坑	近世	Ｂ-3区、長さ1.25m、幅0.68m、深さ0.79m、ＳＥ113に切られる。　肥前染付、唐津？、肥前陶磁器	15		
ＳＫ311	略円形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-2区、径0.96×0.80m、深さ0.75m、ＳＫ312・ＳＫ331を切る。小型の土坑。　連江窯青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿・大鉢、中国陶器、土師器坏・皿（糸切）			
ＳＫ312	略方形土坑	—	Ｃ-2区、長さ0.76m、幅0.65m、深さ0.13m、小型で浅い土坑。　白磁Ⅳ・Ⅴ類、須恵器小片、土師小片			
ＳＫ313	楕円形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-2区、長径1.32m、短径0.90m前後か、深さ0.95m、中央部が段状に深くなる。ＳＫ334を切る。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、青白磁皿、中国陶器、瓦器椀、瓦、土師坏・皿（糸切）	15		
ＳＫ314	楕円形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-2区、径0.78×0.63m、深さ0.71m、小型の土坑。　龍泉青磁、白磁Ⅵ・Ⅶ類、黄釉盤、壺、捏鉢、中国陶器準Ａ群、須恵器、瓦、土師器坏・皿（糸切）			
ＳＫ315	略方形土坑	—	Ｃ-2区、長さ0.68m、幅0.62m、深さ0.35m、ＳＫ333を切る。小型の土坑。　白磁碗Ⅵ類、中国陶器、土師器坏・皿（糸切）	15		
ＳＫ316	略方形土坑	—	Ｃ-2区、長さ幅共0.67m、深さ0.29m、ＳＫ317を切る小型の土坑。　土師器小片、白磁小片	15		6
ＳＫ317	円形土坑	12Ｃ	Ｃ-2区、径0.84m、深さ0.33m、ＳＫ316に切られる。小型の土坑。　龍泉青磁碗、白磁平底皿、丸瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＸ318	略方形土坑	—	Ｃ-2区、長さ1.20m、幅1.15m以上、深さ0.20m、礫を密に敷き詰めている。ＳＥ138に切られる。　白磁小片、土師器小片	16	26	
ＳＤ319	溝	—	Ａ-4区、長さ3.19m以上、幅0.50m、深さ0.61m、底面が部分的に深くなるところがある。礫混入。　白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類、小碗、高麗陶器、中国陶器、土師質土器、土師坏・皿（糸切）		30	7
ＳＤ320	溝	12Ｃ	Ｂ-4区、長さ2.95m以上、幅0.40m、深さ0.47m、底面が部分的に深くなるところがある。礫混入。ＳＤ209・ＳＤ251・ＳＤ319と一連のものであろう。　同安青磁碗、白磁碗Ⅴ類、中国陶器、瓦、須恵器、土師器		31	
ＳＫ321	円形土坑？	15Ｃ	Ｂ-4区、一部分のみ確認ＳＫ152・ＳＥ181・ＳＫ309に切られている。　龍泉青磁盤、青磁、青白磁合子、褐釉擂鉢、瓦質火舎、人形、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ322	略方形土坑	—	Ａ・Ｂ-3・4区、長さ0.95m、幅0.94m、深さ0.12m、小型で浅い土坑。　瓦器椀、土師坏・皿			
ＳＫ323	長楕円形土坑？	13Ｃ	Ａ・Ｂ-3区、長さ2.20m以上、幅0.85m、深さ0.55m、ＳＥ113・ＳＫ322に切られる。　白磁Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ類・口禿皿、龍泉青磁Ⅲ類、高麗青磁、中国陶器捏鉢・盤、土師坏・皿（糸切）		24	
ＳＫ324	略長方形土坑	13Ｃ	Ａ-3区、長さ2.10m、幅1.45m、深さ0.61m、坑底に礫を配する。ＳＫ300・ＳＫ323に切られる。　龍泉青磁椀Ⅰ類、同安青磁皿、白磁口禿皿、黄釉陶器、日本製陶器、	16	24	
ＳＥ325	円形素掘井戸	—	Ｂ・Ｃ-2・3区、上径5.50m、井筒径1.05m、深さ3.40m、東側は階方が階段状に浅くなる。もともとは瓦組井戸か。ＳＥ154に切られている。　越州窯青磁水注・龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類（碗・皿）、同安青磁、高麗・李朝青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類・口禿皿・平底皿・壺・割花文瓶、緑釉陶器、磁炻窯水注、天目碗、古瀬戸香炉、常滑、土師坏・皿（糸切）	29	30	4・6・13
ＳＫ326	長楕円形土坑	15Ｃ	Ｃ-3・4区、長さ3.22m、幅1.06m、深さ0.71m、ＳＫ249・ＳＤ251に切られる。　龍泉青磁碗Ⅱ類、同安青磁碗、高麗青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅴ・Ⅶ類・皿・口禿皿、青白磁合子、中国陶器黄釉盤・捏鉢・Ｂ群、李朝系陶器、国産陶器、須恵器甕	16	24	
ＳＫ327	円形土坑	—	Ｃ-4区、径0.78m、深さ0.31m礫を配する。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁、白磁碗Ⅱ類、中国陶器行平、瓦質香炉、須恵器、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ328	略円形土坑	12Ｃ以降	Ｃ-4区、径2.33m、深さ0.43m、ＳＫ210に切られている。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗、高麗青磁、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・口禿碗・四耳壺、青白磁、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ329	略方形土坑？	—	Ｃ-4区、長さ0.86m以上、幅0.80m、深さ0.11m、浅い土坑でＳＫ210に切られている。　龍泉青磁、白磁Ⅵ類、瓦、土師坏・皿			
ＳＫ330	楕円怪土坑	—	Ｃ-1区、長径0.72m、短径0.50m、深さ0.22m、小型の土坑。　同安青磁、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、黄釉盤、中国陶器準Ａ群、瓦器椀			6・12
ＳＫ331	楕円形土坑	12Ｃ	Ｃ-1・2区、長径1.17m以上、短径1.06m、深さ0.49m、ＳＫ311に切られている。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・平底皿、捏鉢、黄釉盤、瓦器椀（搬入）、土師器高台付碗、土師坏・皿（糸・篦切）			11
ＳＫ332	略円形土坑	12Ｃ	Ｂ・Ｃ-1区、径2.52m、深さ0.93m、南側が段状に深くなる。ＳＥ201に切られている。　同安青磁碗・皿、高麗青磁、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅺ類・平底皿、中国陶器Ｂ群四耳壺、須恵器高台付碗・皿、土師坏・皿（糸切）		25	
ＳＫ333	楕円形土坑	12Ｃ	Ｃ-2区、長径2.10m、短径0.75m、深さ0.37m、ＳＥ140・ＳＫ315に切られている。　越州窯青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ類・平底皿・高台付皿、黄釉盤、石鍋、土師坏・皿（糸切）	16		14
ＳＫ334	楕円形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-2区、長径2.23m、短径1.0m以上、深さ1.18m、ＳＥ131・ＳＥ138・ＳＫ234・ＳＫ313に切られている。　龍泉青磁碗Ⅰ類・皿・大鉢、同安青磁碗・皿、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類・皿・水注、中国陶器準Ａ群、黄釉盤・皿、天目碗、磁炻窯小口瓶、瓦器椀、鑵、丸瓦、土師坏・皿（糸切）			14
ＳＫ335	楕円形土坑	—	Ｃ-2区、長径0.88m、短径0.56m、深さ0.35m、小型の土坑。　白磁Ⅳ・Ⅴ類・小壺、瓦器椀、陶器、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ336	楕円形土坑	11Ｃ後半～12Ｃ	Ｃ-2区、長径0.60m、短径0.50m、深さ0.56m、小型の土坑。　龍泉青磁碗Ⅲ類、同安青磁皿、白磁碗Ⅴ・Ⅵ類、瓦、土師坏・皿（糸切）	15		4・5・6s
ＳＫ337	楕円形土坑	—	Ｃ-2区、長径1.12m、短径0.70m以上、深さ0.26m、ＳＸ318に切られている。　白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・四耳壺、瓦器椀、土師器（糸切）			
ＳＫ338	略円形土坑	11Ｃ末	Ｃ-2・3区、径2.20m、深さ1.63m、底径1.0m、ＳＥ226・ＳＫ337に切られている。　白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿・壺蓋、黄釉四耳壺、中国陶器、須恵器、弥生土器片、瓦器椀、土師坏・皿（篦切）			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ339	楕円形土坑	12Ｃ	Ｃ-2・3区、長径1.22m、短径0.77m、深さ0.77m、南側が段状に深くなる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿、黄釉鉄絵盤、黒褐釉盤、須恵器坏、瓦器椀、土師坏・皿（糸・篦切）	15		
ＳＫ340	不定形土坑	13Ｃ後半以降	Ｂ-4区、長さ1.20m、幅0.60m以上、深さ0.51m、中央部が深くなる。　龍泉青磁Ⅲ類蓮弁小碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、中国陶器Ｃ群捏鉢、黄釉盤、土師坏・皿（糸切）	15		
ＳＫ341	略方形土坑？	—	Ｂ-3・4区、長さ0.88m以上、幅不明、深さ0.58m、一部分のみ確認。　同安青磁碗、白磁Ⅴ類小碗、中国陶器Ｃ群捏鉢、瓦、土師坏・皿（糸切）	15		
ＳＥ401	円形井戸	16Ｃ	Ａ・Ｂ-5・6区、掘方上径3.70m以上、調査区南壁際で危険なため0.62mまでしか掘り下げていない。以下未掘。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗Ⅰ類、高麗青磁壺、明青磁、白磁Ⅳ・Ⅵ類・口禿皿、須恵器、土師器坏・皿（糸切）			
ＳＥ402	円形井戸	13Ｃ	Ｂ-5・6区、掘方上径3.0m以上、調査区南壁際で危険なため1.34mまでしか掘り下げていない。以下未掘。西側は段状に浅くなる。　龍泉青磁壺Ⅰ類、同安青磁碗・皿、越州窯青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・口禿皿、青白磁碗・合子、中国陶器、瓦器椀、瓦、土師坏・皿（糸切）		33	6•7•8•13
ＳＫ403	長方形土坑	13Ｃ	Ａ-5区、長さ1.90m以上、幅1.07m、深さ0.45m、ＳＥ401に切られる。　龍泉青磁Ⅱ類、同安青磁Ⅰ類、越州窯青磁小椀、白磁椀Ⅵ・Ⅶ類・割花文皿、水注、青白磁皿。褐釉四耳壺、黄釉盤、、捏鉢、常滑、土鍋、土師坏・皿（糸切）		34	
ＳＫ404	長方形土坑	15Ｃ	Ａ-4・5区、長さ1.62m、幅0.65m、深さ1.15m、幅が狭く深い土坑。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅴ類、同安青磁、明白磁、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、備前擂鉢・壺、瓦、土師器（搬入）、土師坏・皿（糸切）	22	34	6•14
ＳＫ405	略方形土坑	12Ｃ中	Ａ・Ｂ4・5区、長さ3.95m、幅4.30m、深さ1.50m、大型の土坑で上面に2号人骨の頭蓋骨が出土。　龍泉青磁Ⅰ類、同安青磁碗、白磁Ⅶ類・水注・平底皿・高台付皿、	22	35	6
ＳＫ406	略楕円形土坑	12Ｃ中	Ｂ-5区、長径1.35m、短径0.70m、深さ0.43m、南側が段状に深くなる。　同安青磁碗、白磁Ⅳ・Ⅴ類、土師坏・皿（糸切）	22		
ＳＫ407	不定形土坑？	—	Ｂ-5区、一部分のみ検出。　土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ408	楕円形土坑	—	Ｂ-5区、長径0.98m、短径不明、深さ0.35m、ＳＫ406・ＳＫ407に切られる。　土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ409	長方形土坑？	15～16Ｃ	Ａ・Ｂ-5区、長さ1.95m以上、幅1.26m、深さ0.80mＳＥ402・ＳＫ405に両端を切られる。　龍泉青磁雷文碗・端反皿、明青磁瓶、高麗青磁、明染付碗・白磁皿・碗、白磁碗Ⅴ類・輪禿皿、須恵器、土師坏・皿（糸切）	22	35	
ＳＫ410	略円形土坑	13～14Ｃ	Ｂ-5区、径0.92×0.80m、深さ0.80m。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類・鍔皿、白磁口禿碗・四耳壺、瓦器椀、須恵器、瓦、土師坏・皿（糸切）		36	
ＳＫ411	略円形土坑	13Ｃ	Ｂ-5区、径1.03m、深さ0.56m、坑内から人骨片出土。　龍泉青磁Ⅱ類、白磁割花文皿、青白磁口禿皿・口禿蓋、瓦器椀、土師坏・皿（糸切）	23		
ＳＫ412	不定形土坑	12Ｃ前半	Ｃ-5区、長さ1.25m、幅1.04m、深さ0.67m。　高麗青磁、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿、瓦器椀	22		
ＳＫ413	不定形土坑	13Ｃ中～14Ｃ	Ｂ・Ｃ-4・5区、長さ4.0m、幅1.80m以上、深さ0.48m、ＳＫ472に切られる。人骨片出土。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類・口禿小碗、同安青磁碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・口禿皿・壺・香炉、中国陶器Ｂ群四耳壺・燭台、高麗須恵器、瀬戸、常滑、東播系鉢、瓦器椀、土師坏（糸・篦切）	22	36	4•6•14
ＳＫ414	不定形土坑	—	Ｂ-5区、長さ0.94m、幅0.72m、深さ0.48m、東側が一段深くなる。　白磁小破片、土師（糸切）	22	37	
ＳＫ415	楕円形土坑？	11Ｃ終	Ｂ-5区、長径1.16m、幅不明、深さ0.50m、ＳＥ402・ＳＫ414に切られ一部分のみ検出。　白磁碗Ⅳ類・高台付皿Ⅰ類、中国陶器Ｃ群行平、竈、土師器（篦切）		37	
ＳＫ416	略楕円形土坑	13Ｃ	Ｂ-5・6区、長径1.26m、短径0.80m以上、深さ0.81m。　鹿の肩甲骨、龍泉青磁Ⅰ類碗・皿、同安青磁皿、白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・四耳壺、中国陶器準Ａ群、古墳時代の土師器、土師坏・皿（糸切）	22	37	
ＳＥ417	円形井戸	12Ｃ後半	Ｂ・Ｃ-6区、掘方上面径3.0m、調査区南壁際に位置し、掘り下げるとシートパイルが崩壊する危険があるので一部しか掘り下げていない。　同安青磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅴ類、瓦器椀（搬入）、須恵器、弥生土器、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ418	略方形土坑	12Ｃ前半	Ｃ-5区、長さ0.77m、幅0.72m、深さ0.60m、小型の土坑。　白磁Ⅲ・Ⅳ類・小壺、中国陶器捏鉢、高麗須恵器、須恵器壺、瓦器椀（搬入？）、土師坏・皿（糸・篦切）	22		
ＳＫ419	楕円形土坑？	12Ｃ後半	Ｃ-6区、長径1.40m以上、短径1.36m、深さ0.50m、東半部は攪乱で不明。　龍泉青磁碗Ⅰ類、須恵器小片			
ＳＫ420	略方形土坑？	—	Ｃ-5・6区、一部分のみ検出。			
ＳＫ421	不定形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-5区、長さ2.70m以上、幅1.30m以上、深さ0.77m、東側はＳＫ422・ＳＫ423に切られる。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿・平底皿、中国陶器Ａ群黒褐釉盤、Ｂ群鉢、無頸壺、鉄絵盤、磁　窯小口瓶、瓦器椀、るつぼ、土師坏・皿（糸切）	22		6
ＳＫ422	長方形土坑	13Ｃ	Ｃ-5区、長さ1.53m、幅0.70m、深さ0.52m、ＳＫ521を切る。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗・皿Ⅰ類、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、青白磁口禿皿、高麗須恵器、瓦、土師坏・皿（糸切）	22		
ＳＫ423	略方形土坑	12Ｃ	Ｃ-5区、長さ0.75m、幅0.70m、深さ0.39m、礫混入。　龍泉青磁Ⅰ類、白磁碗Ⅳ類、中国陶器準Ａ群、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ424	略方形土坑	12Ｃ前半以降	Ｂ-5区、長さ0.72m、幅0.64m、一部分のみ確認、小型の土坑。　中国陶器Ｂ群壺			
ＳＫ425	円形土坑	14Ｃ以降	Ａ-5区、径1.20m、深さ0.96m、ＳＥ401・ＳＫ403に切られている。　龍泉青磁香炉・大壺・合子蓋、白磁碗Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ類、瓦質捏鉢			6•7•13
ＳＫ426	略円形土坑？	12Ｃ後半	Ａ-5区、一部分のみ確認。　龍泉青磁碗Ⅰ類、高麗青磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿、中国陶器準Ａ群、須恵器、土師器坏・皿（糸切）			6
ＳＥ427	円形井戸	12Ｃ前半	Ａ-5区、掘方上面径2.50m、井筒径0.65m、深さ2.89m、ＳＫ403の下から出土。　掘方　白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿、陶板、捏鉢、高麗須恵器　井筒　白磁（博多分類02）	28		
ＳＥ428	円形井戸	12Ｃ後半	Ｂ・Ｃ-6区、ＳＥ417と同一、埋土の違いで重複していると考えていたが、同一遺構とした方が妥当である。　龍泉青磁小碗、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・高台付皿、須恵器坏、土師坏・皿（糸切）			
ＳＥ429	円形井戸	12Ｃ前半	Ｂ・Ｃ-5・6区、掘方上面径2.32m、井筒径0.65m、深さ2.78m。　掘方　白磁Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類　井筒　白磁Ⅱ類・平底皿、瓦器椀、須恵器、弥生土器	30		
ＳＤ430	溝	12Ｃ前半以降	Ｂ・Ｃ・Ｄ-5・6区、最大幅3.10m、深さ0.40m、Ｂ-5区からＤ-6区へ「Ｌ」字状に曲がる。白磁碗Ⅱ類、青白磁合子、高麗青磁碗、須恵器蓋、焼塩壺、弥生土器		47	
ＳＫ431	土坑	—	Ｂ-6区、一部分のみ確認			
ＳＥ432	円形桶組井戸	13Ｃ中以降	Ａ・Ｂ-1区、掘方上面径3.10m以上、井筒径0.80m、深さ2.40m、桶組、ＳＥ201に切られ、北側は未調査区へ広がる。　龍泉青磁Ⅰ・Ⅱ類、白磁口禿皿、高麗青磁碗、土師坏・皿（糸切）	28	45	
ＳＥ433	円形桶組井戸	13Ｃ	Ａ・Ｂ-1・2区、掘方上面径4.60m、井筒径0.65m、深さ3.02m、桶組、ＳＥ432に切られる。白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ類・平底皿Ⅱ・Ⅵ類・口禿皿・水注、高麗青磁碗・皿、同安青磁碗・皿、龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類・平底皿Ⅰ類、中国陶器Ａ群鉢・黄釉盤、Ｃ群甕、土師坏・皿（糸・篦切）	30	45	4•5•6
ＳＫ434	長方形土坑	12Ｃ	Ｃ-1・2区、長さ1.48m、幅1.02m、深さ0.22m、ＳＫ435の上で検出。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・平底皿Ⅵ類、土師坏（糸切）、同安窯系青磁碗	22		

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ435	略方形土坑	12Ｃ	Ｂ・Ｃ-1・2区、長さ、幅ともに1.70m、深さ1.27m、底面に1.0m方形の木枠痕がある。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・平底皿Ⅵ類、土師坏（糸切）	23	38	
ＳＫ436	略円形土坑	12Ｃ	Ｃ-1区、径0.98m、深さ0.72m、ＳＫ437を切るか。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿Ⅵ類、中国陶器Ｂ群壺、瓦器椀、土師器甕	22		5
ＳＫ437	楕円形土坑	12Ｃ	Ｃ-1・2区、長径1.70m、短径0.74m、深さ0.33m、南側が段状に深くなる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿０類、瓦器椀、土師坏（糸切）	23		
ＳＫ438	略円形土坑	12Ｃ	Ｃ-1区、径0.94m、深さ0.91m、ＳＫ203・ＳＫ440に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、同安青磁碗、越州系壺、褐釉陶器、瓦器椀（楠葉型）、瓦、土師坏（糸切）			
ＳＫ439	楕円形土坑	13Ｃ	Ｃ-1区、長径1.74m以上、短径1.49m、深さ1.02m、ＳＫ203・ＳＫ438に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・平底皿Ⅵ・０類、高麗青磁碗、同安青磁碗、越磁蓋、連江窯青磁碗、中国陶器Ｃ群捏鉢、東播鉢、土師坏（糸・篦切）	23	38	11
ＳＫ440	楕円形土坑？	11Ｃ後半	Ｃ-1区、長さ0.65m以上、幅0.88m、深さ0.30m、ＳＫ203に切られている。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、土師皿（篦切）			
ＳＫ441	円形土坑	古代	Ｃ-1区、径0.70m、深さ0.36m、ＳＥ205に切られる。　高麗須恵器坏、土師器坏	23		
ＳＫ442	円形土坑	11Ｃ後半	Ｂ・Ｃ-2区、径1.10m以上、深さ1.37m、ＳＥ140に切られている。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、土師器椀	23	39	
ＳＤ443	溝	奈良	Ｂ-1・2区、幅1.40m、深さ0.63m、長さ2.90mまで確認。Ｂ-2区からＢ-1区へ延びる。ＳＥ201に切られている。　須恵器、格子叩平瓦、高麗須恵器			
ＳＫ444	土坑	12Ｃ	Ｃ・Ｄ-1区、長さ0.70m以上、非常に浅く一部分のみ検出。　白磁碗Ⅴ類、瓦器椀			
ＳＫ445	円形土坑	11Ｃ後半	Ｄ-1区、径0.92m、深さ0.78m、ＳＫ466を切る。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、中国陶器Ａ群壺・Ｂ群鉢・Ｃ群捏鉢、土師坏・皿（篦切）			
ＳＫ446	円形土坑	12Ｃ	Ｄ-1区、径0.66m、深さ0.34m、小型の土坑。　白磁碗Ⅴ類、瓦器椀			
ＳＫ447	円形井戸	13Ｃ	Ｃ・Ｄ-1・2区、掘方上面径3.40m、井筒径0.65m、深さ2.71m、ＳＥ131・ＳＥ138に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ類・平底皿Ⅱ・Ⅵ類、同安青磁碗・皿、青白磁、龍泉青磁碗Ⅰ類・平底皿、緑釉陶器皿、黄釉盤、中国陶器Ｂ群壺・Ｃ群甕、瓦質鉢、高麗須恵器、瓦器椀、土師坏・皿（糸切）	31	45	5・14
ＳＫ448	略円形土坑？	13Ｃ	Ｄ-1区、径2.60m以上、深さ0.80m、大型の土坑、ＳＥ131・ＳＥ447に切られている。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・平底皿０・Ⅱ類、広東系白磁碗、龍泉青磁碗、同安青磁皿、中国陶器Ｃ群捏鉢、瓦器椀	23		
ＳＫ449	楕円形土坑？	—	Ｃ-2区、一部分のみ検出。			
ＳＫ450	円形土坑	12Ｃ	Ｃ-2区、径1.0m、深さ0.35m。　白磁碗Ⅳ類、瓦器椀、土師坏			
ＳＫ451	略円形土坑	13Ｃ	Ｃ-2区、径1.0m、深さ0.63m、ＳＥ138に切られる。　白磁碗Ⅴ・Ⅸ類、龍泉青磁碗Ⅲ類、同安青磁碗、黄釉盤、土師坏・皿（糸切）	23		
ＳＫ452	略長方形土坑	11Ｃ後半	Ｄ-2区、長さ1.56m、幅1.20m以上、深さ0.98m、ＳＥ226に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿Ⅰ類・平底皿Ⅵ類、広東系白磁碗、高麗青磁碗、高麗須恵器、中国陶器Ａ群壺・Ｃ群捏鉢、土師坏皿（篦切）		39	
ＳＫ453	方形土坑？	13Ｃ	Ｄ・Ｅ-1区、長さ3.90m以上、幅3.03m以上、深さ1.09m、大型の土坑で坑底にピット、段落ちが認められる。半分は北側未調査区へ広がる。　白磁碗Ⅱ（広東）・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅸ類、同安青磁皿、中国陶器Ａ群壺・Ｂ群瓶・行平・Ｃ群捏鉢、瓦	23		12
ＳＫ454	不定形土坑	12Ｃ	Ｄ-1・2区、長さ1.86m、幅1.0m、深さ0.61m、西側は円形土坑状に深くなる。　白磁碗Ⅵ類、瓦質鉢、土師坏・皿（糸・篦切）	23	42	
ＳＫ455	略円形土坑？	—	Ｅ-2区、一部分のみ検出、大部分は東側未調査区へ広がる。　青磁碗			
ＳＫ456	長方形土坑？	12Ｃ後半	Ｅ-2区、長さ1.6m以上、幅不明、深さ0.30m、ＳＫ455に切られる。半分以上は東側未調査区へ広がる。　白磁碗Ⅵ類、同安青磁皿、中国陶器準Ａ群壺			
ＳＫ457	円形土坑	12Ｃ後半	Ｄ・Ｅ-2区、径0.95×0.92m、深さ0.61m。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、同安青磁碗、高麗系須恵器、褐釉陶器、須恵器			
ＳＫ458	長方形土坑？	13Ｃ	Ｅ-2区、長さ1.40m、幅0.70m以上、深さ0.55m、ＳＫ460と同一遺構になる。　龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、同安青磁皿、白磁碗Ⅳ類、須恵質鉢、土師皿（糸切）			
ＳＫ459	土坑	13Ｃ	Ｅ-2区、一部分のみ検出。　龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗・平底皿、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿・口禿皿、中国陶器Ｂ群四耳壺			
ＳＫ460	長方形土坑？	—	Ｅ-2区、ＳＫ458の東側部分をＳＫ460として掘り下げてしまった。ＳＫ458と同一遺構。　白磁碗Ⅳ類			
ＳＥ461	円形桶組井戸	12～13Ｃ	Ｄ・Ｅ-3区、掘方上面径3.04m、井筒径0.70m、さらに径0.4m一段窪む。深さ2.81m、調査区壁際なので井筒のみ掘り下げ、井戸掘方は一部しか掘り下げていない。桶の中に曲物を使用している。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・平底皿・輪禿皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁碗Ⅰ類、中国陶器Ｂ群瓶・Ｃ群行平・捏鉢、土師坏・皿	30		13
ＳＫ462	略円形土坑	12Ｃ	Ｄ-3区、径1.44m、深さ1.32m、坑底は段状に窪む。中央部にはピットがあり、さらに0.43ｍ深くなる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・高台付輪禿皿、越磁壺片、中国陶器Ｃ群褐釉行平、瓦器椀、須恵器	23		
ＳＫ463	略長方形土坑	12Ｃ後半	Ｄ-3区、長さ1.0m、幅0.71m、深さ0.23m。　白磁碗			
ＳＫ464	土坑	13Ｃ	Ｂ-3・4区、長さ1.20m以上、幅1.62m以上、深さ0.82m、ＳＥ113に切られ一部分のみ検出。　白磁碗Ⅳ類・全禿碗・水注、青白磁口禿碗、龍泉青磁碗Ⅰ・類	23		
ＳＫ465	略楕円形土坑	12Ｃ	Ｂ-3・4区、長さ1.94m以上、幅1.48m、深さ0.74m、南側が略方形状に深くなる。　白磁碗Ⅵ類・輪禿碗、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ466	円形土坑	12Ｃ	Ｂ-4区、径0.85m、深さ、0.32m、小型の土坑、ＳＫ465に切られる。　白磁平底皿（口縁三角縁）、中国陶器Ｃ群捏鉢			
ＳＫ467	略円形土坑	15Ｃ	Ａ-4区、径1.44×1.35m、深さ0.89m、坑底には径0.30mのピットがありさらに0.28m深くなる。ピットには焼砂が詰まる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・輪禿碗、青白磁皿、同安青磁碗Ⅰ類、龍泉青磁碗Ⅰ類・皿・大鉢、備前甕・擂鉢	23	40	
ＳＫ468	楕円形土坑？	—	Ｂ-3・4区、規模不明、但し小型の土坑、深さ0.43m、ＳＫ464～ＳＫ466に切られている。　瓦、土師坏			
ＳＥ469	円形井戸	12Ｃ後半	Ａ・Ｂ-2・3区、掘方上面径3.0m以上、調査区壁際のため1.65mまでしか掘り下げていない。井筒未掘。　白磁小片、龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁皿、中国陶器準Ａ群四耳壺・Ａ群黄釉陶器・Ｂ群四耳壺・Ｃ群捏鉢	31		
ＳＫ470	略楕円形土坑？	13Ｃ	Ａ-3区、長径1.90m以上、短径0.80m以上、深さ0.47m、坑底南側にピットがありさらに0.13m深くなる。　龍泉青磁碗Ⅰ類・皿、中国陶器準Ａ群壺、土師坏・皿（糸切）			4
ＳＫ471	楕円形土坑	12Ｃ	Ｂ-4区、長径3.20m、短径2.10m以上、深さ1.02m、中央部が段状に深くなる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・輪禿碗、磁灯窯小口瓶（温斗山）、褐釉水注、中国陶器準Ａ群壺、同安青磁碗Ⅰ類、龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅱ類、土師坏・皿（糸切）	23		

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ472	略楕円形土坑	13Ｃ中	Ｂ・Ｃ-4区、長さ3.0m以上、幅1.60m、深さ0.89m、中央部が略円形状に窪む。　白磁碗Ⅳ・Ⅵ類・輪禿碗・平底皿・口禿皿、同安青磁碗Ⅰ類、土師坏・皿（糸切）	27		
ＳＫ473	略楕円形土坑	13Ｃ	Ｂ-4区、長径1.10m、短径0.80m、深さ0.76m。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、龍泉青磁碗Ⅰ類・皿Ⅰ類、同安青磁碗Ⅰ類・皿Ⅰ類、中国陶器準Ａ群褐釉長胴壺・Ｂ群四耳壺・鉢・Ｃ群皿、瓦器椀、土師坏・皿（糸切）	27	40	6
ＳＫ474	略楕円形土坑	14Ｃ	Ｃ-4区、長径0.95m以上、短径0.88m、深さ0.66m、東側が一段深くなる。　白磁碗Ⅳ類・高台付皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ475	長方形土坑	14Ｃ	Ｃ-4区、長さ1.33m、幅1.05m深さ1.57m、深い土坑で底面は円形を呈する。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・印花文平底皿、龍泉青磁碗Ⅰ類・皿Ⅰ類、同安青磁碗Ⅰ類、盤、陶器、土師坏・皿（糸切）	27	41	
ＳＫ476	土坑	15Ｃ前	Ｃ-4区、長さ1.10m以上、幅0.64m、深さ0.62m、東側が一段深くなる。ＳＫ210・ＳＫ475に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、龍泉青磁鍔皿・端反碗、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ477	長楕円形土坑	13Ｃ後半	Ｃ・Ｄ-4区、長径2.50m、短径0.80m、深さ0.70m、ＳＫ475に切られる。　白磁口禿碗・平底皿、龍泉青磁碗Ⅰ・Ⅲ類、同安青磁平底皿、黄釉陶器、中国陶器Ｂ群壺・Ｃ群耳付壺、古瀬戸四耳壺、土師坏・皿（糸切）	27		
ＳＫ478	円形土坑	13Ｃ	Ｄ-4区、径2.25m、深さ1.37m、ＳＫ477に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・広東系碗輪禿碗・口禿皿、龍泉青磁蓮弁碗Ⅱ類・碗Ⅰ類・皿Ⅰ類、同安系青磁皿、土師坏・皿	27	41	14
ＳＫ479	円形土坑	12Ｃ前	Ｄ-4区、径1.68m、深さ0.72m、ＳＫ478に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、輪禿碗・輪禿高台付皿・平底皿、磁灶窯小口瓶、無頸壺、中国陶器準Ａ群四耳壺・Ｂ群四耳壺・Ｃ群捏鉢、瓦器椀、土師坏・皿（糸・篦切）	27		5
ＳＫ480	略円形土坑	12Ｃ後半	Ｄ-4区、径0.78×0.68m、深さ0.52m、小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ類・輪禿碗・広東系平底皿、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ481	略楕円形土坑	12Ｃ	Ｃ-3・4区、長径1.10m以上、短径0.96m、深さ0.31m、礫混入、東側は調査中に崩落した。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・輪禿碗・輪禿高台付皿、中国陶器Ａ群黄釉陶器・褐釉行平・Ｂ群壺・Ｃ群大壺、高麗青磁碗、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ482	略長方形土坑	12Ｃ	Ｃ・Ｄ-4区、長さ1.48m以上、幅0.82m、深さ0.68m、北側は崩落で未確認。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ類・皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、同安青磁皿、中国陶器Ａ群黄釉盤・褐釉行平・Ｃ群捏鉢・大型壺、瓦器椀	23		
ＳＫ483	略長方形土坑	12Ｃ後半	Ｃ-3・4区、長さ2.50m、幅1.80m以上、深さ0.47m、ＳＫ482に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿高台付輪禿皿・壺、龍泉青磁碗、同安系青磁碗、中国陶器Ａ群黄釉盤・準Ａ群・Ｂ群四耳壺・鉢・Ｃ群褐釉大壺・捏鉢			
ＳＫ484	土坑	12Ｃ	Ｃ-4区、一部分のみ確認、全形不明。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類・皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、黄釉盤、瓦器、瓦			
ＳＫ485	土坑	12Ｃ	白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・平底皿・壺、高麗青磁、越州窯青磁瓶、黄釉盤、中国陶器Ｃ群捏鉢、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ486	略方形土坑	12Ｃ	Ｄ-4区、長さ1.50m、幅1.30m、深さ0.40m。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ類・皿・高台付皿Ⅰ類・平底皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、越州窯青磁壺、中国陶器Ｃ群捏鉢、瓦、土師坏・皿（糸切）		42	
ＳＫ487	長方形土坑？	12Ｃ後半	Ｄ-4区、長さ0.80m、幅0.82m、深さ0.44m、ＳＫ486に切られる。　白磁碗Ⅳ類、龍泉青磁碗、同安系青磁皿、越州窯青磁碗、中国陶器準Ａ群・Ｂ群・Ｃ群捏鉢、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ488	円形土坑？	12Ｃ	Ｃ・Ｄ-4区、一部分のみ確認、ＳＫ486・ＳＫ487に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・平底皿・四耳壺・小壺、越磁？、褐釉長胴四耳壺、黄釉盤・壺、中国陶器Ｂ群瓶・Ｃ群行平・壺、瓦器椀、土師坏・皿（糸・篦切）			
ＳＫ489	土坑	11Ｃ	Ｃ-3・4区、一部分のみ確認、ＳＫ326に切られる。　白磁Ⅴ類、土師坏・皿（篦切）	27		
ＳＫ490	土坑	12Ｃ	Ｃ-4区、一部分のみ検出、ＳＫ475・ＳＫ477に切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、瓦器椀			
ＳＫ491	不定形土坑	12Ｃ後半	Ｃ・Ｄ-5区、長さ1.77m以上、幅1.65m以上、深さ0.51m、部分的に確認。　同安系青磁碗Ⅰ類、龍泉青磁碗Ⅰ類、高麗青磁皿、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・輪禿碗・高台付皿Ⅰ類・平底皿Ⅰ類・壺、青白磁碗、天目碗、黄釉盤、中国陶器Ａ群・Ｃ群壺、土師坏・皿（糸・篦切）			
ＳＫ492	不定形土坑	12Ｃ後半	Ｄ・Ｅ-1・2区、長さ1.92m、幅1.40m、深さ0.85m、南側が深くなる。ＳＫ454に切られる。　龍泉系青磁碗、同安系青磁碗、白磁碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・輪禿皿・割花文皿、褐釉長胴四耳壺、高麗系陶器、土師坏・皿	27	42	
ＳＥ493	円形桶組井戸	12Ｃ後半	Ｄ-1・2区、掘方上面径2.85m、井筒径0.75m、深さ2.60m、井筒はやや東側に寄る。桶組。　白磁香炉・割花文皿・碗Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類、龍泉系青磁碗・皿、同安系青磁碗、磁灶窯壺・小口瓶、中国陶器Ｂ群水注・鉢、東播鉢、瓦、石鍋	31	46	6•11•12
ＳＫ494	円形土坑	12Ｃ	Ｄ-3区、径1.35m、深さ0.61m、ＳＫ462に切られている。　白磁碗Ⅳ類・平底皿、高麗系須恵器、瓦器椀	27		
ＳＫ495	略円形土坑	12Ｃ	Ｄ-3・4区、径0.84m、深さ0.24m、小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ類・平底皿・高台付皿、中国陶器Ｃ群水注、土師坏・皿（糸・篦切）			
ＳＫ496	略方形土坑	12Ｃ	Ｄ-3・4区、長さ、幅とも1.0m、深さ0.32m、ＳＫ495に切られる。　白磁Ⅳ類、石鍋、土師坏・皿（糸・篦切）	27		
ＳＫ497	略方形土坑	11Ｃ末	Ｄ・Ｅ-3・4区、長さ、幅とも0.78m、深さ0.23m、小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、高台付白磁皿、越磁、磁灶窯壺（小口瓶）、中国陶器Ｃ群捏鉢、瓦器椀、土師坏・皿（篦切）			
ＳＫ498	略方形土坑？	12Ｃ	Ｅ-4区、長さ0.9m、幅不明、深さ0.38m、半分以上は東側未調査区へ広がる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、高麗青磁碗、越磁水注、中国陶器Ｃ群捏鉢、褐釉長胴四耳壺			
ＳＫ499	円形土坑	12Ｃ	Ｅ-4区、径0.82m、深さ0.21m、ＳＫ498に切られる。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、瓦器椀、土師皿（糸切）			
ＳＥ500	略円形井戸	12Ｃ	Ｄ・Ｅ-4区、掘方上面径2.60×2.60m、井筒径0.50×0.55m、深さ2.65m、井筒には曲物を使用する。　白磁碗Ⅱ・Ⅴ類・小碗Ⅴ類、須恵器高台付坏、中国陶器Ｃ群行平、土師坏・皿（糸・篦切）	31	46	
ＳＣ501	方形住居？	古墳時代前期	Ｅ-4・5区、長さ5.90m以上、深さ0.44m、大部分は東側未調査区へ広がるため全体の様子は分からない。　古式土師器甕（布留）	28	44	
ＳＫ502	略方形土坑	—	Ｄ・Ｅ-5区、長さ0.90m、幅0.85m、深さ0.32m、ＳＣ501を切る。　瓦器椀、鉢	27		
ＳＫ503	略方形土坑	12Ｃ	Ｅ-6区、長さ1.0m、幅0.8m、深さ0.64m。　龍泉系青磁碗、中国陶器Ｂ群瓶・Ｃ群大型甕、瓦、土師器坏・皿（糸切）	27		
ＳＫ504	楕円形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長径1.34m、短径0.92m、深さ0.52m。　高麗青磁碗、龍泉青磁碗、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・皿、青白磁合子、磁州白釉陶器皿、中国陶器Ｃ群無釉捏鉢、褐釉陶器四耳壺、高麗系須恵器、瓦器椀、土師坏・皿（糸・篦切）	27		6•7
ＳＫ505	略方形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長さ0.78m、幅0.70m、深さ0.16m、浅い小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、高麗青磁、中国陶器無釉Ｃ群捏鉢、瓦器椀、土師皿	27		
ＳＫ506	略長方形土坑	12～13Ｃ	Ｄ-5区、長さ0.65m、幅0.40m、深さ0.17m、小型で浅い土坑。　白磁皿、中国陶器茶托？、瓦器椀、土師皿（糸切）	27		
ＳＫ507	楕円形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長径1.21m、短径0.91m、深さ0.36m。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ類、越磁系壺、高麗系須恵器、瓦器椀、瓦、土師坏・皿（糸・篦切）	27		
ＳＫ508	長方形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長さ0.94m、阻0.70m、深さ0.24m、小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅴ類、中国陶器Ａ・Ｃ群壺、瓦器皿			

Tab. 2　出土遺構一覧

遺構番号	種類	時期	遺構の概要・出土遺物	Fig.	PL.	PH.
ＳＫ509	楕円形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長径0.70m、短径0.58m、深さ0.21m、小型の土坑。　白磁碗Ｖ類、瓦器椀、土師皿（糸切）	27		
ＳＫ510	略円形土坑	12Ｃ初	Ｄ-5・6区、径1.80×1.60m、深さ1.03m。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類・高台付皿Ⅰ類・広東系、土師器椀、土師坏・皿（糸・篦切）	27	43	
ＳＫ511	略長方形土坑	13Ｃ	Ｄ-5区、長さ1.10m、幅0.95m、深さ0.57m、ＳＫ509に切られている。　白磁碗Ⅱ類、青白磁口禿碗、瓦器椀、土師坏（糸切）	28		
ＳＫ512	長楕円形土坑	12Ｃ	Ｄ-5・6区、長径1.90m、短径0.65m、深さ0.26m。　白磁輪禿碗、無釉陶器、土師坏・皿（糸・篦切）	28s		
ＳＫ513	円形土坑	12Ｃ	Ｄ-6区、径0.63m、深さ0.37m、小型の土坑。　土師坏・皿			
ＳＫ514	土坑	12～13Ｃ	Ｃ-5区、基盤が砂層で部分的な確認であったので、調査時に消滅。　中国陶器Ｂ群四耳壺、須恵質鉢、土師坏			
ＳＫ515	土坑	12～13Ｃ	Ｃ-6区、調査時に消滅。　白磁壺、龍泉系青磁碗Ⅰ類・皿、同安系青磁碗Ⅰ類、中国陶器Ｂ群鉢、瓦			
ＳＥ516	円形桶組井戸	12Ｃ前	Ｃ・Ｄ-5区、掘方上径3.30m、井筒径0.65m、深さ2.57m、井筒の深さ1.0m、桶組。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・皿、青白磁皿、高麗割花蓮弁文碗、中国陶器Ａ・Ｂ・Ｃ群、須恵器、瓦器椀、土師椀			6
ＳＫ517	楕円形土坑	12Ｃ	Ｄ-5区、長径0.84m、短径0.64m、深さ0.61m、小型の土坑。　白磁碗Ⅵ類輪禿			
ＳＫ518	円形土坑	12Ｃ	Ｄ-3区、径0.76m、深さ0.32m、北側はＳＥ226の掘方で切られている。　白磁碗Ｖ類、瓦器椀			
ＳＫ519	楕円形土坑？	13Ｃ	Ｃ・Ｄ-5区、長径1.45m、短径0.92m以上、深さ0.77m。　龍泉系青磁碗Ⅰ類・菊皿、同安系青磁碗・皿、白磁碗Ⅵ類・皿、青白磁口禿皿、褐釉四耳壺、黄釉陶器、中国陶器Ｂ群鉢・瓶・Ｃ群水注、瓦、土師坏・皿（糸切）			
ＳＫ520	略楕円形土坑	12～13Ｃ	Ｃ-4・5区、長径0.75m、短径0.60m、深さ0.24m、小型の土坑。　白磁輪禿碗、土師坏			
ＳＫ521	円形土坑？	12終～13Ｃ	Ｃ-5区、径1.08m、深さ0.40m、ＳＫ422に切られている。　龍泉系青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅵ類、無釉陶器捏鉢、土師坏（糸切）			
ＳＫ522	土坑	12Ｃ	長胴四耳壺、黄釉盤、瓦			
ＳＫ523	円形土坑	13～14Ｃ	Ｂ・Ｃ-4区、径1.0m、深さ0.39m、ＳＫ474・ＳＫ524に切られている。　龍泉系青磁鍔付皿、白磁碗Ⅳ類、瓦器椀、須恵器高台付坏、瓦			
ＳＫ524	楕円形土坑	13Ｃ	Ｂ・Ｃ-4区、長径1.38m、短径0.9m、深さ0.24m、ＳＥ181に切られる。　白磁口禿皿、龍泉系青磁碗、四耳壺、瓦、土師坏・皿、弥生土器	28		
ＳＫ525	略方形土坑	11～12Ｃ	Ｃ-4区、長さ0.79m、幅0.70m、深さ0.45m。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、須恵器坏、土師器椀			
ＳＫ526	略方形土坑？	古墳時代前期	Ｂ・Ｃ-3・4区、一部分のみ確認、幅3.40m以上、竪坑住居址の残欠かもしれない。ＳＥ325に切られる。　庄内甕			
ＳＫ527	略方形土坑？	12Ｃ	Ａ・Ｂ-4区、長さ2.92m、幅1.40m以上、深さ0.69m、ＳＫ405に切られる。　白磁碗Ⅳ類、同安系青磁皿、中国陶器（捏鉢・無頸壺・四耳壺）、須恵器坏・甕、土師坏・皿、瓦器椀	28	35	6・7
ＳＫ528	楕円形土坑	11～12Ｃ	Ｃ-2区、長径0.75m、短径0.30m、深さ0.35m、小型の土坑。　中国陶器、瓦、土師坏			
ＳＫ529	楕円形土坑	11～12Ｃ	Ｃ-2区、長径0.94m以上、短径0.26m、深さ0.18m、小型の土坑。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・皿、瓦器椀、土師坏・皿			
ＳＫ530	円形土坑	11～12Ｃ	Ｃ-2区、径1.74m、深さ0.87m、ＳＫ313・ＳＫ450に一部切られる。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・皿、褐釉盤、瓦器椀、土師坏・皿、須恵器甕、瓦	28	43	
ＳＫ531	楕円形土坑	11～12Ｃ	Ｃ-3区、長径0.74m、短径0.43m、深さ0.32m。　白磁碗Ⅱ・Ⅳ類・小碗、須恵器坏			
ＳＫ532	楕円形土坑	古墳時代前期？	Ｃ-3区、長径0.80m、短径0.50m以上、深さ0.30m、土色の違いでＳＫ531と区別したが、もともと同一の遺構と考えられる。　土師器甕			
ＳＫ533	略方形土坑？	11～12Ｃ初	Ｃ-3区、一部分のみ確認。　白磁碗Ⅳ・Ⅴ類・皿、越磁Ⅲ類壺、越州系中国陶器、瓦器椀、土師坏・皿			
ＳＫ534	土坑	12～13Ｃ	Ｃ-4区、一部分のみ確認。　同安系青磁碗・皿、龍泉青磁碗Ⅰ類、白磁碗Ⅴ・Ⅵ類、土師坏・皿			
ＳＫ535	略長方形土坑	11終～12初	Ｃ-4区、ＳＫ483の坑底で確認した土坑。　白磁碗、中国陶器、瓦器椀			
ＳＤ536	溝	奈良	Ｂ-3・4区、幅0.60m、深さ0.16m。　須恵器坏蓋			

陶磁器の分類は、『博多出土貿易陶磁分類表』福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅳ福岡市埋蔵文化財調査報告書105集　別冊（1984年）による。

93出土。703～712は石硯である。703・707・708は小豆色を呈し石材が良く似ている。砂岩製であろうか。703はⅠ面下包含層、707・708がSK284から出土している。704はⅢ面の遺構確認時に出土したもので、滑石でできており、幅6.1cm、長さ9.4cmを測る。705・706は近世の硯で、共に頁岩製か。SK101から出土している。705には裏にかぶりものをした人物の顔が描かれている。709はSE226の掘方から出土した小型の硯である。幅4cm、長さ10cmで、石材には黄白の脈が入っている。頁岩であろうか。710はSK292下層から出土した硯で、滑石製石鍋を再加工して作られた小型のものである。711・712は頁岩製か。近世のものである。

713～718はツマミのあるコテ状の石製品である。すべて滑石製で石鍋の再加工品と考えられる。713は長さ9.4cm、幅6.9cmを測り、裏が窪む。SK453から出土している。714はSK292下層から出土。715はSE226掘方から出土したものである。ともに裏側が窪む。716はⅡ面下包含層から出土。717は湾曲した細長い把手が付く。SK338から出土。718はⅡ面下包含層から出土したもので、やはり裏側が窪んでいる。713～718はススが付着している。719・720は方形を呈し、孔を有する滑石製品である。719は中央部に720は上端部に孔を穿つ。719はSK330から出土している。720はSE493井筒から出土したもので、長さ11.3cm、幅8.6cm、厚さ1.5cmを測る。全面にススが多量に付着している。

721・722は滑石製の鉢である。口縁は玉縁状に作り、厚さ4mmである。721はSE225掘方、722はSE201掘方から出土している。723・724は碇石のミニチュアであろう。723は長さ4.2cmで中央部の相対する所に幅8mm程の切り込みを入れる。SK402出土。724はⅡ面下包含層から出土したもので、長さ4.6cmである。これは中央部に切り込みは入れない。725はツマミのついたコテ状の石製品であるが非常に小さい。裏面は半円状に丸くなっている。Ⅱ面下包含層出土。726は滑石製のミニチュアの硯である。SK425から出土したもので、長さ6.2cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmを測る。727は緑色変岩製の鋳型である。リングと截頭円錐形の部分がセットになったものである。房飾りの根付の部分であろうか。リングの外径は1.8cmである。SK255出土。728は滑石製でふたつの窪みを粗く削り込んだものである。滑石ミニチュア品の未成品であろうか。Ⅲ面遺構確認で出土している。729滑石製石鍋を再加工した石錘である。SK260から出土している。

(5)　金属製品（PH.13・14）

金属製品には鉄製品と銅製品がある。鉄製品の中には鉄釘なども含まれるが全て割愛している。鉄釘はかなりの数が出土している。鉄滓なども多く出土しているが殆ど近世に属するものであったので報告では取り上げていない。

PH.14－1及びPH.13－730～748は金属製品である。その中で、1と732だけが鉄製品で、それ以外は全て銅製品か青銅製品である。730・731・733は毛抜である。730は長さ6.6cm、体部の幅は0.6cmである。両方とも先端部が少し折れている。SE131掘方から出土。731は半分だけ残存した毛抜で、732は耳掻である。ふたつともSK139から出土している。733は曲がって歪んでいるが小型のタイプである。Ⅰ面下包含層から出土。734は飾り金具で、幅4.5cm、裏に2箇所足があり、その部分に小孔が開いている。735は留め金具のひとつであろうか、中央部に銅釘が打ち込まれたままになっている。先端部は、一方は次第に細くなり、もう一方は丸味を持った段3段で細くなっている。全長は13.4cm以上、幅1.2cm、厚さ1.5mmを測る。SK325中層から出土している。736は何らかの留め金具である。SK107から出土。737は小柄の柄の部分である。長さ9.9cm、幅1.7cm、最大厚0.4cmである。SK111から出土。近世のものであろう。738は刀のハバキである。高さ2.6cm、上端幅0.8cmを測る。SE113掘方から出土。739は飾り金具のひとつであろうか。径1.9cm、高さ3mmのボタン状を呈し、下端に長さ5mmの三角形をした爪が2箇所付く。SK325から出土している。740は端部の断面が三角

形に近くなり、全体は円形を呈する銅製品である。残存長は13cmで非常に薄い作りになっている。懸仏の周辺の一部であろうか。SK249から出土したものである。**741**はSE226から出土した銅製品である。銹が進んで何か分からない。**742**は飾り金具のひとつであろう。先端は何かに打ち込むように足が付いている。表面には毛彫りで花文をあしらう。下端は窓の所で折れている。残長5.6cm、幅2.2cm、厚さ2.2mmである。SK292上層から出土している。**743**は不明銅製品、**744**も器種が分からない銅製品である。釣針状を呈するが平たくて釣針ではなかろう。SK461から出土。**745**は石突き状の銅製品であるが、長さが2.4cmで小さなものである。SE226掘方上部から出土している。**746**はSE140から出土した雁首銭である。キセルの雁首を押し潰している。**747**・**748**は器種の分からない銅製品である。**747**は中央部に孔を穿つ。Ⅱ面下包含層出土。**748**はSK248から出土している。

(6)　玉

749～**751**は管玉である。**749**は長さ2.65cm、径6mm、碧玉製である。SK478から出土。**750**は長さ2.3cm、径6mm、頁岩製か。SK404から出土。**751**は長さ1.4cm、径5mmで碧玉製である。SK413から出土している。**752**・**753**はSK107から出土したもので器種は分からない。**752**は長さ4.3cm、径5mm、**753**は長さ2.8cm、径5mmである。**754**はSK292下層から出土した円形のガラス製品である。径2.3cmで中央部に7mmの孔とその上に小孔がある。**755**～**760**は丸玉である。**760**が土製である以外は全てガラス製である。**755**は径1.2cm、高さ1.25cmで緑色を呈する。SK333から出土。**756**は径、高さとも1.2cmで青色を呈する。SK413から出土。**757**は径1.2cm、高さ1cmで光沢のある青色を呈する。SE225から出土。**758**は径1cm、高さ9mmで青色を呈する。SK247から出土。**759**は径8mm、高さ4mmでSE201から出土。**760**は径8mm、高さ7mmでSK221から出土している。

(7)　ガラス製品（PH.14）

調査区からガラス器の破片が7個出土している。その内、口縁部が2個あり、それぞれ厚味が違うので少なくとも2個体以上は存在するものと考えられる。色は全て薄い黄白色である。**761**はSE447掘方、**762**はSK334、**763**はSK231、**764**・**766**・**767**はⅡ面中央遺構確認、**765**はSK334からそれぞれ出土している。

(8)　銭貨（Tab.1）

各調査面から北宋銭を中心に百枚近くの銭貨が出土した。詳細は一覧表にとりまとめている。

Ⅲ　おわりに

博多71次調査では、弥生時代から近世にかけて多数の遺構と多量の遺物が出土した。弥生時代の明確な遺構は検出できなかったが、古墳時代初頭には集落が形成されている。現在の御供所町から祇園町にかけては古墳時代の集落が広い範囲で展開している。外来系の土器も多く今後注目されるところである。今回の調査では、古代末から中世にかけて出土遺物に見るべきものが多い。天目は破片も含めて150点近く出土しており、玳玻天目の優品も出土している。耀州窯や吉州窯、磁州窯の製品も注目されるところである。また、景徳鎮で焼かれた刻花唐子文鉢は合わせて4点出土している。その他、緑釉陶器類、白磁、青白磁、青磁などにも優品がかなり出土している。博多遺跡群の中でも富裕層が居住していた地域のひとつであろう。聖福寺の門前であり、博多62次調査で出土した道路遺構の北側にあたり、博多35次調査で出土した道路推定線の西側に位置する部分になる。中世の終りには、タイ・ベトナム陶器が出土し、元染付磁器、高麗や李朝の陶磁器なども出土している。「海のシルクロード」の終着点のひとつとして博多遺跡群の占める位置は重要である。

博多遺跡群第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した緑色ガラスなどの化学分析および鉛同位体比測定

名古屋大学名誉教授　山崎　一雄
奈良国立文化財研究所　肥塚　隆保
室蘭工業大学　白幡　浩志

1。はじめに

博多遺跡群第59次および第62次調査で出土した緑色ガラスについてはさきに化学分析値と鉛同位体比を報告した（注1、2）。また第79次調査で発掘された緑色ガラス容器についても現在報告が印刷中である（注3）。ここでは第71次調査で出土した白磁片とそれに付着した緑色ガラスおよびルツボ破片などについて報告する。出土場所はⅡ面下包含層C－2である（詳細は別項の下村の記載参照）。

2。白磁片とルツボ破片などの形状

白磁片は容器の円形の蓋の約1/3で、少量の黒色粒子を含む灰白色の胎土にやや青味を帯びた半透明の釉がかかっている。その上に融解した緑色のガラスが流れ落ちて固まっている（写真参照）。調査したルツボ片は2個で、1個は三角形、他の1個は不規則な四角形で、後者の上に黄褐色の変質したガラスが付着している。ルツボの破片の表面は粗雑で灰白色、断面は黒色で、白色の粒子を多く含んでいる（写真参照）

3。分析法

白磁片とルツボの胎土についてはX線回折法により鉱物成分を、また付着しているガラスについては蛍光X線分析法とX線回折法により、それぞれの化学成分と鉱物成分を分析した。さらにガラス中の鉛の同位体比を室蘭工業大学のFinnigan Mat 262質量分析計により測定した。

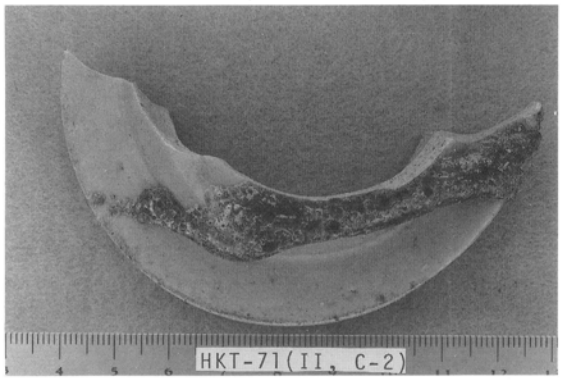


写真1　白磁片についている緑色ガラス。

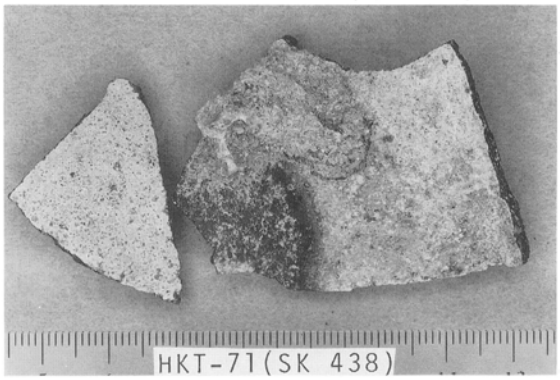


写真2　ルツボ破片2個。四角形の方に変質したガラスが付着している。

4。分析結果

4。1　白磁片とルツボの胎土。

X線回折法により胎土中に認められた鉱物は次の通りである。

白磁片：石英、ムライト（やや多量）
ルツボ：石英、ムライト（やや多量）、クリストバライト（少量）

白磁片の胎土中にはムライトは生成しているが、クリストバライトは生成していないから、両者の生成温度の中間、約1000－1200度で焼成されたと推定される。ルツボはクリストバライトが生成しているから、1200度以上で焼成された上、ガラスの融解に使われたのであろう。なお白磁の釉中には結晶質の物質はX線回折法では認められなかった。

4。2　白磁片の釉

蛍光X線分析法によれは、釉の化学組成は次の通りで、灰釉である。

SiO_2	72.5%	CaO	4.33%
Al_2O_3	12.8	MgO	0.79
Fe_2O_3	1.77	K_2O	6.04
TiO_2	0.16	P_2O_5	0.89
MnO	0.57	（計	99.85%）

他にRb、Sr、Zrの微量が検出される。Naは定量できるほど含まれていない。

4。3　緑色ガラス

蛍光X線分析法によれば、ガラスの化学組成は次の通りである。

SiO_2	43.6%	Na_2O	2.08%
Al_2O_3	0.87	K_2O	10.8
Fe_2O_3	1.01	PbO	34.6
CaO	3.74	CuO	1.03
MgO	2.22	（計	99.95%）

他に微量のTi、Mn、Snが存在する。

このガラスは銅で緑色に着色されたカリ鉛ガラスであるが、融解して流れ落ち、他のものと接触してやや変質していると思われる（5　考察参照）。

4。4　変質したガラス

ルツボに付着していた黄褐色のガラス状物質は緑色ガラスが土中で変質したものであり、蛍光X線分析法によって元のガラスの成分であるSi、Pb、Fe、Ca、Mg、K、Naなどのほか、Cl、Pなどが検出される。X線回折法によれば主成分は$Pb_5Cl(PO_4)_3$塩化トリス（燐酸）五鉛（鉱物名　緑鉛鉱、pyromorphite）である。この化合物はさきに第59次、第62次および第79次の調査でも鉛ガラスの変質した部分から発見されており、鉛ガラスが土中で動物、人間の遺体、排泄物などと接触していたために生成したと考えられる。

4。5　ガラス中の鉛の同位体比

変質していない緑色のガラスについて測定した鉛の同位体比は次の通りである。比較のため第59次、62次、79次調査で出土したガラスの鉛の同位体比なども同時に示す（表1）（図1参照）。

表1　鉛同位体比

試　　料	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$
1　第59次鉛	18.473	2.1118	0.8479
2　第62次鉛	18.455	2.1099	0.8475
3　第71次鉛	18.449	2.1089	0.8473
4　第79次鉛	18.098	2.1268	0.8622
5　対州鉱山鉛（注4）	18.476	2.1099	0.8479

鉛同位体比の標準偏差2σは206Pb／204Pb、208Pb／206Pb、207Pb／206Pbについてそれぞれ±0.02%、±0.01%、±0.01%以下である。

第71次の鉛の同位体比は第59次、第62次および対州鉱山産の鉛の値に近く、第79次の鉛とは異なっている（5　考察）。

5。考察

5。1　ガラスの組成

既に説明したように今回のガラスは白磁片の上に流れ落ちて、やや変質しているから、元の組成は明確ではない。しかし三成分系K_2O-SiO_2-PbOのカリ鉛ガラスとすれば、その組成は第62次調査で出土した緑色ガラスに近いものであろう（注2）。すなわちPbO 49%、SiO_2 41%、K_2O 10%で、融解点は約720度のガラスに類似したものではないかと考えられる（注5）。

5。2　ガラス中の鉛の同位体比

測定された同位体比を図示すれば、図1のように第59次、第62次調査のガラスの数値に近く、これ

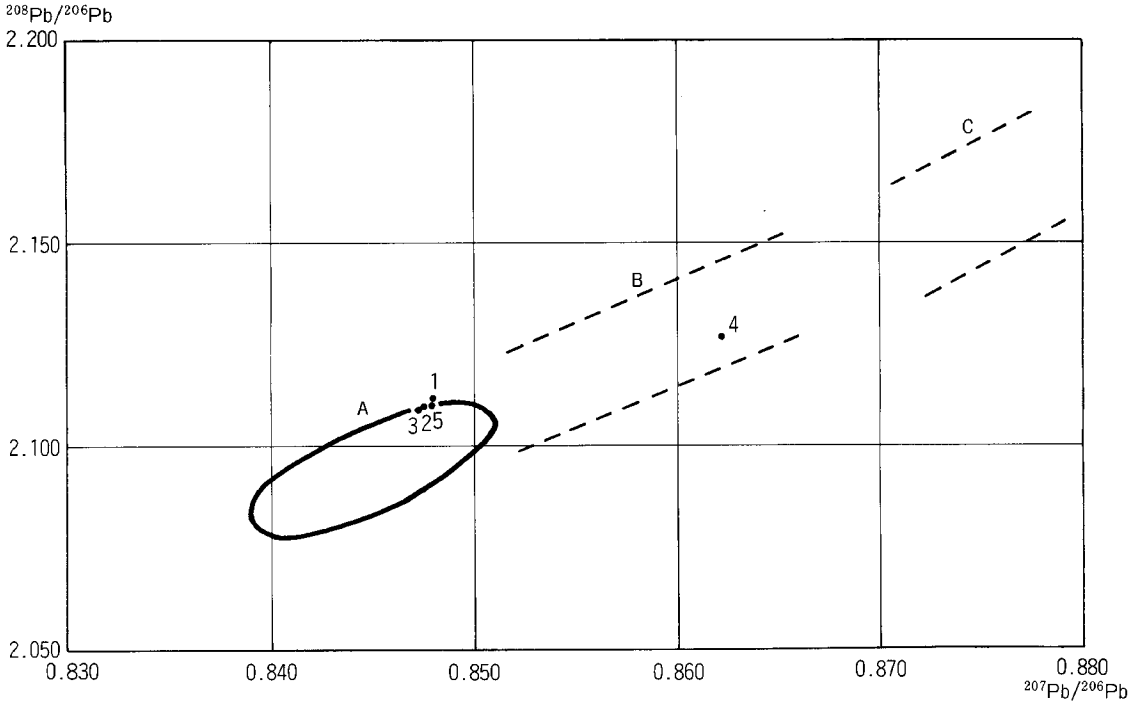


図１　鉛同位体比

図中の１、２、３、４、５は表１の試料と同じである。

１：第59次鉛、２：第62次鉛、３：第71次鉛、

４：第49次鉛、５：対州鉱山鉛

Ａは日本産鉛鉱石の同位体比の範囲

Ｂは中国後漢式鏡の同位体比の範囲

Ｃは中国前漢鏡の同位体比の範囲

らと同じ対州鉱山の鉛鉱石が使用されたものと考えられる。これに対し第79次のガラス壺の鉛の数値は明らかに異なっており、中国産の可能性がある。もしこの差、即ち産地の差が作られた製品の差と関連しているならば、非常に興味が深い。ただ第59、62および71次調査で出土したガラスでどのような器物がつくられたか不明であるのは残念であるが、将来の調査に期待したい。

謝辞－白磁片の実測図をつくり、種々御教示を賜った森本朝子氏と写真を撮影された名古屋工業大学内田哲男博士にあつく感謝する。

注１　山崎一雄、肥塚隆保、福岡市埋蔵文化財報告書、第328集（1993）

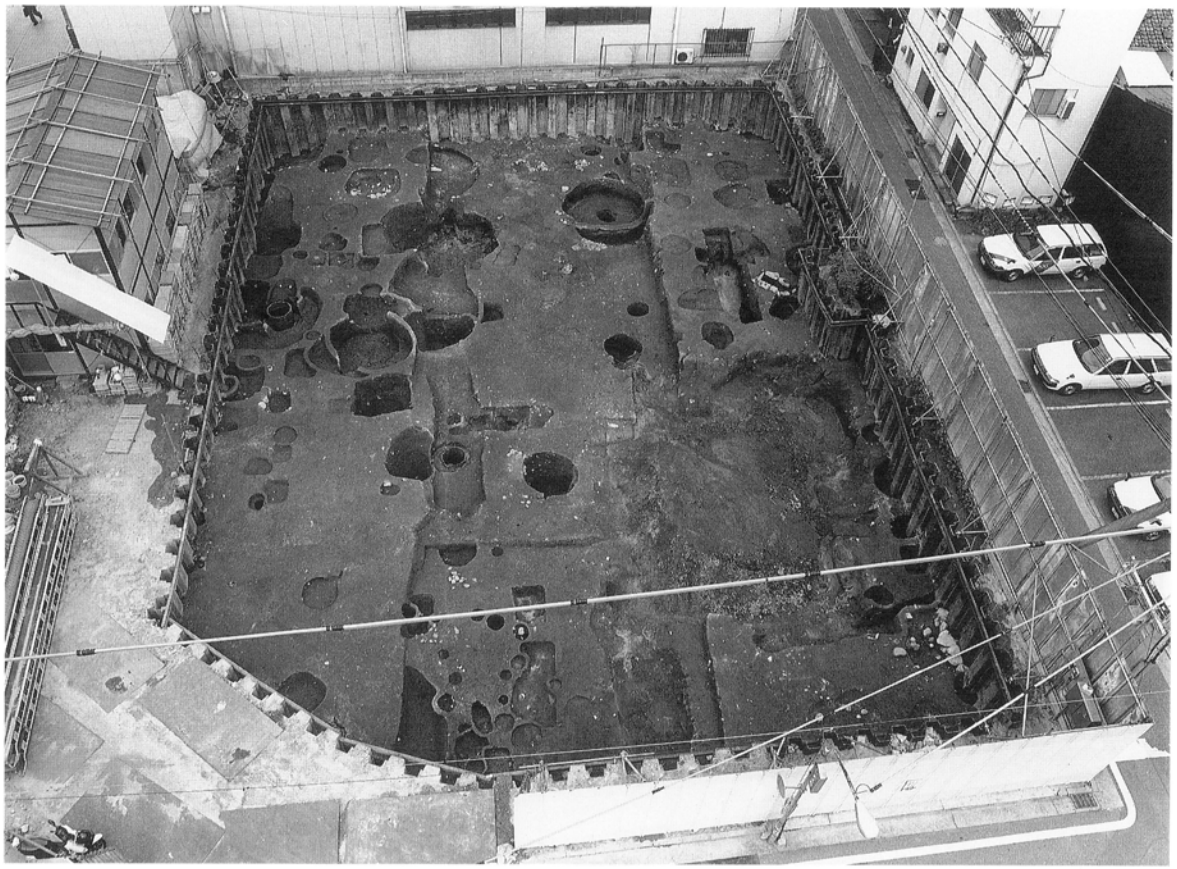
注２　山崎一雄、肥塚隆保、白幡浩志、同上報告書、第397集（1994）.

注３　同上著者、同上報告書、第450集（1996）.

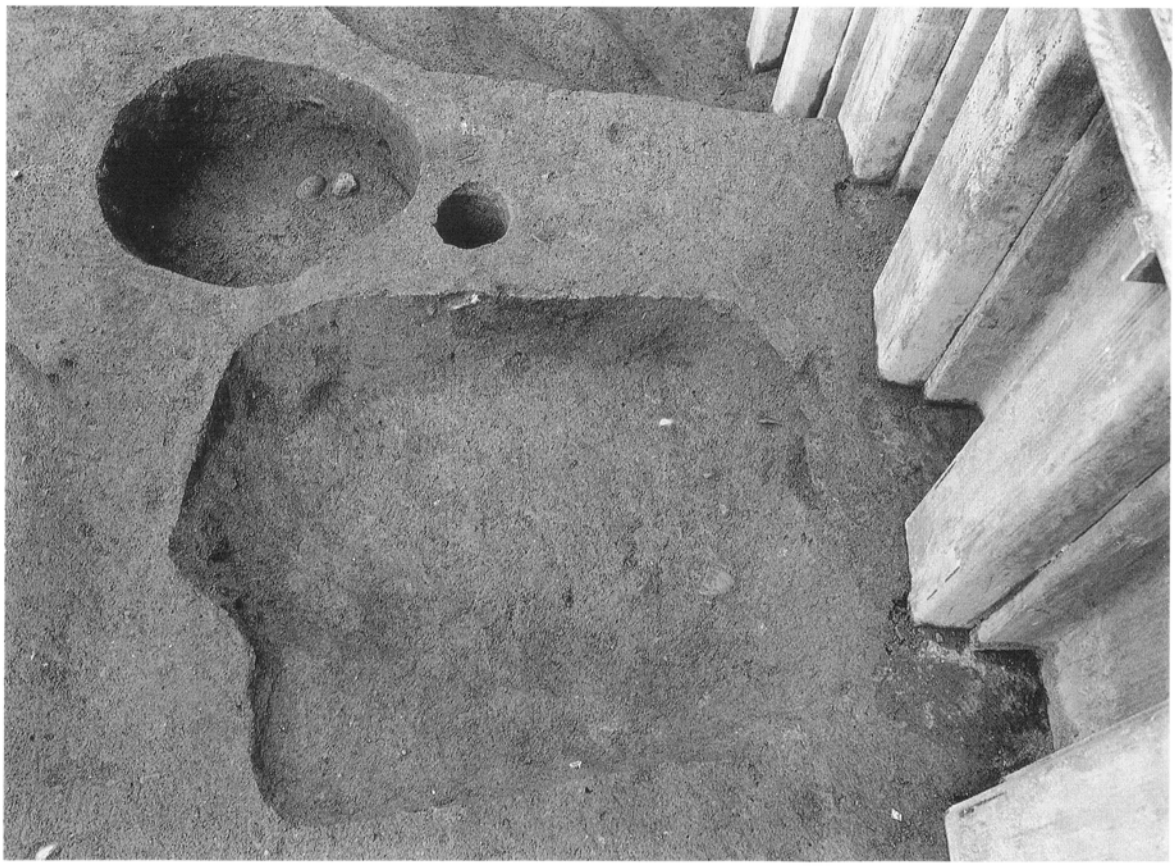
注４　馬淵久夫、平尾良光、考古学雑誌、73巻（1988）199; 75巻（1990）385.

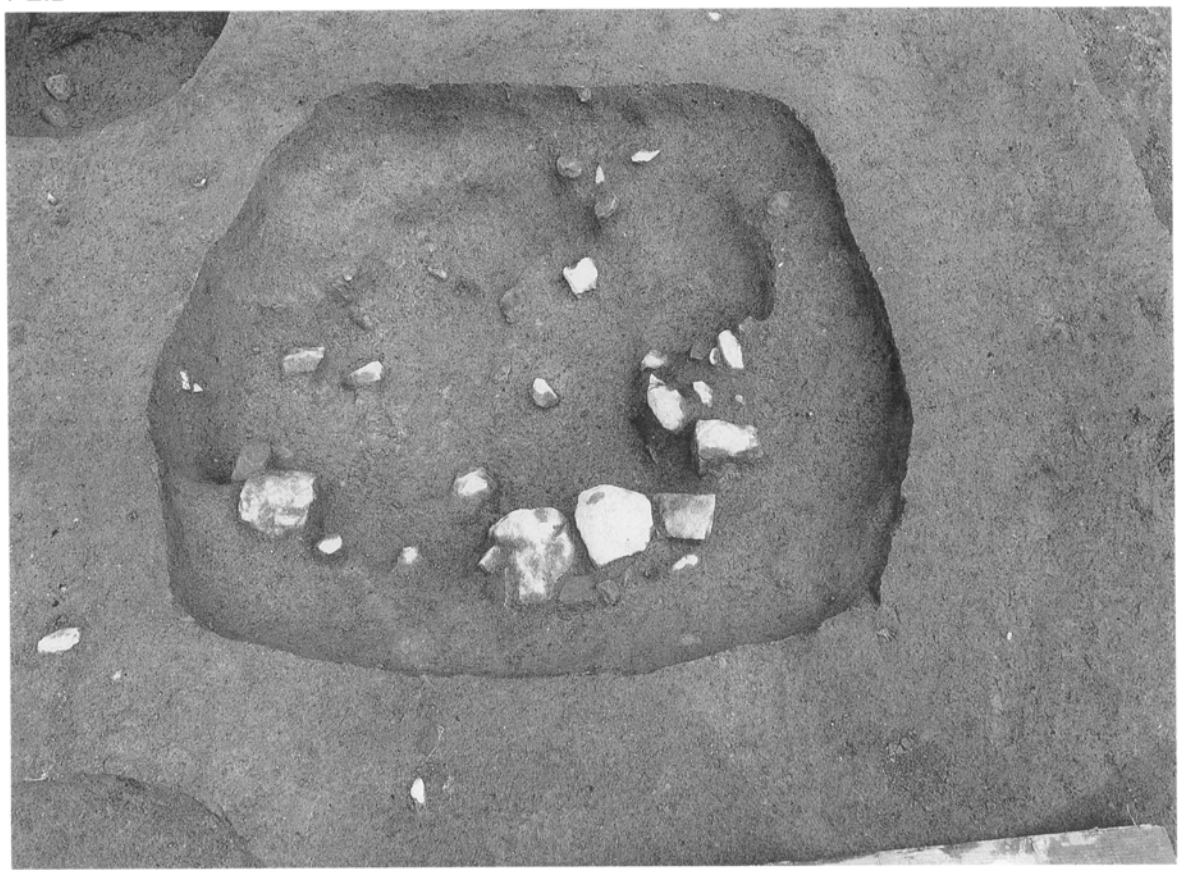
注５　R. F. Geller, E. N. Bunting: J. Research National Bureau of Standards, 17（1936）283.

図　　版



▲ (1) 第Ⅰ面遺構出土状況全景（南から）　▼ (2) SK102 出土状況（東から）

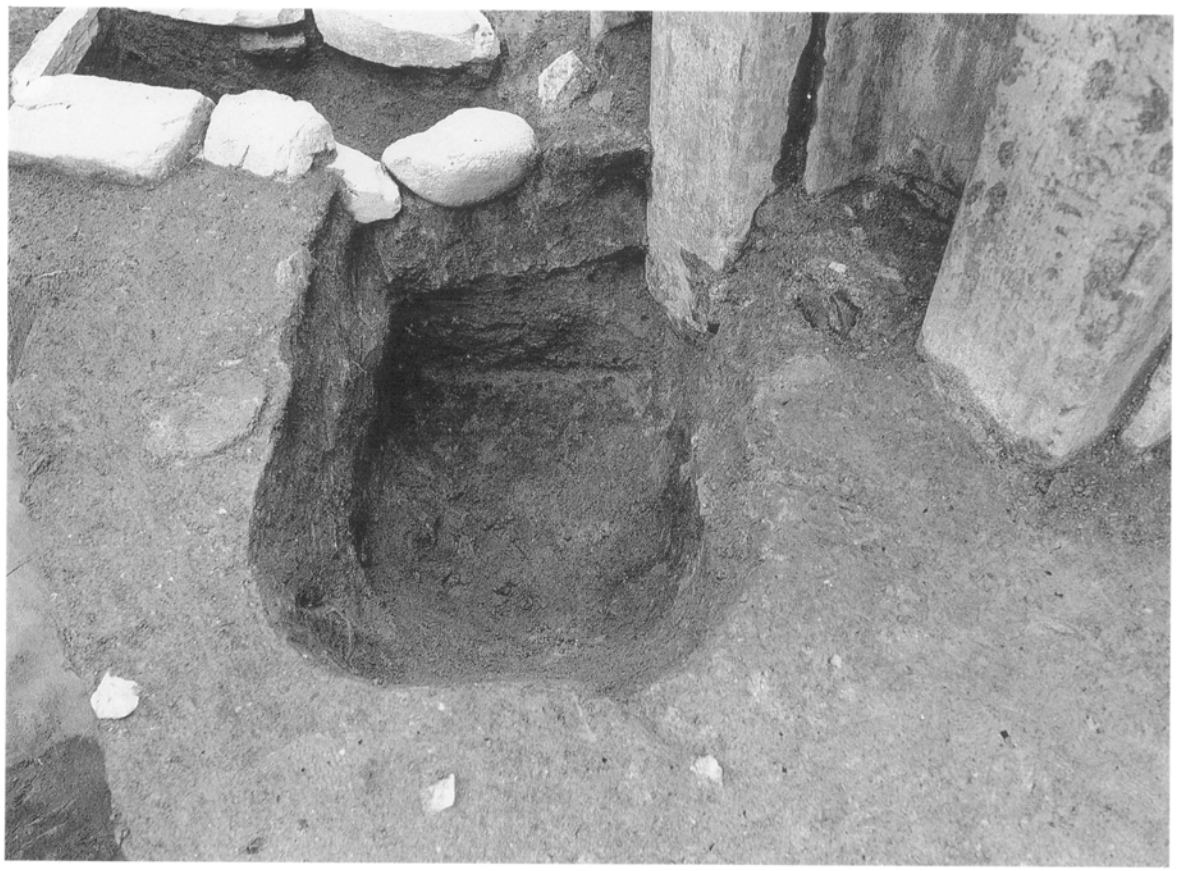




▲ (1) SK103 出土状況（南から）　▼ (2) SK104 出土状況（南から）

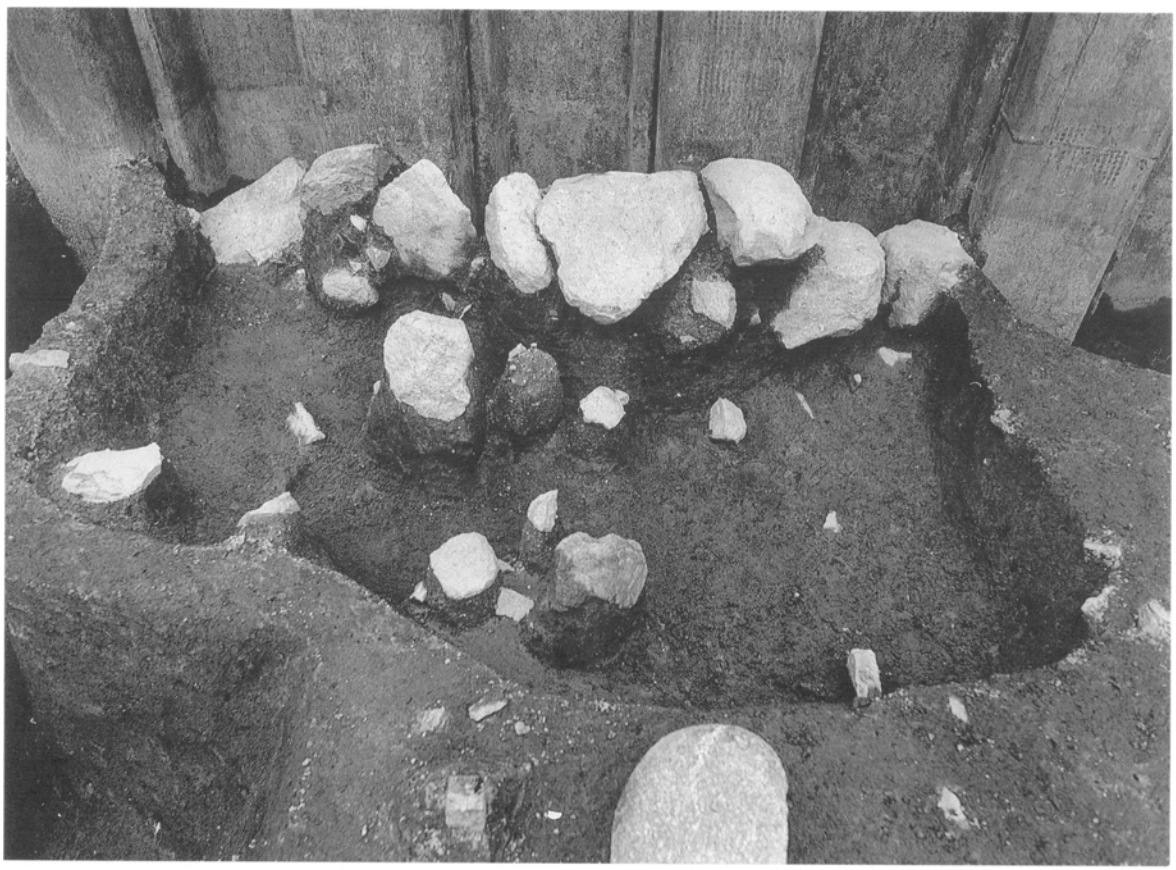
▲ (1) SK107 出土状況（南から）　▼ (2) SK127 出土状況（南から）

▲ (1) SK144 出土状況（東から）　▼ (2) SK149 出土状況（南西から）



▲ (1) SK160 出土状況（北から）　▼ (2) SK161～163 出土状況（東から）

▲ (1) SK167 出土状況（西から）　▼ (2) SK173 出土状況（西から）

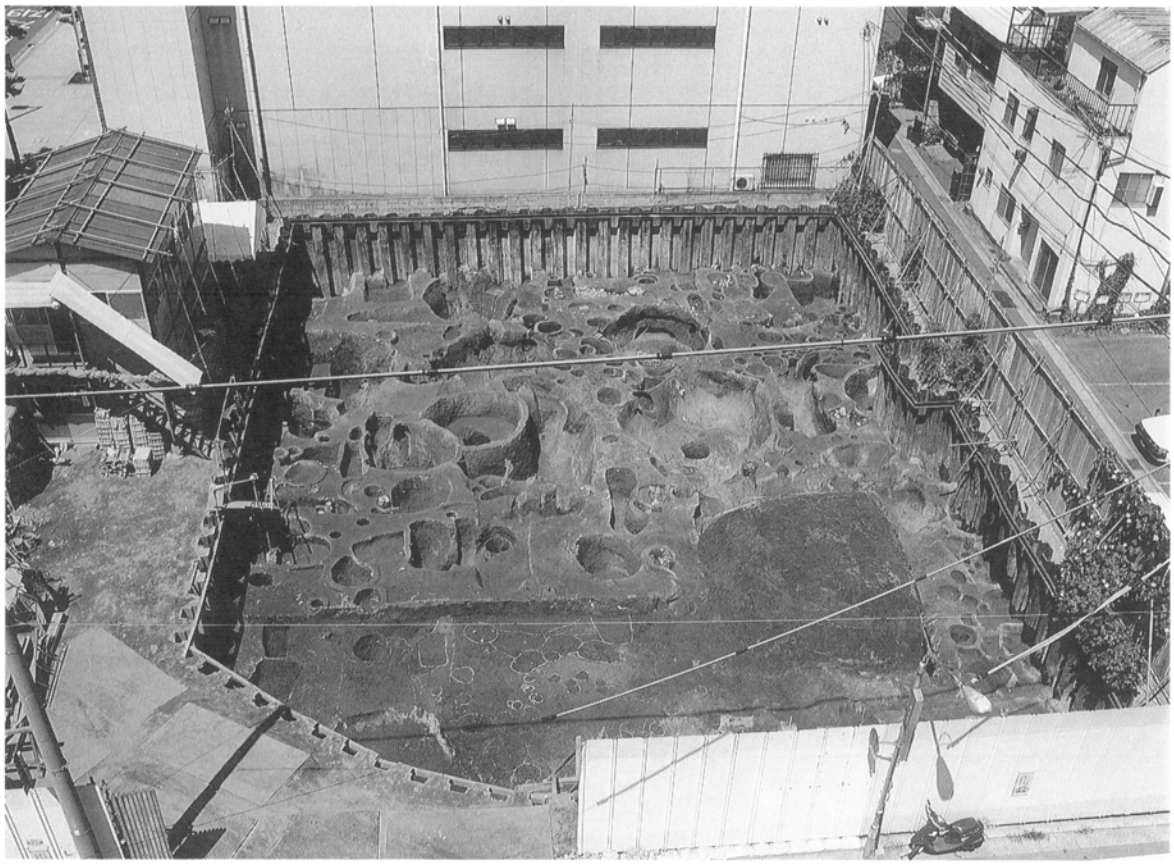


▲ (1) SK177 出土状況（西から）　▼ (2) SX148 出土状況（南東から）

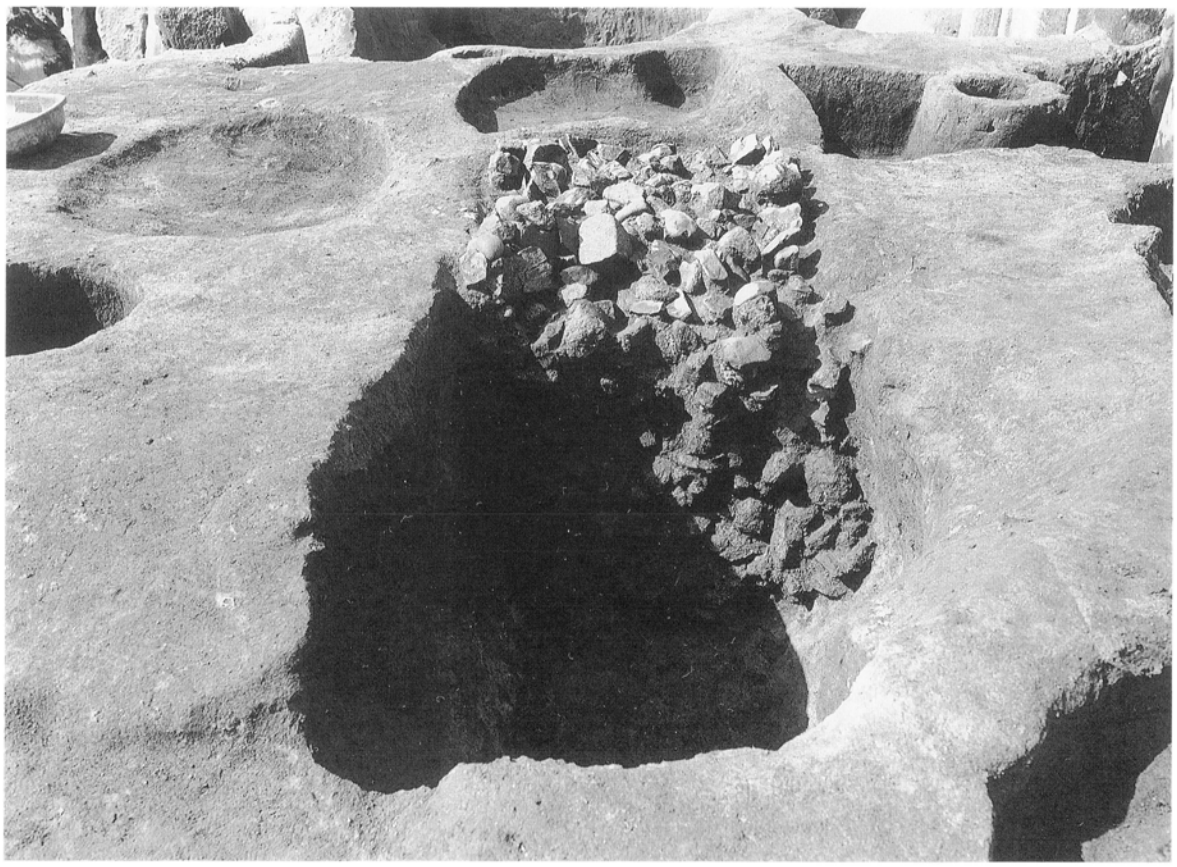
▲ (1) SE114 出土状況（西から）　▼ (2) SE131 出土状況（西から）

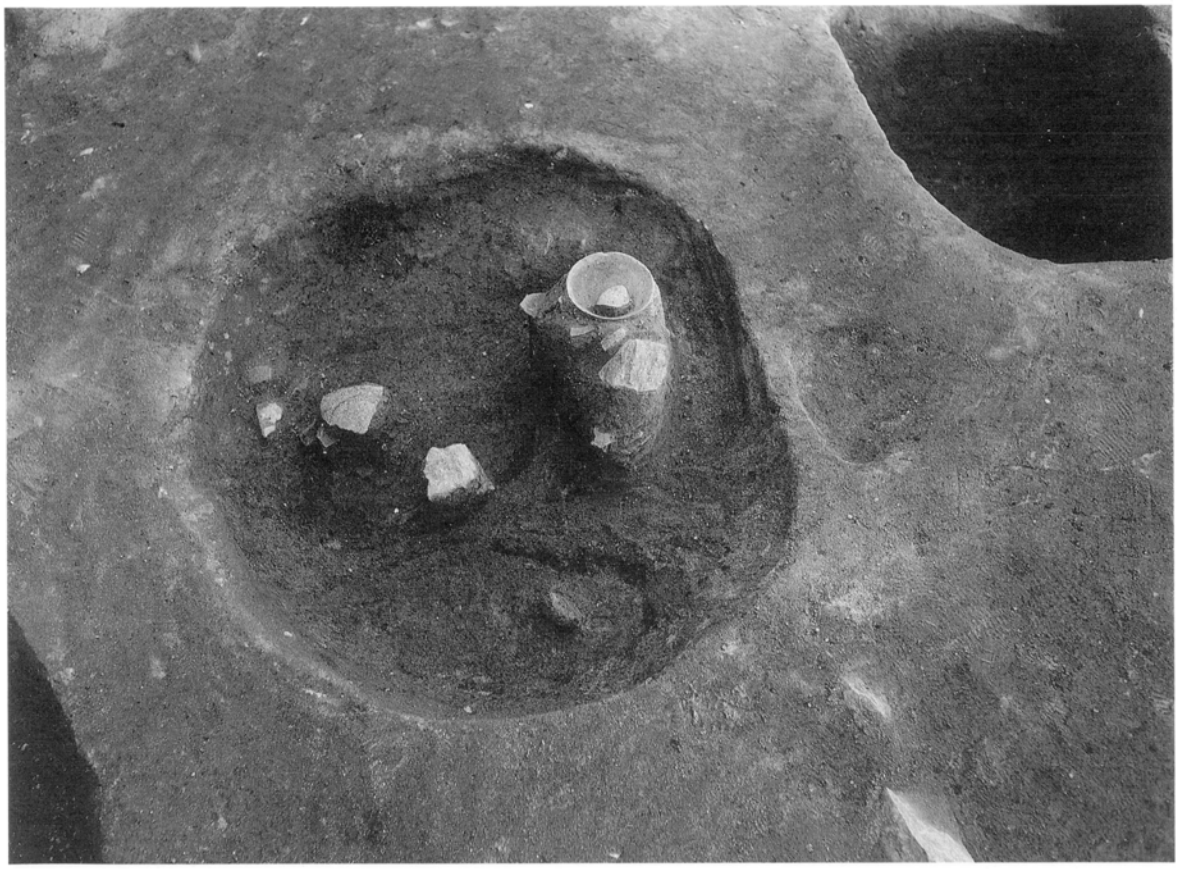
▲ (1) SE140 出土状況（西から）　▼ (2) SE180 出土状況（西から）

▲ (1) SE181 出土状況（東から）　▼ (2) 第Ⅱ面遺構出土状況全景（南から）



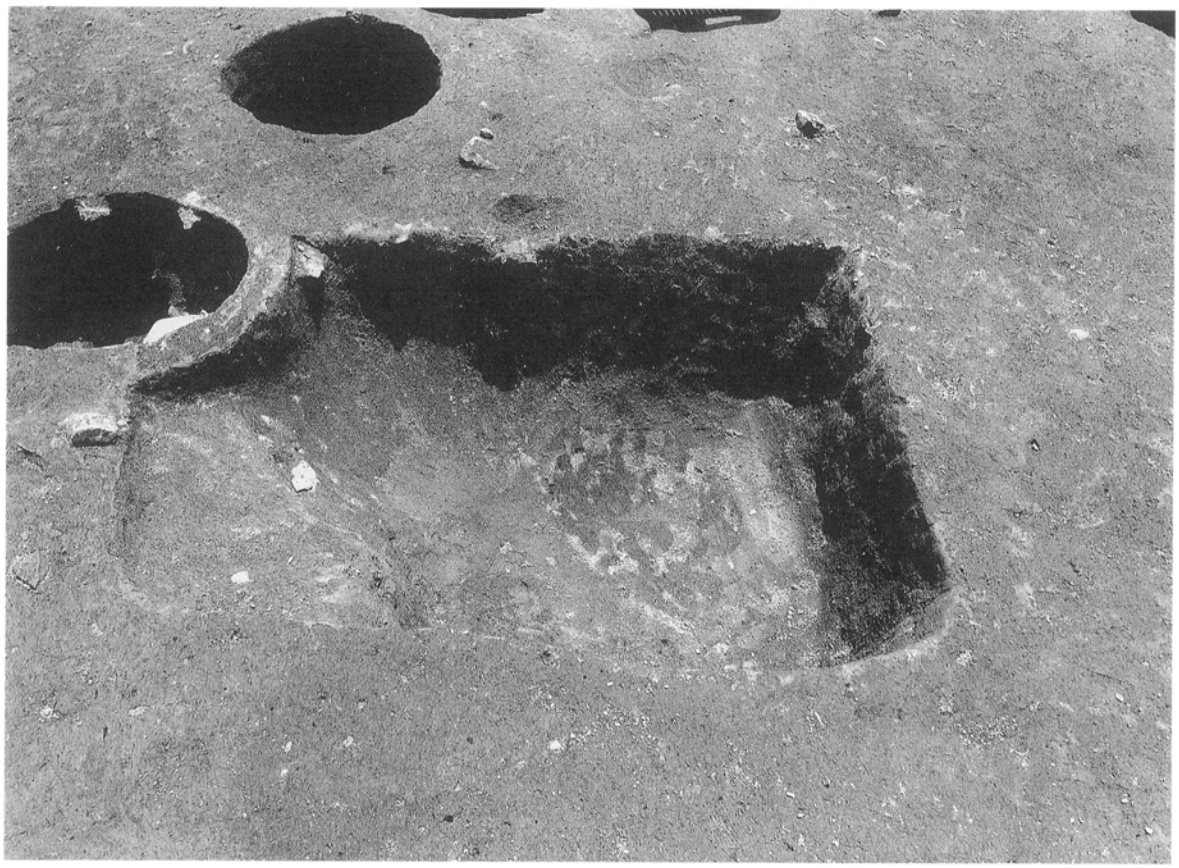
▲ (1) SK203 出土状況（東から）　▼ (2) SK203 礫堆積状況（東から）





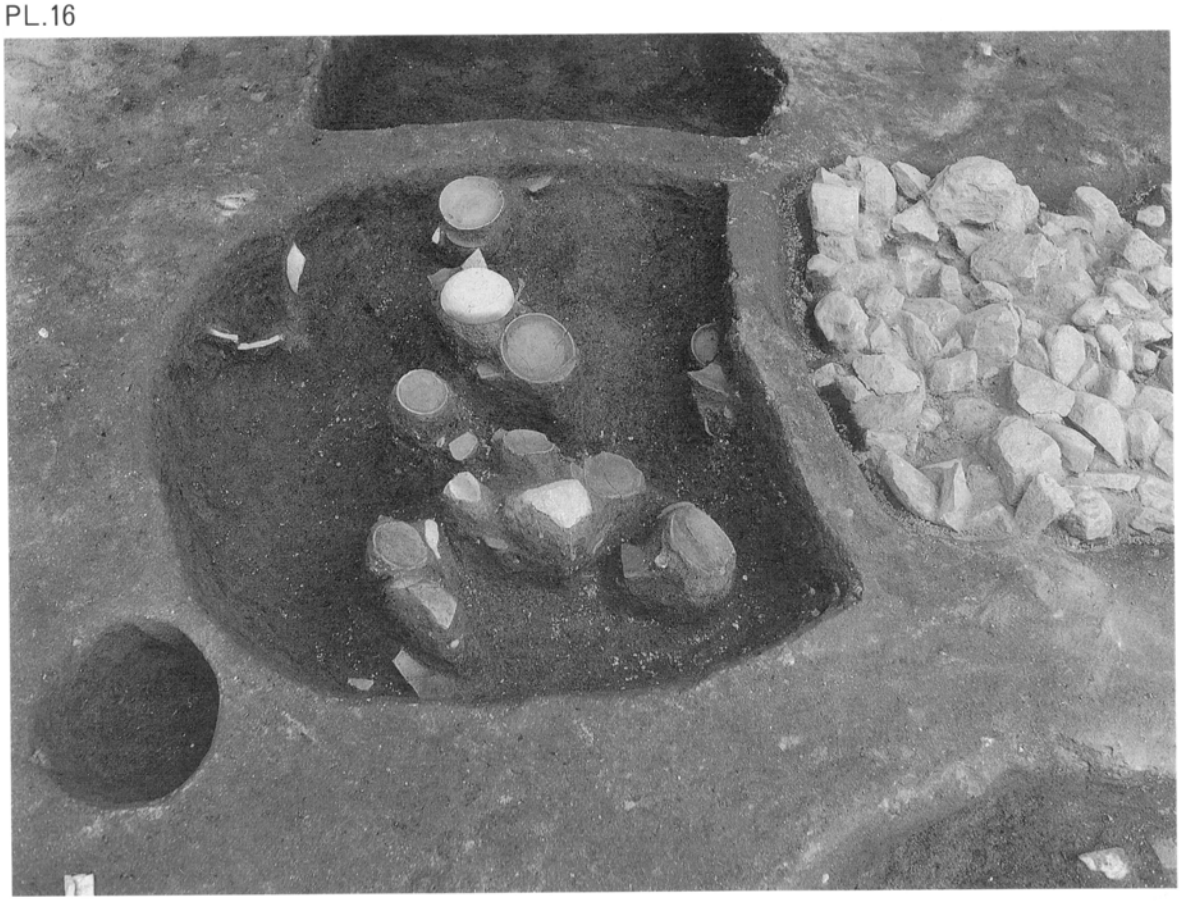
▲ (1) SK204 出土状況（西から）　▼ (2) SK210 出土状況（北から）

▲ (1) SK212 出土状況（北から）　▼ (2) SK214 出土状況（東から）



▲ (1) SK221 出土状況（西から）　▼ (2) SK222 出土状況（南から）

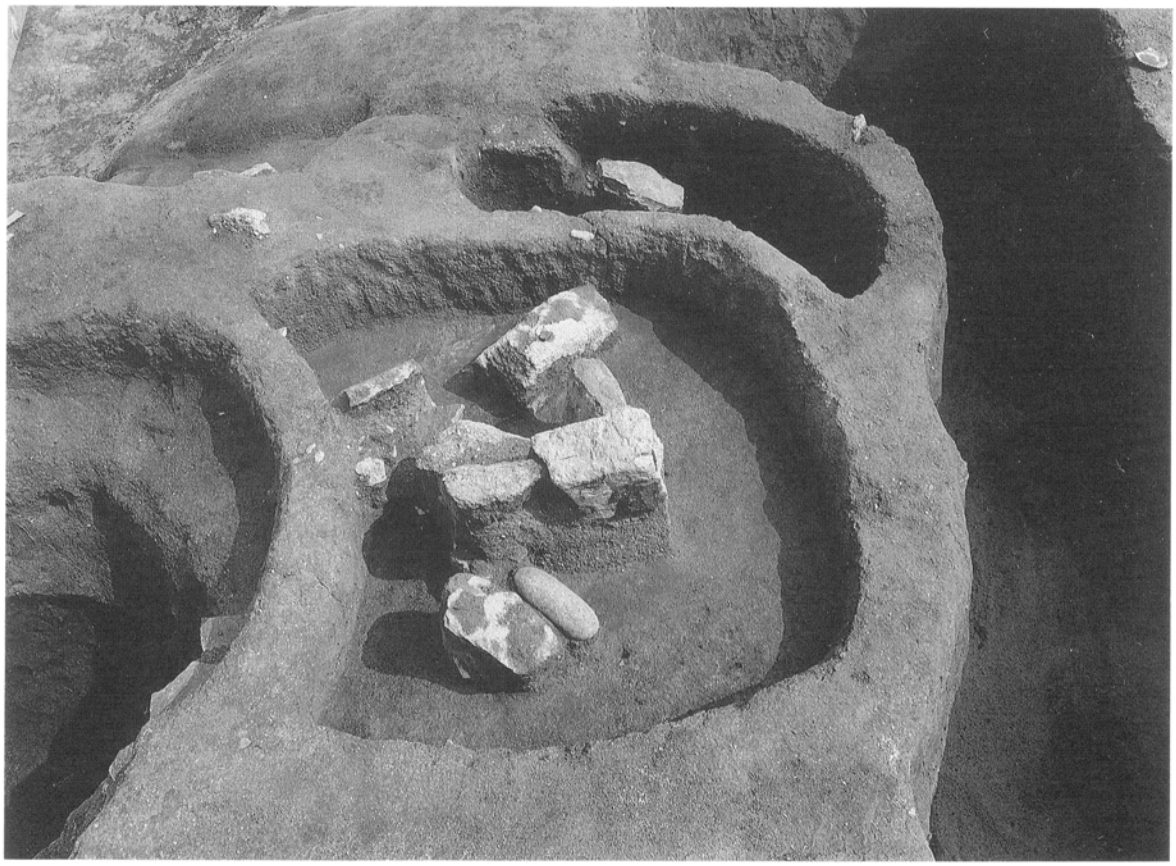
▲ (1) SK250 無頸壺出土状況（南から）　▼ (2) SK229 出土状況（西から）

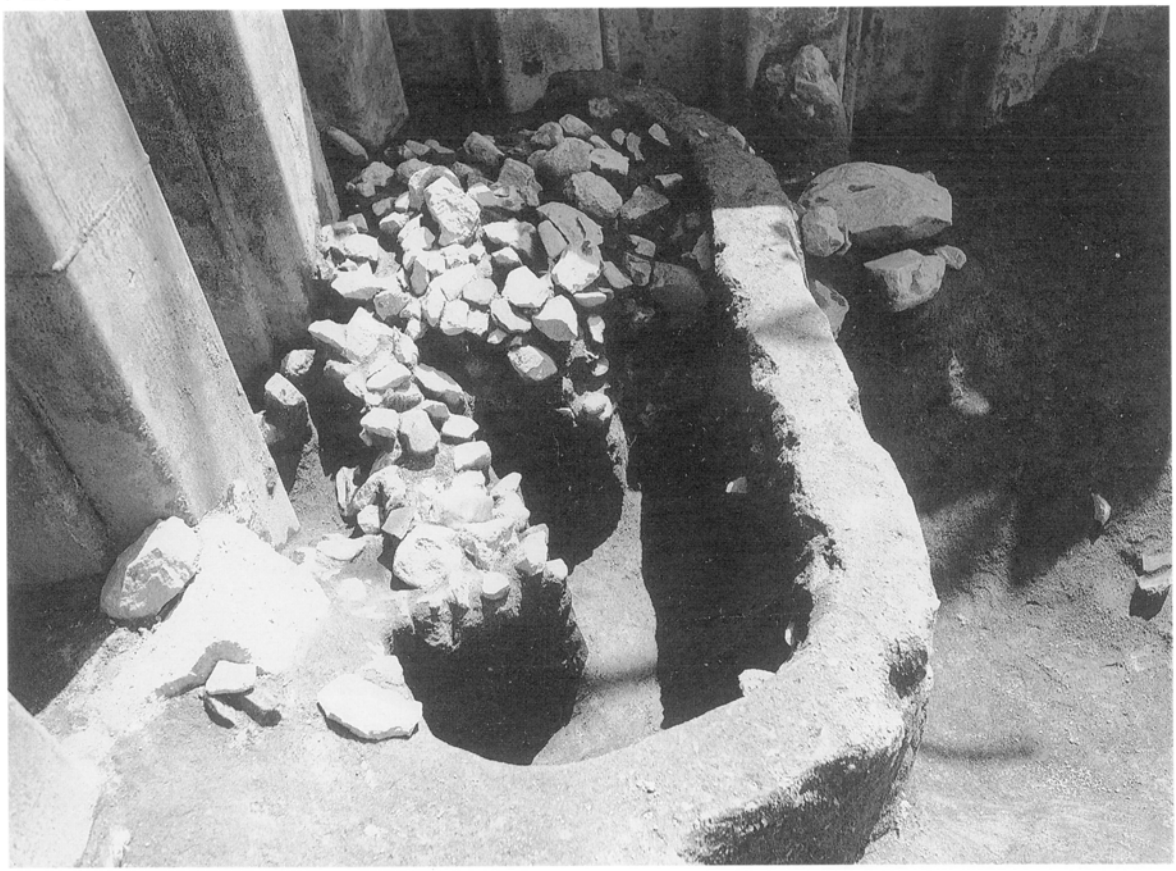


▲ (1) SK232 出土状況（南から）

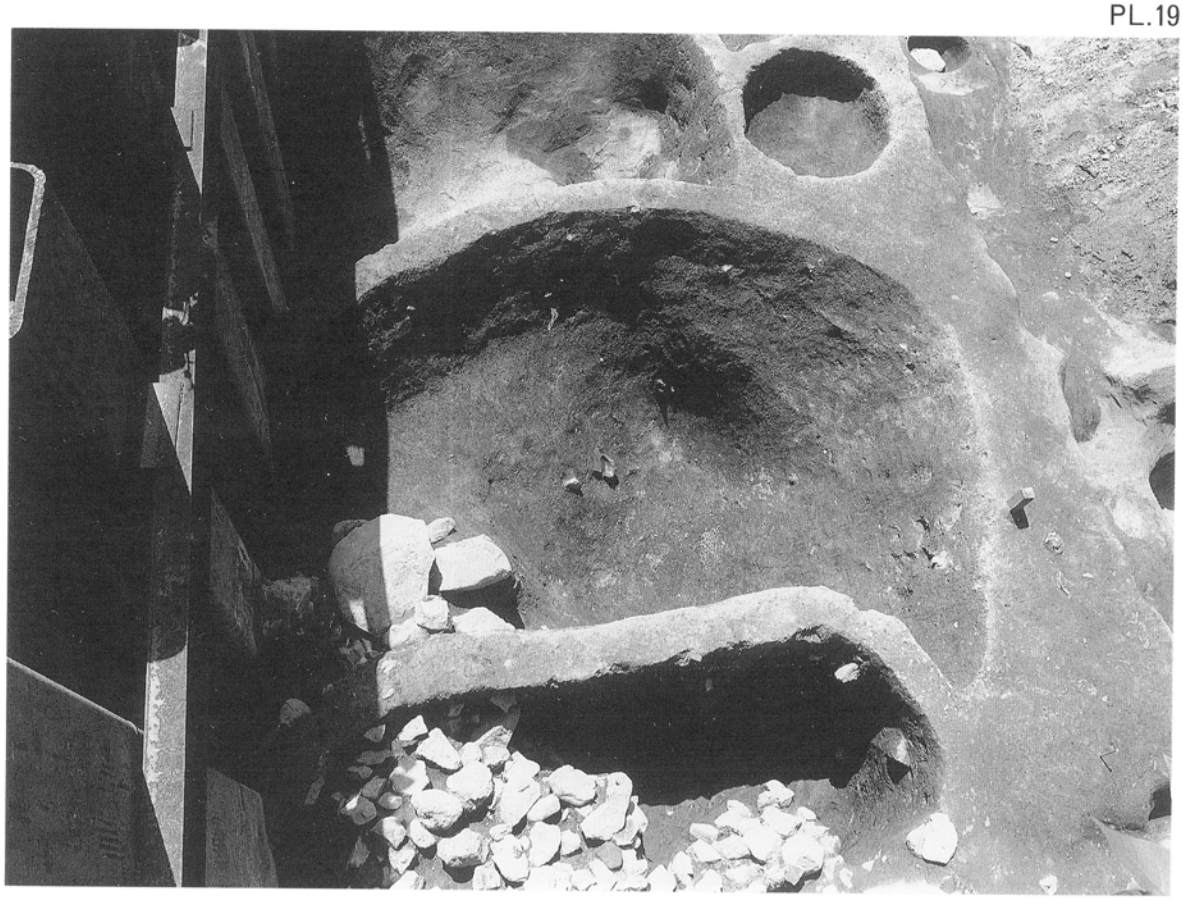
▼ (2) SK239～242・244出土状況（南から）

▲ (1) SK245・246 出土状況（南から）　▼ (2) SK249 出土状況（北から）

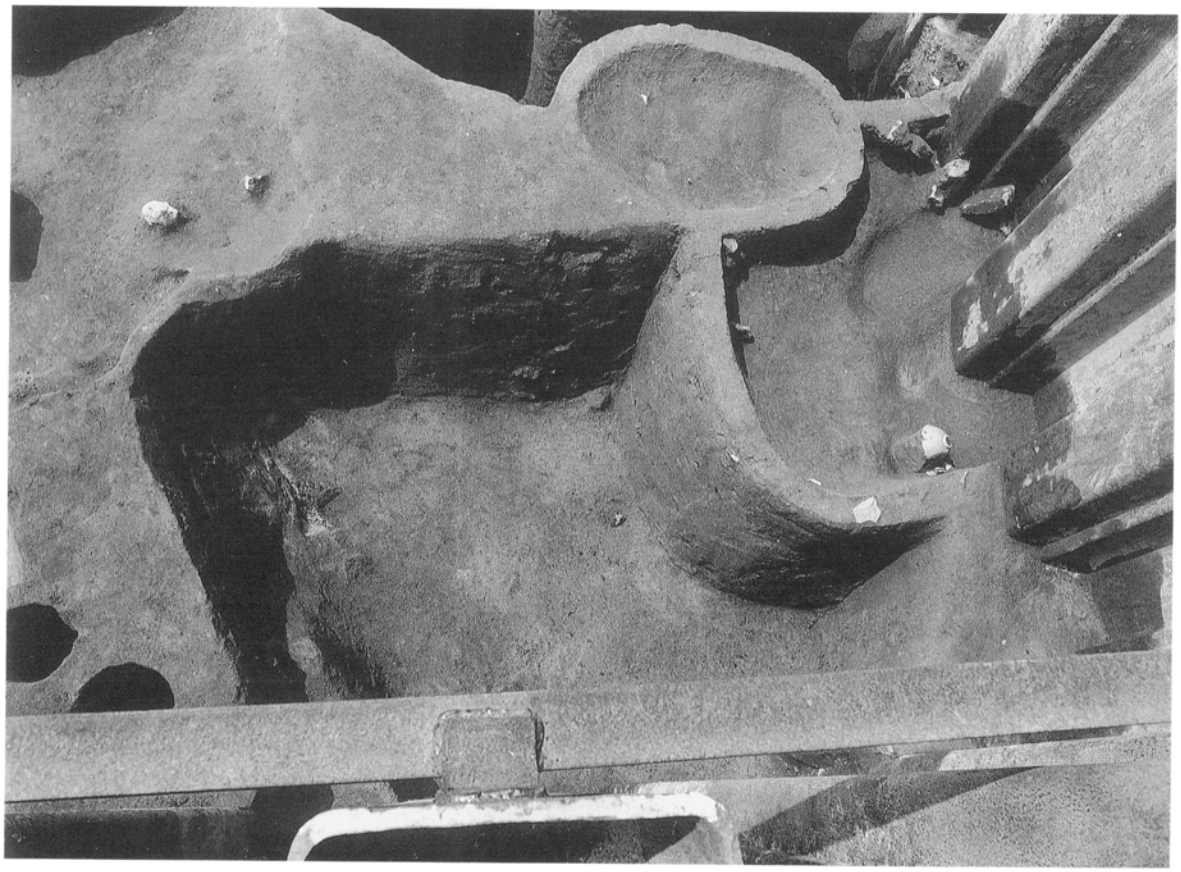


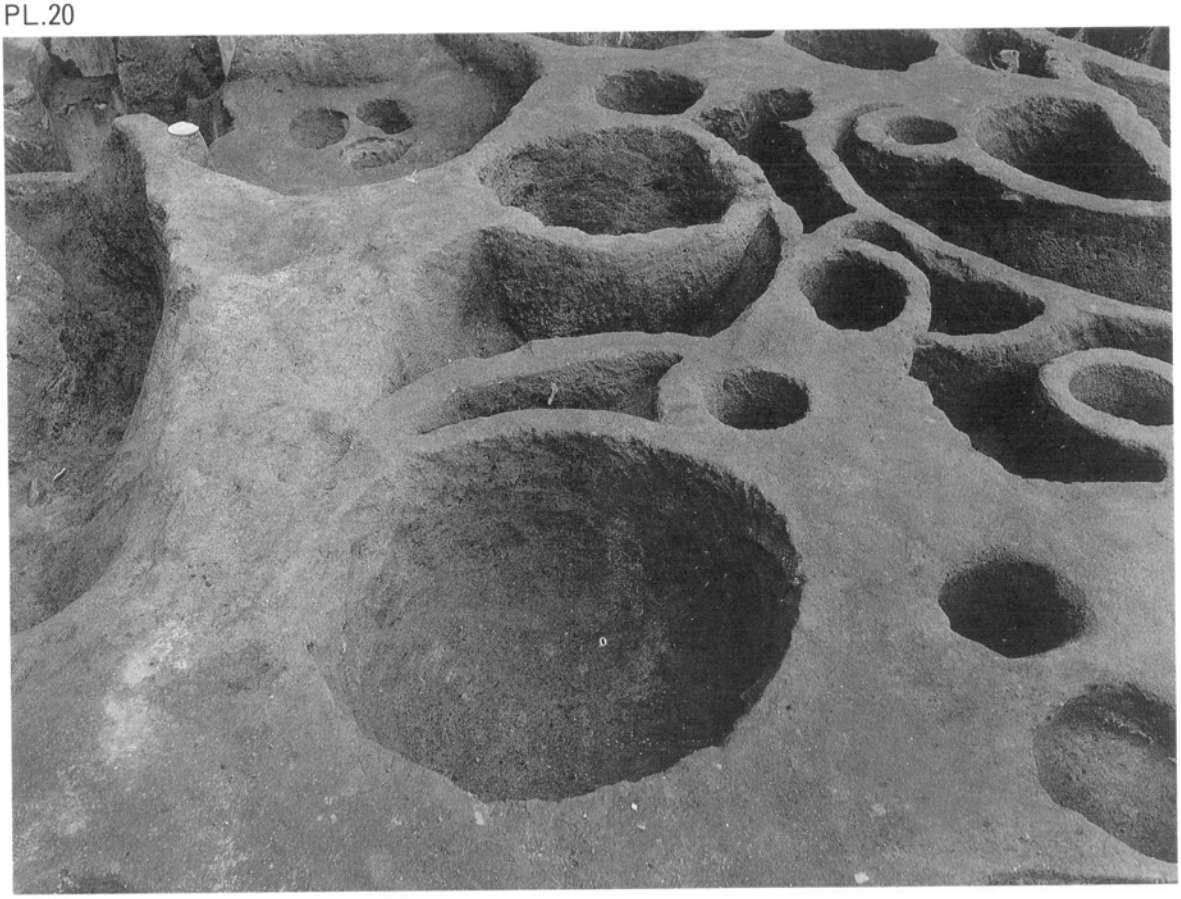


▲ (1) SK252 出土状況（北から）　▼ (2) SK252 礫堆積状況（北から）



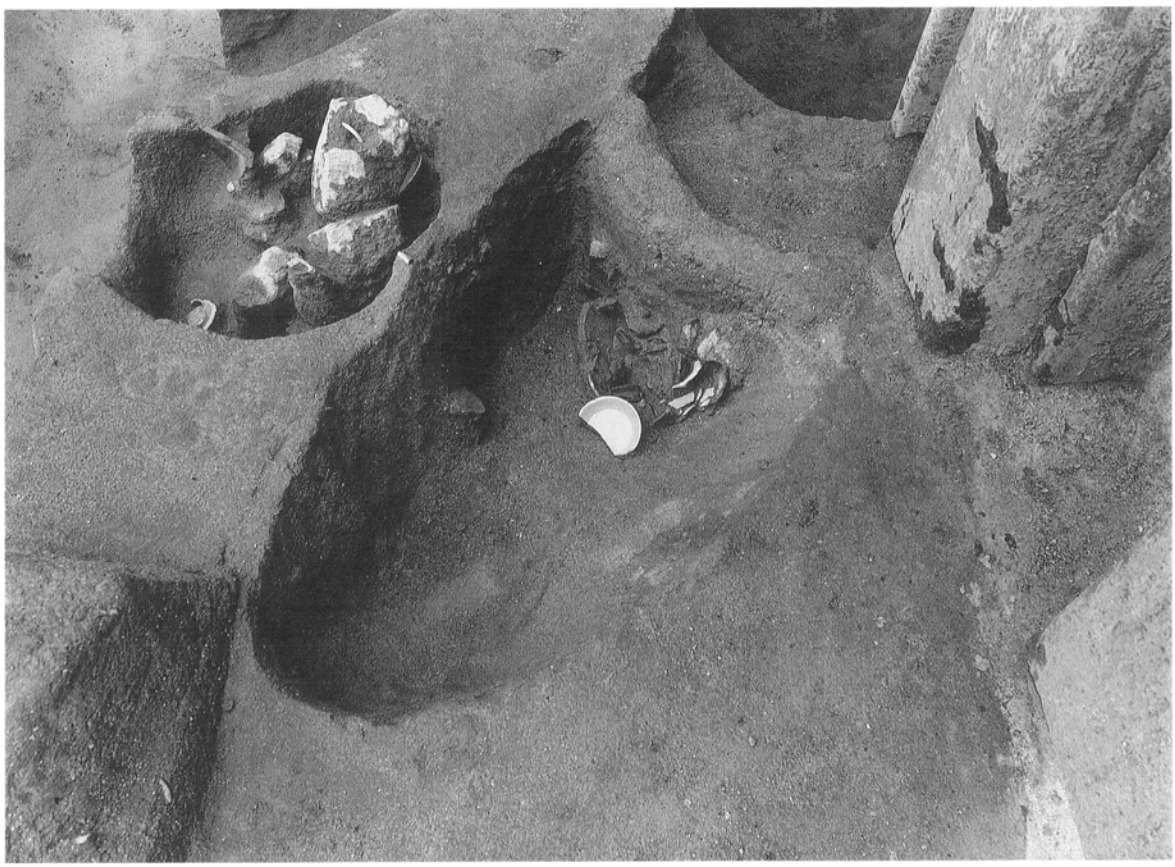
▲ (1) SK253 出土状況（東から）　▼ (2) SK260 出土状況（西から）





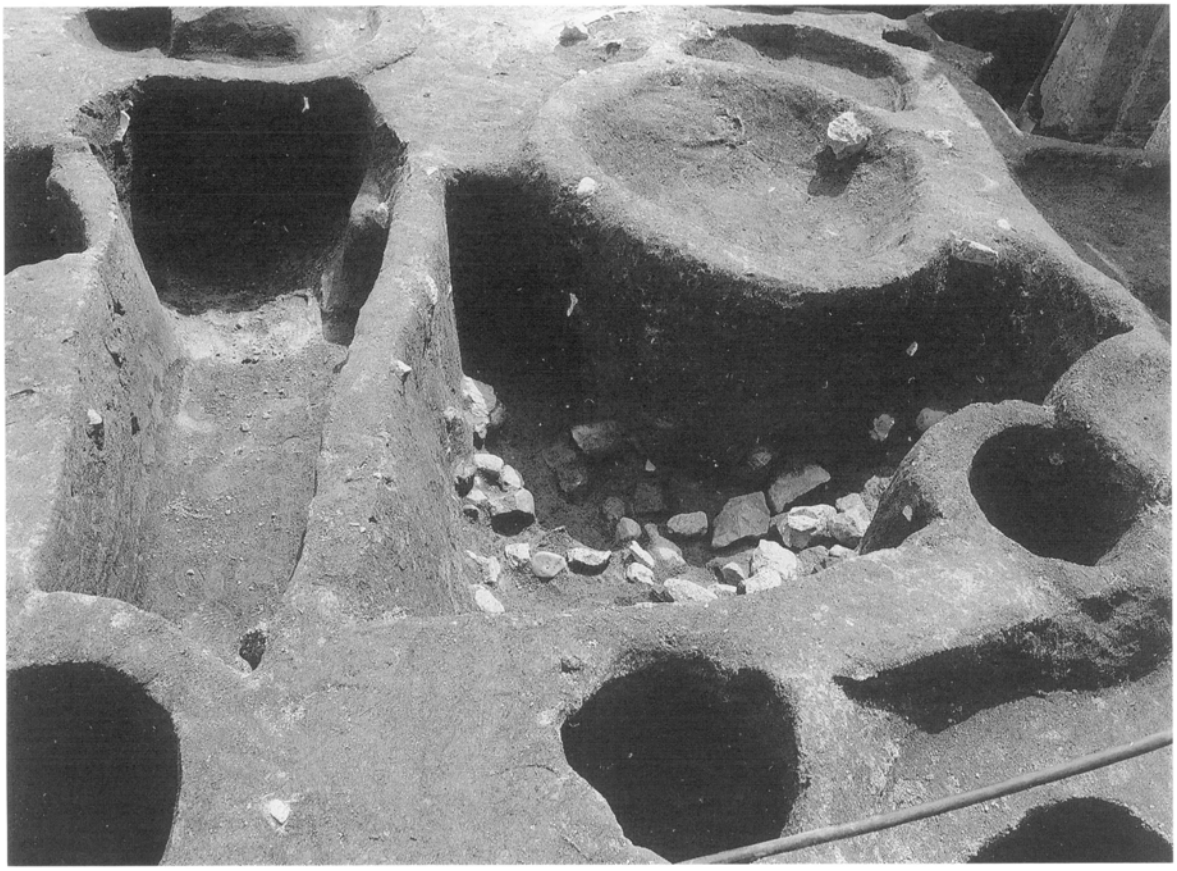
▲ (1) SK266 出土状況（西から）　▼ (2) SK272 出土状況（北から）

▲ (1) SK277・278 出土状況（西から）　▼ (2) SK279 出土状況（南から）



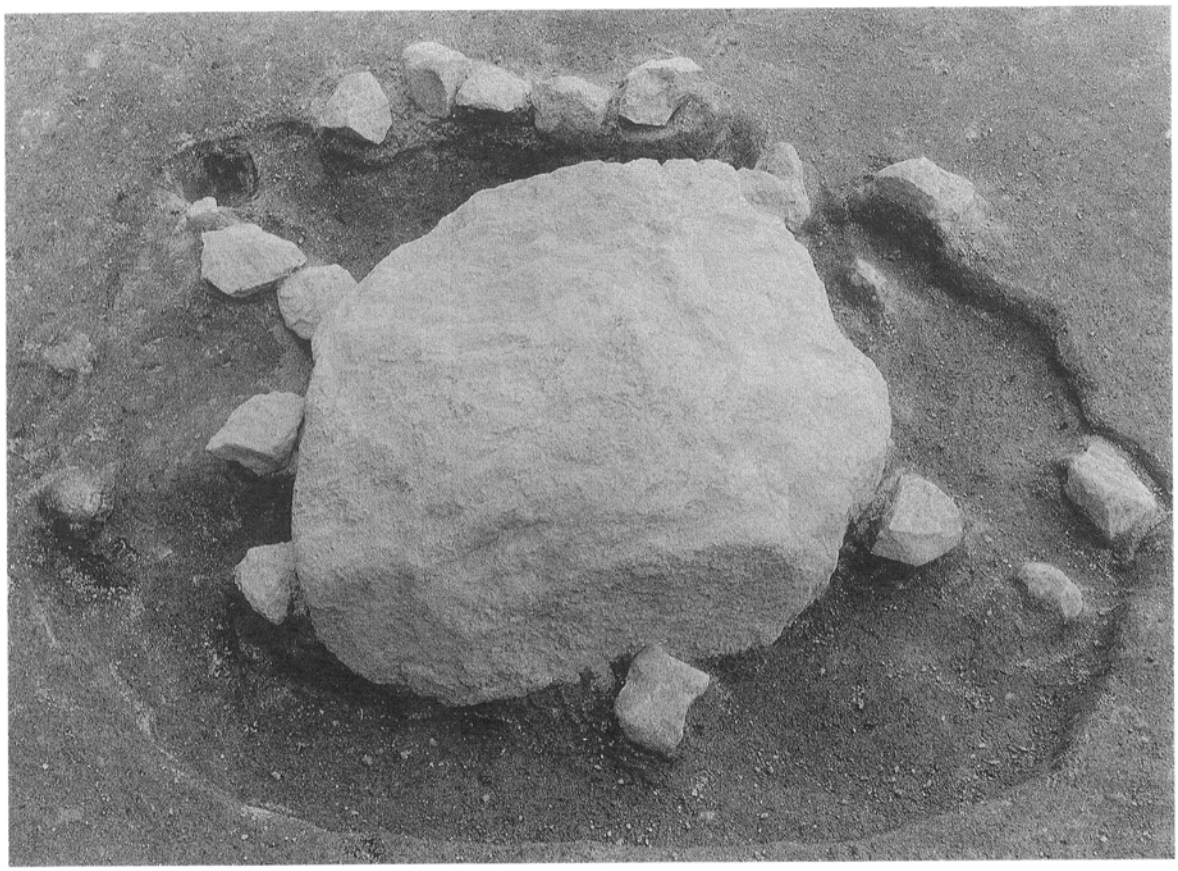
▲ (1) SK285・286 出土状況（西から）　▼ (2) SK292 出土状況（西から）

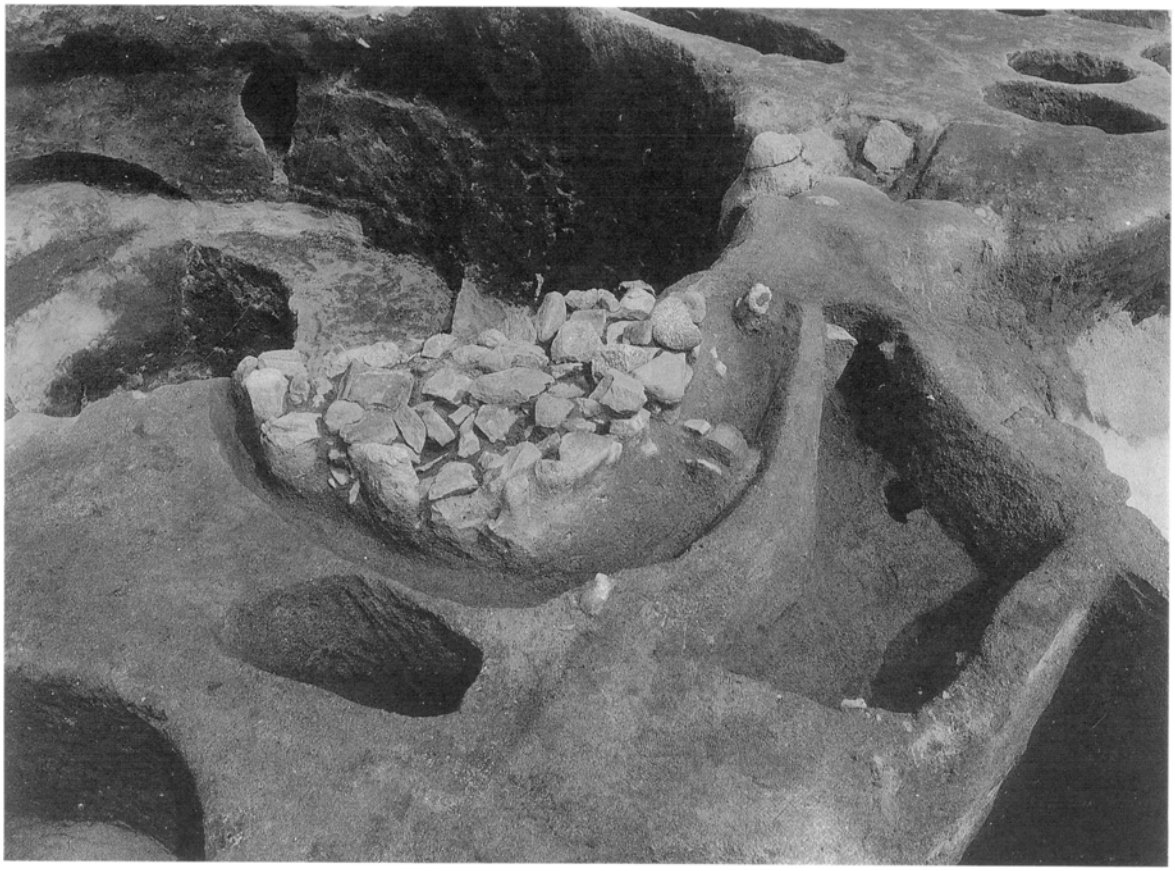
▲ (1) SK295 出土状況（南から）　▼ (2) SK304 出土状況（東から）



▲ (1) SK300・323・324 出土状況（北から）　▼ (2) SK326 出土状況（北から）

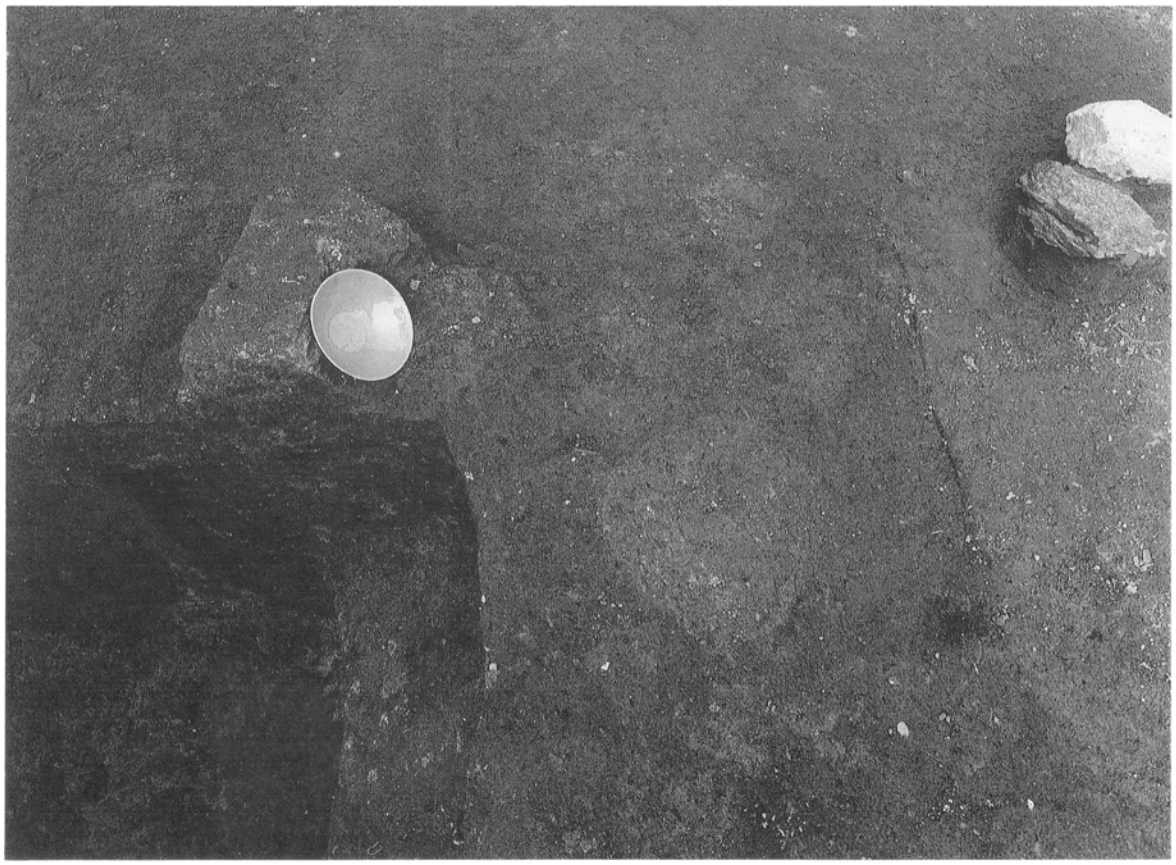
▲ (1) SK332 出土状況（東から）　▼ (2) SX227 出土状況（西から）





▲ (1) SX318 出土状況（南から）　▼ (2) SX318 礫堆積状況（北から）

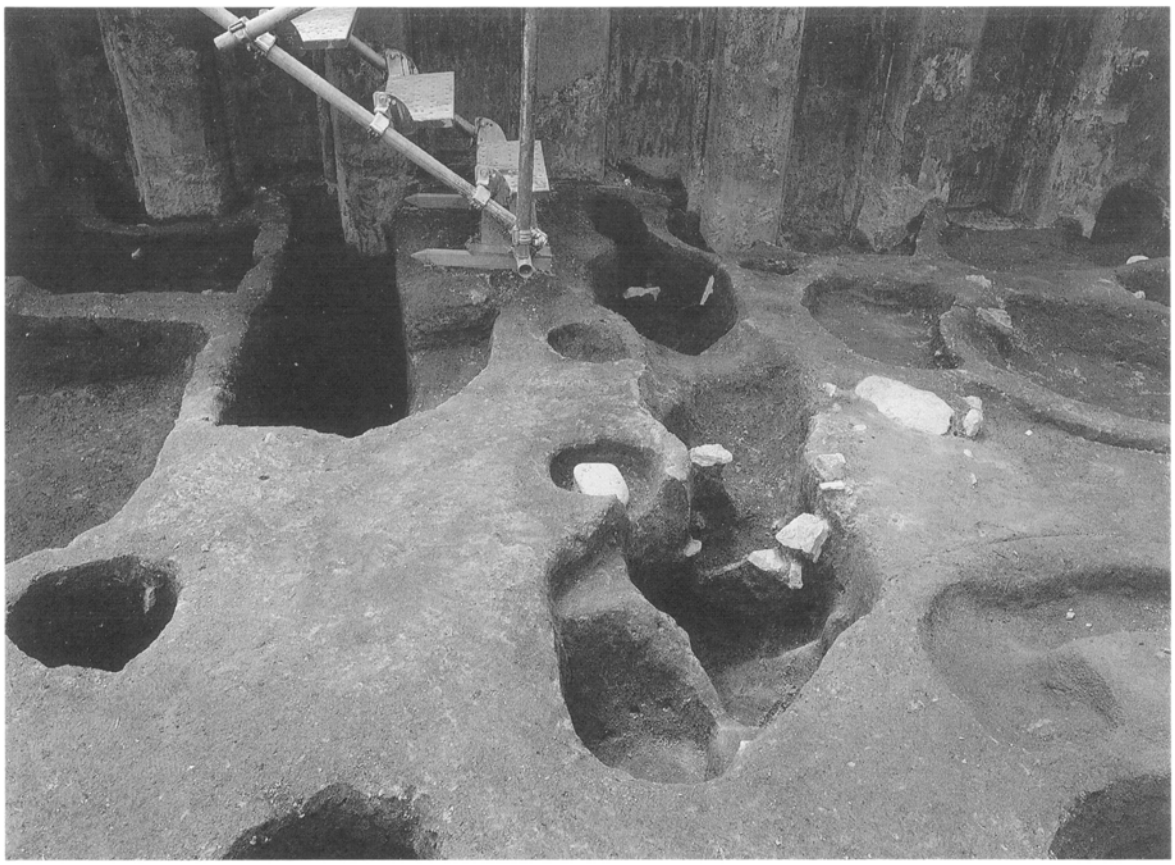
▲ (1) SX228 出土状況（西から）　▼ (2) 1号人骨（土壙墓）出土状況（西から）



▲ (1) SE201 出土状況（北から）　▼ (2) SE225 出土状況（西から）

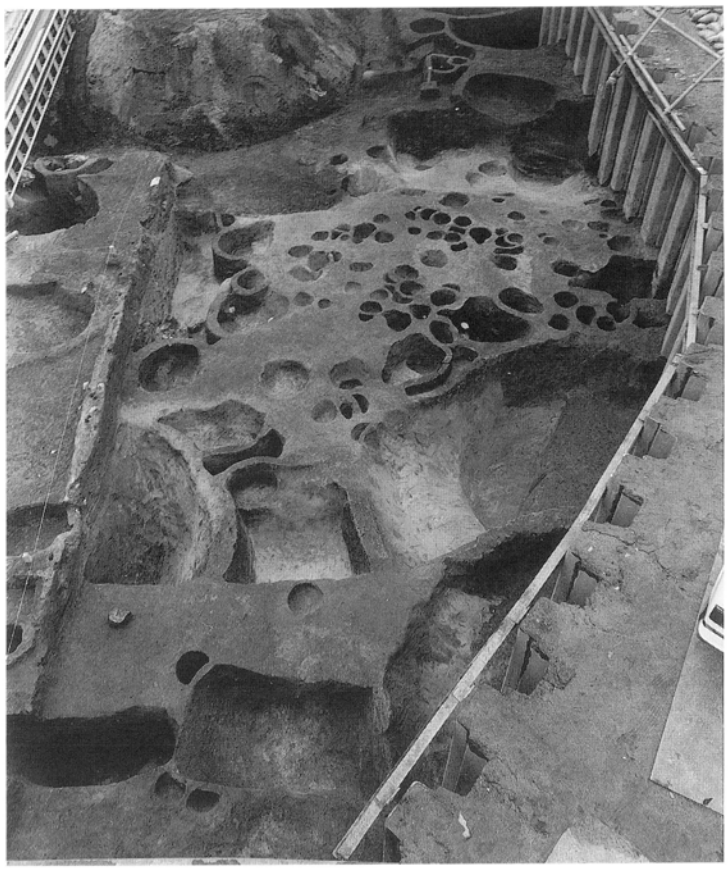
▲ (1) SD209 出土状況（北から）　▼ (2) SE226 出土状況（北から）

▲ (1) SE113・154・325 出土状況（南から）　▼ (2) SD319 出土状況（東から）



▲ (1) SD320 出土状況（東から）　▼ (2) SD237 出土状況（南から）

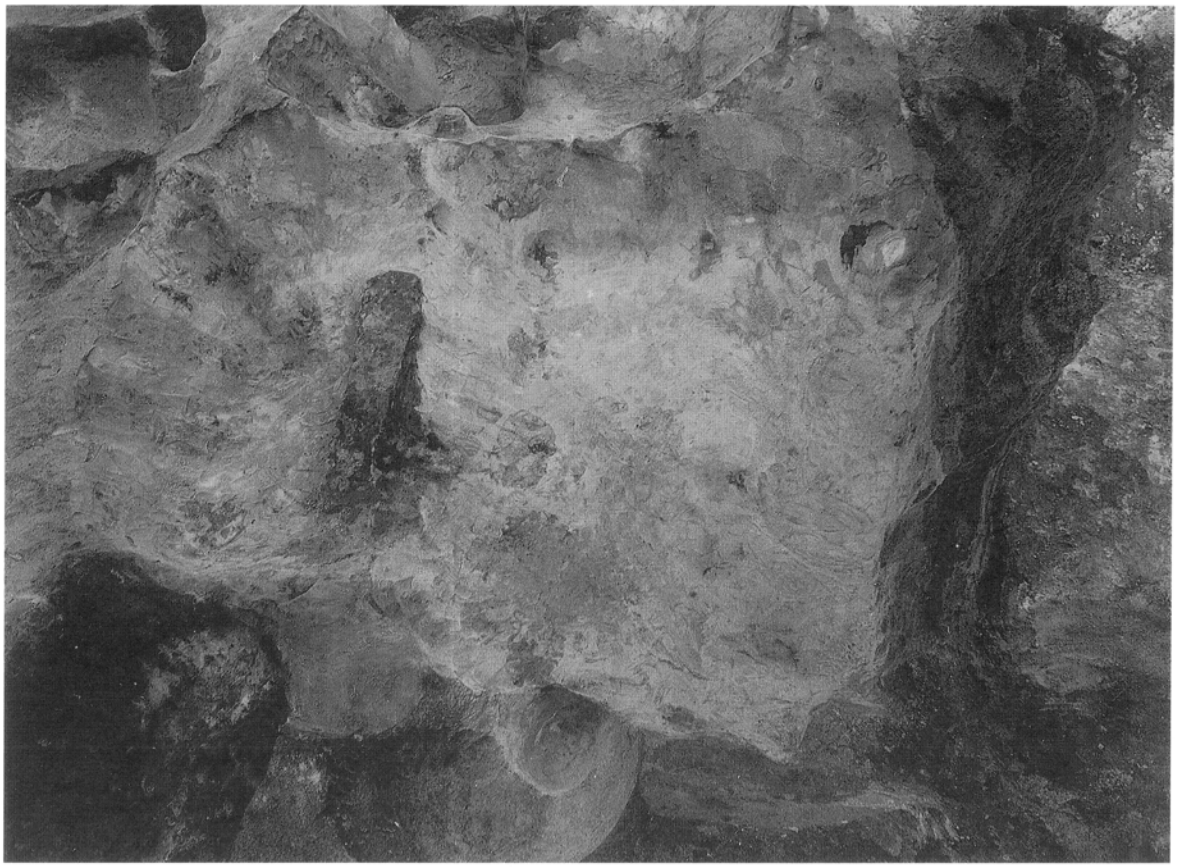
第Ⅲ面遺構出土状況全景（北から）



▲ (1) 第Ⅲ面A・B-5・6区遺構出土状況全景（西から）

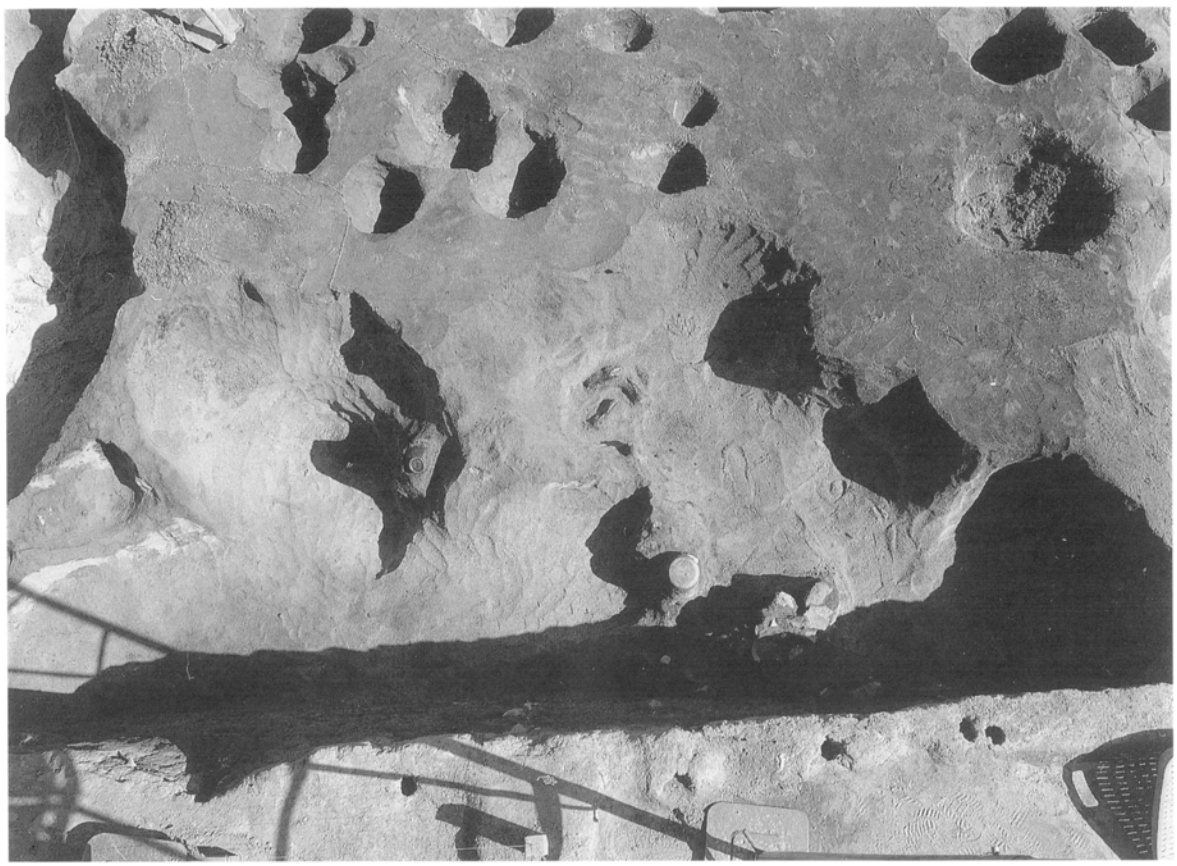
▼ (2) SE402 出土状況（南から）

▲ (1) SK403 出土状況（東から）　▼ (2) SK404 出土状況（北から）



▲ (1) SK405・527 出土状況（西から）　▼ (2) SK409 出土状況（西から）

▲ (1) SK410 出土状況（南から）　▼ (2) SK413 出土状況（北から）



▲ (1) SK414・415 出土状況（北から）　▼ (2) SK416 出土状況（東から）

▲ (1) SK435 出土状況（北から）　▼ (2) SK439 出土状況（西から）

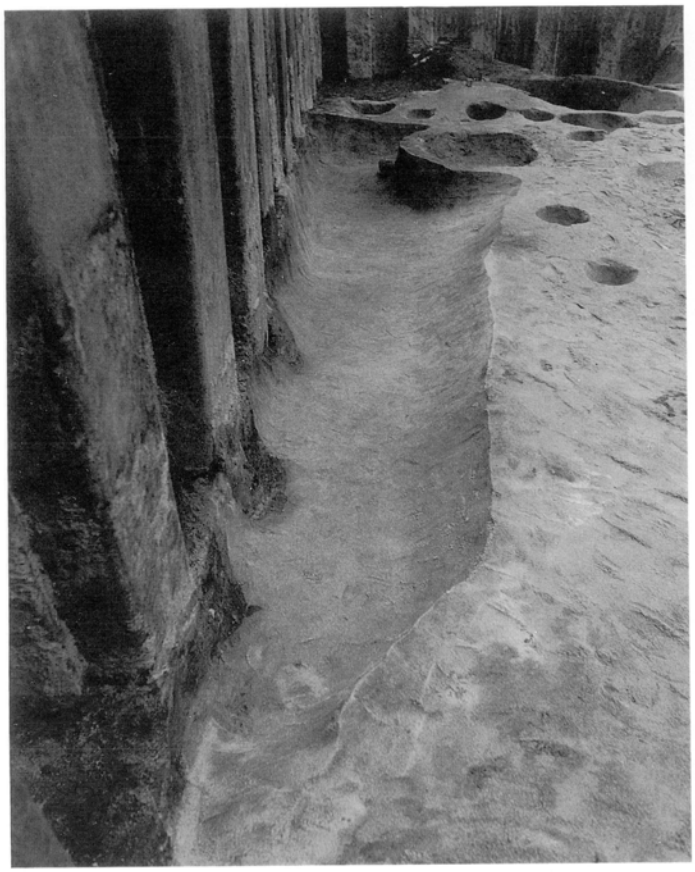
▲ (1) SK442 出土状況（南から）　▼ (2) SK452 出土状況（東から）

▲ (1) SK467 出土状況（東から）　▼ (2) SK473 出土状況（南から）

▲ (1) SK475 出土状況（北から）　▼ (2) SK478 出土状況（南から）

▲ (1) SK486 出土状況（北から）　▼ (2) SK454・492 出土状況（南から）

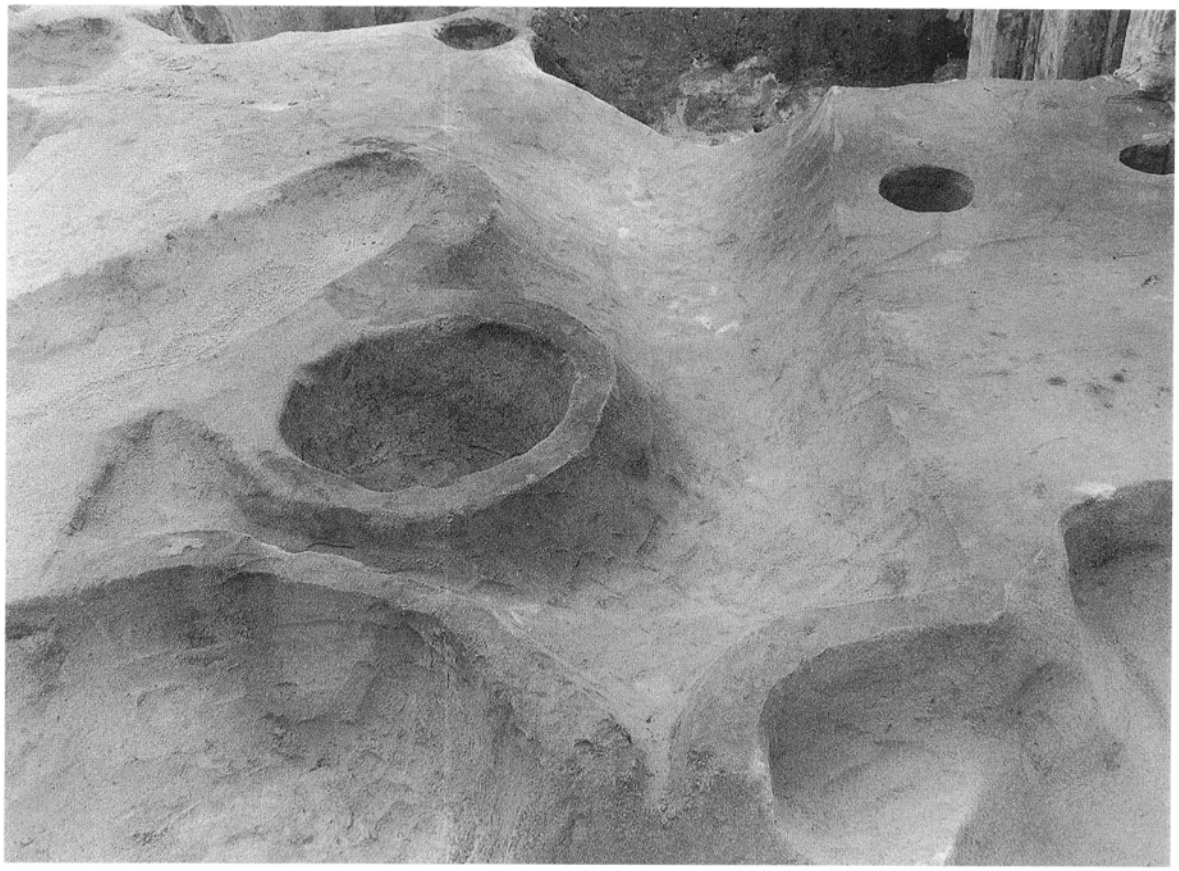
▲ (1) SK510 出土状況（北から）　▼ (2) SK530 出土状況（北から）



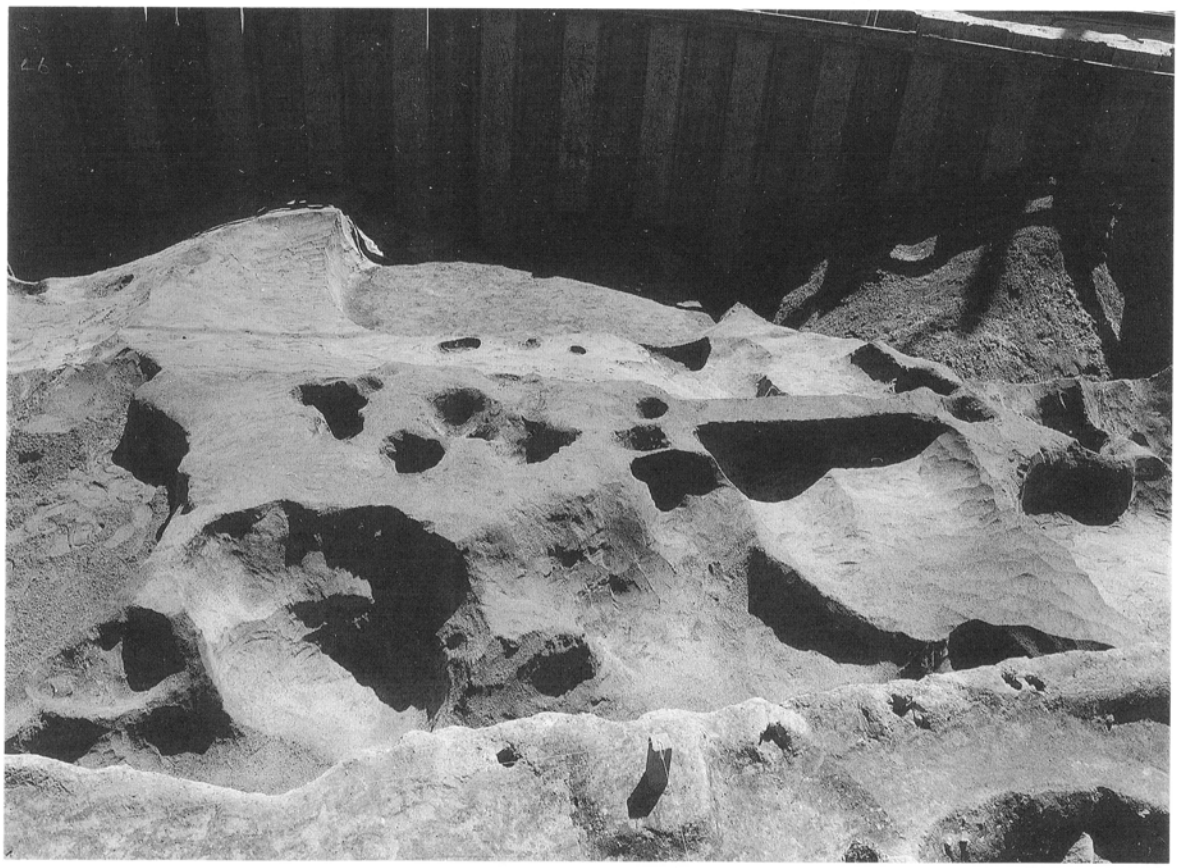
▲ (1) SC501 出土状況（北から）　▼ (2) SC501 遺物出土状況（北から）

▲ SE432・433 出土状況（西から）　▼ (2) SE138・447 出土状況（東から）

▲ (1) SE493 出土状況（東から）　▼ (2) SE500 出土状況（北から）



▲ (1) SD430 出土状況（西から）　▼ (2) SD430 出土状況（北から）



▲ (1) 2号人骨出土状況（南から）

▼ (2) 調査区から聖福寺を望む（西から）［現在の町割と寺の建物の軸線がズレている］

博　多　53
－博多遺跡群第71次調査報告－

1996年（平成８年）３月29日

発　　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　　刷　セントラル印刷株式会社
福岡市中央区大宮一丁目５番13号